

文部科学省
専門職大学院等教育推進プログラム

GP

真に課題解決能力を育てるカリキュラム開発

地域協働学校と教職大学院のコラボレーション

最終報告書

(平成19～20年度)

岡山大学大学院教育学研究科

平成21年3月



岡山大学



OKAYAMA
UNIVERSITY



最終報告書

岡山大学大学院教育学研究科



岡山大学

目 次

巻頭言	1
『教職大学院GP最終報告書』	
I 本事業の目的・計画と実施の経緯	3
1. 目的と計画	3
2. 事業経過	11
1) 第1年度（平成19年度活動記録）	11
2) 第2年度（平成20年度活動記録）	12
II 実施概要	14
1. 平成20年度カリキュラムの実施理念	14
2. 平成19年度における「課題発見実習」「教育実践研究Ⅰ（課題発見）」の試行	17
3. 平成20年度教職大学院開校時の改善点	19
4. 平成21年度に向けての課題	22
5. 岡山県・市教育委員会との連携協力関係強化	25
1) はじめに	25
2) 連携協議会の発足	26
3) 地域協働学校との連携協議	27
4) 地域協働学校と教職コラボレーションセンター	30
6. 教職コラボレーションセンターの機能と活動	31
1) 遠隔教育研究指導システムの概要	31
2) 遠隔教育研究システムの改善と運用評価	35
3) 活動記録（本センター活動日誌）	40
4) 授業収録一覧	45
III 実施の成果と課題	47
1. FD活動	47
2. 課題発見実習中間／最終報告会	58
1) 中間報告会（H20.6.16）	58
2) 最終報告会（H20.7.23）	69
3. 課題解決実習報告会（H20.10.8）	82
4. 新卒院生の成長と自己評価	95
IV 成果発表に対する所見・評価（H21.3.7）	103
1. 他大学等関係者	103
2. 県教育委員会	110
3. 市教育委員会	111
4. 実習校代表	113

V	研究成果報告一覧	115
	1. 検証分析の原理と考察	115
	2. 日本教育工学会研究報告集	121
	3. 日本科学教育学会年会論文集	129
	4. 日本教育工学全国大会講演論文集	131
	5. 日本教育大学協会研究年報	133

『学校支援活動成果報告書』

I	序論	149
II	院生による学校支援活動報告	152
	1. 現任校での活動	152
	1) 教育実践研究中間発表会 (H20. 10. 8)	152
	2) 最終報告会 (H21. 3. 7) での3人の報告	178
	(1) 青田後喜	178
	(2) 平松克茂	181
	(3) 國富聖子	185
	2. 現任校からの評価 (H21. 3. 7)	187
	1) 中野隆重岡山県立早島養護学校長	187
	2) 高原康則矢掛町立山田小学校長	190
	3) 江木英二岡山市立操南中学校長	192
III	新卒院生による地域協働学校での活動	194
	1. 『インターンシップ実習』としての活動	
	(前期報告会 : H20. 7. 29, 後期報告会 : H21. 2. 10 並びに最終報告会 : H21. 3. 7)	194
	2. 最終報告会 (H21. 3. 7) での2人の報告	223
	1) 香川真吾	223
	2) 岡崎亮人	225
	3. 最終報告会 (H21. 3. 7) での事例別評価	228
	1) 山本健五岡山市立岡山中央中学校教頭	228
	2) 乙部憲彦岡山県教育庁指導課総括副参事	230
	おわりに	232

【巻頭言】 岡山大学大学院教職実践専攻がめざすもの — アートを磨け —

岡山大学大学院教育学研究科長 高橋香代

岡山大学大学院教育学研究科は、平成 20 年度、教職大学院である教職実践専攻設置と修士課程再編を行ないました。教職実践専攻の設置にあたっては、平成 19 年度文部科学省専門職大学院等教育推進プログラム「真に課題解決能力を育てるカリキュラム開発——地域協働学校と教職大学院のコラボレーション」のご支援をいただき、この度最終報告書を作成いたしました。

「教職実践専攻」は、中国地区初の教職大学院です。中国地区の教員養成を担う基幹大学として、岡山大学は教職大学院の設置に取り組みました。この取組は、単に教職大学院の設置だけを目指すのではなく、岡山大学教育学部や教育学研究科修士課程における教員養成のあり方を改革し、学校支援を通して学校教育に貢献し、次世代の子どもたちに、よりよい教育を提供することを目的としています。

「教職実践専攻」のこの一年の歩みは、決して楽なものではありませんでした。しかし、設置後一年を経て、私は、課題はあるとしても、着実に一步を踏み出すことができていることを、感謝とともに皆様にご報告したいと思います。

昨年度の報告書の巻頭言には、「人の和に如かず」と書かせていただきました。それは、「孟子」にある「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」の言葉が、教職実践専攻のスタートにあたって、ぴったりだと思ったからです。

「天の時」とは、平成 18 年 7 月の中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」を受けて、教員の高度専門職業人養成を目的とした教職大学院制度が創設された「天の時」に、岡山大学では、平成 11 年度以来全国に先駆けて設置されてきた「学校教育臨床専攻」「カリキュラム開発専攻」「教育組織マネジメント専攻」のいわゆる現職 3 専攻の教育研究成果が蓄積されていたことがあります。「地の利」は、昭和 24 年岡山大学発足以来、教育学部が岡山県の教育現場としっかり連携を拡げ深めてきたことです。平成 12 年 9 月には、岡山県教育委員会と、教員の資質・能力の向上及び教育上の諸課題への対応のため、相互に連携して基礎的・実践的研究を行い、その成果を生かして岡山県の教育の充実・発展を図るため「連携協力に関する覚書」を交わしています。これまで継続してきた連携協力事業は「地の利」の基盤でした。

しかし「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」と言うように、「人の和」こそ「教職実践専攻」の成否の鍵を握っていると思っていました。文部科学省専門職大学院等 GP の助成で、「人の和」を生み出す教職コラボレーションセンターを開設することができました。教職コラボレーションセンターには、遠隔教育研究指導システムを構築し、①院生の実習・学習支援、②学校支援機能、③学校現場・院生・教員の連携・協働支援の役割を果たすように計画しました。実際教職コラボレーションセンターでは、学校現場と院生・教員のネットワークの要として、学校現場・教育委員会とだけではなく、院生と教員、院生と院生、教員と教員の和を拡げ、深めてくれました。学習の企画をする時、困った時、寂しい時、何かにつけて相談しあえる温かな空間でした。教育研究指導システムである「こらみゆ」では、楽しませていただきました。近藤勲先生をはじめとするスタッフの皆様の支援で、教職実践専攻の着実な一步が保証されたと思います。

教職実践専攻は、①デマンドサイドのニーズに立脚したカリキュラム、②課題発見・分析能力と、チーム解決力・企画力を身につけるための理論と実践の融合を中核としたカリキュラム、③大学院での成果を教育現場に直接還元できるカリキュラム、④教育委員会など教育現場との協働によるカリキュラムの点検・評価と不断の改善というカリキュラムポリシーを持って制度設計し、高度専門職業人たる教員の養成を図ってきました。とくに「教育実践研究」を柱にして、多角的な視点から課題を発見・分析し、それをチームで解決する高度な教育実践力をどのように育成できるのかを研究してきました。

そのために、大切にしてきたこと、これからも大切にしていきたいことはまず多様性の確保です。教員は、老若男女、研究教員と実務家教員、教育学に限らない教員の多様な専門性を持っています。とくに実務家教員の先生方には、教員の先輩として、厳しくやさしく院生の成長を促す力を発揮してくれたことに感謝申し上げます。研究教員は、理論的な援助をしながら、学校現場に関わる中で、自らの研究を振り返り深めてくれたと思います。

第2に、アート・クラフト・サイエンスを掲げて、単にクラフト（経験知）とサイエンス（研究知）を融合させるだけではなく、クラフトとサイエンスを広げる作業の中から、「アート」、私はこれを「専門職のカン」と表現するのですが、アートを磨くという道筋をとっていることです。アートを磨くためには、何が目指すものなのか、つまりアウトカムは何かを忘れないことが重要です。またクラフトもサイエンスも実践の中にあること、課題も解決法も学校現場にあることを、学校現場が教えてくれることと確信していました。我々は、理論をそのまま、現場にあてはめるのではなく、また自分の経験だけを押し付けるのではない、アートを求めてきました。学校現場で、行動して磨き、振りかえり、やり直す、そのようなプロのしたたかさを、院生だけでなく教員にも育てていきたいと思いました。

第3は、柔軟性を大切にしたいということです。学びの共同空間を生み出すためには、柔軟な思考が求められます。「理解されない」、「分かってくれない」から、「理解してみよう」「分かろう」とする「自分を変える」ことです。人間というのは変わりがたいものですが、他人を変えることに比べたら、自分を変える、視点を変えることは楽です。解決策が見つからない時、教育以外の学問領域や社会から学ぶことができる柔軟性が助けてくれると思います。

この、最終報告書には、準備段階からこの一年間の教職実践専攻の歩みがあります。入学したばかりの院生が、それぞれに成長していった姿をみていただけたと思います。教員もまた成長したと思います。何より、ご協力いただいた連携協力校の校長先生をはじめとする教職員の皆様、子どもたちや保護者・地域の皆様のご協力の賜物と感謝申し上げます。とくに、「院生を同僚としてきたよ」との発言をいただいた時には、嬉しさがこみ上げました。また岡山県教育委員会からは、授業参観や中間報告会、指導主事による指導など様々な場面でご協力・ご指導を直接いただきました。福武教育文化振興財団からは、特定教育助成「学校力向上プロジェクト」で、学校支援の資金的援助をいただき、教職実践専攻の学校支援機能を後押ししていただきました。地域からの支援に支えられて活動できたことに、心から感謝申し上げます。

教職実践専攻は、確かに一步は着実に歩むことができましたが、課題は多くあります。「もっとしなやかに、もっとしたたかに」を合言葉に、一つひとつを改善してまいりたいと思います。今後ともよろしくご指導・ご支援くださいますようお願い申し上げます。最後に教職実践専攻の第一期生の皆さんの頑張りにエールを送りたいと思います。

I 本事業の目的・計画と実施の経緯

1. 目的と計画

取組の概要(200字以内)

複雑化・多様化した教育課題に対応する高度専門職業人を育てる教職大学院で、ケーススタディやフィールドワークが形ばかりで終らぬ様、課題発見から課題検証まで体系化した「教育実践研究」をコアとしたカリキュラム開発を行う。本取組は、地域協働学校をフィールドに重層的な協働体制づくりとリアルな課題解決に取り組むことで、課題発見と課題解決「教育実践研究」に実効性を持たせ、真に課題解決能力を育てる教育方略を開発する。

取組の内容等

1 取組の内容及び実施計画

1) 目的と概要

今日、地域社会や家庭環境の大きな変化とともに学校現場での教育課題が複雑化・多様化している上に、教員の高齢化と多忙化の中で若手教員を育てる余裕がないまま、ベテラン教員の一斉退職時期の到来を迎えようとしている。

このような状況下で、デマンドサイドのニーズに立脚した真に課題解決能力を持った新人教員や中堅教員を養成することは教員養成大学にとって喫緊の課題である。岡山大学教育学部は、平成18年度に改組し教員養成に特化して、教員養成コアカリキュラムを実施した。続いて、教育学研究科の改組に取り組み、平成20年度修士課程教育の実質化と共に、教職大学院教職実践専攻設置を計画している。その準備として、入学前の準備状況と到達目標の異なる新卒院生と現職院生(表1)別に、体系化した「教育実践研究Ⅰ～Ⅲ」をコアにして「教職大学院カリキュラム@岡大」(全体構成は図1)を立案した。

それは、これまでの教員養成教育のあり方に強い意識改革を求めるものであり、課題解決能力養成を軸とした多くの開拓的要素が含まれている。そのため、カリキュラム実施に先立ち、その有効性を検証し実践方法を確立することが極めて重要となる。本取組では、この「教職大学院カリキュラム@岡大」の有効性の検証と実践方法の改善のプロセスを確立することを目的とする。

新卒 課題は、教師の力量に関する自己課題が対象。経験の浅い新卒院生は院生 自己課題を把握できない状態で入学。それに対応する内容設定。

現職 課題は、現任校に実際に存在する比較的大きな課題が対象。院生 現職院生は既に課題を把握して入学。それに対応する内容設定。

教育実践研究		教育実践研究	
Ⅰ(課題発見)	実習校での継続的な実習と共通科目を通じた事例分析も活用し、自己課題(一部は学校課題)を明確化し、課題解決の目標を設定する。必要に応じて模擬授業等も活用する。	Ⅰ(課題分析)	共通科目も活用した分析法を踏まえて、現任校での課題を構造的に把握・明確化する。
Ⅱ(課題解決)	明確化した自己課題の解決を目標に課題解決実習(4週間集中)を実施、学校課題への影響も含めて評価を行なう。その後、別フィールドで定期的実践、自己課題の克服訓練を進める。	Ⅱ(課題提案)	課題分析で得られたいくつかの課題解決方法を現任校へ提案・検討し、教職員と協働して次年度の改善計画を作成する。課題を定量的に抽出する活動等も取入れる。
Ⅲ(課題探究)	赴任校で勤務または協力校で教育実践をしながら、自己課題や学校課題を発見し解決する計画を立案し、教職員と実践し評価する。その過程を言語化し、他者が活用できる実践研究を作成	Ⅲ(課題検証)	提案した改善計画に基づいて実践研究を行い、その成果を評価、検証、言語化し、他校でも活用できる様に一般化する。

表 1. 教育実践研究の「体系化」と「ねらい」。カリキュラム全体像(図1)も参照。

教育実践研究を柱としたカリキュラム構造
 自ら課題を発見（分析）・解決（提案）・検証・言語化する能力の育成

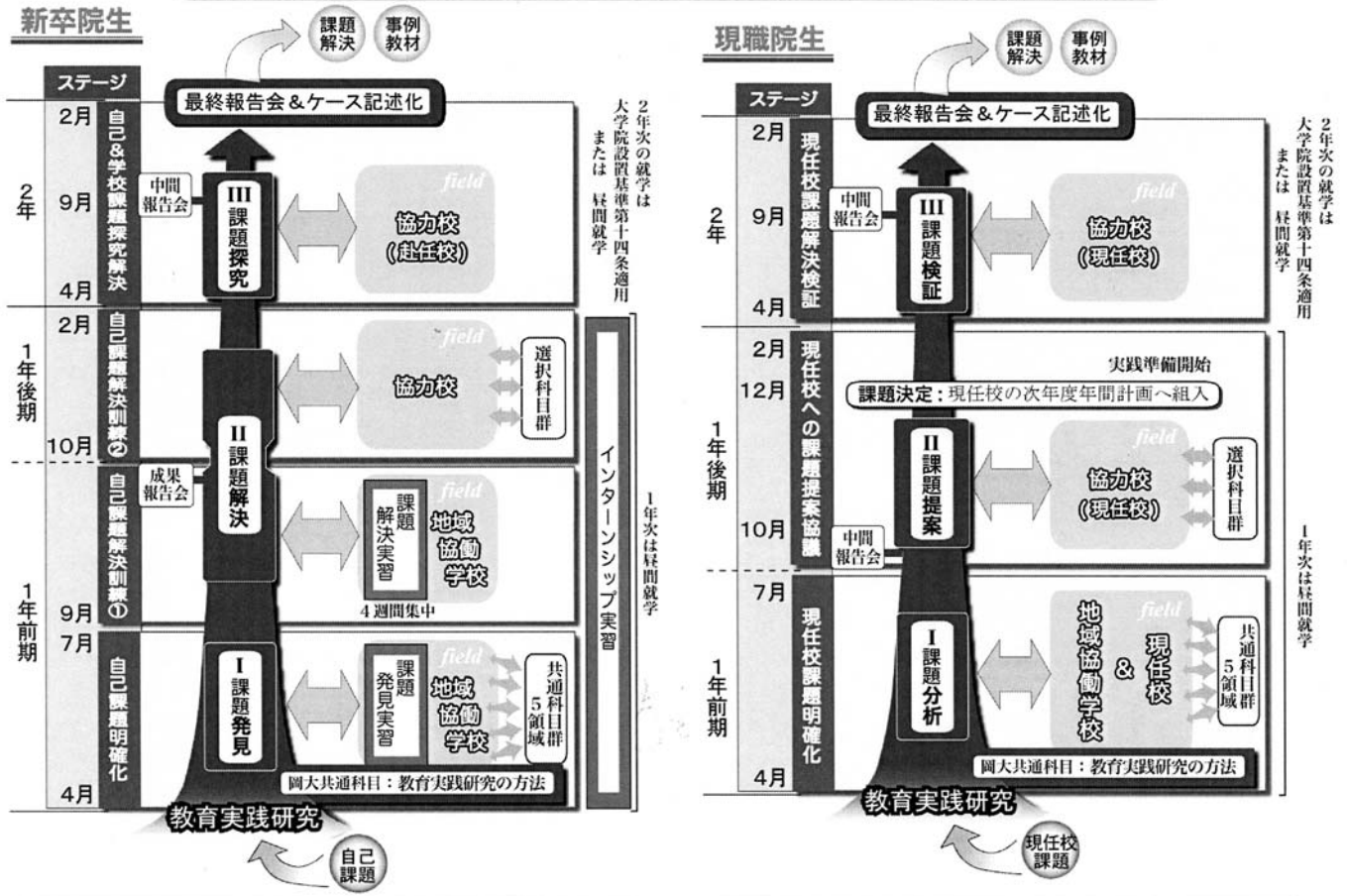


図1 体系化した「教職大学院カリキュラム@岡大」の全体像。 現職院生と新卒院生の能力差を考慮した課題の種類と解決プロセスの設定。（表1も参照）

「教職大学院カリキュラム@岡大」では、①課題発見・分析能力と②チーム解決力を特に重視する。課題の本質を見極める力がなければ課題解決力を養うことは不可能である。また、課題が複雑化する今日、教員個人の力量形成だけの課題解決は困難になり、保護者・地域と連携して、学校全体としてチームを組み戦略的に学校力を上げていく視点は、教員の同僚性を育てる意味でも欠かせないものである。

そこで「教職大学院カリキュラム@岡大」では、体系化した「教育実践研究Ⅰ～Ⅲ」をコアにして、共通科目で方法論を学んだ上で自己課題と学校課題を明確化した後、大学教員も参加して学校現場での課題解決をチームで実践・検証し、課題解決力育成を机上の空論に終わらせない仕組みとしている。

本取組では、主に「教育実践研究Ⅰ～Ⅱ」に当たる課題明確化ステージを解決・提案ステージにつなぐプロセスの検証を中心課題とする。課題発見には多角的視点と柔軟な思考が不可欠であり、そのためには多様な教育課題が存在する共通のフィールドと multiple view（多角的視点）を持つ仕組みが必要である。本取組では、図2のように、地域協働学校で、新卒院生は課題発見実習に取組みながら現職院生はフィールドワークの場として参加し、研究教員、実務家教員も現場で指導する。その上で共通科目群5領域の観点でのケ

一ススタディにプラスした教育実践研究の方法論の学習（共通科目群5プラス1）によって多角的分析を行い，教育実践研究Ⅰ（課題発見）&（課題分析）の中で，異なる立場とキャリアを持つ4者が議論しながら教育実践課題を分析・発見していくカリキュラムである。特に，現職院生については既設の岡山大学教育学研究科現職3専攻（学校教育臨床専攻，カリキュラム開発専攻，教育組織マネジメント専攻）の経験から，「教育実践研究Ⅰ（課題分析）」から「教育実践研究Ⅱ（課題提案）」の展開については指導方法や評価基準について実績があるが，新卒院生については新たな試みである。

そこで本取組は，新卒院生を主な対象に，後述のように地域協働学校をフィールドに重層的な協働体制づくりとリアルな課題解決に取り組むことで，「教育実践研究Ⅰ（課題発見）」から「教育実践研究Ⅱ（課題解決）」に実効性を持たせ，真に課題解決能力を育てる教育方略の試行と評価から実践・検証を行うものである。



2) 取組内容

(1) 「課題発見実習」「教育実践研究」のカリキュラム試行－評価－改善－実施

① 「共通科目」5領域の視点で読み解く地域協働学校の教育実践課題

本取組における「課題発見実習」は，その後続く「課題解決実習」とともに地域協働学校で実施する。地域協働学校は，地域社会との連携・協働，異校種間の連携・協働を進めながら，特色ある教育課程を編成・実施しており，様々な教育実践課題を有するとともに，実践・研究支援に対する高いニーズを持っている。

まず新卒院生は地域協働学校で週1日実習を行い，現職院生は週1回参加観察するとともに，実習校の教師と協働しながらアクション・リサーチする。その際，新卒院生・現職院生・研究教員・実務家教員がチームをつくる。現職院生は新卒院生にとってメンターとしての役割を果たし，新卒院生の課題発見力・解決力をチームとして高めるようにする。また，研究教員と実務家教員が現場に参加することで，地域協働学校の教職員と協働して，研究的に教育実践の課題を分析するとともに具体的に課題解決を支援する役割を果たせるように準備が可能となる。

院生は地域協働学校の教育実践課題を，共通科目で教育課程論，教科指導論，教師論，生徒指導・教育相談論，学級・学校経営論と教育実践研究の方法論を組み合わせた多角

的な観点から分析する。試行段階ではこれらの領域を観点としたケーススタディを地域協働学校における「課題発見実習」の試行と同時に試みる。すなわち、実習の事前指導及び実習期間の前半にこれらの観点からケーススタディを行ない、ティーチングノートを作成し教材化する。

② 集団討論を通して課題発見力を育成し自己課題を明確にする「教育実践研究 I」の実施

半期にわたる実習期間中に、5領域の「共通科目」でのケーススタディを通して実習校が持つ教育実践課題を多角的に分析する。さらに「教育実践研究 I（課題発見）」を通じて、各人の問題意識で分析した教育実践課題について共同討論して構造的に把握する。続いて自己課題を明確化する作業を行ない、課題解決のステージである「課題解決実習」と「教育実践研究 II（課題解決）」の到達目標の精度を高める。そのために、1) 同じ地域に入ったチーム同士による地域社会・子ども分析、2) 同じ学校に入った院生同士による学校分析、3) 実習校の教職員を交えた教育実践分析などを行なう。このような重層的な協働を行なうことで、真にリアリティのある教育実践課題の分析と、それを解決する方略の創出を図る。

(2) 「実習」「教育実践研究」試行－評価－改善－実施のためのシステムづくり

① 院生－大学院－学校をつなぐ「コラボレーション・センター」の組織化

実習と教育実践研究において、有機的かつ効果的に院生・大学院・学校をつなぎ、日常的に院生の学習・研究支援を行なうとともに、協力校と日常的につながり学校支援を行なうために「コラボレーション・センター」を組織する。

同センターの機能には、院生と協力校との間では、(1)協力校が取り組んでいる教育課題や研究内容をあらかじめ調査し、院生の希望課題とマッチングさせる機能。院生と大学院の間では、(2)大学院教員による院生の学習・研究支援をオン・デマンドにコーディネートする機能、(3)院生の実習記録や学習・研究履歴を蓄積する「デジタル・ポートフォリオ」を作成支援する機能、(4)遠隔地にいる院生の学習・研究を支援する e-learning 支援機能。大学院と実習校間では、(5)リアルタイムに動画の送受信ができる環境での日常的交流・学校支援機能がある。

同センターには、教職大学院担当予定教員の他、事業推進員を置く。

② フィールドで協働しながら院生指導できる大学院教員の F D

大学院において「実習」「教育実践研究」を実施するためには、大学院の指導教員がフィールドでの教育実践研究に熟達し、地域協働学校での教育実践をよく理解しておく必要がある。これまで、本学では多くの教員が学校現場と継続的に関わり、フィールドでの教育実践研究を行なって学校の教育実践研究を指導している。とくに前述の現職 3

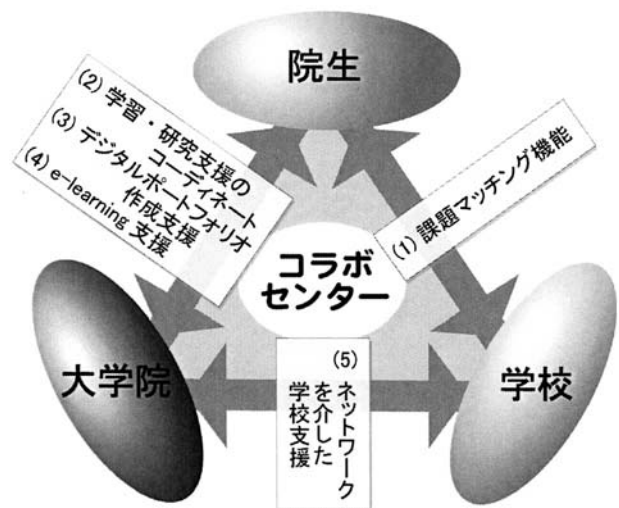


図 3. コラボレーション・センターの機能

専攻では、現職教員の「教育実践研究」を指導した実績がある。この成果を踏まえて院生とともに地域協働学校に出かけることで、教員側の研究課題や問題意識から出発する「教育実践研究」ではなく、デマンドサイドの学校現場が抱えている課題、院生が分析し明らかにした教育実践課題から出発する「教育実践研究」を展開する。

その準備として「実習」を行なう前に、地域協働学校において研究教員と実務家教員の協働によるフィールドワーク、アクション・リサーチを実施し、その成果をもとに「教育実践研究」をいかに指導するかについてワークショップを開催する。

3) 実施計画

図4に示す実施計画にもとづいて取組を進める。要点を以下に記す。

I. 平成19年度4～9月：準備期間

- ① 本取組実施の責任母体は、学内の教職大学院プロジェクト委員会であり、6月には岡山市教育委員会・地域協働学校との連携協議会を発足させる。
- ② 8月には試行チームを編成とコラボレーション・センターを組織化し、本センターと連携協議会が主催するシンポジウムを開催し、本取組の意義と内容を共有する。
- ③ 教員のFDを通して「実習」「教育実践研究」のカリキュラム・指導方法を開発する。

II. 平成19年度10～3月：試行、評価・立案期間

- ① 「取組内容」欄に示した方法で試行する。
- ② 試行の結果を、教員・院生による自己評価・相互評価、地域協働学校教員・保護者による評価、及び、他大学教員などの第三者を含めた「事業評価委員会」を構成し、その外部評価を行い、その結果をふまえて、平成20年度の教職大学院開設に向けたカリキュラムの改善を行なう。

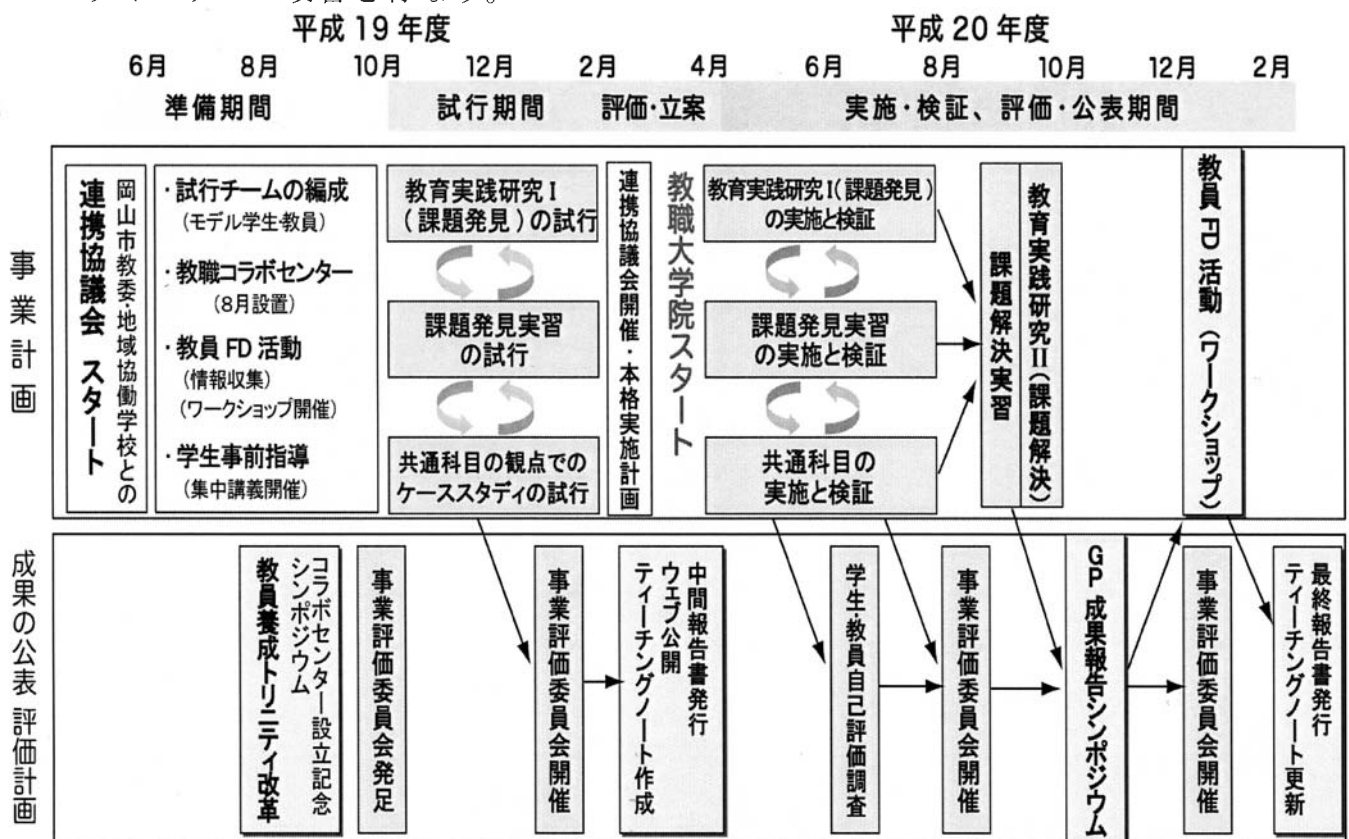


図4.実施計画

Ⅲ. 平成 20 年 4～10 月：実施・検証期間

- ① 教職大学院をスタートさせ、試行の成果を踏まえて体系的な教育実践研究をコアとした「教職大学院カリキュラム@岡大」を実施する。
- ② 教職大学院での取組の成果は「GP 成果報告シンポジウム」の中で深め、公表する。

Ⅳ. 平成 20 年 10～2 月：評価・公表期間

- ① 本取組の成果を本学部の全教員が共有し、学部教育や大学院他専攻での教育に生かすことができるように教員FD活動を実施するとともに、事業評価委員会の意見を交えて最終報告書を作成し他大学等でも活用できるようにする。
- ② 「学校支援活動成果報告書」を作成し、他の学校現場の取組に成果を活用する。

2 取組の特色

本取組は、高度専門職業人の育成に特化した「教職大学院カリキュラム@岡大」（図1）が、真に課題解決能力を育てるものとなるように事前に試行・検証を行うものである。取組内容の工夫の主なものは以下の3点であり、その3点が本取組の独自性といえる。

1) 多様な教育実践課題が存在する地域協働学校と協働すること

地域協働学校を協力校とすることで、院生は重層的な協働を体験し、協働の中で教育実践課題を分析・発見し、解決していく力量を身に付けていくことができる。保護者や地域住民と協働する経験は、特に新卒院生にとって保護者との対話をする貴重な経験ともなる。また、地域協働学校は、地域に開かれた学校づくりを進めていくモデルでもあり、一般校における開かれた学校づくりを推進する見通しを獲得できる。

さらに、岡山市が進める中学校区を単位とした地域協働学校の取り組みは、異校種間の連携・協働について学ぶ貴重な経験となる。校種間の学校文化や教員文化の違いから、異校種間の連携は今日も十分進んでいるとは言えない。地域協働学校での実習を通じた異校種の教員や子ども、保護者との協働経験は、異校種間連携を推進できる人材を育成することにもつながる。

また、地域協働学校は、大学院の教員にとっても新しい研究対象であり、十分な研究的蓄積があるわけではない。そのため、大学院教員による研究指導は、既存の理論枠組みからなされるよりも、現実の教育実践や事実から出発するものとならざるを得ない。したがって、研究教員と実務家教員との協働が不可欠となる。

2) 体系的に課題解決能力を育成するカリキュラムの有効性を検証すること

本取組は、「教育実践研究」をコアにして課題解決能力を体系的に育成するカリキュラムの一部を先行的に試行し、その有効性を検証しようとするものである。このカリキュラムは、実態を調査し、課題を明らかにすることから出発する。与えられた課題を解決していく力量ではなく、自分で今何が課題であるのかを多角的に発見・分析することが、課題解決能力の土台にあると考えるからである。さらに本取組で試行する「課題発見実習」「教育実践研究Ⅰ（課題発見）（課題分析）」に続き、明確化した課題を解決していく過程が教職大学院で展開され有効性が検証される。（図1参照）

3) 院生と教員がチームを組みリアルな学校課題の解決に取り組むこと

本取組は、単に大学院において院生を教育する取り組みではない。同時に、地域協働学校が抱える課題に取り組み、学校の改善を支援する取り組みでもある。このことは、本取組の成果が、学校の改善状況によって評価されることを意味する。「教育」だからといって、学校の改善に無責任に関与するのではなく、学校改善に責任をもって取り組むメンバーの一員となるのである。

これを実現するために、院生と大学院教員がチームを組み、地地域協働学校の教職員と協働しながら、実習と教育実践研究に取り組む。

3 取組の有効性

1) 真に課題解決能力を育成する教職大学院カリキュラムの開発

取組の問題意識は取組の概要欄で前述しており、目指すべき成果は真に課題解決力を育成する教職大学院カリキュラムの開発である。特色で示した「教職大学院カリキュラム@岡大」の工夫は、高度専門職業人の育成に特化した教職大学院における「実習」カリキュラムや、課題解決能力を育成するカリキュラムの体系化のモデルとなりうると考えている。

さらに、本取組は本学教職大学院構想の有効性を検証・評価するものであり、本取組を通して、教育現場との協働によるカリキュラムの点検・評価から教職大学院設置後も問題点を明らかにし不断の改善を加えることを可能にするものといえる。

2) 教職大学院での研究成果を学校現場に直接還元し支援

本取組の目的は、何よりもまず院生の課題発見・分析能力を育てることであるが、大学院における教育・研究の成果を追求することに閉じたものではない。院生が課題発見・分析能力を身に付けていく過程は、地域協働学校の教育実践課題を発見・分析し解決に取り組む過程でもある。この取組の真の成果は、地域協働学校の教育実践課題の解決という形でこそ現われる。つまり、この取組の成果は、院生の課題発見・分析能力の成長を評価するとともに、地域協働学校の教育実践の改善を評価することによっても明らかになる。

この取組で経験された地域協働学校の課題分析及び課題解決策の取り組みは、他の多くの学校が教育実践を改善していく上で役に立つ情報を提供するものとなる。さらに、地域協働学校は、ただ一つの学校の中での教育実践が改善されればよいというものではない。地域社会や異校種の学校も連携・協働する中で改善されていく必要がある。このような広がりの中で、本取組の成果は有効性を発揮する。

3) 大学院教員の「教育実践研究」指導に関する意識改革

本取組を継続的で効果的なものにしていくためには、コラボレーション・センターの設立などの制度的・組織的な取り組みとともに、教員の「教育実践研究」の指導力量の向上が欠かせない。そこで、本取組では、教職大学院を担当予定の教員全員が参加し、地域協働学校などに出かけ、フィールドの教職員と協働した「教育実践研究」に取り組むFDを実施し、教員の指導力量を向上する。そのために、平成18年度より岡山県教育委員会による「授業で勝負！」研究指定校に大学院教員が組織的に訪問して「教育実践研究」を行ない、デマンドサイドとの連携を深めてきた。平成19年度からは、地域協働学校における教育実践を対象としたケーススタディの実施方法についてワークショップを通して身に付けるなど、多様な体験的FDを工夫して実施する。

このようなFDを通じた教員の「教育実践研究」の指導力量の向上と、それらに対する意識変革は、本学だけでなく他大学の教員養成教育に波及効果を持つと考える。

4 関係団体等との連携方法

本学部は、従来から学校・教育委員会との間で連携を深めており、岡山県教育委員会とは平成12年に連携協力の推進のための「協定書」を締結し、年次毎にテーマを策定して取り組んできている。平成18年1月には、本学部と岡山県下の教育委員会・教育センター・学校関係者等で構成される「岡山大学教職大学院設置検討委員会」を組織し、「教職大学院カリキュラム@岡大」の策定においては岡山県教育委員会と協働して行ってきた。

また教職大学院の実務家教員として、岡山県教育委員会と3名の交流人事を行なう予定である。この3名は教科指導・生徒指導・教育相談に経験の深い指導的立場の実務家教員であり、学校現場で大学の研究教員とタッグを組んで指導にあたる強力な人材といえる。

本取組においては、実習校である地域協働学校と岡山市教育委員会との「連携協議会」を組織するとともに、岡山県教育委員会及び岡山県総合教育センターは本取組の事業評価に参加する。なお岡山市教育委員会とは、地域協働学校の選定について協議中であるが、現時点では岡山市立石井中学校区7校園の予定で調整中である。

「コラボレーション・センター」の設置は、平成19年8月を予定しており、マルチ通信ネットワークも活用してこれら関係機関との日常的・組織的な連携を行なう。

5 取組の経過や成果等に関する情報公開の方法

1) 本取組専用WEBサイトの開設

コラボレーション・センターが作成するWEBサイトを通じて、1)「実習」「教育実践研究」のカリキュラムと実施状況、2)院生による地域協働学校の教育実践課題の分析・発見の進捗状況、3)大学院教員のFDの実施内容と成果・課題等について定期的に情報提供する。これらは、学外に対する情報提供であると同時に、院生・大学院教員との情報共有を図り、協働を進めていくためにも有効といえる。

2) シンポジウム及び報告会の開催

平成19年度には、8月にコラボレーション・センター設立記念シンポジウム「教員養成のトリニティ改革」を開催する。

平成20年度には、「実習」「教育実践研究」の試行－評価－改善－実施をふまえた成果報告シンポジウムを開催する。さらに年度末には、「最終報告会」を開催し成果を広く世に問う。

3) 報告書の作成

19年度末には、試行を評価した「中間報告書」と教材となる「ティーチングノート」を作成する。20年度末には、「最終報告書」を作成する。なお、報告書の作成にあたっては、大学院教員による自己評価とともに、事業評価委員会による外部評価の内容も反映させ、客観的に価値のある成果をまとめる。さらに「学校支援活動成果報告書」を作成し、学校現場に配布する。

2. 事業経過

1) 第1年度（平成19年度活動記録）／2007年8月～2008年3月

- 8月 1日 第1回運営委員会
4日 「教員養成のトリニティ改革—岡山大学教職大学院構想」シンポジウム
9日 本事業採択決定
- 9月 4日 第2回運営委員会
26日 第3回運営委員会
- 10月 10日 第1回教職大学院ワークショップ
22日 連携協議会／地域協働学校への本事業説明会（石井中学校区4校）
31日 第4回運営委員会
- 11月 5日 地域協働学校との打ち合わせ（石井中学校）
6日 地域協働学校との打ち合わせ（三門小学校）
14日 第5回運営委員会
地域協働学校との打ち合わせ（大野小学校）
15日 地域協働学校との打ち合わせ（石井小学校）
16日 第2回教職大学院ワークショップ
28日 第6回運営委員会
- 12月 8日 第7回運営委員会
14日 山口大学教育学部「e-ちゃぶ台」調査
25日 第8回運営委員会
- 1月 7日 モデル学生への説明会
地域協働学校との打ち合わせ（大野小学校）
「こらみゅ（SNS）」始動
8日 モデル学生による実習開始
地域協働学校との打ち合わせ（石井中学校）
10日 地域協働学校との打ち合わせ（石井小学校）
25日 第9回運営委員会
30日 第10回運営委員会
- 2月 6日 モデル学生による実習中間報告会
9日 大学教育改革プログラム合同フォーラム（ポスターセッションで報告／横浜）
19日 第11回運営委員会
27日 モデル学生による実習報告会
29日 第3回教職大学院ワークショップ
- 3月 12日 連携協議会／地域協働学校との打ち合わせ（石井中学校区4校）
13日 第12回運営委員会
15日 平成19年度GP成果報告会
25日 第13回運営委員会
26日 地域協働学校との打ち合わせ（石井小学校、石井中学校）
27日 地域協働学校との打ち合わせ（三門小学校、大野小学校）

2) 第2年度(平成20年度活動記録) / 2008年4月~2009年3月

- 4月 4日 FD活動:教職大学院教員合同研修
8日 教職大学院オリエンテーション
9日 院生向け「こらみゆ」使用説明会
15日 インターンシップ実習オリエンテーション
16日 学校における実習(課題発見実習)オリエンテーション
22日 実習校訪問・打ち合わせ(岡山中央中学校)
課題発見実習開始
23日 第1回教職大学院運営委員会
インターンシップ実習開始
- 5月 14日 実習校訪問・打ち合わせ(大野小学校)
28日 第2回教職大学院運営委員会
教職大学院GPプロジェクト会議
- 6月 2日 FD活動:公開授業研究会
16日 課題発見実習中間報告会
25日 第3回教職大学院運営委員会
28~29日 教職大学院公開会議参加(福井大学教職大学院)
- 7月 2日 実習校訪問・打ち合わせ(石井小学校)
3日 教職大学院連携協力会議
5日 研究成果発表:日本教育工学会研究会参加(金沢大学)
8日 FD活動:教育学研究科専任教員による授業の見学・評価
23日 課題発見実習報告会
25日 教職大学院GPプロジェクト会議
29日 インターンシップ実習前期報告会
- 8月 2日 教職大学院オープンキャンパス
FD活動:教職大学院GP講演会
4日 第4回教職大学院運営委員会
5日 教職大学院GP研究打ち合わせ
20日 第1回実習校連携協議会
21日 教職大学院オープンキャンパス
23日 研究成果発表:日本科学教育学会年会参加(岡山理科大学)
25日 学校における実習(課題解決実習)オリエンテーション
26日 課題解決実習開始
29日 第2回実習校との連携協議会
- 9月 5日 第5回教職大学院運営委員会
8日 現職教員院生現任校との打ち合わせ(行幸小学校、伊里中学校)
9日 現職教員院生現任校との打ち合わせ(早島養護学校)
10日 現職教員院生現任校との打ち合わせ(一宮高校)
11日 現職教員院生現任校との打ち合わせ(倉敷西小学校、山田小学校)
12日 現職教員院生現任校との打ち合わせ(美咲中央小学校、久米中学校)

- 16日 現職教員院生現任校との打ち合わせ（富山中学校、操南中学校）
- 21日 大学院入試
- 22日 教職大学院連絡協議会・情報交換会（京都）
- 10月6日 実習校との連携協議会
- 8日 学校における実習（課題解決実習）報告会、教育実践研究中間報告会
教職大学院連携協力会議
- 11日 研究成果発表：日本教育工学会全国大会参加（上越教育大学）
- 24～25日 研究成果発表：日本教育大学協会協議会（三重大学）
- 29日 第6回教職大学院運営委員会
- 11月12日 第7回教職大学院運営委員会
- 20日 第8回教職大学院運営委員会
- 21日 岡山県教育委員会との打ち合わせ
- 26日 教育実践研究中間報告会
- 12月1日 文部科学省による教職大学院実地調査
- 3日 教職大学院オープンキャンパス
第9回教職大学院運営委員会
- 1月13日 文部科学省主催・専門職大学院G P分科会（横浜）
- 19日 教職大学院協会運営委員会
- 22日 教職大学院訪問（情報交換・資料収集／奈良教育大学教職大学院）
- 23日 教職大学院訪問（情報交換・資料収集／愛知教育大学教職大学院）
- 27日 教職大学院G P最終成果報告会及び最終成果報告書についての打ち合わせ
- 28日 第10回教職大学院運営委員会
- 2月4日 第11回教職大学院運営委員会
- 7日 大学院入試
- 10日 インターンシップ実習後期報告会
- 27日 第11回教職大学院運営委員会
- 3月7日 教職大学院G P最終報告会（シンポジウム、公開外部評価委員会、連携協議会）
- 18日 第12回教職大学院運営委員会
- 24日 第3回実習校との連携協議会
- 29日 研究成果発表：日本教育大学協会研究年報第27集，pp. 175-190
- 31日 本研究成果最終報告書提出・発送

<補足>

教職大学院教員FDにおいては、基本的に全ての講義を公開授業にしている。授業担当教員の了解を得て授業参観・意見交換を行う。

実習校との打ち合わせにおいては、実習時に大学教官も実習校に行き、常に意見交換や調整等を行い情報共有を図る。また、教育委員会とも電話やメール等で頻りに連絡を取り合い、意見交換や調整等を行い情報共有を図る。

Ⅱ 実施概要

1. 平成 20 年度カリキュラムの実施理念

(1) 本教職大学院の目的・目標

現在の学校教育が抱える新しい複雑な教育課題に対応しうる高度な教育実践力を身につけていくためには、それらの仕組みや成り立ちを分析的・理論的に考え、実践的な理論を構築し、展開していくことが必要である。さらに、分析的・理論的に考えることを通して、教育実践を展開し高度化していくことも求められる。「事例（ケース）」をもとにした「理論（知）と実践（知）の融合」が求められているといえる。

そこで、本教職大学院では、以下のような力量を要素とする「高度教育実践力」を養成することを目的とする。

- ①問題や事象に関して理論との架橋・往還によって問題の解決の方向を見通すことのできる、高度の「解釈力・診断力」
- ②それに支えられた具体的な問題解決策の「企画力」
- ③それを实地に試みるために必要な優れた授業力をはじめとする「実践的な展開力」
- ④これらに関して客観的に評価したり反省的に思考するなどの「評価力」

つまり、今後の学校教育に必要な知識・技術を身につけ、今日的教育課題や教育事象について実践と理論との架橋・往還・融合を通して高度にマネジメントし遂行できる高度教育実践力を育成し、専ら高度専門職業人である教員の養成と研修のための教育を行なうことを目的として、本教職大学院は設置されたのである。

この目的を、本GPのテーマである「課題発見力」と関連づけると、①の「解釈力・診断力」は課題を発見する力の中心になる力量であり、発見された課題を解決するために②の「企画力」、③の「実践的な展開力」が求められ、この課題発見－解決の営みをサイクルとして継続的に発展させていくために④の「評価力」が必要となるといえることができる。

これらの「高度教育実践力」を養成することで、本教職大学院が育てようとするのは、次のような学校教員である。

- ①学部段階で教員としての基礎的・基本的な資質能力を修得した者（新人教員）が、さらに学習指導や学級経営、生徒指導などに関する実践的な能力（即戦力的能力）を身につけること。
- ②現場での一定の教職経験を有する現職教員（中堅教員）が、若手教員を育成する能力、及び、学年や学校、地域において学習指導や学級・学年経営、生徒指導などに関する指導的役割を果たす能力を身につけること。
- ③現場での一定の教職経験を有する現職教員（学校リーダー）が、学校のリーダーとして指導的立場に立って学校を運営していく能力を身につけること。

(2) 本教職大学院カリキュラムの構成理念と構造

このような高度教育実践力を持った学校教員を育成するために、本教職大学院は次のような特色を持ったカリキュラムを開発した。

- ①デマンドサイドのニーズに立脚したカリキュラム
・・・現場の課題を授業科目に取り入れる

②理論と実践の融合を中核としたカリキュラム

・・・課題発見・分析能力とチーム解決力・企画力を育成する

③大学院での研究成果を学校現場に直接還元できるカリキュラム

・・・「教育実践研究」の成果を学校支援に活かす

④教育現場との協働によるカリキュラムの点検・評価と不断の改善

・・・教育現場との意見交換を通じて絶えずカリキュラムを改善する

これらの特色を体現するカリキュラムとして、学校における実習・実践と往復しながら、自分自身と現任校の課題をチームで発見（分析）・解決（提案）・探究（検証）し、言語化する「教育実践研究」を柱としたカリキュラムを開発した。さらに、そのカリキュラムは、学部新卒者に即戦力的能力を育成することをめざす<新卒院生カリキュラム>と、一定の教職経験を持ち学校で指導的な役割を果たす力量の育成をめざす<現職院生カリキュラム>に区分した（図1）。

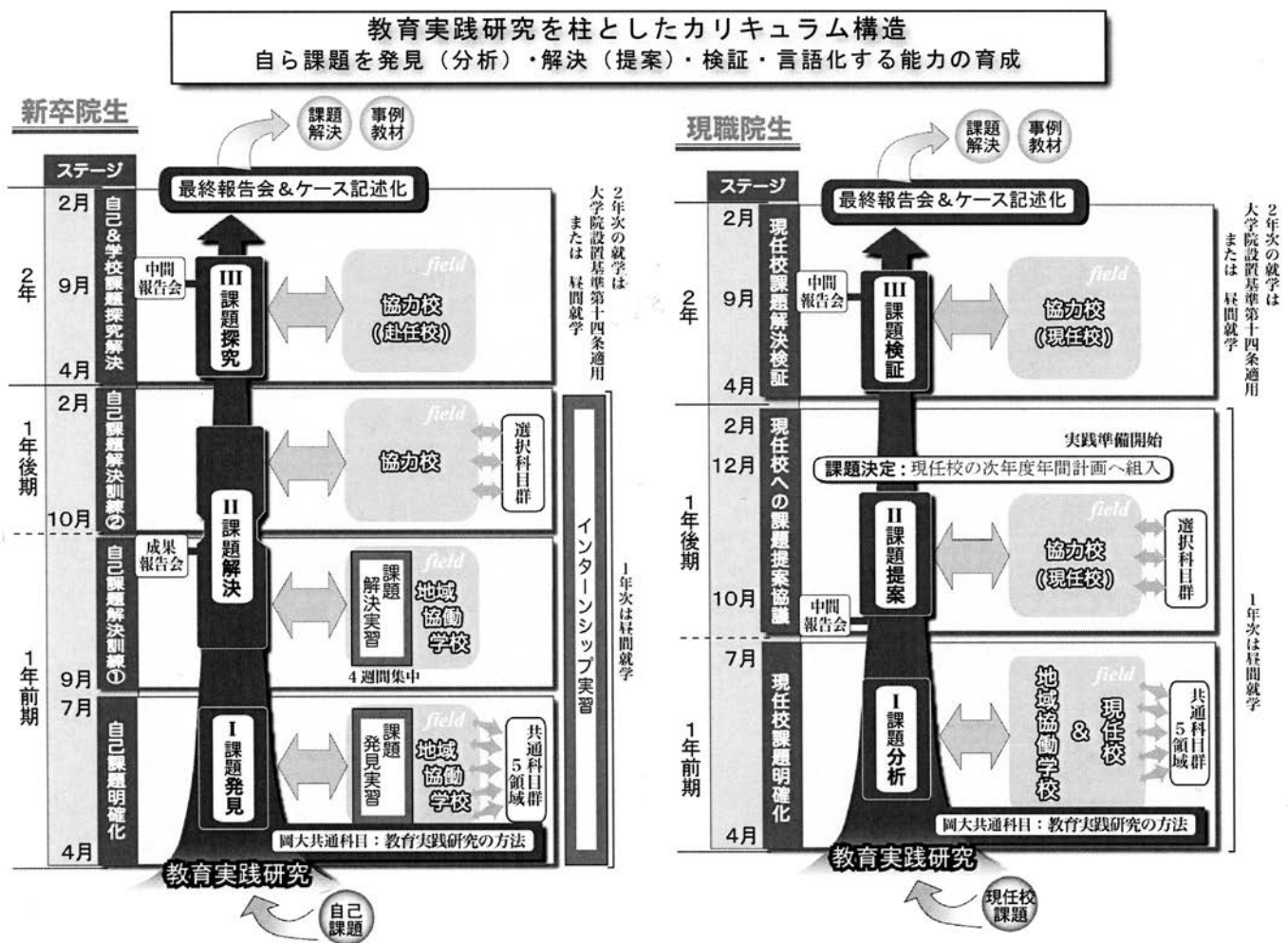


図1 体系化した「教職大学院カリキュラム@岡大」の全体像。 現職院生と新卒院生の能力差を考慮した課題の種類と解決プロセスの設定。（表1も参照）

本教職大学院カリキュラムの柱となっている「教育実践研究」は、2年間にわたって継続的に開講される。それは、図2のような系統性を持って実施される。つまり、新卒院生は自分自身の抱えている課題（自己課題）を明確にし、その解決に向けて自分自身を磨い

ていく過程で、学校現場の抱えている課題を探り出してその克服に取り組んでいくようにする。現職院生の場合は、現任校の抱えている課題を分析することから始め、その課題を克服する方策を練り、それを実践し、検証する中で学校の課題を解決していくとともに高

新卒院生 課題は、教師の力量に関する自己課題が対象。経験の浅い新卒院生は自己課題を把握できない状態で入学。それに対応する内容設定。

現職院生 課題は、現任校に実際に存在する比較的大きな課題が対象。現職院生は既に課題を把握して入学。それに対応する内容設定。

教育実践研究		教育実践研究	
I(課題発見)	実習校での継続的な実習と共通科目を通じた事例分析も活用し、自己課題（一部は学校課題）を明確化し、課題解決の目標を設定する。必要に応じて模擬授業等も活用する。	I(課題分析)	共通科目も活用した分析法を踏まえて、現任校での課題を構造的に把握・明確化する。
II(課題解決)	明確化した自己課題の解決を目標に課題解決実習(4週間集中)を実施、学校課題への影響も含めて評価を行なう。その後、別フィールドで定期的実践、自己課題の克服訓練を進める。	II(課題提案)	課題分析で得られたいくつかの課題解決方法を現任校へ提案・検討し、教職員と協働して次年度の改善計画を作成する。課題を定量的に抽出する活動等も取られる。
III(課題探究)	赴任校で勤務または協力校で教育実践をしながら、自己課題や学校課題を発見し解決する計画を立案し、教職員と実践し評価する。その過程を言語化し、他者が活用できる実践研究を作成	III(課題検証)	提案した改善計画に基づいて実践研究を行い、その成果を評価、検証、言語化し、他校でも活用できる様に一般化する。

教育実践研究の「体系化」と「ねらい」。カリキュラム全体像(図1)も参照。

<図2 「教育実践研究」の系統性>

度な教育実践力を身につけていくようにする。

この「教育実践研究」は、大学院における共通科目・選択科目とも連携して行なわれる。本教職大学院の共通科目は、文部科学省が提示した5領域（教育課程の編成・実施に関する領域、教科等の実践的な指導方法に関する領域、生徒指導・教育相談に関する領域、学級・学校経営に関する領域、学校教育と教員の在り方に関する領域）に加えて、教育実践研究の方法を学ぶ「教育実践研究に関する領域」を設定している。これら計6領域の授業科目で学習した理論を、各人の学校での実習・実践を多角的な観点から分析・考察する道具として活用することで、自己課題・学校課題を追究していくのである。

また、「教育実践研究」は、学校における実習・実践と連動して行なわれる。教職大学院では「学校における実習」（10単位）が必修化されているが、10年以上の教職経験者は、審査を経て「学校における実習」を免除される。したがって、教職経験10年未満の現職院生並びに教職未経験の新卒院生を対象とした「学校における実習」を企画・実施しなければならない。教職大学院における「学校における実習」は、学部における教育実習と同じものであってはならない。本教職大学院では、「教育実践研究」と連動させ、次のような特徴のある実習を構想した。

- ①技術的な指導力よりも自己課題の発見・解決を目的とする
- ②実習校は地域と連携した学校づくり、幼・小・中の連携など特色ある教育を体験できる「地域協働学校」（岡山市が独自に実施している中学校区単位でのコミュニティ・スクール）とする
- ③学校での教師の一日の仕事すべてを参観・実習する
- ④実習期間中に大学教員による直接・間接の指導を継続的に実施する

1年次前期には「課題発見実習」（3単位）を開講する。1週1回8時間を15回程度、地域協働学校等で実習を行なう。この実習で気づいた課題、経験については、「教育実践

研究Ⅰ（課題発見）」において集団リフレクションの手法を援用して意味づけ並びに理論的体系づけを行なう。

1年次の8～9月には「課題解決実習」（5単位）を集中的に連続して5週間、地域協働学校等で行なう。前期に発見した自己課題を解決することを目的とする実習である。

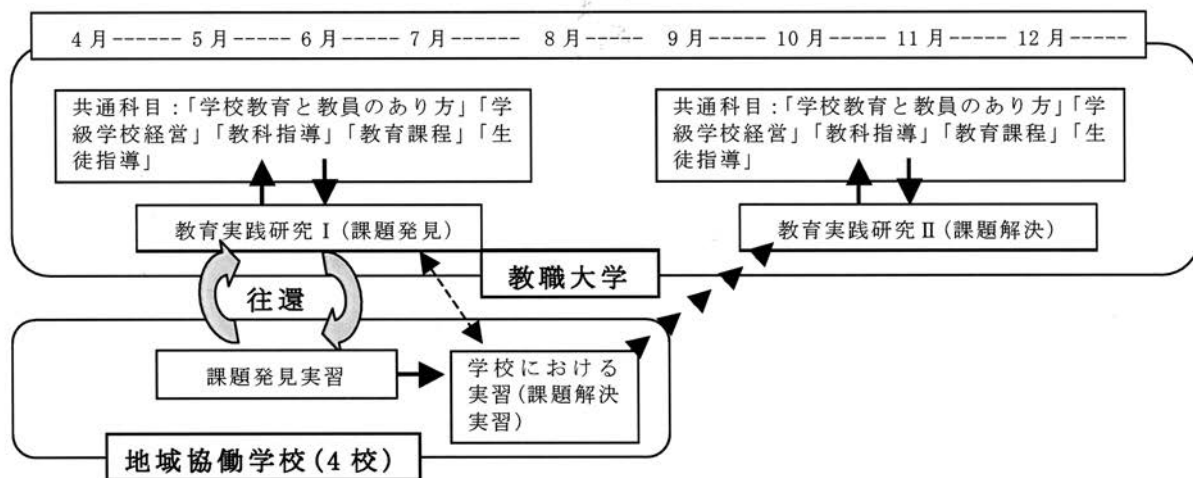
また、より多様な実習経験ができるように、特別支援教育と部活動の指導を実習する「インターンシップ実習」（2単位：1週1回3時間で15回程度）も行なうこととした。

以上のような「教育実践研究」を柱に、学校における実習・実践と共通科目・選択科目とを連動・連携させることで高度教育実践力を育成する。そして、その成果は「最終報告書」として言語化され、院生間に共有され、学校現場に還元されるようにする。

(3) 1年次新卒院生カリキュラムの構造

本GPの中心的な実践・研究対象は、新卒院生の1年次カリキュラムである。

新卒院生は、共通科目において6領域に区分された理論的な知を習得しながら、毎週1日地域協働学校において「課題発見実習」を行なう。そして、共通科目で学んだ理論を多角的な分析の観点として課題発見実習における実習経験を分析し、「教育実践研究Ⅰ（課題発見）」において院生集団で各人の実習分析を共同考察する。これを繰り返す中で自己課題を鮮明にし、広げたり、深めたりするとともに、その課題を解決するための方策を検討する。そして、その方策を実践するのが「課題解決実習」である（図3）。



<図3 新卒院生1年次カリキュラムの構造>

2. 平成19年度における「課題発見実習」「教育実践研究Ⅰ（課題発見）」の試行

本GPにおいて1年次前期に開講される「課題発見実習」「教育実践研究Ⅰ（課題発見）」を試行した。

学部4年次生3名(男1名、女2名)、院生1年次生1名(女)の計4名を「モデル学生」と呼び、平成20年度に実習校となる地域協働学校4校(小学校3校、中学校1校)において、1月8日～2月28日まで基本的に毎週1日、朝から晩まで実習を行なった。さらに、この実習をサポートするために、遠隔教育研究指導システム「こらみゆ」を構築した。

この試行の詳細は、本GPの昨年度の中間報告書、及び、本報告書にも再録されている「教職大学院の学部新卒者を想定した『学校における課題発見実習』の試行の一検討」（日

本教育工学会研究報告集, JST08-3, 日本教育工学会), 「教職大学院生を想定した教育実習の分析結果とその可視化の検討」(日本科学教育学会年会集, 第32回 2008, 日本科学教育学会), 「教職大学院専用遠隔教育研究指導システムの開発と試用結果の考察」(日本教育工学会大会論文集 JSET 24 2008/10/11 日本教育工学会)を参照されたい。

ここでは, この試行を通して得られた知見を整理しておく。

①実習生は実習校において, 新任教員と同様に, 不安と期待が錯綜した心理状態になる。

派遣先学校の所在地を確認し, 当該校の校長あるいは教頭と事前に面識があるとは言え, 大半の教職員及び児童・生徒とは面識がないまま, 派遣先の学校で人間関係を新たに形成する必要がある。こうした状態になるのは, 実習生も新任教員も同じである。モデル学生4人は異口同音に期待と不安を吐露していたが, 実習校教職員や児童・生徒と挨拶を交わすことによって, 緊張を緩和させ親近感を感じるようになる。人間関係が広がり, 安定してくるにつれて, 実習生は実習意欲を高め, 自信を回復していくという波及効果が生ずる

②「こらみゅ」に書き込まれた実習生の実習日誌に対する教職大学院の教職員からの教示的, 激励的なコメントは, 彼らの実習への動機づけを強化させる効果を与える。

モデル学生が実習日誌を「こらみゅ」に投稿すると, それを閲覧した教職大学院の教職員から, 教示的, 激励的なコメントが投稿された。その内容は, 実習生の不安や心配を和らげ, その日の実習で大きな学びがあったことを意味づけ, 評価するものと, 次週の実習に向けての課題を明示し, 実習の見通しを与え, 実習への期待と意欲を高めようとするものであった。

また, 「こらみゅ」を通して, 教職大学院の教職員は実習校での実習生の様子や実践状況, 気づきや課題意識などを把握することができる。そして, それを教職員間で共有することができる。「こらみゅ」を媒介として, 一人の実習生を複数の教職員でサポートする体制ができたのである。

③実習の回数が増え, 実習校教職員からの信頼を獲得するにしたがって, 次第に任される仕事・業務の内容が増大するなど量的な変化に加え, 教務事務処理の手伝いなどの質的变化が見られる。

実習校教職員からの信頼が得られない限り, 実習できる内容の質も量も豊かにならない。例えば学習指導面では, 当初は授業参観者の立場であるが, 次第に TT(Team-Teaching)の授業運営に直接参画できるようになる。また, 授業担当教員から学習指導理念や授業実施の事前・事後対応について, 指導助言を得るようになっていった。

④校内の各種委員会・部会に陪席することによって, 学部段階での教育実習では認識されなかった学校運営に関わる校内組織の存在とそれぞれの機能に注意と関心が向けられるようになる。

学校運営に当たり各種校務分掌組織が存在し, それらが連携して機能していること, 教職員は教職経験や教科・学年担当等などが考慮されて校務分掌を担っていること, 教職員相互のチームワークの重要性などを認識するようになった。そして, 教職員の使命の重要性と責

務の大きさを実感していた。

⑤教育相談室において関わる児童・生徒を通して、個別に子どもの発達・成長と多様性を認識するようになる。

学級・学年集団の中の児童・生徒を観察する認識とは異なり、個として関わる児童・生徒に対しては、一人ひとりの性格・心理状況・学習履歴などを推察し、その上で働きかけの結果を予測して対応する必要性を実感している。つまり、個としての児童・生徒一人ひとりの内面と顕在化された反応を注意深く観察するようになり、以前と異なる反応・変容が見られると、それを喜び充実感と自己効力感を持つようになる。児童・生徒を個として観察するという認識・行動様式が、TT による授業において、個別指導を必要とする児童・生徒を弁別することに応用されている。

⑥実習内容を共通科目の5領域の項目名で分類すると、「教科指導」が体験件数、時間とも突出して多い。

モデル学生自身「教科指導」の授業への関心が高い上に、受け入れ先である学校側の意向・対応が「教科指導」を除いては各委員会・部会への陪席程度に限定されること、背景・経緯の事前の認識が不可欠な「生徒指導」、「教育課程」等へ関わる内容への参画・関与は回避する配慮がされたように見受けられる。勿論、「生徒指導」「教育課程」に関わる案件は、一般に不定期的であり、生起頻度が「教科指導」に比べ低いと推測される。このような実習内容の偏りは、派遣先校教員に準ずる待遇を受けながらも守秘義務のない学生に対して、今後起こりうると考えられる。

⑦独善的でない積極性に富んだモデル学生は職場への適応が円滑に行なわれ、本人自身の充足感、自己効力感も高い。逆に周囲から消極的と見なされるモデル学生は不適応を起こす傾向が見られる。

前者の場合は派遣先校で教員だけでなく児童・生徒に歓迎されていると実感し、周囲の人間関係が早期に形成され、親密度が増す傾向が顕著である。張りのある声で受け応えできることが好感度を増すように見受けられる。後者の場合は周囲の人間からの働きかけが次第に乏しくなるとともに、言動を批判的に見られるようになるので、ますます不適応が強化されると危惧される。この状況を打開するためには、モデル学生自身が自分自身を対象化でき、より積極的に行動しようという意識を持つことが肝要である。

3. 平成20年度教職大学院開校時の改善点

平成20年度に開校した本教職大学院は、以上のような平成19年度の試行で明かとなった知見をふまえてカリキュラムを改善して実施した。その際のポイントをいくつか整理して示す。

①実習校への適応を支援する体制を構築する

学部の教育実習は、実習生を受け入れることに慣れと耐性のある附属学校であるが、教

職大学院の実習校は実習生を受け入れることが初めての公立学校である。それゆえに実習校は、実践生をどのように受け入れ、どうかかわっていけばよいのかなどのノウハウをまったく持っていない。また、附属学校での実習であれば、先輩から学校の様子や先生方の個性などについてあらかじめ耳にすることもできるが、平成 20 年度に開校する本教職大学院にはそのような情報はない。したがって、実習生は緊張を強いられる状況に置かれ、強い不安を抱きながら実習せざるを得ない。教職大学院における実習は、学部の教育実習のように実習校に「丸投げ」では実施できないのである。

そこでまず、実習生が安心して実習に取り組める環境を構築することが求められる。そこでまず、平成 19 年度の試行で明らかになった実習生の精神的な不安状況を和らげ、実習校、実習校の教職員集団への適応を支援する体制を確立することを意識した。

そのために、第一に、実習校毎に実務家教員を割り当て、特に初期の段階では、できる範囲で実習生とともに実習校を訪問したり、実習生と実習校とをつなぐ役割を果たすようにした。実習校で困ったときに相談できる体制を構築したのである。

第二に、各実習校には 2 名の実習生を割り当て、2 名で協力・協働しながら実習に取り組む体制をとったことである。これにより、2 名で状況を共有し、協働して課題を発見・解決していくことができるようになる。

第三に、「教育実践研究」において、課題発見・解決をめぐる分析・考察をするだけでなく、適応状況や精神状況なども含めて交流・討論するようにしたことである。その際、グループ編成を他の実習校で実習している者が一緒になるようにすることで、視野を広げ、自分の実習をより客観視できるようにした。

第四に、「こらみゆ」において、実習生の書き込みに対して、共感的・受容的に対応し、実習生の自己肯定感を高めるように配慮したことである。「もっとこうすべき」と要求する前に、見ることができたこと、することができたこと、気づくことができたことを評価し、意味づけることから始めたのである。

第五に、実習以外での教員による実習生に対する面接指導、個別面談を設定したことである。特に、学校現場の実情を熟知している実務家教員が、実習校教職員の言動に込められているメッセージを読み解き、翻訳することで、両者のすれ違いを解消する役割を果たしたのである。

②自己課題に即して、実習体験を意図的に深化・拡張する支援が不可欠

新卒院生は、入学願書にある「研究計画」を作成する過程で、自己を見つめ、自己課題を探る。しかし、それは表面的で、自己の狭い経験にもとづく自己課題であり、あいまいでぼんやりとした自己課題である。が、そこにその院生の自己認識があり、こだわりがある。それを否定することからは自覚的な自己課題は生じない。そこで、出発点となる自己課題を大切にしながら、「実習」及び「教育実践研究Ⅰ（課題発見）」を実施する中で、その自己課題を発展させていくことが重要である。

平成 19 年度の試行では、「実習」及び「教育実践研究Ⅰ（課題発見）」において院生が参観できたり、経験できたりした領域は「教科指導」領域に偏重しており、5 領域をバランスよく実習することはできなかった。このままでは「教科指導」以外の自己課題を設定した院生は、実習を通して自己課題を深めることができなくなってしまう。そこで、でき

る限りバランスよく実習体験ができるように実習校に依頼した。また、「教育実践研究Ⅰ（課題発見）」においては、「教科指導」に自己課題を設定していても、その課題を解決していくためには、その他の領域での指導が必要であると提起するようにした。

最初から「全部参観してこい、経験してこい」と要求しても、それはますます実習生の意識を拡散させ、何も見えなくさせてしまうこととなる。最初の自己課題を手がかりにしながらも、多様な実習経験をする中で課題意識を広げていくことが、自己課題をより鮮明にし、解決の糸口発見につながるのである。

と同時に、自己課題のある領域に関しては、その領域にかかわる実習経験をより深めていくことが重要である。今年度、数名の実習生が、課題発見実習の中で「教壇実習」を経験した。実習生は、1時間の授業を任せられ、指導案づくり、教材・教具の作成、授業指導、振り返りと経験していく過程で、見ているだけでは気づかなかったことに気づき、新しい自己課題や自己課題解決の見通しを獲得している。また、生徒指導に関しても、実習校教員の生徒指導場面を参観するだけでなく、実際に気になる行動をする生徒に声をかけ、コミュニケーションをする中で多くの発見をしている。自己課題にかかわる実習経験の質を深めることで、課題発見・解決はより豊かに行なわれるのである。

③実習・教育実践研究と結びつけた共通科目の展開

実習体験を拡張していくためには、文部科学省の提起した5領域に「教育実践研究の方法」を加えた6領域の共通科目を、実習・教育実践研究と結びつけて展開する必要がある。従来の大学院の授業は、研究者である教員が、自己の学術研究の成果を一方向的に講義することが多かった。そこで、本教職大学院では、共通科目を研究者教員と実務家教員の2名で担当することとし、共通科目そのものが理論と実践とを往還しながら展開されるように工夫した。

さらに、共通科目の授業を進める過程で、その授業の内容にかかわって実習で学んできたことを整理して発表する活動や、その授業の学習過程について実習校をフィールドにして実地調査する活動を位置づけた。例えば、平成19年度の試行においてもほとんど経験されることのなかった「教育課程」領域については、共通科目「教育課程編成の理論と実践」の中で、新卒院生に対して「あなたの実習校の教育課程、その編成・評価方法について調べてきて、発表してください」と課題を提示し、2名の実習生で協力して調査し、発表させるようにした。

しかし、こうした「課題発見実習」と重ねたフィールドワークを位置づけることができるのは前期開講の共通科目だけであった。そこで、後期の共通科目においても同様のフィールドワークを可能とし、新卒院生の学校での課題解決・探究を支援する「フィールド研究」を、前期と同様の実習校において実施することとした。ここでは、実習生という身分ではなく、「学校支援ボランティア」制度を活用し、学校支援をしながら自己課題を解決・探究していく。

④実習・教育実践研究・共通科目のサイクル化

当初は新卒院生は2年間で実習を含めて50単位を修得することを想定していたが、最終報告書を作成する「教育実践研究Ⅲ（課題探究）」を除いては、1年次に大半の単位を修

得できるようにカリキュラムを編成することとなった。これによって、院生は1年次に多くの授業科目を受講しなければならないこととなった。特に、1年次前期は、週1日は課題発見実習に、半日は「インターンシップ実習」に行きながら、残りの3日半で授業を履修しなければならない。さらに、実習の記録を「こらみゆ」に記入しなければならないし、フィールドワークやケース発表などの準備も多い。

このような多忙な新卒院生の負担感を少しでも軽減できるように、1週間の生活をルーティン化できるようにした。すなわち、水曜日に1日課題発見実習を行なう。その日のうちに実習内容を「実習日誌」として「こらみゆ」に書き込む。木・金曜日は共通科目等の授業を受け、週末に実習体験を省察して「実習分析」を「こらみゆ」に書き込む。月曜日に「教育実践研究Ⅰ（課題発見）」を行ない、そこで「こらみゆ」に書き込んだ「実習分析」を共同考察する。火曜日は午後に「インターンシップ実習」に出かける。このように1週間の学習生活をルーティン化したのである。

しかし、いずれにせよ、新卒院生は多忙である。新卒院生同士が課題解決のために共同・協働する機会を十分保障することができない。今後の課題である。

⑤実習校との意思疎通と信頼関係が決定的に重要

実習生の実習を充実させ、課題発見力・解決力を育成するためには、何より実習校の協力・協働が不可欠である。そして、そのためには教職大学院と実習校との信頼関係が必要である。

教職大学院と実習校との信頼関係を構築するためには、第一に双方の教員が Face to Face で話ができる機会を頻繁につくる必要がある。そのために、実務家教員を中心に何度も実習校を訪問したり、課題発見実習と課題解決実習の成果発表会に実習校の先生方を招聘したり、「教職大学院連携協力会議」の中で協議したりするなどした。

第二に、実習生が実習を通して何をどのように学んでいるのか、それについて教職大学院においてどのような検討がなされているのか、そしてどのような課題意識で今週の実習に取り組んでいるのかについて実習校が理解・共有できるように、それらについて毎週レポートを作成し、実習校に届けることとした。これも、実習校との信頼関係を深めるための取り組みの一つである。

第三に、実習校に対する学校支援である。新卒院生たちは、前期毎週水曜日に実習生という立場で実習校に行くだけでなく、時間的にゆとりのある日や後期にも「学校支援ボランティア」として実習校を訪問した。また、教職コラボレーションセンターの技術職員は、平成19年度より各実習校のホームページの作成を支援してきた。実習校の教育実践や校内研修に教職大学院教員がどのように貢献できるのかについては今後の課題である。

なお、平成20年度前期の実践とその成果については、「岡山大学教職大学院における新卒院生の課題発見実習とその成果に関する研究」（『日本教育大学協会研究年報』第27集、日本教育大学協会）を参照されたい。

4. 平成21年度に向けての課題

この2年間、文部科学省からの経費を活用しながら、本教職大学院を充実させ、大きな成果を上げるために、この研究・実践に取り組んできた。

最後に、このGPでの成果をふまえ、平成21年度にさらに改善していかなければならないことをあげておきたい。

①学生に対する「初期指導」の強化

新卒院生は、多様な学習・実習履歴を持って本教職大学院に入学してくる。その中には、学部生時代に十分実習を受けることも、子どもたちと触れ合うこともできなかった者がいる。したがって、入学したばかりの新卒院生をいきなり実習校に送り込むよりも、その事前指導として、実習校に適応するために必要なこと、実習に取り組むために必要なこと、例えば、社会人としてのマナーや実習校での参観の仕方などを指導しておく。

②実習校との協働、実習カリキュラムの開発

今年度、教職大学院として初めての「学校における実習」を実施した。その中で、実習校も大きな不安やとまどいがあった。実習校としての実習実施の総括をふまえながら、新卒院生の課題発見・解決・探究を支援する実習の実施に向けての改善が必要である。

さらに、3ヶ月にわたり、経験できる領域が多様であるがゆえに拡散しがちな課題発見実習において、「はじめ・中・終わり」と、どのような実習経験を蓄積させていくのかを示した実習カリキュラムを開発する必要もある。各学校の特色も生かしながら、そして、個々の実習生の自己課題も考慮しながら、教職大学院の実習としてのミニマム・エッセンシャルズを共有できる実習カリキュラムの開発である。

また、1ヶ月間集中的に実施する「課題解決実習」のカリキュラムも求められる。それは、一方で、教師として求められる即戦力的な教育実践力を育成するためのカリキュラムであるとともに、他方で個々人の自己課題を解決・探究できるカリキュラムでなければならない。

各実習校の実習担当教員と、教職大学院教員との共同研究として、これらの実習カリキュラムを開発していくことが求められる。

③「課題発見」から「課題解決」への連続性

本GPでは、1年次前期の課題発見過程を中心に検討してきた。新卒院生は8～9月には、1ヶ月にわたる「課題解決実習」を行なう。「課題発見実習」を通して明確になった自己課題は、この「課題解決実習」を通して本当に解決したのか。その解決は何によってもたらされたのか、障害になったことは何かなど、詳細な分析・評価と、それにもとづくカリキュラムの改善が必要である。

④実務家教員と研究者教員との協働

平成20年度4月に赴任した実務家教員は、新卒院生への指導、実習校との連携などにおいて大きな役割を果たした。その反面、研究者教員は、実習校との連携において十分貢献できたとは言えない。役割を分担して取り組むことも重要であるが、協働できること、協働して成果が上がること、協働しなければならないことなどについては、両者が協働できるように、指導・運営体制を改善することが求められる。

⑤「実習」と連動し、「教育実践研究」で活用できる「共通科目」

文部科学省は、教職大学院の共通科目に関して、既存の修士課程とは異なり、ケーススタディやシミュレーション、フィールドワークなどの教育方法を活用し、実践的な力量を形成するよう求めていた。本教職大学院においても、こうした要請に応えるシラバスを開発し、教材を開発してきた。しかし、そのことが、院生の理論知の獲得にとっては障害になったり、数多くの発表やレポート提出を院生に求めることで院生のゆとりある探究を妨げる多忙化をもたらしてしまった。

「共通科目」は、一方で実習校や現任校の実践と結びつけることを強化しつつ、他方で自他の実習経験を分析・考察できるような理論知、理論枠組みを習得できるようなものへと改善することが求められる。

⑥遠隔教育研究指導システムの有効活用

「こらみゆ」による遠隔教育研究指導システムの活用は、すべての教職員のものにはならなかった。実習WEBポートフォリオに対するコメントやTV会議システムの活用も、実務家教員がほとんどであった。実習の書き込みに対するコメントは、研究者教員の場合、「教育実践研究」において直接的に指導しているために、必要感を十分感じられなかったかもしれない。しかし、本GPの研究・実践で明らかになったように、専門家の立場からの即時的な書き込みや共感的・受容的な書き込みが持つ教育的な効果は大きい。

さらに、院生の多くは、2年目には各学校で勤務しながら教育実践研究を続けるため、日常的に教職大学院教員と直接対面して指導を受ける機会は極めて少なくなる。そのような状況下では、本遠隔教育研究指導システムを活用した指導が行なわれる中で、このシステムの利便性が実感され、利用頻度も自ずと高まると予想される。

今後、教職大学院全教員がこのシステムを有効活用し、教育実践研究を続ける院生に十分な指導ができるようにしなければならない。

(文責：住野好久)

5. 岡山県・市教育委員会との連携協力関係強化

1) はじめに

本取組は、平成20年度に設置しスタートする、複雑化・多様化した教育課題に対応する高度専門職業人を育てる教職大学院で、ケーススタディやフィールドワークが形ばかりで終わらぬよう、課題発見から課題探求まで体系化した「教育実践研究」をコアとしたカリキュラム開発を行うものである(図1-1・2)。また本取組は、特に新卒院生を対象としたものであり、地域協働学校をフィールドに重層的な協働体制づくりと教育現場で課題解決に取り組むことで、課題発見実習と課題解決実習、そして「教育実践研究Ⅰ・Ⅱ」に実効性を持たせ、真に課題解決能力を育てる教育方略を開発する事である(図2-1・2)。

この開発・実現のためには、岡山市教育委員会・地域協働学校との連携・協力関係を確立し、地域協働学校と教職大学院のコラボレーションが重要である。

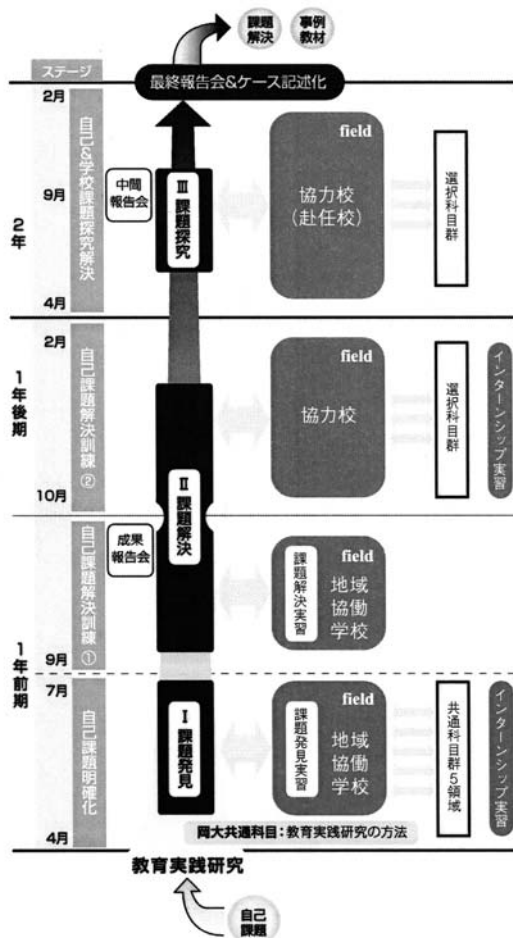
なお、院生の希望校種人数の関係で、学校における実習(課題発見実習、課題解決実習)の実習校としてインターンシップ実習校でもある岡山市立岡山中央中学校に協力を依頼する。

下記図1-1は、GP初年度に大学が計画し、地域協働学校でのモデル学生による試行を経て、今年度(GP2年目/最終年)スタートした教職大学院に導入したカリキュラム構造図である。

大学の実習担当教員は、常に実習校と連絡を取り合い、情報共有を図るとともに、カリキュラムや実習方法の課題・問題点等について意見交換・調整を行う。さらに、連携協議会を開催し、意見交換・調整を行い、協働してカリキュラム改革を行う。図1-2は、その結果であり、平成21年度実施予定のカリキュラム構造図である。

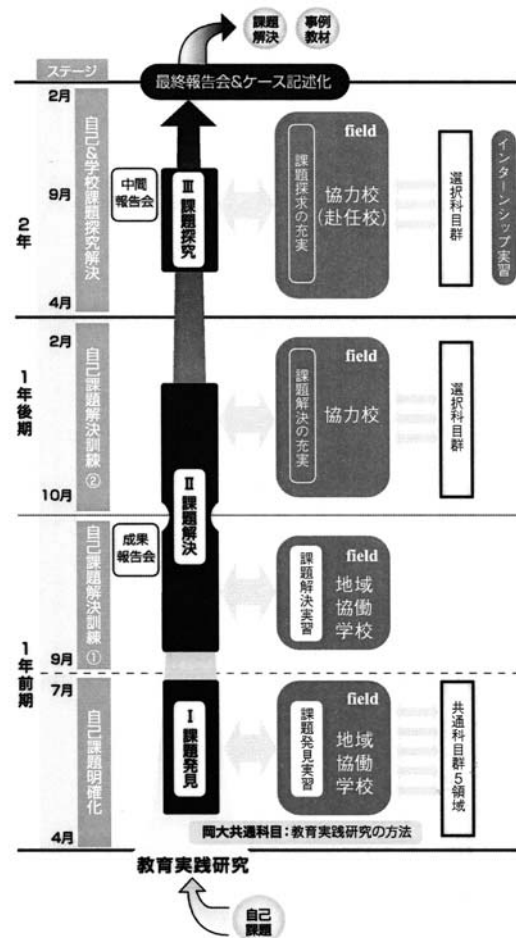
● 図1-1

「教育実践研究」をコアとしたカリキュラム構造図(平成20年度)



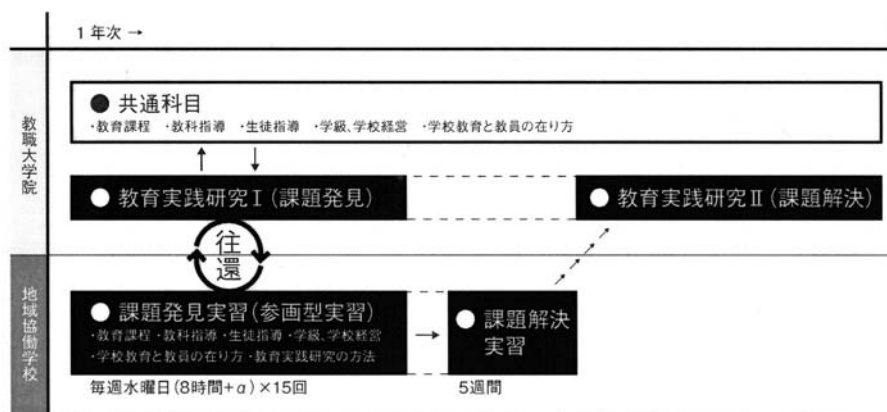
● 図1-2

「教育実践研究」をコアとしたカリキュラム構造図(平成21年度)

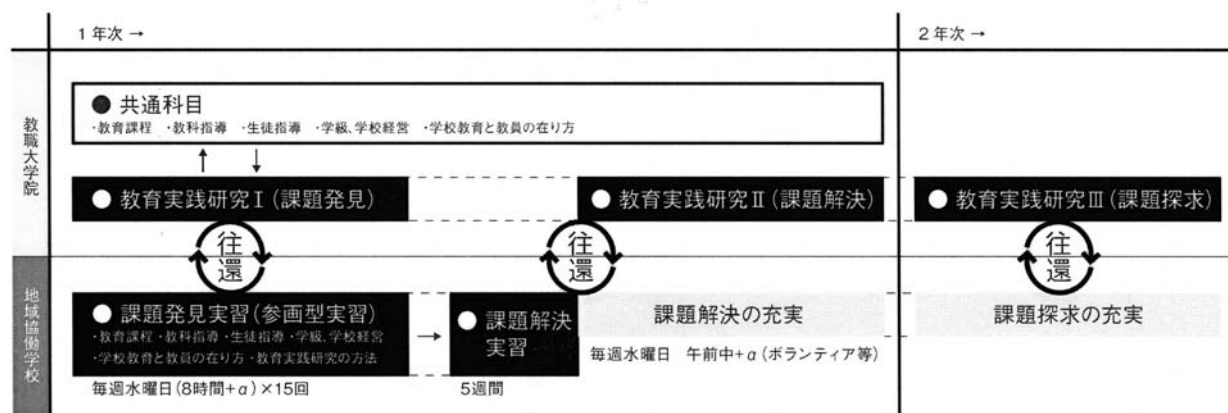


下記図2-1は、GP初年度に大学が計画し、今年度(GP2年目/最終年)スタートした教職大学院での課題発見実習と課題解決実習、そして「教育実践研究Ⅰ・Ⅱ」の関係図である。これに沿って今年度実施したが、実習校との意見交換・調整との中で、この関係のさらなる充実がなければ教職大学院における実習効果が得られないのではないかということになる。また、「教育実践研究Ⅲ」を含め、2年間を視野に入れたものが求められ、協働して各実習と教育実践研究との関係するカリキュラム改革を行う。図2-2は、その結果であり、平成21年度実施予定の関係図である。

● 図2-1
課題発見実習、課題解決実習、教育実践研究との関係(平成20年度)



● 図2-2
課題発見実習、課題解決実習、教育実践研究との関係(平成21年度)



2) 連携協議会の発足

本取組では、図1-1・2で示すように「教育実践研究Ⅰ～Ⅲ」にあたる課題明確化ステージを解決・探求ステージにつなぐプロセスの検証を中心課題とする。このプロセスにおける課題発見には、多角的視点と柔軟な思考が不可欠であり、そのためには多様な教育課題が存在するフィールドとmultiple view(多角的視点)を持つ仕組みが必要である。

岡山市の場合、中学校区を単位に地域指定されている地域協働学校(コミュニティスクール)がある。この地域協働学校とは保護者や地域住民が一定に権限と責任のもとに学校運営に参画することにより、学

校運営の活性化と家庭や地域社会の教育力の向上を図るために設けられた新しい学校運営制度を持つ学校である。そしてこの地域協働学校は、地域社会との連携・協働、異校種間の連携・協働を進めながら、特色ある教育課程を編成・実施しており、様々な教育実践課題を有するとともに、実践・研究支援に対する高いニーズを持っている。このような地域協働学校は、本取組のフィールドとして最適である。

岡山県教育委員会から岡山市教育委員会・倉敷市教育委員会へという流れで相談・依頼を行い、岡山市石井中学校区4校の地域協働学校に了解をいただくことができる。そして、本取組に向け連携協議会を発足する。連携協議会のメンバーは以下の通りである。

- ・岡山市教育委員会
- ・岡山市立石井中学校
- ・岡山市立石井小学校
- ・岡山市立大野中学校
- ・岡山市立三門小学校
- ・岡山大学教職大学院プロジェクト委員会

事業経過(平成20年度)にあるように、今年度は3回連携協議会を開催したが、これ以外にも各学校毎に意見・情報交換を行う。さらに、課題発見・解決実習の報告会にも参加していただき、評価・感想・意見等をいただく。

また、インターンシップ実習も重要な実習であることから、地域協働学校4校に加え、インターンシップ実習校である岡山市立岡山中央中学校と岡山市立岡山中央小学校にもメンバーとなつていただく。

3) 地域協働学校との連携協議

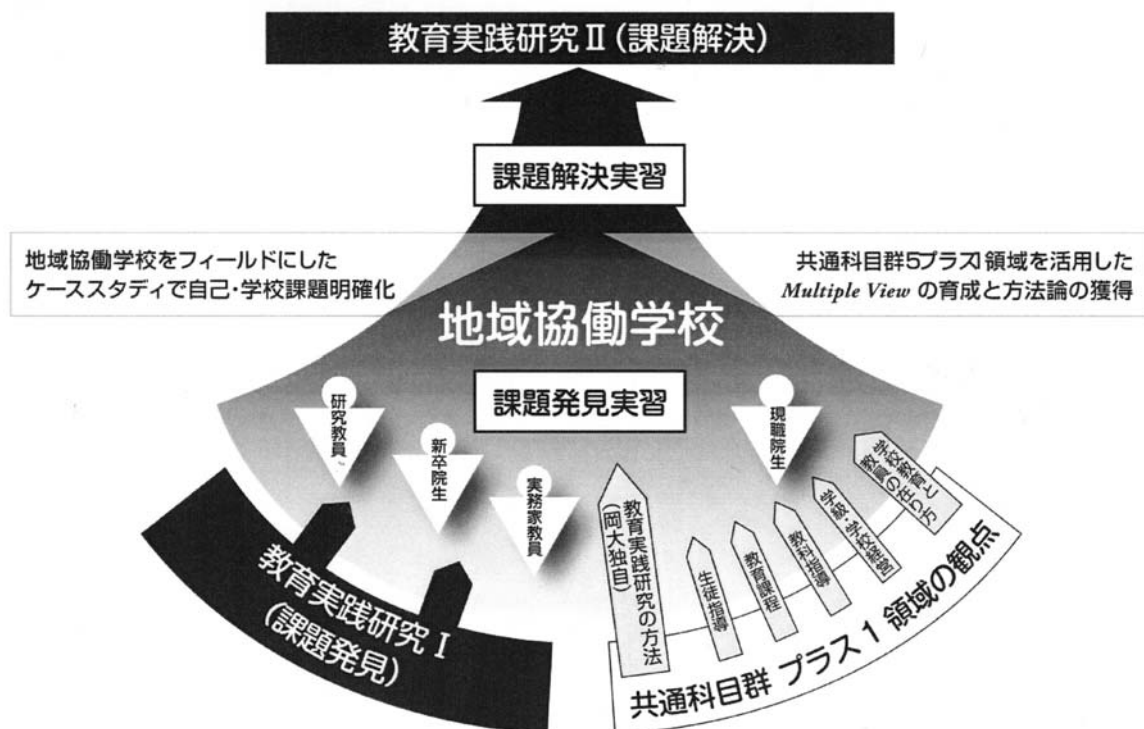
連携協議は、本取組の目的である教職大学院における「真に課題解決能力を育てるカリキュラム開発」について説明することからスタートする。

地域協働学校で新卒院生は課題発見実習(参画型実習)に取り組みながら、現職院生はフィールドワークの場として参加し、大学の研究教員、実務家教員も現場で指導する。その上で共通科目群5領域の観点でのケーススタディにプラスした教育実践研究の方法論の学習(共通科目群5+1)によって多角的分析を行い、教育実践研究Ⅰ(課題発見)の中で異なる立場とキャリアを持つ4者が議論しながら教育実践課題を分析・発見していくカリキュラムである(図3)。本取組は、新卒院生を主な対象としたものであり、地域協働学校をフィールドに重層的な協働体制づくりとリアルな課題解決に取り組むことで、「教育実践研究Ⅰ(課題発見)」から「教育実践研究Ⅱ(課題解決)」に実効性を持たせ、真に課題解決能力を育てる教育方略の試行と評価から実践・検証を行うものである。

以上のような説明と意見交換を行い、本取組の共通理解を得るとともに、モデル学生による試行に向けての協議を進めることとなる。

連携協議会立ち上げ後の第1回連携協議会は、上記内容である。

第2回連携協議会は、石井中学校区の地域協働学校についての全体説明、各4校の取組等の説明、意見交換等を行い、研究教員(大学教員)が地域協働学校および事業・運営等の実際を聞き、理解を深める。



その後は、各地域協働学校に特色があるので、10月～12月の間に各学校3回の打ち合わせや意見交換を行う。主な内容は、モデル学生による試行についてと実習に関する共通科目群の授業づくりのための大学教官との協働についてである。この打ち合わせや意見交換では、各地域協働学校から以下のような共通の質問や指摘があった。

- ① 学部段階での教育実習との違いはどこにあるのか。
- ② 学生への対応・指導はどのようにすればよいのか。
- ③ 地域協働学校も評価に関わるのか。また、地域協働学校も評価されるのか。
- ④ 特に、生徒指導に関わる守秘義務についてはどう考えているのか。
- ⑤ 教員には勤務時間外の仕事が多いが、実習時間はどうなるのか。
- ⑥ 大学教員への対応はどのようにすればよいのか。

モデル学生による試行前の第3回連携協議会では、上記内容について大学側からの提案を基に意見交換を行い、共通理解とともに地域協働学校へのお願いをする。

①について：学部段階での教育実習は授業に関する実習が主であるが、教職大学院での課題発見実習は、毎週1回の地域協働学校の実習と大学での教育実践研究Ⅰの往還により、学校にはどのような仕事があるのか、教員にはどのような仕事があるのかを知り、理解し、参画実習をすることで、教育現場から自己課題を発見するものである。そして、引き続き行う課題解決実習は、発見した自己課題の解決を大学の研究教員、実務家教員、そして地域協働学校教員との指導のもと、5週間の実習を行うものである。と説明を行い、実習の違いを共通理解する。

②について：モデル学生に担当教員を付けていただく、クラスに配属する、学年に配属する、フリーにして自主性に任せる、などが考えられるが、各学校の事情や都合があること、大学側にも未知数があること、試行であり報告・検証会も行うなどを加味し、各学校にお任せすることで了解を得る。

③について：教職大学院での評価については大学中心で行うが、実習終了後に行う報告会に参加していただき、意見・感想をいただくという形で評価に関わっていただきたい。試行においては、終了後に報告・検証会を行う。各地域協働学校の評価は行うものではない。ということで了解を得る。

④について：大学での事前指導を厳しく行う。試行のモデル学生においても同様である。各学校でも重ねて指導をお願いする。ということで了解を得る。

⑤について：実習時間は、勤務時間同様8時間であるが、教員や学校を知ることからも先生方と同様をお願いする。授業の内であるので保険等にも問題はない。ということで理解いただく。

⑥について：依頼など(授業見学、ビデオ撮り、資料・情報収集など)がある場合は、事前に連絡・相談をさせていただく。学生指導などで行く場合の対応は必要ない。逆に、教職大学院には学校支援という役割があるので、学校や地域での研究・研修会などについての参加・協力などについて相談してください。ということで了解を得る。

連携協議を重ね、以上のような共通理解と了承を得た後、2008年1月～2月の2ヶ月間、各地域協働学校とモデル学生と時間調整を行い、週1回のペースでモデル学生による試行を行う。

試行終了後、大学でモデル学生からの報告会を開催し、以下のような報告があった。

- ・学部段階での教育実習に比べ、密度が濃く教員や学校について知ることができた。
- ・自分に欠けていることや気づきがあった。
- ・先生方が熱心に助言・指導をしてくださり、積極的に参画すればもっと得るものがあったように思う。

この後、第4回連携協議会を開催し、モデル学生による試行の報告・検証を行う。

特に大きな問題はなかったが、以下のような指摘があった。

- ・学生はテーマを持ってこないとただ体験することで終わってしまうのではないか。
- ・主体的、積極的に行動しないと、教員、学校が何をどのように指導・助言すればよいのか分からない。

モデル学生の報告と連携協議会での報告・検証を基に、教職大学院での実施に向け意見交換・検討を行い、下記内容で了承を得る。

- ・院生に対し、主体的、積極的に実習に取り組むことを事前指導で徹底する。
- ・児童や生徒の変化や成長を見るためには、長時間同じ環境が必要ではないかということで、院生をクラスに配属する。
- ・地域協働学校と大学との連絡窓口を一つにするとともに、責任体制を明確にし、密な連絡を取り合い連携強化を図る。

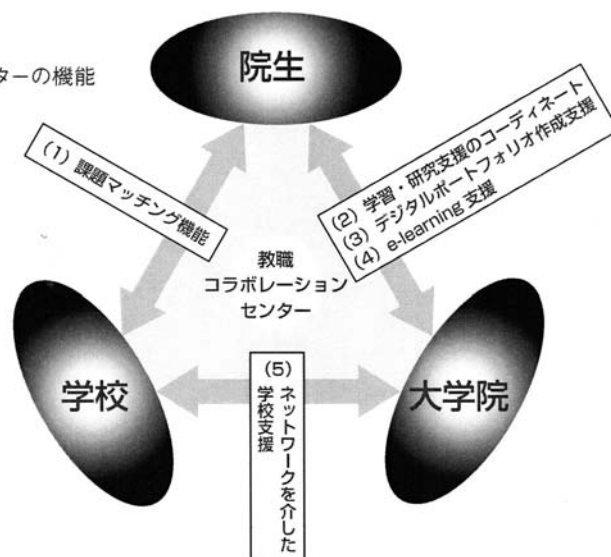
以上のような経過を経て、平成20年度、連携協議会での了解・決定事項に沿い教職大学院がスタートする。今年度の連携協議会は、実習のさらなる充実へ向けた実施内容や方法について検証・意見交換・検討を行う。この結果は、次年度に向けたカリキュラム改革に反映される。スタートまでに試行ができたこと、そして試行の検証とともに連携協議会および各地域協働学校との意見交換・検討・打ち合わせを密に行ったことで、大きな問題点もなく実習を終了することができた。実習結果については、「教職大学院GP最終報告書・Ⅲ章・実施の成果と課題」をご覧ください。

岡山大学教職大学院が目指す実習においては、実習校(地域協働学校)と大学との密な連携が重要であることをこのGPを通して痛感する。

4) 地域協働学校と教職コラボレーションセンター

教職大学院と院生・学校現場をつなぎ、院生の学習・研究支援を行うとともに、連携協力校と日常的につながって、学校支援を行うために、「教職コラボレーションセンター」を組織する。同センターは、地域協働学校と院生・大学とを日常的につなぎ、学習・研究を支援するとともに、ネットワークを介した学校支援機能を持つ(図4)。

● 図4 教職コラボレーションセンターの機能



教職コラボレーションセンターは、平成19年10月に設置しスタートする。それと同時に、地域協働学校4校にノートパソコンを配置し、各地域協働学校に毎週1回のペースでセンター職員を派遣して、担当教員に操作指導を行う。学校現場では、デジタル機器操作に不慣れな教員が多く見られ、一応の成果は達成できたが、引き続き平成20年度も同様に指導にあたる。しかし、各学校毎月1回程度の派遣指導となることで了承を得る。

平成20年度、各地域協働学校に毎月1回のペースでセンター職員を派遣したが、前年度センター職員に頼り過ぎていた学校からは派遣依頼が何回かあった。学校現場では、デジタル機器操作に不慣れな教員が多いことを改めて痛感した。デジタル機器操作を含めた教員への情報教育が急がれる。人手不足の教職コラボレーションセンターとしては、あまりにも重い任務であり、これからの課題の一つとして浮かびあがる。

大学と院生をつなぐことを目的に設置した「こらみゆ」は、効果的に機能し成果をあげる。しかし、ここでも問題は教員である。デジタル機器操作に不慣れな教員は「こらみゆ」を活用できておらず、機器操作習得が急がれる。

教職コラボレーションセンターについての詳細は、「教職大学院GP最終報告書・Ⅱ章-6・教職コラボレーションセンターの機能と活動」をご覧ください。

「こらみゆ」の成果については、「教職大学院GP最終報告書・Ⅲ章・実施の成果と課題」をご覧ください。

(文責：橋ヶ谷佳正)

6. 教職コラボレーションセンターの機能と活動

1) 遠隔教育研究指導システムの概要

本教職 GP の研究は教職大学院設置・運営と表裏一体を成すものであり、教職コラボレーションセンター(以後、コラボセンターと略称する)は、本教職 GP の主目的である教職大学院カリキュラム開発の研究推進の実務面で中核的機能を果たすことが期待されて、平成 19 年 10 月に設置された。したがって、教職 GP とコラボセンターとは、一心同体である。換言すれば、本教職 GP と教職大学院及びコラボセンターの 3 者は、相互不可分の関係にある。平成 19 年度には本教職 GP の研究指針と実施内容を参照しながら、本教職大学院運営委員会は、平成 20 年度の本教職大学院の正式な発足と運営を逐一想定し企画立案を主導したが、その実務面をコラボセンターが担当した。平成 19 年度に構想されたコラボセンターを含む 3 者の組織関係の概念を図 1 に示す。

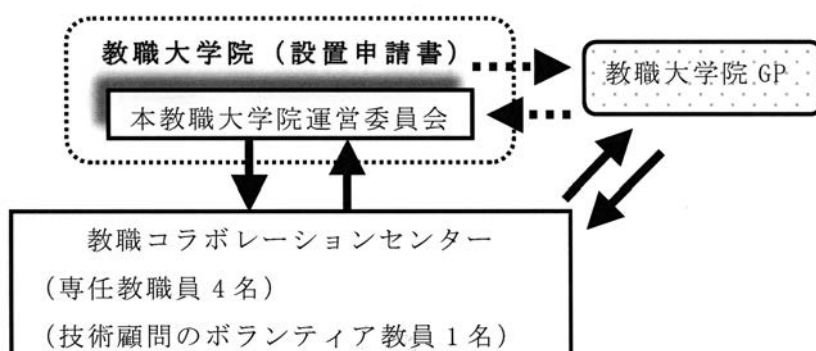


図 1 教職大学院運営委員会と教職コラボレーションセンターと教職大学院 GP の関係

場所としては、中間報告書に紹介したように教育学部東棟 1 階「弱電実験室：約 60m²」を平成 19 年 10 月までに改修して、そこにコラボセンターは設置された。コラボセンター新設に伴い、専任教職員として 3 名が同 11 月 1 日付で採用された。内訳は、特任教授 1 名、技術職員 2 名である。なお、コラボセンターが管理運営している専用遠隔教育研究指導システムの開発者である理科教育講座准教授 1 名が技術顧問ボランティアとして、設計段階から同システムの管理運営に参画している。平成 20 年 4 月には、教職大学院の発足に備えて、教職大学院の運営に直接関わる技術職員を 1 名増やしたので、コラボセンター専任教職員は計 4 名となった。平成 20 年 5 月には、平成 20 年度に試行された教員免許更新予備講習会の事務担当専任としてパートタイム職員 1 名が同室となった。

コラボセンターとしての主要な活動は、平成 19 年度においては、以下に列挙した①～③であり、同 20 年度にはそれに④～⑥が追加・集約された。これらの活動を通して、コラボセンターは教職大学院の運営に事務的、技術的な両面から、教員、院生に組織だって関わり、支援体制を通常業務として確立した。

- ①「学校における課題発見実習」と「教育実践研究 I (課題発見)」のカリキュラムの試行・評価とその活動を通して教材開発を行う。
- ②上記授業実施に備えて、学外の組織(例えば、教育委員会、地域協働学校、連携協力校など)と連携するための組織づくりを行う。

③大学教員のFD活動のための調査・ワークショップを開催する。

④教職大学院運営に伴う指導教員、院生及び実習校との連絡調整を行なう。

⑤実習先あるいは在宅において、院生が大学指導教員とのコミュニケーションを維持するため、遠隔教育研究指導システムとして専用情報通信システムを構築し管理維持する。

⑥専用情報通信システムの活用並びに授業収録促進のため、技術的な支援体制を構築する。

平成19年度～同20年度の主要な運営活動は、上述の6つに集約される。平成19年度の詳細な活動については、すでに本GP中間報告書に詳細を紹介しているのので、そちらを参照されたい。

本稿では、学校現場における実務を通して、課題発見、課題解決の方策を具現化させる本教職大学院の指導理念を実現させるために開発した遠隔教育研究指導システムについて述べる。

1) 遠隔教育研究指導システムの概要

本システムを開発するに当たって構想した基本理念は、機能面では「情報の即時共有と交流・流通」であり、操作面では「simple is best.」である。その上、新卒院生1年生は地域協働学校等の実習校で個人課題から学校課題の発見・解決へ、現職院生は、2年目以降については現任校で実務に従事しながら、学校課題の解決へと発展させる。その過程において、複数の大学教員の指導助言を求めるだけでなく、院生相互間で課題の共有と解決に向けた知見・体験の交流を促進することを想定した。以下に2つの要点をまとめる。

① 多角的視点で課題解決できる能力を育成させるため、複数の教員の視点を利用した複数指導を重視する。つまり、指導内容・過程の明示化と関係者による即時共有である。

② 2年次には課題解決を実践に移すために、学校現場へ勤務復帰あるいは新任等で大学院から離れる。つまり、課題解決への遠隔指導・相談が必要不可欠になる。

以上の必要性から、SNS (Social Networking Service) 並びに動画像送受信システムを利用した支援・指導体制を構築した。前者のシステムに「こらみゅ」という愛称を付けた。後者は「iChat」と呼ばれるテレビ電話システムである。SNS 並びに動画像送受信システムを含めた統合情報通信システムの概念図を図2に示す。図3は、「iChat」を用いて実習先の学校にいる新卒院生とコラボセンターの教員が提示資料を画面共有しながら会話をしている場面である。

「情報の即時共有と交流・流通」については、大学教員が院生に対して行う指導助言を公開・明示することによって、どの教員がどの院生あるいは課題に対して、どのような内容と方法によって指導助言を行っているかが、他の指導教員あるいは院生にも周知される。また、院生は



図3 iChatによる遠隔個別指導
(コラボセンターと実習校との間で資料提示も共有しながら交信できる。)



図4 実習校で院生が担当した授業をコラボセンターで指導教員の解説を聞きながら視聴する他の院生たち

実習先の学校あるいは現任校に留まらず，自宅においても大学教員あるいは他の院生と情報交換できる。つまりユビキタスの理念を具現化できる。

実習生が担当する授業をビデオカメラで収録し，それを教材化させるために DVD に記録し，コラボセンターが一覧表付で保管する。図 4 にゼミ形式の授業で授業実践した院生をも含めて，実務家教員と一緒に収録された授業を視聴しながら討論する。このような授業形態は，DVD 化された収録授業を視聴するだけでなく，リアルタイムで実施されている授業をこのようにコラボセンターで視聴することができる。

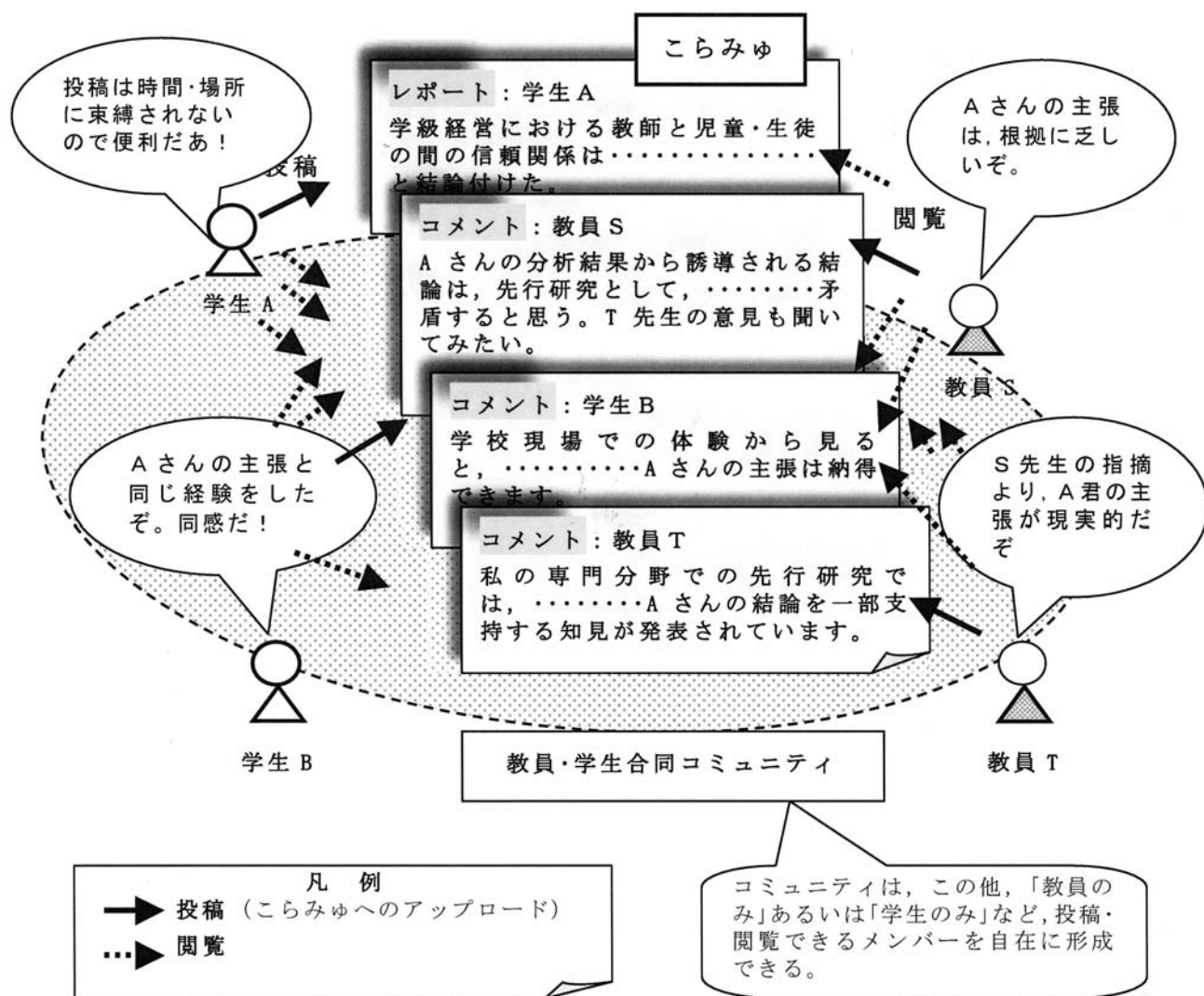


図 5 「こらみゆ」での『教員・学生合同コミュニティ』の利用事例の概念図

次に「こらみゆ」の活用事例を以下に紹介する。

新卒院生は前期（4月下旬から7月下旬）に毎週水曜日に終日実習として「課題発見実習」を行なうため，地域協働学校を含めた実習協力校5校（小学校3校，中学校2校）へ出かける。この実習では，実習校において専任教員に準ずる位置づけのもとで実務実習を行なう。実習指導は，実習校の専任教員によって行なわれるが，実務家教員を含め大学教員が週に1～2回直接実習校へ出かけて院生に対し個別指導を行なう。さらに8月下旬から9月下旬にかけては，

「課題解決実習」として終日実習を前述の5校で毎日行なう。実際の実習指導は「課題発見実習」の指導形態と同様であり、実習校の専任教員が直接当たるが、実務家教員を含め大学教員が週に数回実習校へ出かけて直接院生の指導を行なう。

これらの実習中に院生には、実習日誌を「こらみゆ」に投稿することが義務付けられる。実習日誌に記載される内容は、1日の授業時間割、関わった授業、学校・学級行事、児童・生徒に対する個別指導など、実体験したこと、認識したことなどである。このため、「こらみゆ」に投稿した新卒院生にとっては、実習日誌がデジタルポートフォリオである。デジタルポートフォリオとしては、院生によって電子化された指導案及び院生が教科指導として行った授業実践を8ミリビデオカメラで収録し、それをDVDに記録したものも含まれる。

院生が「こらみゆ」に投稿した実習日誌を閲覧した大学の指導教員は、専門家の立場からだけでなく激励・慰労等の意図も含めて指導助言をまとめ、それを「こらみゆ」へ投稿する。それを、また、投稿した院生が閲覧する。大学教員ばかりでなく、現職院生も新卒院生が投稿した実習日誌を閲覧し、その内容によっては自分の体験を紹介するため、「こらみゆ」を通して投稿する。この一連の投稿・閲覧・再投稿の教育研究指導の循環系の概念は、図5に示すとおりである。このようにして、「こらみゆ」を媒介して自然発生的に“学びの場”が形成されるという副次効果が得られた。

「こらみゆ」の開発と運営には、コラボセンターの技術職員の一人がSNSの利用を提案し技術指導ボランティアの指導助言を得て、独自に開発した。本システムの全体の概念図は図2に示したが、このシステムのうち、「iChat」については正常な機能を確保し維持するため、地域協働学校とコラボセンター間でテスト通信を試みた。特に「こらみゆ」より1ヶ月余早く稼働を始めた「iChat」について、平成19年11月20日（火）過ぎから地域協働学校4校と大学間で通信テストを行い、正常な通信の可否を確認した。当初は、いずれも3校では通信不能、1校については送受不良であったが、通信テスト結果を岡山市教育委員会指導課へ連絡し改善に向けた協力を要請した。

それぞれの学校における情報基盤は、必ずしも同じではないことが分かった。例えば、インターネットへの接続回線については、CATVに接続している学校がある一方、光ネットで接続されている学校があった。また、校内LANの構成も学校によって千差万別であった。この現状の中で、コラボセンターとそれぞれの学校をインターネット接続するに当たっては、岡山市教育委員会の全面的な支援と協力が得られ、12月下旬には支障なく4校とも接続できる環境が整備された。

このような経過を経て、本教職大学院が正式に発足した平成20年4月には、県派遣の現職院生10名と新卒院生10名の計20名が入学し、4月中旬からの授業開始からなんら支障なく対応できた。インターネットへの接続に関わる課題を解決できたことは、情報通信手段を確保する上で極めて有効であった。日々の運用では、コラボセンターの技術職員が利用者である院生の利用者登録作業を含め管理全般を担当している。また、利用者である大学教員、院生からの利用上の機能変更・改善要望についても、可能な限り対応しカスタマイズしている。このため1年間の継続利用を通して、本教職大学院専用、かつ、独自の情報通信システムを完成させた。

（文責：近藤 勲）

2) 遠隔教育研究指導システムの改善と運用評価

2) - 1 アンケートの実施

院生の利用状況・機能改善の要望を調査するため、前期日程が終了した平成21年7月下旬、「こらみゆ」上で、良かった点・困った点を記述する任意のアンケートに加え、図1のような無記名式アンケートへの回答を呼びかけた。

(1)操作方法について

実際に分かりやすい	かなり分かりやすい	まずまず	かなり分かりづらい	全く分かりにくい
-----------	-----------	------	-----------	----------

操作が分かりにくかった点を具体的にお書き下さい ()

(2)機能に関すること

a)コミュニティ機能

常時活用した	かなり活用した	少し活用した	あまり活用していない	全く活用していない
--------	---------	--------	------------	-----------

b)メッセージ機能

常時活用した	かなり活用した	少し活用した	あまり活用していない	全く活用していない
--------	---------	--------	------------	-----------

c)日記機能

常時活用した	かなり活用した	少し活用した	あまり活用していない	全く活用していない
--------	---------	--------	------------	-----------

a)～c)以外に欲しい機能があれば、その概要を書いてください

(3)前期で活用して

a)コミュニケーションツールとして

特に良い	やや良い	ふつう	やや悪い	悪い
------	------	-----	------	----

※その理由 ()

b)学習ツールとして

特に良い	やや良い	ふつう	やや悪い	悪い
------	------	-----	------	----

※その理由 ()

c)実習日誌の投稿手段として(掲載、閲覧について)

特に良い	やや良い	ふつう	やや悪い	悪い
------	------	-----	------	----

※その理由を利便性と意欲喚起などの効果の面から書いて下さい

(4)その他

a)他のSNSを利用したことがありますか？

1.はい	2.いいえ
------	-------

サイト名()

b)自宅にインターネットの環境がありますか？

1.はい	2.いいえ
------	-------

「1.はい」の場合 ①光ケーブル ②ADSL ③CATV ④その他

c)「こらみゆ」を携帯で見たことがありますか？

1.はい	2.いいえ
------	-------

「2.いいえ」の場合、その理由()

また、携帯で利用したいですか？

1.はい	2.いいえ
------	-------

「2.いいえ」の場合、その理由()

ご協力ありがとうございました

図1 「こらみゆ」アンケート用紙

2) - 2 アンケート結果

任意の記述式アンケートで得られた回答を表1, 2に記す。また、「こらみゆ」の利用状況を示した月次別 PV の推移を図2に記す。PV（ページビュー）はアクセス数とほぼ同義であり、アクティブ率とは3日以内にログインした利用者で、図にあるものはその数値を月平均したものである。

「こらみゆ」を利用するに当たり、良かった点
・自宅で自分の生活習慣に合わせて利用することができること
・最初はどのように書くかを迷っていましたが、大学の先生が形式を指定してくださったので書きやすかったです。特に実習日誌は、限られた分量で書かないといけないことは大変だったものの、たくさん書かなくて良いということで負担が少なくて助かりました。
・最初は難しいかと思いましたが、慣れてくると大丈夫でした。あまり負担にならないで欲しかったので、今の程度で大丈夫だと思います。
・非対面式に相手のプロフィールを知れたこと
・先生と学生の距離が近く感じた
・実習日誌をこらみゆに書けることで、先生方から反応をいただけること
・メッセージなどの情報が携帯にも届くこと。
・とても充実していると思いました。使いやすかったです。
・実習日誌や、個人の日記を書くと、学生や先生方からコメントを頂けたので嬉しかったし、参考になった
・授業の内容や課題のテーマなどを確認できたのは便利だった
・メッセージで実習日誌の添削をしてもらえたのは便利だった
・現在、使用にあたり特に困っている点はありません。私が無精なものなので、頻繁に閲覧することが少ないのですが、重要な連絡は携帯にも届くようになり、大変助かっております。ありがとうございます。
・データをファイルでアップできるようになった
・休講情報が即座に分かる
・メッセージが届くと携帯で判る
・まさしく「デジタル・コミュニティ」が出来上がった
・研究の素材として活用できた
・日記に絵文字が使えるようになったのが良かった。コミュニティの書き込みにも使えるようになるともっとよい
・授業の休講通知が携帯に届き、大変便利でした
・4月の早い時期に、お互いの情報を知り合うことができ、コミュニケーション作りに役立った
・他の院生の考えていることが分かり、安心したり、刺激をもらったりすることができた
・授業後、その授業について意見交換することができた
・宿題の予定が書き込まれてあると安心した
・情報関係が苦手な私にも、コラボの皆さんはとても親切に教えてくれた。ありがとう
・コラボの皆様がいつも親切に教えてくださるというサポート体制があったことがとてもよかったです
・情報交換のツールとしてはありがたかったです。日記やメール機能も楽しませてもらっているし、授業についての意見交換ができるどころ、課題について確認できるどころなどとても役に立ちました
・サポートシステムがしっかりしている(分からないことをいつでも気持ちよく助けていただくことができました)

表1 「こらみゆ」記述式アンケート 「良かった点」

「こらみゆ」を利用するに当たり、困った点
・ログインのためのアドレスが長いこと
・授業の休講通知が講義棟の掲示板になく、「こらみゆ」にしかなかったこと
・月曜2限の授業を受けた後の感想をこらみゆに書き込まなかったことを申し訳なく思っています。多くの方がそのような状況であったので、来年度以降は早めに報告すればいいと思います。
・自分のせいもあるが、マイメンバーに登録していない人の事が分からない時があった。
・関わりの少ない先生とマイメンバーになりづらい
・実習日誌を書き込んだ後の編集が出来ない
・自分を含め、こらみゆの活用頻度が4月初より下がった
・コミュニティの書き込みが多いと、重要なトピックがホーム画面に現れず、見落としている人もいた
・日記などの書き込みを頑張って、もう少し盛り上げていこうかなあ・とも思ったりしています
・課題発見実習やインターンシップ実習のトピックを作る際に、個人で立ち上げるのか、全員同じトピックで書いていくのか、曖昧で統一感がなかった
・動作があまり速くない（サーバ移設で解消）
・参加していない人、携帯に登録していない人にはメッセージが届かない
・添付ファイルの容量があまり大きくない（サーバ移設で一部解消）
・ファイルの添付が同時に1種類しかできない
・ファイルの添付がドラッグ&ドロップできない
・あまり利用できていないため困った点はなかった
・活用している人と活用していない人がいる。先生もよく活用される先生と全く活用されない先生とかなり温度差がある
・今年はまだ試用の段階で、しかも毎日顔を合わせている仲間同士ですからSNSの価値は分からない。本当にありがたいと思うのは2年目だと思います。現場にフィールドが移った時のコミュニケーションツールとしては最適だと思います
・「～をしたい時には～すればよい」というマニュアルが欲しい
・困った点というより、SNSというシステムをはじめ、PC及び、インターネットにもともと不慣れだったので、使いこなせるかどうか、とても不安でした。（学校では、文書作成と成績処理でしか使用したことがなかった）
・よい機能がたくさんあるが、忙しい日々の中で使いこなすことがあまりできなかった。前期の後半になると日記も時々しか書かなくなってしまった。せっかくだらいろいろ工夫してくださっているのに申し訳ありません

表2 「こらみゆ」記述式アンケート困った点

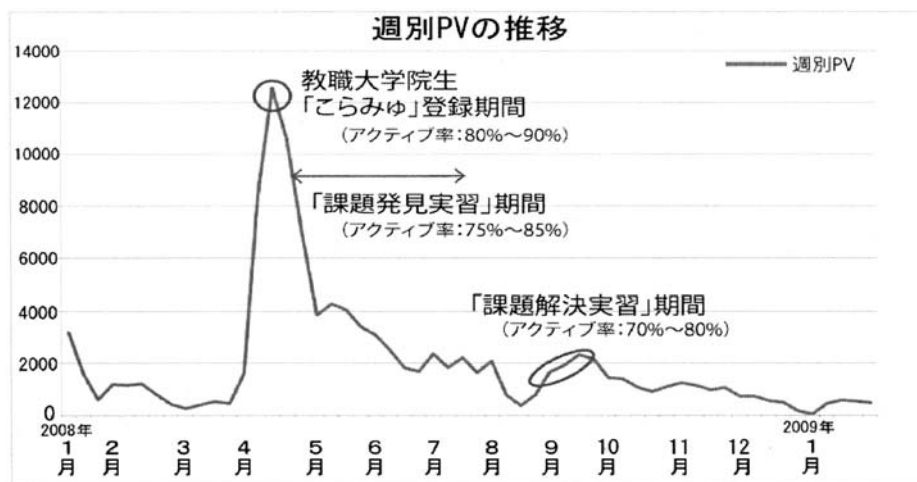


図2 月次別PVの推移

図1のアンケートについて、各項目の「良い」方を5点、「悪い」方を1点とした平均値を出した。

(1)「こらみゅ」導入前より懸念されていた操作方法については、コラボセンター職員の操作補助、他 SNS の利用経験のある院生からの知識供与などもあり 3.7 点と比較的高得点であった。

(2)各機能の利用状況については、コミュニティ機能・メッセージ機能ともに3点台であったが、日記機能についてはあまり利用されておらず 2.3 点であった。4月当初、「こらみゅ」利用促進のため、日記機能の利用を推進していたが、日が経つにつれて見られなくなった。授業の考察や最新の教育事象への意見・討論、趣味の話題などが期待されたが、何を書いていいかわからない、利用しづらいといった意見もあった。

(3)前期で活用しての各機能の評価については全ての項目で3.3点前後であった。特筆すべきは実習日誌の投稿手段としての項目で、「こらみゅを通じて実習を振り返ることができたから」、「実習日誌とそれについてのコメントを参加者で共有できるので相互に刺激し合える」、「紙媒体と違って、PC か携帯があればどこでも閲覧・コメント可能」といった意見があり、「こらみゅ」の意図している活動がなされていたように見受けられる。中には「自分の投稿を修正することができなかったので使いにくく感じた」という意見もあった。

(4)他の SNS を利用したことがある院生は約 25%であり、その全員が「mixi」と回答した。自宅のインターネット環境については90%が「ある」と回答した。携帯電話での利用については「いつでもどこでも見られるので便利」「通信料が高くなって見られない」「文字が小さく見づらい」など個人の携帯電話の利用形態によって異なり、「利用したい」「利用したくない」が半々であった。

2) - 3 考察 ～今後の「こらみゅ」～

表1にある「良かった点」のアンケート結果や利用状況から、「こらみゅ」は院生に浸透し、日々の活動の中で「こらみゅ」の目指す形として頻繁に利用されているように見受けられる。しかし、改善すべき点も多い。ここでは「こらみゅ」の今後の運用に向けた改善点に着目し、その方法を検討する。

① 活用頻度の個人差をどう埋めるか

表2で院生からの指摘もある通り、活用状況にかなりの温度差がある。特に大学教員側がシステムに積極参加していない面もあり、院生から教員への一方通行になり兼ねない。特に2年次には大学を離れ、学校現場で通常勤務をしながら修学する院生が多いため、「こらみゅ」上でのつながりをより強固なものにしなければならない。操作指導を徹底して行い、利用促進を行う必要がある。

② システム面の改善

システムへの要望があった際は随時対応しているが、全ての要望にこたえられているわけではない。オープンソースの「OpenPNE」を利用して SNS を構築しているが、ソースコードが複雑で、内部を変更するには時間がかかる。「OpenPNE」のシステムを把握し、改変できる体制作り、また、今後の Web の発展などに対応したインターフェイスの変更、システムの移行なども必要である。

③ 日記機能の利用促進

SNS のメイン機能である日記機能があまり活用されていない。前期授業期間中は少人数ではあるが日記を書き、それにコメントする活動が見受けられたが、後期に入り日記は数えるほどとなった。日記の投稿数が少ないと SNS も盛り上がり欠ける。どこまでレクリエーション的な内容を許容す

るかなどを検討し、日記の利用促進を図りたい。

①でも述べている通り、「こらみゅ」の真価が発揮されるのは2年次からであり、本年度より活発な活動が期待される。「こらみゅ」を運用する上で、使いやすいシステムへの改善・試みを行い、院生とともに育っていくシステムを構築していきたい。

(文責：泊 直希)

3) 活動記録(本センター活動日誌)

月	日	活動内容
平成19年 10月	15日	東棟弱電室(教職コラボセンターに改修予定)で教職GPにもとづく教職コラボセンターの打合せ開催
	25日	東棟弱電室(教職コラボセンターに改修予定)で教職GPにもとづく教職コラボセンターの打合せ開催
	31日	学部長室で教職大学院委員会を橋ヶ谷佳正委員長のもとで11人が出席して開催。
11月	16日	教職GPワークショップを本学高橋香代学部長、森熊男副学部長を始め30余名の教員の出席のもとで、講義棟5101室で世田谷区教育長若井田正文先生と島根大学教育場学部長高岡信也先生を講演者に迎え、大学と学校現場並びに地域との連携による学校運営について実践事例の紹介をして頂いた。
	28日	教職大学院準備委員会が橋ヶ谷委員長司会のもとで開催された。27日の教職大学院設置全国で19大学という新聞報道を受けて広報活動に入る予定であったが、大学設置審議会の答申であって文科省の正式認可内示でないため、12月3日の正式設置認可通知が発送される当日、広報活動を始める。カリキュラム、指導体制、入試についても検討された。住野委員が出席した時点で教職GP並びに教職大学院の概要が改めて説明され、共通認識を得た。稲田委員とコラボ技術職員によって、教職コラボセンターのシステムの機能紹介が実演を伴って行われた。
12月	3日	稲田佳彦先生と近藤の二人で岡山市教委指導課河内智美課長、平井秀尚主任、学事課森川靖志係長、岡本指導主事、教育企画総務課青木将次長らと会い、教職大学院の設置に伴う教職コラボセンターの新設と教職GPの実施計画について説明する。岡大から地域協働学校4校へ持ち込んだパソコンを通したテレビ会議システムのテスト通信結果を報告し、その中で通信障害の解消について、協力を求めた。
	4日	稲田先生と近藤の二人が三門小学校でiChatの通信障害の原因究明を行った。
	5日	住野先生にコラボセンターのシステムの機能について、稲田先生の支援のもとで実演を伴う説明会を行う。説明終了後は、同システムの具体的な利用事例並びに教職大学院の運営への活用について、検討する。
	11日	・大野小学校と稲田先生の研究室間でiChatのファイル伝送を伴うテスト通信：映像/音声の受信状況は前回と同じ。学部での受信画質/音質は良好なれど、大野小学校での受信状況は劣化。 ・橋ヶ谷先生が学生に模擬学生の役割と業務内容について説明する。
	12日	スプリング8(兵庫県佐用町)に滞在中の稲田先生とコラボセンターの2サイトでiChatによる3元の送受テストを実施。画質/音質とも良好。テスト通信中の映像/音声を録画モードにすると、即座にホルダーに保存し、iChat停止後、再生視聴できる。movモードで1分間8メガバイトのメモリサイズ。
	14日	山口大学教育学部へ橋ヶ谷佳正委員長、黒崎東洋郎委員、住野好久委員、泊直希、小山朝子両技術補佐員と近藤の7名が吉田一成学部長を表敬訪問した後、eちゃぶルームにおいて、鷹岡亮准教授からeちゃぶについてプレゼンを併用して口頭説明を受けた。当日、同室において、学生21名が参加したボランティア活動の報告会が行われていたので、口頭説明終了後には10分程度参観できた。
	19日	橋ヶ谷佳正先生はモデル学生を引率して三門小学校へ、住野先生は同様にモデル学生を引率して大野小学校へ。三門小学校と大野小学校では、岡大からの要請内容の理解と認識に大きな隔りがある。モデル学生の協力校での活動内容を教職大学院専門教員間で検討し、その結果をもとに再度協力校と話し合う場を設けることが望ましいのではないかとと思われる。
	20日	iChatの通信が不可であった協力校3校について既設ルータを交換し、通信テストを行った。非常に高品質の通信ができ、画面共有を用いたプレゼンテーションにも成功した。27日に全ての学校でルータを交換し、通信が可能になる。
平成20年 1月	7日	3人のモデル学生に集まってもらい、コラボセンターでパソコンの使い方を中心にコラボセンター設置の情報通信設備について紹介する。稲田先生にも陪席して頂き、詳細に補足説明をしてもらう。
	10日	8日から、モデル学生の一人が大野小学校へ終日出かけ、そのレポートをsnsへ投稿。話し言葉書きによる記述内容から類推して、本音が吐露されている?ように見受けられる。所期の通り、貴重な資料になりうると思われる。住野先生とのディスカスを通して、印象記、見聞録としての日記録(個人の非公式)と体験、見聞内容を個人の中で反芻・内省して、その結果を精選して記述する(個人ではあるが、よりフォーマル、よりアカデミック?)という二つの方向性とそれを実現する仕組みが必要ではないかとの結論に至る。
	17日	モデル学生からの実習日記がSNS「こらみゅ(仮称)」に投稿され、それに対する教職員側からのコメントも随時付記されるようになった。4月からの教職大学院発足に向けて、教職GP推進による研究データが蓄積されている。2月8日の成果発表会の資料にもなる。
	21日	石井小学校北棟3階に在る岡山市教育センターへ交換用の3台のルータを持参し、返却

月	日	活動内容
平成20年 1月	24日	来年度の教職GPの予算計画立案作成、予定金額丁度にまとめあげた。
	29日 30日	G社の佐藤氏が来学され、サーバーの管理並びに昨年末以来試行を開始したsnsの一つOpenPneのXサーバへの実装などについて、再設定と補足説明を行う。この実装については、OpenPneについて可能との見通し、また、メールのssl付記・転送、サーバの遠隔操作などについて解説してもらい、ある程度、コラボセンター要員でサーバの管理ができる体制にする。
	6日	モデル学生を招集しての中間報告会。3人が各学校の実習内容、問題等について報告した。
2月	9日	パシフィック横浜で平成19年度「大学教育改革プログラム合同フォーラム」のポスターセッションに出展。橋ヶ谷委員長制作の本学教職GP紹介用ポスター(A0判)3枚を主催者側が準備したパネル(180cm×120cm)に掲示し、机上には、「こらみゆ」のトップ画面とそれを援用したモデル学生のレポートとそれに対する教員側のコメントの画面コピーを展示。併せて、インターネットに接続したパソコンで「こらみゆ」の実演を行った。更に会場にて、iChatを用いたテレビ電話の実演を予定したが、会場のインターネット接続の機能制限のため、実現できなかった。本GP・教職大学院紹介冊子を作成・持参し、会場で60余部を配布した。
	29日	第3回GPワークショップを兵庫教育大学教授渡邊満先生、加治佐哲也先生、愛知教育大学折出健二先生をお迎えし、開催した。それぞれの大学における教職大学院の実態をお聞きし、これからの具体的な運営について等の討論が行われた。
3月	15日	講義棟1階5102教室で専門職大学院等教育推進プログラム平成19年度成果報告会を文科省高等教育局専門教育課長藤原章夫氏、生涯学習推進課室長新田正樹氏、千葉喬三学長、門野八洲雄県教育長を迎え、以下の成果報告を行った。 1 地域協働学校との連携(橋ヶ谷佳正) 2 課題発見実習の歩み—デジタルポートフォリオの活用—(住野好久) 3 現職教員の課題意識と学校支援—アート・クラフト・サイエンスの一体化—(佐藤博志) 4 教職コラボレーションセンターの取り組み(近藤勲) 指定討論者 文科省生涯学習課室長新田正樹氏
	17日	稲田佳彦先生によって、無線ルーター(ドラフトn11からタイムカプセルというマッキントッシュ純正品n11に対応した新機種)の取り替えが行われ、安定な無線環境が構築された。旧ルーターでは、稼働中に突然無線による回線が断絶、iChatの機能不全など不具合が頻発していた。
4月	4日	講義棟5301室 対象は専任教員14名(研究家教員8名、実務家教員6名)と兼任教員10名「教職大学院FD」教職員の顔合わせ、教職大学院の理念と始動方法に関するディスカッションと共通理解、コラボセンターからは、「こらみゆ」の活用理念と操作方法について紹介。
	9日	教職大学院、授業開始 4限 院生向け「こらみゆ」使用説明会(コラボセンター技術職員担当)
	16日	・天城高校(稲田先生と天城高校の理科担当の先生)とコラボセンターとの間でiChatによるテスト通信を行い、高品質の映像・音声を確認。 ・第1回目の地域協働学校へ「学校における実習(課題発見)」のため、学部新卒生を引率して橋ヶ谷運営委員長をはじめ実務家教員が4校へ出かける。
	22日	「学校における実習(インターンシップ)」が始まる。
	23日	「学校における課題発見実習」が開始。
	30日	「学校における実習(課題発見実習)」の2回目 実習日誌とレポートの使い分けと記入内容について専攻側の指針が明示されたので、全体の構成・書式の統制がとられてきている。実習日誌は非公式(散文的な内容)、実習レポートは公式(書式指定、論旨、評価の対象)と性格づけている。院生による「こらみゆ」の利用が益々活発になっている。教員側の利用頻度を上げる方が必要。
5月	15日	センターのコンピュータなど設備が増えたに伴い総合情報基盤センター指定の書式に則り、ハード並びにソフトの管理整理簿を作成する作業を始める。教職GPで購入した教科書約450余冊を中央図書館へ購入手続きのため搬出し、手続き終了に伴い16日にセンターへ再搬入された。
	19日	稲田先生と近藤、泊の3人で本年度購入予定の専用サーバーの機種について、性能を含め検討する。2ヶ月ほど前にOpenPNEサポート先のT社からの推奨としてNEC 5800を勧められているが、現用の「こらみゆ」のデータも含め円滑な移植が実現できるよう段取りをとるという基本方針を確認。泊は、T社へ移植のサポートに関わるサービス範囲を、近藤はN社の代理店等について20日に総合情報基盤センターへ問い合わせることにした。
	21日	OpenPNE移植の専用サーバ設置計画に伴い、総合情報基盤センターの大隅淑弘氏の紹介でN社岡山支店の技術者が来室し、稲田先生、近藤、泊の3人同席の上で所要機能、スペック、設置作業と保守管理等について打ち合わせを行う。8月下旬には運用開始できる日程を伝える。OSについては、OpenPNEサポート先のT社の推奨はCentOSであるが、N社はRedHatを扱うので、T社へ泊技術職員がRedHatでも保証されるか否かについて確認する。T社からは稼働上の保証については確認しかねる旨の回答が後刻あった。

月	日	活動内容
5月	28日	教職GP・教育実践専攻講座会議合同会議開催。H20年度の実施計画を話し合う。FD・セミナーは最終成果報告会を含め開催3回程度。6月には連携協力者会議を行うので、他者からの評価を得ることも念頭に置くようにとの研究科長の指示が出された。
6月	2日	情報管理システム委員長加賀先生より技術職員に学部HPへのアップロード作業(今までは稲田、木村両先生が担当)の担当を依頼する旨の要請があり、了承した。
	4日	N社が来室し、先日の依頼した専用サーバーの資料(CentOS版、Redhat版)を持参し、稲田先生、近藤、泊の3人で検討する。
	10日	橋ヶ谷運営委員長から教職大学院連携協力会議への招待状発送先とその案内状の原案が届けられ、技術職員が担当する。
	13日	Xserveが突然機能不全になる。このため、xserve.ed.okayama-u.ac.jpのドメイン名のセンター専用メール並びにwikiが機能不能。G社の佐藤氏宛に対応策をメールで依頼。稲田先生へ連絡し、稲田先生から佐藤氏へ対策を要請してもらう。
	16日	サーバを2階から1階のセンターへおろし、電話でアップルサポートの指示を仰ぎながら、故障の症状を確認する。この結果、raidカードが不調との結論を得る。直接佐藤氏と電話で協議した結果、佐藤氏から岡山市内にある修理業者へ連絡が行く。その会社と稲田先生が直接電話で話し合った結果、raidカードが不調が予測されるので、17日にその会社から交換部品のraidカードを宅配する旨、連絡が入る。18日にSEが本センターへ来て、サーバを修理する旨、対応がまとまる。
	18日	修理業者のSEが来訪し、新品のraidカードと古いものを交換する。SEの仕事はそれまでのため、稲田先生が佐藤氏の指示を仰ぎながら、再起動をかける。この結果、保存データ並びにインストールのソフトに異常がなく、そっくりハードディスクから抽出したりメール、wikiを立ち上げることが確認された。学部内にコラボセンターのサーバが復旧した旨、周知させた。
		新卒院生が3年生理科の授業「燃焼」を担当してもらい、授業収録を行った。その収録をコラボセンターの技術職員が編集作業を行う。教職大学院発足後、授業実践は初めて。
	23日	N社が専用サーバの資料を持参したことを受けて、稲田先生、泊技術職員と最終打ち合わせを行う。本体を含めサーバ立ち上げの一括費用が約142万円、保守費用が約43万円の計185万円。なお、xserveについては、先日のダウンを教訓にして、外付けハードディスクで1日ごとにバックアップをとるように、リモートで佐藤氏によって機能づけられた。このため、「こらみゆ」専用サーバもxserveへバックアップをとらずにNASで処理する方針で了解。
	25日	岡山中央中学校2年国語を新卒院生が担当し、藤島技術職員が撮影。稲田佳彦先生のアイデアでiChatのAV端子を通してコラボセンターへ配信。画質はしばしばタイルパターンが生じる。音質は、常時ホワイト雑音様の雑音レベルが生じ、音声の明瞭度がやや欠ける。マイクの特性上、机と床との衝撃音、机の天板を叩く音など、高い周波数の音を検出し易い。教師にはピンタイプマイク、ビデオカメラには指向性の高い、いわゆるガンマイクを使うことが改善につながると予測される。教室の配置の構造上、隣室の英語の授業の音声マイクで検出され、明瞭度を更に下げている。
	26日	SNS専用サーバの購入・立ち上げの準備のため、購入手続きを始める。
27日	30日に携帯型パソコン15台の本センター宛納入手続きが仙台にある会社のパートナーによって行われる。	
30日	新規購入パソコンMacBook15台(10台、上位機種5台)が宅配で到着。コラボの職員4人が庶務係へ受け取りに出かけ、稲田先生の指導のもとで増設メモリの取り付け変更作業を行う。	
7月	2日	教職大学院GPの研究打ち合わせを本センターで行う。各先生方と本センターの教職員が参加し、昨年度の成果公表と今年度の研究実施の方針などについて意見交換し、検討した。
	3日	教職大学院の連携協力会議を自然科学研究棟の会議室で開催。実習協力校長と研究科長、運営委員長、教職大学院専任教員が出席。
	5日	日本教育工学会研究会が金沢大学教育実践総合センターを会場に開催された。本学から「教職大学院の学部新卒者を想定した「学校における課題発見実習」の試行の一検討」と題して、住野、稲田、近藤の順で口頭発表した。発表件数はA、B2会場合わせて21件であったが、教職大学院関係は本学と奈良教育大学の計2件であった。
	17日	コラボセンター専用ホームページのプロトタイプが完成し、教職員が見てコメントを出し合う。トップページのデザインもすっきりしている上に、情報入手のアクセスが連想し易い全体構成になっている。
23日	課題発見実習報告会が講義棟5208室で開催された。本センターの技術職員は、前日から資料作成準備、記録機材準備に加え、発表会の収録と終了後の片付け・編集作業を行う。	

月	日	活動内容
7月	29日	岡山市教育委員会、中央小・中学校の教頭先生の出席も得て、10名の院生がインターンシップの成果を1人10分(発表7分、質疑応答3分)発表した。本センターの職員が撮影、資料配布等の面で支援を行った。撮影終了後、エンコード作業してDVD等の教材化の準備を行った。
8月	28日	岡山大学教育学部・岡山県教育委員会連携協力事業運営委員会が開催され、8月25日に実施された夏期教員研修講座の反省並びに来年度の取り組みについて審議された。主な検討事項は、1. 学校インターンシップ 2. 教職大学院 3. 免許更新制 4. 連携協力会議の存続 である。
	29日	N社と本センターとの間で専用サーバの保守契約の対応について打ち合わせが行われた。サーバに付随する1年間無償保守により、本年10月購入とし2ヶ月の立ち上げ準備期間を経て12月から正式稼働に入る。無償保守については、10月の購入時から来年9月末までが対象期間となる。
9月	2日	稲田佳彦先生が「こらみゆ」に対するアンケート調査結果を精査して、今後の改善点を抽出する作業を本センターで行う。
	8日	課題解決実習の一環として授業を担当した院生の授業収録が増え始めている。技術職員が午前中に収録された授業をエンコーダを通してHDに保存する作業を行う。
	11日	T社と連携しながら、「こらみゆ」の機能改善に取り組む。
10月	2日	こらみゆ専用サーバー設置に伴いN社と打ち合わせの再確認とセッティングに必要な技術上の諸データの確認を行った。本館北棟の竣工式が11月21日と言われているので、本館4階のサーバー室への移設は12月に入ってから行なわれる予定である。
	7日	教職大学院生の実習報告会の資料作り、会場設営等で技術職員が終日対応する。
	8日	・教職大学院生の実習報告会の受付、運営などの業務に当たる。 ・教職大学院連携協力会議の運営に横山技術職員が参加。
	14日	N社が移設に伴う設置作業を開始し、技術職員が対応する。
11月	7日	魚眼レンズ付きビデオカメラ10台が納入された。
	10日	スマートボード(商品名)で知られる電子黒板1台が付属品とともに納入された。常設場所は未定のため、暫く本センター内におく。
	11日	附属小学校公開研究授業で先週末に納入された魚眼レンズ付きビデオカメラ10台を使用するため、稲田先生が持参されて構想通りの試用ができるか否かを確認された。
	14日	技術職員がN社の担当者と連携しながら進めていた「こらみゆ」のレンタルサーバーから専用サーバーへの移植作業が最終段階に入ったため、本日から17日(月)朝まで「こらみゆ」の利用を一時停止。想定外の障害が発生しない限り、11月17日(月)から専用サーバーが本格稼働に入る。
	19日	こらみゆ専用サーバーへのこらみゆ移行作業が開始。技術職員とN社のSEとでレンタルサーバーからデータの移植を行う。専用サーバーへのインポートの正否を確認でき次第、正式運用。
	20日	スタッフミーティングを行い、12月1日の文科省専門教育課の教職大学院視察に対応した事前打ち合わせを行う。橋ヶ谷運営委員長との打ち合わせでは、本センターの教職大学院に特化した機能・役割について説明するよう求められた。
	25日	教職大学院オープンキャンパスで来年度入学志望者に対し、橋ヶ谷運営委員長が本センターにおいて個別に説明を行う。
27日	こらみゆ専用サーバーの購入・設置に伴う事務処理のため、事務局経理課が来室し本センター教職員(近藤、泊)立ち合いのもとで検収を行った。購入物品の確認と実際に機能している状況を確認してもらい検収作業は終了した。 文科省による教職大学院運営視察に備え、研究科長から指示された必要資料の準備、並びに教職コラボレーションセンターの教職大学院への役割・機能を紹介するスライド作り・提示試行を技術職員が行った。	
12月	1日	文科省による教職大学院の運営実態視察が15:20～15:30まで本センターを視察。技術職員が作成し準備したスライドを使って「こらみゆ」、「iChat」を中心に紹介した。
平成21年 1月	5日	12月20日の停電でXserveが機能不能になり、26日のアップルサービスに連絡して電話サポートを受けた結果、Bay3が機能していないとの結論で、1月5日に部品を宅送し、6日に修理業者が交換に来ることになった。5日に交換部品が届けられた。その後、システムを立ち上げてくれたG社の佐藤氏へメール、電話で連絡。21日、あるいは22日に来学が可能との回答。

月	日	活動内容
平成21年 1月	6日	修理業者が来学。Xserveの電源をonにした後、正常に設定画面まで起動したが、その直後にBay2も不調になり、結局、システムを最初からインストールし直すことになった。
	21日 5	G社の佐藤氏が来学。HD並びにBay1、2、3を改めてフォーマットし、外付けHDIにバックアップされていたシステム、データをインポート。HDのパーティションも直し、ほぼ完全復旧の見通しを得る。
	22日	復旧作業を続行。ところがディスプレイ表示に異常発生し、設定画面の読み取りが不能。ディスプレイカードが不調になったとの見立て。アップルサービスに連絡し、交換をしてもらうことになった。
	26日	G社の佐藤氏が再来学し、改めてシステム、データの復旧作業を再開してくれたので、メールサーバー、wikiなどが完全復旧。iChatは22日の時点で既に復旧していた。Xserveの復旧作業にあたっては、技術職員が主に担当し佐藤氏、修理業者に対応した。
	28日	NASによるバックアップ機能が正常に機能しているか否かを確認するため、N社が来学。NASによって、1週間のスパンでログなど所要データがバックアップされていることを確認。技術職員が対応した。
2月	10日	インターンシップ実習最終報告会が東棟1209室で開催された。10名の新卒院生が指導教員及び現職院生の他、県教委指導課副参事、岡山市立中央中学校長先生が同席の会場で体験成果を発表。技術職員がビデオ収録・写真撮影を行った。
	24日	スタッフミーティングを行う。主な議題は、3月7日(土)の教職大学院GP成果報告会のプログラムの確認とその事前／当日／事後のコラボセンターとしての役割・担当業務の確認並びに最終成果報告書の作成に関する業務の確認。
3月	7日	GP最終報告会を自然科学研究棟において開催する。10:00～12:30の第1部と14:00からの第2部に分かれ、午前中は福武教育文化財団助成にもとづく「学校力向上プロジェクト—教職大学院の学校支援機能を利用して—」の主題のもとで、午後は「真に課題発見解決能力を育てるカリキュラム開発—地域協働学校と教職大学院のコラボレーション—」で学内・外から約80名の参加者のもとで開催。本センター技術職員3名は、会場設営・片付け、プレゼン支援、収録、機器運用などで終日従事。

4) 授業収録一覧

課題発見実習, 課題解決実習における授業実践				
授業者	実習校・学年	日付	教科	内容
学生A	岡山市立石井小学校・5年	2008.7.10	算数	角の大きさの和
		2008.9.19	国語・算数	漢語・和語・外来語 割る数が少数になる割り算
		2008.9.24	国語	漢語・和語・外来語
学生B	岡山市立三門小学校・5年	2008.9.11 2008.9.12	国語	人と「もの」との付き合い方 第一次
		2008.9.16	国語	人と「もの」との付き合い方 第二次
		2008.9.18	国語	人と「もの」との付き合い方 第三次
学生C	岡山市立岡山中央中学校・3年	2008.6.18	理科	化学変化と熱エネルギー
		2008.9.18	理科	星座の動き
		2008.9.19	理科	星座の動き
		2008.9.25	理科	星座の動き(最終)
学生D	岡山市立石井中学校・1年	2008.6.25	社会	世界各国の地図の見方
		2008.7.10	社会	食品偽装の社会問題化
		2008.9.10	社会	飛鳥時代末
		2008.9.12 2008.9.18	社会	班田収授～租庸調
		2008.9.26	社会	飛鳥文化と天平文化の比較
学生E	岡山市立岡山中央中学校・2年	2008.6.25	国語	方言と共通語
		2008.9.16	国語	盆土産4・3
学生F	岡山市立石井中学校・3年	2008.9.8	国語	和歌1
		2008.9.9	国語	和歌2
		2008.9.10	国語	和歌3
	岡山市立石井中学校・2年	2008.9.25	国語	単語の分け方
学生G	岡山市立大野小学校・1年	2008.9.18	国語	朝の会～ おおきなかぶ
		2008.9.18	国語・生活	じどう車くらべ はなのたねをあつめよう
		2008.9.25	道徳	朝の会～ かぼちゃのつる
		2008.9.26	算数	たしざん
学生H	岡山市立大野小学校・6年	2008.9.3	算数	くらべ方を考えよう
		2008.9.11	国語	りんご
		2008.9.25	社会・算数	朝の会～ 江戸時代の町人文化 変わり方のきまりをみつけて
		2008.9.25	国語・道徳	漢字を的確に使う 節度を守る
学生I	岡山市立三門小学校・6年	2008.9.8	算数	単位量あたりの大きさ
学生J	岡山市立石井小学校・3年	2008.7.2	国語	くわしくする言葉
		2008.9.22	算数・体育	間の数を考えよう マット運動

その他の授業実践

授業者	実習校・学年	日付	教科	内容
学生A			体育	サッカー
学生D	岡山市立岡山中央中学校	2008.2.12	選択社会	ごみの有料化について
学生E	岡山市立岡山中央中学校	2008.9.26		文化祭
学生H		2008.2.25	体育	キックベース
学生G	岡山市立大野小学校	2008.2.25	理科	地球から他の天体への距離
学生J	岡山市立石井小学校	2008.3.2	体育	サッカー

院生発表会

内容	日付	開催場所
課題発見実習報告会	2008.7.23	岡山大学教育学部講義棟5208室
インターンシップ実習前期報告会	2008.7.29	岡山大学教育学部東棟 1229室
現職院生 教育実践研究中間発表会	2008.10.8	岡山大学自然科学研究科棟 大会議室
課題解決実習報告会	2008.10.8	岡山大学自然科学研究科棟 大会議室
インターンシップ実習後期報告会	2008.2.10	岡山大学教育学部東棟 1209室

講演会等

内容	日付	開催場所
教職大学院GP第2回ワークショップ	2007.11.16	岡山大学教育学部講義棟 5101室
教職大学院GP第3回ワークショップ	2008.2.29	岡山大学教育学部講義棟 5101室
教職大学院GP講演会	2009.8.2	岡山大学教育学部講義棟 5101室
夏期研修講座 特別講演	2009.8.25	岡山大学創立五十周年記念館 多目的ホール
夏期研修講座 学力向上分科会	2009.8.25	岡山大学創立五十周年記念館 多目的ホール
夏期研修講座 学校教育臨床分科会	2009.8.25	岡山大学創立五十周年記念館 大会議室
夏期研究講座 情報教育分科会	2009.8.25	岡山大学創立五十周年記念館 中会議室

Ⅲ 実施の成果と課題

1. FD活動

【報告記録】（平成21年3月7日開催教職大学院GP最終成果報告会）

教職大学院におけるFDの実施概要と展望

佐藤博志

はじめに

皆さんこんにちは。教職大学院におけるFDの実施概要と展望というテーマで、お話をさせていただきますと思います。本報告では第一に、教職大学院におけるFDについて述べます。FDは、簡単に言いますと、大学における教員の研修のことです。2番目に専門職におけるアート、直観的判断の重要性を踏まえて、FDの在り方を考察していきたいと思います。

私は、教職大学院という名前が本当によかったのかと最近思っています。皆さん、教職大学院、教職大学院と言っているうちに単に教員養成の大学院と思われているのではないのでしょうか。教職大学院は専門職大学院です。専門職大学院とは何かと言うと、専門家を育成する大学院です。この点を追求するには、専門家というのは何であり、どのように育成されるのかが問われます。実は、その答は世界的に見て、まだ出されていないのです。ですから、FDの在り方について考えるためには、専門職を育成するためにはどうすればいいのかという考察が必要になるのです。

アート・クラフト・サイエンス

これまで本学の教職大学院では、専門職を育成するために、直観的判断・実践的経験・実践に資する理論という視点を持ってきました。直観的判断・実践的経験・実践に資する理論は、アート・クラフト・サイエンスと呼ぶことができます。これは経営学者のミンツバーグが提唱したものです。このアート・クラフト・サイエンスの三つが揃って初めて経営の成功があるのです。これは学校経営もそうですし、学級経営にも当てはまります。学級経営は経営なのです。40人の子どもを相手に、いわばリーダーシップをとって教育活動を展開していくからです。ですから、私は常々、学校経営と学級経営の相似形ということを書いております。したがって、経営マインドは、これからの教育専門家の育成にとって不可欠なものだと思います。

この図（スライド4、図1「専門家としての教師の三次元」）をご覧ください。ミンツバーグは、アメリカのビジネススクールのMBA（マスター・オブ・ビジネスアドミニストレーション）を批判しております。MBAでは、サイエンスとクラフト、つまり、理論と実践の結合だけをしてしまった。その結果、学生が偏った考え方をもち、「理論の単純な当てはめ」をする可能性が出てきます。これがミンツバーグの主張です。最近、アメリカ発で金融危機が起きました。アメリカの金融危機は、非常に複雑で高度な経営工学や数学を用いて、誰もその理屈が説明できないような金融商品を作って売っていたことが一因と言われている

ます。そのプロセスに、多くの MBA スクールの卒業生が関わっていたことは看過できません。

この点に注目すると、日本の教員養成・スクールリーダー教育への反省も必要になってきます。サイエンスとクラフトだけに注目している教員養成・スクールリーダー教育が本当によいのでしょうか。ミンツバーグは直観的判断が専門家には必要であると主張しました。これを聞くと「なるほど」と思うのですが、よく考えてみると当たり前のことなのです。例えば、高橋研究科長は1年前に次のような話をしました。「内科医は、Aという薬とBという薬、どちらを出すか、その判断に迫られる。セオリー通りでいけばAの薬を出せばいい。だが、総合的な状況から直観的に判断すると、Bの薬が適切だと考えられる。そして、Bの薬を出したら治った。」これはまさにアートであり、直観的判断です。セオリー通りにやっていたら、理論と経験、つまり、サイエンスとクラフトだけで考えて、安全な道ばかりを進みます。だが、これで本当によい教育ができるかという問題があるのです。学級においても子どもの表情を見て「今この子に当ててるのだ」とか、学校経営の場面においても「この先生は若いけれど、今これに問題意識を持っているからこの係・行事をやらせてみよう」とかが大事なわけです。これが直観です。リーダーシップの重要性がよく指摘されますが、リーダーシップの発揮は直観的判断の連続です。

教職実践専攻では、研究者教員は理論をベースにして、実践やアートへの広がりをつくっていく。実務家教員は、豊富な経験をお持ちですから、そこをベースに理論知・研究知の方に広がり、アートの方にも広がっていきます。このような協働体制をつくりました。今まで住野先生や渡邊先生から報告がありましたように、本専攻では大きな成果を上げてきたと思います。私達が実施したFDは、研修会の実施、今まで述べたような考え方を共有する会を持ったこと、それから公開授業を実施しました。研究科のFDとも連動した公開授業と協議会も実施しました。それから、ある先生が学生と一緒に授業を受ける相互参観も一部で行いました。また、学生指導では、学生の力を引き出すためにはコーチングの考え方が必要ですから、コーチング・マインドに関する研修会も実施しました。

今年の3月以降、私が「アート・直観的判断が大事だ」と言いましたら、主に現職教員院生からですが、予想以上の反応がありました。授業の時に「アートはどのように身に付けられるのか」と毎回質問がきました、私も答えるのに非常に苦慮したのですが、今日の報告の中で答えていきたいと思います。なぜそんなに現職教員の先生方がアートという言葉に魅力を感じたのでしょうか。それは、先程お医者さんの例を挙げましたが、アートが専門職にとって不可欠の能力だからです。そのことを1期生の現職教員院生の方が直観的に感じとったのです。アートは判断ですから、判断して影響を与えていくというリーダーシップの発揮につながっていきます。直観的判断は専門職の核心ですから、専門職大学院・教職大学院の成立基盤に関わってくるのです。

教職大学院の理論的基盤—専門職としての教師

これからの話は少し理論的な基盤を考えていきたいと思います。ここ(スライド8「3. 教職大学院—アートはどのように育成するのか」)に示した手順で、アートはどのように育成されるのか、どのようなFDを実施していけばよいのかという論理で進めたいと思います。

まず、「好ましい学校組織とは何か」を考えてみたいと思います。教師論、教職論では、個々の教師がこうあるべきだという理論が多いのですが、その前提として教師はそもそもチームで働くわけです。したがって、望ましい学校組織像を考えた上で教師像を考えると手順が必要になります。ローゼン・ホルツは、危機的な学校と豊かな学校の特徴を分けました。危機的な学校は、教師が孤立していたり、個々の教師が競い合っていたり、肯定的な反応がなかったり、無力感があったり、リスクを回避することは大切なのですが、とにかく安全な道を進む、新しいことはやりたくないというリスク回避主義、あるいは、やらされ感のある研修を特徴としています。一方、豊かな学校の特徴は、ここ（スライド 10）に挙げたとおりです。これを見てチェックした時に、自分の学校はどうでしょうか。豊かな学校になっていくことが望ましいわけですが、そのためには、どのような専門職としての教師が求められるのでしょうか。

ショーンは教師が反省的実践家であることを指摘しました。このことは日本でも広く知られています。このため、教員養成に関する会合に行きましても、ショーンがすぐ出てくるわけです。そういう点ではリフレクションが大事です。それは正しいし、私も賛成です。しかし、ショーンの理論に頼り続けている研究者は反省が必要ではないかとも思います。ショーンの反省的実践家論を踏まえて、構造化していく努力が教職大学院の成功のために必要なのではないかと思うからです。

イギリスの教員養成に影響を与えたヘイ・マクバーは、教師の能力について論究しています。ここで、資料を見て頂ければ分かるのですが、図 3 のような冰山モデル（スライド 13、図 3 「教師の能力の表と裏」）があります。氷山のモデルの上の方がティーチングとサブジェクト・ノウレッジ、つまり、教育方法と教科の知識です。これは既存の専攻で育成してきたものであるし、学部教員養成の根幹であったと思います。日本でも「教育は人なり」とか「人柄が大事」とずっと言われてきたわけです。これが氷山の水面下の部分です。

一方、学校現場は図 4（スライド 14、図 4 「教師の態度と技法」）のようなスーパーティーチャーのようなものを切望しており、教員評価の項目を見ると、そういうニュアンスが出ています。これは日本だけではなくて外国でもそうです。ところが、スーパーティーチャー・モデルを設定して望ましい能力を細分化し、教員評価なり教員養成をしていくことが本当に良いことかは、もう一度考え直さなければならない。図 4 のような専門的特性が結果的に出てくるようにするには、まず氷山の水面下のところについて深く理解し、それを引き出していくことが、とりわけ教職大学院における教育において大事なのではないか。

つまり、図 3 を見ると、氷山の下のところは Professional Characteristics とありますから、これが専門的特性なのです。教育専門家の特性というのは、氷山の下の部分である。それは、社会的役割、自己イメージ、行動特性、自分が何に価値をおくかです。これらは、インターンシップ実習の報告などを聞いていても、出てきたと思います。「部活で、ひやかす子がいるが、それをやめさせることが必要で、みんなでほめ合い、声をかけ合う部活にしていかなければならない」「教師は子どもが学びで困難に陥っているところを分かろうとすることが大事である」という報告がありました。「これは学校コミュニティにおける教師の社会的役割に適合するものだな」と思って聞いておりました。

既存の研究科・専攻と教職大学院の違いがよく問われるのですが、既存の専攻は上の部分、教科内容学や教科教授法をターゲットにしてきたのではないのでしょうか。こういうもの（スライド 14，図 4「教師の態度と技法」）があるのですが、これが全部できる人は、おそらくこの中に一人もいないと思います。いたとしても全国に一人か二人です。にもかかわらず、これが全部できるようになるべきだという考え方は問題があると思います。そうしてしまうと断片的になって、分裂して、学生は受容できなくなってしまう。先程、渡邊先生の発表にありましたように、教育実習の基礎的な力量をチェックリスト的に設定することは必要だと思います。そういう基礎的なものを包括した上で、どういう教師を養成していくか、もう少しマクロ的な方向性を考える時には、先程のような細分化したものは逆効果だと思います。

ここで注目されるのは OECD のキー・コンピテンシーです。キー・コンピテンシーは適度に具体化したものであり、示唆的なものであり、先程の冰山モデルの水面下の能力との関連性が認められると思います。これは OECD が出したものですが、私は学級経営や学校経営をしていく時にも、この三つの特性（スライド 16）は非常に大事ではないかと思いません。とりわけ、異質な集団との交流は大切であろうと思います。どうしてかと言うと、人間は物質的・心理的に生存するためにも、社会的アイデンティティ、あるいは教師としての役割を獲得するためにも、他の人々とのつながりに依存しているからです。小学校の先生と話をしていると、最近よく「つながりが大事だ」と言われます。これは的を射ていると思います。小学校の先生は直観的に感じ取っています。今、学級や学校全体を見て、子ども同士が個々孤立して、つながりが薄れてきている。何かがおかしい、親も昔みたいに協力してくれず、消費者的になってすぐ文句を言ってくる。だから、つながりを再生しなければならない。つながりをつくるために、異質な集団で交流することは、学校経営や学級経営の本質的な部分になってきます。

私達は、教職大学院において、先程の冰山モデルの水面の上と下の両方をきちんと育成してきたのでしょうか。先程の発表で、例えば住野先生は、学生の意識の変容があったと言われました。たしかに育成してきていると思います。この点は教職大学院の成果ですが、それが十分かどうかというのは議論の余地があるし、我々の課題だと思います。

ここで、アートの発揮、冰山モデル、キー・コンピテンシーを包括し、ホリスティックな教師像と呼びたいと思います。この発表では、専門職とは何か、アートはどのように発揮されるのかという問いから進んできました。ここで、ホリスティックという概念を出してきたのには理由があります。ホリスティックの語源は、ギリシャ語の *holos* ですが、これを訳すと「全体論的」「全身の」「関連」先程言った「つながり」になります。このギリシャ語の *holos* を語源とした英語は、*whole*（全体の）、*heal*（癒す）、*health*（健康）、*holy*（聖なる）という言葉があります。医学の世界でも内科とか外科とか分かれているところを統合的にみて、ホリスティック医学という人間の自然な治癒力に着目した医学が出てきています。

ホリスティックな考え方を持つ教師というのは、共感、柔軟性、人情深さを特徴としています。これはやはり学校の先生にとってすごく大事であると思います。大学の先生にとっても同じです。「人情深くない先生に教わりたくない」と皆さん思っているでしょう。し

かし、学校の中に少なからず人情深さを忘れてしまった教師がいるかもしれない。もしそうであるならば、それは問題であり、解決していかなければならない。そのためにはいい先生を増やさなければならぬし、そこが教員養成の課題になっていると思います。

「アートを発揮するにはどうすればいいか」と現職教員の授業で学生に何回も聞かれたのですが、そこで私が出してきた答えは、ここ（スライド 22「アートを発揮するにはどうすればよいか」）に書いたものです。視野を柔らかく広げて、その間で織りなされている「結びつけ合うパターン」のようなものを把握して、「こうだ！」と思う。でも、その理由はうまく説明できない。これは、自転車の例で表現できます。自転車はみんな直観的に乗れる、ただ自転車をどのようにこいでいるか、どのように動いているかは説明できない。それと似たようなものです。

私はこの1年間授業をしてアートを育成するには、例えばブレインストーミングとかワークシートを使ってアイデアを出していくことが有効だと思ってきました。それは一定の有効性があると思います。ただ、それだけでは十分ではない。もう一つ大事なことはアートを阻害している要因を取り除くことが大事だということが分かりました。それは何かと言うと、思い込みがあるとアートは発揮できない。例えば誰が見ても悪い授業があったとして、いや、でもあの先生は普段いい人だとか、普段子どもはついてきているとか情緒的に授業を見てしまう人がベテランの教師でもいます。これはアートを阻害しています。あるいは、同僚に対して非常に厳しく見てしまう教師がいます。もっと子どものために働かなければならない、それは正しいのだけれど、その思い込みが強すぎて、アートの発揮、直観的判断の発揮を阻害している。ここ（スライド 22）に挙げた三つの問い（学校組織や学級・子どもの様子を柔軟に見ていますか？ 子どもや同僚と接する時に、思い込みはありませんか？ ミクロな動きばかり見て、背後にあるものを見過ごしていませんか？）は、教師の授業力、学級経営力、学校経営力を高めるために大事なことだと思います。

教職大学院における教育方法

教職大学院における教育方法について三つの観点から考えます。第一に、基礎的な知識を習得し、理論を理解することは大事です。これは主に授業などでやっています。第二に、理論を基盤に実習し、あるいは校内研修などを観察し、経験・省察する。そして、課題を解決することも重要です。大学院生は入学して1年経ったところですが、概ね2番目のところまでは来ています。さらに、第三の教育方法として変容型学習に注目しておきたいと思います。変容型学習は、課題解決に基づきながらも、それだけではなく、むしろ自分の内と外のつながりが深まって、自分自身に変容していくような学びです。

先程、岡山県教育委員会の方が、学んだことの組織的な広がり的大事だと言われていたのですが、私はそこに踏み込むには変容型学習をしないと無理だと思います。といいますのは、一時、課題を分析してこういう研究を設定し、このようにやります、すると何らかの改善はできるが、それは一過性のものに留まってしまう危険性を持っているからです。もちろん、そうではない場合もあるかも知れません。一時的な学校改善に留まらないためには、課題が変わっても、あるいは転勤して勤務校が変わっても、立場が変わっても、リーダーシップを発揮できるような直観的判断力が必要だと思います。それができることに

よって、学校や学級の継続的、組織的変革ができるようになってくるのです。

このような本物の力を身に付けるためには、個人の問題意識を深化させ、問題を掘り下げて、物事の本質に迫っていく営みが必要です。そうすれば個人の思考様式や行動が自ずと変化していきます。これが変容的学習です。私は論文執筆を通して得られるものが多いと思います。修士課程で、修士論文が課されてきたのは正しいことだと思います。実践研究報告書は一種の論文です。学校でも生活綴方という実践があります。文章を書いてそれを見て、鏡のように自分と照らし合わせて、自分が更に高まっていく。これが変容型学習のプロセスです。

私が2月、3月以降、嬉しい経験をしたのは、指導している学生が論文を本気で書くようになってきたことです。明らかに変わってきていて、あるテーマを追い込んでいくように焦点化が進んで問題意識が鮮明になって、文章に迫力が出てくる、ということが分かるのです。これは間違いなく本人の力になっていくし、たとえ転勤しても使える力がついてくると思っております。論文の指導が2年目の課題であり、その意味では、岡山大学教職大学院の現職教員のカリキュラムを1年制ではなく2年制にしたのは大正解だと思います。1年経って、やっとじわじわといい問題意識が出てくるのです。このようなことを踏まえて、どのように指導すればいいか、という問いを発するのがFDです。ただ集まってFDをやっても、無意味ではないですが、得られるものは少ないのではないかと思います。

おわりに

時間がありませんので少し飛ばします。今日、学校だけでなく、企業も困っています。成果主義が導入され、雇用形態も変わってきました。自信が無い人が増えてきていたり、消費者が強くて文句を言うようになってきたりして、なかなか難しくなっています。例えば、ここの記事の左上の一番端（スライド28）に「上司の背中を見て部下が育つ時代は終わった。個の価値を大事にし、コミュニケーションが得意でない若手社員も増えた。・・・雇われる側の立場も多様化する。」そうしたときにどう人材育成していくか。これは20年経験を超えた現職教員が、学校にこれからたくさん入ってくる新任教員にどう向き合うかという問題なのです。世代が違って感覚が違うから相手にできないというのでは駄目だと思います。世代が違って意識が違う人たちに対してどうアプローチしていったらいいか、信頼関係をつくっていくのかが問われているのではないのでしょうか。これは、教員養成の在り方を考える際にも非常にヒントになると思います。今日はFDの話でしたが、これから教職大学院をどう評価していくかも問われてくるでしょう。新しい評価方法を開発することがこれからの課題だと思います。ご清聴ありがとうございました。

教職大学院におけるFD の実施概要と展望

佐藤博志(岡山大学)

1. 本報告の目的

- 本報告では、第一に、岡山大学教職大学院におけるFD (Faculty Development; ファкультティは大学の教員組織, ディベロップメントは能力開発を意味する。したがって, FDは, 大学教員の研修を通じた授業力・指導力等の組織的力量向上を意図している。)の実施概要を報告する。
- 第二に、専門職におけるアート(直観的判断)の重要性をふまえて, FDの在り方を考察する。

2. FDの実施概要

- これまで、岡山大学教職大学院では、育成したい教師像をイメージ・共有し、授業や学生指導を行ってきた。
- 育成したい教師像とは、アート(直観的判断)、クラフト(実践的経験)、サイエンス(実践に資する理論)の三次元をかねそなえた新人教員、スクールリーダーである。(図1)
- これに関わって、研究者教員・実務家教員の役割についても、明確化してきた。(図2)

図1 専門家としての教師の三次元

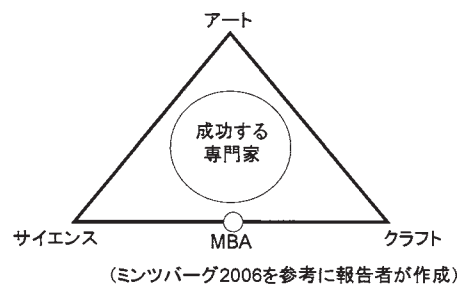
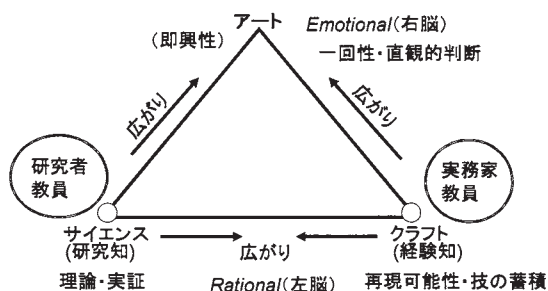


図2 研究者教員と実務家教員の協働



1年経過後の成果

- 本学教職大学院の教員は、実践に貢献する理論(理論の実践化)、実践と理論の往還に努め、概ね、授業や学生指導において成果をあげてきた。
- 実施してきたFDとして、(1)研修会の実施、(2)公開授業の実施、(3)授業相互参加の実施、(4)講演会(コーチング)の実施がある。

1年経過後の課題

- 学生からの声:「アートはどのように身に付けられるのか」→予想以上の反応。
- アートは分野を問わず専門職に必須の能力である。そのため、学生にとって魅力的な言葉となった。アートは、学級・学年・学校におけるリーダーシップの発揮につながる。
- この問いは、哲学的であり、教職大学院(専門職大学院)の成立基盤に関わっている。

3. 教職大学院の展望

—アートはどのように育成するのか

- ① 好ましい学校組織とは何か 教員養成高度化・スクールリーダー教育から学校力向上へ(好ましい未来)
- ② アートを発揮できる教師の能力 反省的実践家論の構造化、既設の専攻と教職大学院の到達目標に関する深い理解(シナリオ)
- ③ ホリスティックな教師像にもとづくFD 教師像の認識論的進化と専門職大学院の実質化(基本計画)

①好ましい学校組織とは何か

- 教職大学院の使命は、優れた教師・スクールリーダーの輩出を通して、学校力の向上に寄与することである。
- この使命を実現するために、前提的な議論になるが、好ましい学校組織について考えてみたい。(表1)
- 教師はチームで働いている。したがって、好ましい学校組織を理解することは、専門職としての教師像(教職大学院の到達目標)の共有につながっていくだろう。

危機的な学校

- ・教師の孤立
- ・教師の競い合い
- ・肯定的反応の欠如
- ・方向性の拡散

無力感

- ・リスク回避主義
- ・やらされ感のある研修

教師の学習への無理解

- ・教師の生涯学習への確信

豊かな学校

- ・教師の協働と共有
- ・教師の実践に関する会話とその継続
- ・肯定的反応と受容、自己効力感
- ・方向性の共同化、

子どもの成長への焦点化

- ・教師の価値観の共有
- ・組織の内側だけでなく外側も見る
- ・チャレンジ志向
- ・教師の主体性の確立

—理論適用主義を越えて

- ・教師の生涯学習への確信

—豊かな学校が成立するためには、どのような教師が求められるのか?

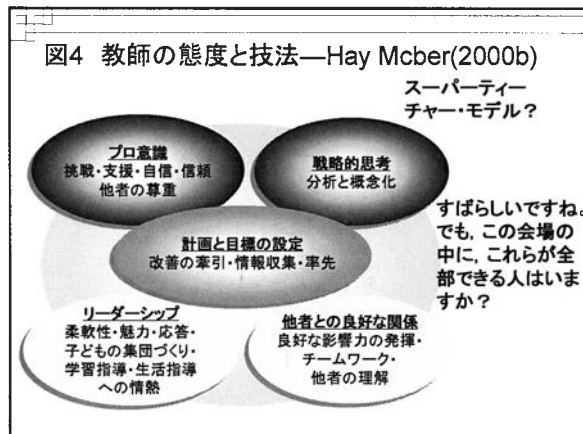
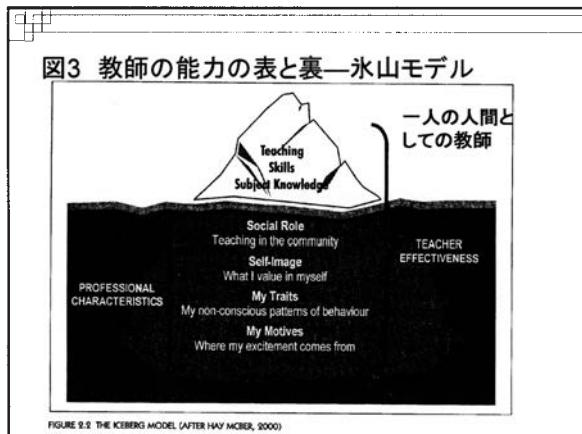
Rosenhoiz 1989 一部改

②アートを発揮できる教師の能力

- ショーンは、教師が反省的実践家であることを指摘した。このことは日本で広く知られている。
- このため、教職大学院では実践(実習・授業)を基盤としたリフレクションが取り入れられている。
- しかし、単なるリフレクションは作業主義に陥る。どのような教師を育成しようとするか、その能力を明らかにした上で、リフレクションを促す必要がある。

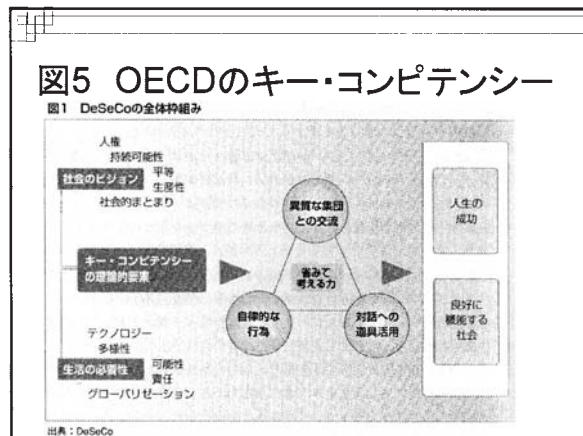
水面下の能力の育成—アートの源泉

- Hay Mcber(2000a, b)は、教師の能力について論究している。(図3, 4)
- 図3の氷山の水面下は、日本では人柄という言葉で表されてきた。一方、学校現場は、図4のような態度と技法を持つ教師を、即戦力として切望している。
- だが、図4のような専門的特性を育成するには、図3の氷山の水面下について深く理解し、注意深くケアし、見守る必要がある。**急がば回れ**
- 教職大学院学生の「氷山の水面下に関する潜在的な能力」を引き出す、あるいは自ら気がつかせる必要がある。(注意:押し付けてはいけない。)



キー・コンピテンシーの意義

- スーパー・ティーチャーモデル(図4)のように、網羅主義によって能力を設定すると、断片的になり分裂し、学生は受容できなくなる。つまり、教師の能力モデルの細分化は逆効果である。
- 一方、OECDのキー・コンピテンシーは適度に具体化したものであり、特に教職大学院にとって示唆的である。
- 教師の水面下の能力(図3)はOECDのキー・コンピテンシーと関連性・整合性が認められる。(図5)



人間は、他の人々とのつながりに依存している。

- キー・コンピテンシーの1つのカテゴリーに「異なる集団で交流する」ことがあげられている。これは学校経営と学級経営にとって重要である。
- 「人生を通じて、人間は、物質的・心理的に生存するためにも、そして社会的アイデンティティの獲得という面でも、他の人々とのつながりに依存している。(中略)『社会的能力』、『ソーシャルスキル』、『異文化間能力』、『柔軟な能力』といった用語と関係した多くの特徴にこのキー・コンピテンシーは当てはまる。」(OECD 2006)→学校経営と学級経営の本質。

冰山モデルの検討

- 既設の専攻は水面上の能力を育成してきた。
- 教職大学院は、水面上と水面下の両方を視野に入れているはずである。水面下はアートの源泉である。
- だが、私たちは、教職大学院で、水面下の能力やキー・コンピテンシーを育成してきたらどうか？

学生の個人のニーズを出発点に

- (1)アートの発揮、(2)教師の能力の氷山モデル、(3)キー・コンピテンシー、これらを含めて、ホリスティックな教師像と呼ぶことにする。
- ホリスティックな教師を輩出するためには、教員養成における標準化の誘惑を拒否し、個人のニーズを出発点として、安心して自分を出せる共同空間を創成しなければならない。

③ホリスティックな教師像にもとづくFD

- 教職大学院を、個人のニーズを出発点とした共同空間にするためには、どうすればよいか。
- 大学院担当教員が、教員養成の技術主義・効率主義を越えて、ホリスティックな教師像を共有し、実践する必要がある。
- つまり、私たちが教師像を認識論的に進化し、専門家教育(専門職大学院)の新たな地平を切り拓く必要がある。

ホリスティックな教師の特徴

- Holistic の語源はギリシャ語のholos。全体論的、全身の、関連、つながり。(whole, heal, holy)→参考:ホリスティック医学。
- 「ホリスティックな考え方を持つ教師は、共感、柔軟性、人情深さ、民主的価値観を表している。そして、多面的な可能性と視野、物事が互いに関わり合っていることを認識している。そのような教師は複合的な学びを奨励する。」(Carnell 2001)
- 専門職としての教師像をふまえたFDの企画。

アートを発揮するにはどうすればよいか

- 「視線がある一つの部分に収斂して分析的に見ているのではなく、視界を柔らかく広げておいて、部分と部分をバラバラにはではなく、それらの<間>で織りなされている『結びつけ合うパターン』のようなものを、全体直観的に把握している」(吉田1999 p.33)時に、アートが発揮される。
- 「このようにして『諸部分の総和以上の』<全体>や<間>をとらえようとするのは、<ホリスティックな知>に特徴的なものである。」(吉田1999 p.34)
学校組織や学級・子どもの様子を柔軟に見ていますか？
子どもや同僚と接する時に、思い込みはありませんか？
ミクロな動きばかり見て、背後にあるものを見逃していませんか？

教職大学院における教育方法の再考

- 理論・知識の説明・理解は必要である。(サイエンス)
- さらに、理論を基盤に、実践を経験・省察し、課題を解決することも重要である。(サイエンス→クラフト→学校・学級の課題解決)
- もう一つ必要なことは、変容型学習である。それは、「認知レベルだけでなく、直観やイメージや無意識や身体などの全体が含み込まれていて、自分の外にある課題を解決するというよりも、内と外との<つながり>が深まり、自己自身が変容していくような学びである。」(吉田1999 p.197)(アート→リーダーシップ・影響力の発揮→学校・学級の継続的・組織的な変革)
- 実践研究報告書の指導では変容型学習に踏み込む必要がある。(論文執筆を通して自分と向き合う。)

岡山大学教職大学院FD

2009年3月24日

指導の成果と課題

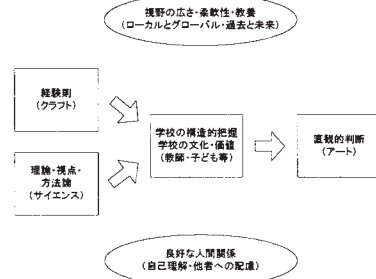
—1年間を振り返って—

- 成果と課題を意見交換し、解決策を探る。
- ホリスティックな教師像をふまえて、グループディスカッションを行う。
- 対象:岡山大学教職大学院の教員(専任・兼任)。

教職大学院の根幹—専門職としての教師のアートの育成

- アートの育成については、報告者もスクールリーダー教育の観点から概念化している。(図6)
- 出典: 淵上克義・佐藤博志・北神正行・熊谷慎之輔編著『スクールリーダーの原点—学校組織を活かす教師の力』金子書房, 2007年。
- 基本的な考え方は、これまで論じてきたホリスティックな教師像と共通している。

図6 スクールリーダーの専門性



補論: 教育専門家と共感力 (AERA 2009.2.23)

「強面は通用しない 先行き不透明な時代、業績も伸びず、人員力も落ち、戻って来れば不確実化が進む職場で、上司の姿勢も変わっている。部下と心を通わせ、共感しよう。それが会社存続の鍵になる。」

共感力
共感力とは、相手の感情や考え方を理解し、それと共感する能力のこと。共感力が高い人は、周囲の人々から信頼され、リーダーとして活躍できる。共感力は、コミュニケーションの基盤であり、組織の活性化に不可欠な能力である。

共感力
共感力とは、相手の感情や考え方を理解し、それと共感する能力のこと。共感力が高い人は、周囲の人々から信頼され、リーダーとして活躍できる。共感力は、コミュニケーションの基盤であり、組織の活性化に不可欠な能力である。

例えば共感力というキーワードから、どのような校内研修を企画できるだろうか。

企業組織のイノベーションを、教育組織に合うようにアレンジを加えて、**学校経営・学年経営・学級経営**に取り入れる必要がある。

教員養成・大学院教育への示唆。

出典: 『AERA』2009.2.23, 朝日新聞出版

おわりに—新しい教職大学院評価の必要性

- 現代日本における構造改革の帰結→「ひとりひとりが固有な『生きる意味』の世界を生きていることには配慮が払われず、効率的な『数字』がひとり歩きしていく」(上田 2005:127)→共感力の低下
- この指摘は、大学評価、学校評価、教員評価を再検討する必要性を示唆している。ポスト新自由主義の在り方を模索する時期が来ているのではないか。
- 教職大学院がホリスティックな教師を育成し、学校現場に貢献したいならば、新しい評価方法を開発しなければならない。

主要参考文献

- 吉田敦彦『ホリスティック教育論—日本の動向と思想の地平』日本評論社, 1999年。
- 上田紀行『生きる意味』岩波新書, 2005年。
- ライチェン, サルガニク編著『キー・コンピテンシー—国際標準の学力をめざして』明石書店, 2006年。

ご清聴ありがとうございました。

2. 課題発見実習中間／最終報告会

1) 中間報告会

日 時： 平成 20 年 6 月 16 日（月） 10：20～11：50

場 所： 岡山大学教育学部東棟 1210 室

発表者： 安藤宏恵

（実習校 岡山市立石井小学校 実習担当大学教員 仲矢明孝教授）

大賀基代

（実習校 岡山市立石井中学校 実習担当大学教員 笠原和彦講師）

岡崎亮人

（実習校 岡山市立岡山中央中学校 実習担当大学教員 笠原和彦講師）

香川真吾

（実習校 岡山市立大野小学校 実習担当大学教員 渡邊淳一准教授）

佐藤典美江

（実習校 岡山市立大野小学校 実習担当大学教員 渡邊淳一准教授）

玉木修治

（実習校 岡山市立三門小学校 実習担当大学教員 山崎光洋講師）

時岡宏行

（実習校 岡山市立三門小学校 実習担当大学教員 山崎光洋講師）

南川由理

（実習校 岡山市立石井中学校 実習担当大学教員 笠原和彦講師）

根山夕佳

（実習校 岡山市立岡山中央中学校 実習担当大学教員 笠原和彦講師）

八木雄治

（実習校 岡山市立石井小学校 実習担当大学教員 仲矢明孝教授）

1. 課題設定

（1）課題

クラスのすべての児童が学びやすい授業の在り方
－発達障害児を視野に入れて－

（2）課題設定の理由

現在、日本の子どもたちの学力に関する問題は、大きな教育課題として取り上げられており、子どもたちに基礎的・基本的な内容を確実に身につけさせ、自ら学び自ら考えるなどの「生きる力」をはぐくむことが求められている。課題は、すべての児童生徒を対象としているが、学力についてみるならば、児童生徒一人一人の違いは極めて大きいのが現状である。私が今、実習している学級にも、学習面や行動面において困難を示している児童、いわゆる「特別な教育的ニーズ」のある児童が在籍していると思われる。

私が教師になる身として目標に掲げていることは、児童生徒が直面している学習や行動面における困難を少しでも克服できるような手だてをし、すべての児童生徒が学びやすい授業環境を整えることである。実習に行き、配当学級で児童とともに勉強していく中で、この課題の必要性を実感した。

授業環境を整えるためにまず必要なことは、子どもたち一人一人の実態を把握し、個々のニーズをとらえることである。特に「特別な教育的ニーズ」のある子どもたちの実態についてはできるだけ的確にとらえたい。さらに児童の実態を踏まえながら教材研究を行う。特に①発問②板書③児童の活動の3点については、綿密に計画しておく必要があると考えている。③は、教師の説明を聞くだけでなく、実際に活動する中で学ぶということである。活動を取り入れることで、教師は児童の授業理解を個別に知る機会ができると考える。さらに、児童が相互に関わり合う中で、学び合う姿もとらえていきたい。

2. 今後の課題発見実習の計画（スケジュール）

- 6月中旬～下旬 ・今後の実習について、担任の先生と打ち合わせを行う。
・引き続き、実習校での授業観察を行う。
・自己の課題に関する文献収集をする。
- 7月上旬～中旬 ・実習校で授業を行う（算数）。
・授業を振り返り、自らの課題をさらに明確にする。

3. 大学教員のアドバイス

特別な教育的ニーズのある子どもたちに対する支援内容や方法は、子どもの実態によって一人一人異なります。さらに、教育的ニーズと言う視点でとらえるならば、子どもたち全員が各々のニーズを持っていると言えます。多様な実態の子どもたちを前にして、授業を行うには、自分が教えようとする教材に関する研究、子どもたちの実態把握、学習を進める上での様々な手だての検討等が必要となります。現時点での具体的課題として発問、板書、活動の3点を挙げていますが、これらの検討の前提となるのが、子どもたち個々及び学級全体の実態把握であり、できるだけ的確な把握が望まれると思います。

1. 現段階での課題

(1) 課題

「生徒理解に基づいた授業づくり」

(2) 課題設定の理由

多くの国語の授業を見学し、実習校の生徒たちと会話してきた。その中で、「国語は特に勉強しなくても、なんとなくテストの点数はとれる」という生徒の言葉を聞き、学習意欲を高めるための授業方法を工夫し、生徒に国語の授業の楽しさを伝えなくてはならないと考えようになった。そのため、生徒の興味・関心や学習意欲を高めるために、授業の導入部・中間部・終末部で教師がどのような方法を用いて授業を構成しているか、またその時の生徒の様子はどうかを観察・分析し、生徒の学習活動への支援という視点に注目した授業構想について考えていきたいと思っている。今までの授業観察の中で、導入部では、「漢字テスト」を行うなどして授業間の休憩時間に国語の授業への意欲づけを促し、スムーズに授業に入らせるといった工夫が多く観察できた。また、中間部では、生徒の注意をひきつける手法や、生徒たちが作業する場面を取り入れていることも多く、授業内容の確かな理解のための教師の力量が発揮される場面となっている。また、学習形態については、「班学習」だけでなく教室を自由に使った私的グループの利用など、様々な工夫もなされていた。最後に授業の終末部では、各回の授業のまとめ方にも様々な視点と工夫が見られた。実際に自分が授業をする場合、構想時に生徒の反応や必要な支援方法などを十分に検討し、様々な工夫を取り入れながら実践していく必要性を強く感じている。

また、授業を行う上で最も重要な内容として生徒理解が考えられる。生徒理解とは、授業では生徒の興味・関心、意欲などについて理解することであるとも考えられる。授業では、授業構想の段階から学習形態や発問方法などを考え、それぞれにおける生徒の反応を予測しておかねばならないと同時に、生徒のつまづく場面やノートをする速度などについて授業観察をする中で特に注目し、生徒たちへの支援方法を考えていく必要があると思っている。さらに、発問計画をする中で、生徒たちの個性を活かし、各クラスの実態や指導内容に合った授業を構想していきたいと考えている。実習が始まった当初は、自らの緊張が生徒に伝わり、ぎこちないものであったが、体育大会などの行事で共に活動することを通して、生徒とのコミュニケーションも徐々にとれるようになってきた。今後は授業内だけでなく、休憩時間や放課後なども生徒と接する中で生徒間の人間関係や生徒の思いに寄り添い理解しようとすることに重点を置いて実習に取り組んでいこうと考えている。

2. 今後の実習計画

- ・「朝の会」や「帰りの会」において生徒の前で話す時には、簡潔に生徒に分かりやすく伝えられるよう努力する。特に、一方的に話すだけでなく、生徒たちとの対話を意識して話したいと考えている。
- ・9月に行う課題解決実習での指導案やワークシートなどを早い時期から作成し、十分な授業準備をして授業実践に取り組みたいと考えている。

3. 実習校担当者からのコメント

生徒の興味や関心、意欲といったものを教師側がどのように把握し理解しようとするのかということについて、授業内での生徒とのやり取りや反応、観察等の中から自分なりの視点を確立していきましょう。生徒の理解や人間関係づくりについては、日頃の関わり方やどのような意図でどのような言葉をかけるかということが大切です。多くの指導場面で、しっかりと分析し経験をつんでいきましょう。

1. 自己課題について

(1)課題

現在…① 学習指導の分析 (板書、ノートの取り方を中心に)

② 生徒間の人間関係と学級経営についての分析

③ 学校と部活動の関わりについての分析 (野球部を中心に)

実習前…○ 「授業」を中心とした学習指導の分析

○ 学力・生活態度等の評価についての分析

○ 部活指導と学級・授業経営の関連についての分析

○ 教員として心がけることについての分析

(2)課題設定の理由

①について…週1日、1日2時間という限られた時間の中で課題発見をするため、「学習記録」に関わる板書とノートの取り方に視点を絞り分析する。

②について…授業中に机に伏せる生徒や立ち歩く生徒、陰でいじめを起こす生徒やクラスに無関心な生徒等と関わることが多く、「授業」を核とした課題発見を目指す上で、学校や家庭で受けるストレス等の生徒の抱える問題の背景にせまる必要性を感じた。そのため、授業外での生徒同士の関係や学級経営に注目して観察分析を行う。

③について…部活動に参加する中で、実習校の抱える問題を目の当たりにした。環境整備や指導方針、生徒への教育的配慮等、多くの課題に向き合うことで自分なりの指導の観点を構築する。

2. 今後の計画

- ・「方言と共通語」についての授業実践 (6月25日)
- ・学級通信の作成
- ・道徳の授業実践
- ・部活動での観察、分析と支援
- ・生徒、学級観察と支援
- ・授業記録を中心とした授業分析

3. 実習担当者からのコメント

指導の必要があると考えられる生徒の理解やその指導について、課題意識がふくらんできたということだと思います。学校が抱える諸問題について、実習校で多くのものが見えてきています。学級や学年という組織の中での自分の役割を理解して、実習校の先生方と相談しながら、いつも生徒の近くで指導の経験をつんでいきましょう。

1 現段階の課題（仮題）

（1）課題

「教師として適切なタイミングで適切な言葉をかける」

（2）課題設定の理由

実習前に「教師として自分にしかできない言葉かけ」を自己課題として決め、実習に臨んだ。実習を重ねるにつれ、学校生活（朝の時間、休憩中、授業、給食、放課後など）はどの時間においても学級経営に関連する場であることを再確認した。また、その中で授業が占める割合が一番多く、授業が学級経営に与える影響は大きいと感じた。

これからの実習の方向性としては学級経営に影響の大きい“授業”の中で最終的な自己課題を見つけ、課題発見実習に向けて取り組んでいきたいと考えている。また、朝の会などの実践をさせていただくことで広い視野を持って、課題に対する意識を持つようにもしたいと考える。

2 今後の課題発見実習のスケジュール

- ・ ベースは担任の仕事の一つでも多くさせていただき教員としての資質能力を高める。
- ・ 自分が将来、どのような学級をつくりたいのか考える。
- ・ 授業を教科指導、生徒指導、学級経営の三つの視点で観察する。
- ・ 朝の会を実践・撮影し、自分の立ち振る舞いや発言について分析する。
- ・ 課題解決実習での授業実践のために授業案の作成を行う。

3 大学院教員のアドバイス

教師としての実務に習熟していない段階では、教師の仕事のすべてが課題と感じていると思います。その中で、何が自分にとって最も大切なのかを自分なりに見極めていくことが大切です。また、「何ができるようになったか」という視点をもつのもよいかもしれません。

1. 課題設定

（1）課題

「教師と児童との信頼関係をはぐくむ授業実践」

（2）課題設定の理由

7回の実習を通して、最初の3・4回目までは居場所のある学級経営とは何か、またそのためには何が必要か、どうしたらよいかについて観察・考察をしていた。しかし、その間に自己の課題がいかにも漠然とした課題であるかに気づき、自分に実現可能でより身近なことから取り組む必要性を感じるようになった。児童にとって居場所がある、楽しいと感じられる学級をつくるために、まず教師と児童の信頼関係つくりを焦点を当て、特に学校生活の大半を占める授業について自分の力量を高めていきたいという課題をもつようになった。

ある児童が、入学当時は授業中よく叱られていたが、一方でよいところを見つけられ先生からほめられていく中で、何がよくて何がしてはいけないことかを学んでいっていた。そして、きちんと自分を評価してもらえることで、その先生を信頼しているようであった。他の児童も同様である。自分たちをしっかりと見てくれている、きちんと評価、指導してくれると感じ、先生に信頼を寄せている。これらのことから、授業内で児童をしっかりと見て、いいところとよくないところをきちんと評価し指導していくことの積み重ねが、児童の成長にとって大切であるだけでなく、児童との信頼関係を築いていく上でも重要な鍵であることが分かってきた。

ところが、「児童をしっかりと見る」といっても、今は一人一人や一人とその周りの範囲をそれぞれじっくり見ているにすぎず、担任の先生のように全体を見渡しながらも個々を見、出来ているところやつまづきを察知するといった見方は私にとってまだ難しい。「きちんと評価する」ことも、ただよいところを見つけてほめることはできるが、結果だけでなく頑張っ取り組んだ過程に目を向けたり、褒めてほしいところを褒めてほしいときに褒めるといったタイミングを考慮したりする力量は、まだまだ不足している。よくないところを指導する場合も同様である。そこで、それらのような点に配慮しながら、教師と児童との信頼関係をはぐくむ授業をするができる実践力を身につけていきたい。

2. 今後の計画

あと5回の実習では、授業に臨むにあたって児童との関係づくりのために、授業や休み時間における観察・実践を引き続き行う。また、水曜日に行われている授業やできればその他の曜日の授業も参観し、授業の展開や児童の反応を観察することで授業の構想を練りたいと考えている。

3. 実習担当者からのコメント

教師の指導を具体的な行動レベルで考えていき、じぶんのできていること・いないことを整理していく必要がある。行動レベルだけでなく、観察の視点・評価の観点など、教師の行動の根拠となるものは何であるかを知り、身につけていくことも大切である。

1. 課題設定

（1）課題

「学級経営における教師の働きかけ・意図的に状況を創り出す授業」

（2）課題設定の理由

当初、この実習の課題を「教師と児童，児童どうしのかかわりの在り方」と設定していた。学級経営を行うにあたって教師が児童のことを知り，児童との信頼関係を築くとともに，学級を構成する教師や児童のかかわり方について考える必要があると考えたからである。そこで，実習校では，まず教師と児童のかかわりや児童どうしのかかわりを観察し，かかわりの生まれる場面やかかわりの実態をとらえ，児童を理解し，信頼関係を築くための具体的なかかわり方についての手がかりを得ようと考えた。

実習に取り組んでいる中で教師と児童，児童どうしのかかわり方を考える場面として授業に着目するようになった。それは，授業が児童の学校生活の大半を占め，教師と児童，児童どうしのかかわりの両方が必然的に生まれる場面だからである。さらに，授業では，あらかじめ授業の目的を明確にして学習場面を計画し，事前に働きかけを想定することができる。しかし，それらのかかわりが必然的に生まれるようにするためには教材の準備や学習活動のさせ方などの学習の場の構成が大切になる。それらの構成の工夫により，意図的にかかわりが生まれたり，必要になったりする状況を創り出す必要がある。そこで授業の中で教師と児童，児童どうしのかかわりが生まれる場を構成する要件を探り，工夫の視点を明らかにするとともに，具体的なかかわり方を理解するために上記の主題を設定した。

2. 今後の計画

授業における場面（準備，導入，発展，まとめなど）を分け，それぞれの具体的なねらいや方法について分析する。またそれぞれの場面で児童に具体的な働きかけを行い，児童の学習に対する意識や学習の中での考えをとらえるようにし，どのようなかかわりが生まれるようにするべきかを考察する。

授業をさせていただくことについては，授業場面での児童とのかかわり方，児童どうしのかかわり方を十分に吟味した上で，担任の先生や窓口になってくださっている先生と相談した上で実施する。

3. 実習校担当者のコメント

その場の状況に応じたかかわりができるようになることが大切だと言われますが，学校教育は意図的計画的な営みですから，子どもの力を発揮したり人間関係を築いたりする場面を設定しておき，そこでの子どもの状況に応じた働きかけをできるようになることが必要ですね。教育実習がそういった経験に発展させられるといいですね。

1. 発見した課題

(1) 「授業をとおしての仲間づくり、クラスづくり」

(2) 課題設定の理由

私は担任になったら、学級を児童にとって楽しく安心できる場所に、自分の本音が出せる場所にし、互いそれを認め合い、一人ひとりが成長できる人間関係をクラスの中につくりたい。そのため、今回の自己課題として授業時間に焦点を当て、子ども同士のかかわり合いを生み出し、そこから本音の言える人間関係や集団づくりをしていくために考えられる、教師の役割や指導のあり方、授業形態の工夫などについて研究したい。

授業時間は学校生活のなかで最も多くの時間を占めている。また、普段はそれぞれの友達とそれぞれの活動をしている児童たちが、ひとつの場所で共通の目的をもって活動する時間である。さらに、授業時間は、それ以外の時間ではかかわることの少ないクラスメイトであっても、自分の思いを伝えたり、友達の思いを聞いたりすることができる場である。そのため、授業を子ども同士が安心して意見交換ができたり、教え合ったりできる場にするのが重要である。授業中のかかわり合いを通して、友達の思いや考えを知り、高め合うことを経験することで、互いに本音が言え、それを尊重しあえる人間関係をつくることのできるのではないか。私はそのような授業を考えていきたい。

また、各教科にはそれぞれ教えるべき内容があり、その習得も重要なことである。そのような教科内容に関しても、子どもの同士のかかわり合いや学び合いが大切な役割を果たしていると考えられる。

2. 課題に取り組むための手立て

- ・授業中における児童への教師のかかわり方と、それに対する児童の反応や学級の変化から、教師のかかわり方の意図と意義を分析する。
- ・授業の中で児童同士がどのようにかかわり合い、学習を広げたり深めたりしているか観察し、そのようなかかわりを生む学習指導の方法について考察する。
- ・授業以外の時間での教師の児童とのかかわりについても同様に分析する。
- ・関連の文献を読む。

3. 実習校担当者のコメント

授業は分かるようになることやできるようになることといった児童が共通の目的を持つことのできる時間です。児童同士が練りあい高めあうこと喜びを、達成感や満足感につながるものだと思います。そのためには、まず、児童がしっかり考え、考えを出し合い、それを検討し合える授業を成立させることが必要です。そのような質の高い授業を実現することが、期待する仲間づくりやクラス作りを可能にする第一歩になるものと思います。

1 課題設定

（1）課題

「課題追究し、自分の言葉で表現する中学校社会科の授業づくり」

（2）課題設定の理由

実習での子どもの実態から、自分の考えを説明する力をさらに身につけていくことの必要性を感じている。特に、中学生にとっては、いきなり「法とは何か」といった抽象的な概念の操作を行うことは大変難しいように思われる。したがって、まず生徒の概念形成の過程で具体と抽象を往復する場（フィードバック）の設定が大切であると考えている。そして、これらのことを生徒同士の学び合いの中で行うことで、より高い意欲や達成感が期待できると思われる。新しい学習指導要領でも「言語活動の充実」をはかることが示されていることを踏まえ、これを具現化した授業を行いたいと考えた。そこで、自分の言葉で表現する中学校社会科の授業づくりという課題とした。

なお、これまでの授業観察を通して、授業そのものと並行してノートの使い方についても検討中である。現段階では、授業での内容をノートに構造図にしてみることで、具体的に歴史的な事象と登場する人物がどのような関係にあるかといった内容を生徒が構造的に捉えることができるのではないかと考えている。また、自分の考えをノートに表出することで、より考えが明確になったり、振り返った際に自分の考えが深まったことを認識したりすることができるのではないかと考えている。

2 今後の計画

6/25 授業実践 1年A組「社会」（地理的分野）

7/ 9 授業実践（未定）

○7月まで

- ・課題発見
- ・発見した課題の分析と検討

○8月以降

- ・課題設定
- ・課題解決のための仮説と課題解決のためのプログラムづくり
- ・課題解決のプログラムにそった課題解決の実行
- ・解決の検証と今後の課題

3 実習校担当者からのコメント

授業の中で生徒同士の学び合い、自分の言葉に表現する場面の設定やその評価の仕方、単元ごとの学習内容の構造化モデルの作成などがキーワードになるでしょう。自分なりの授業スタイルを確立していく中で、生徒の実態をいつも意識しておくということを忘れないうでほしいと思います。

1 現段階での課題

(1)課題

自分の“理想の授業像”にもとづき、教科担任の方針や生徒の実態に合った授業の流れを短時間でイメージした上で、授業計画を立てる力を身につける。また、授業実践で浮かび上がった問題点を改善することができるようにする。

(2)課題設定の理由

今まで、漠然と「楽しい」授業や「わかる」授業をしたいと考えていたが、具体的にそれはどのような授業なのか、どうすればそのような授業になるのかということについて自分の考えをしっかりと持っていないことに気がついた。自分の目指す授業をしっかりとイメージするために、まずはこれまでの観察から得たポイントを整理し、自分の“理想の授業像”を確立することが必要であると考えている。

“理想の授業像”を現実のものにするためには、授業計画を立てる必要がある。しかも、将来現場に出て働くことを考えると、しっかりとした授業計画を短時間で立てられなければならない。そこで、授業の計画をできるだけ多く立ててみて感覚をつかみ、さらに授業を実践できる形にするための予備実験や実験器具の準備などもできるようにしたい。また、それらの作業も効率よく限られた時間に行えるよう、授業計画を立てる時には、あらかじめ準備しておくべきことや器具・試薬の配布の仕方などの細部にわたってしっかりと考えておくことを心がける。

授業計画をしっかりと立てても、やってみてうまくいかないということも多い。その場合、たとえ次の時間に続けて他のクラスで授業をしなければならぬという時でも、少しでも改善して臨むべきであると考えている。したがって、実習では授業実践をする機会があった時には、次に同じ授業を他のクラスでする場合はもちろん、しない場合でも改善した新しい授業計画を立てるようにして常によりよい授業作りに努めたい。

2 今後の計画

6月18日（水）3、4時間目に授業実践を行う。授業では、自分の今できる範囲のことが余裕をもってできるようにしたい。その後の予定については、1回目の出来をふまえて担当の先生と話し合っ決めてたい。観察した授業や教材研究についても、担当の先生ともっと話ができるようにしたい。授業観察を引き続き行い、生徒の活動場面では積極的に関わりを持ち、「楽しい」授業のヒントを得るところから、授業を「楽しい」ものにするような関わり方をしてみるというところへ進んで行きたいと思う。授業外でも、担任の先生の思いを理解し、指導の一貫性を保ちながら生徒とより指導的な関わりに心がけようと思う。もし機会があれば、実践的なことを何でもやってみたい。授業の内外で生徒との関係を築くことに重点を置いて実習に取り組んでいきたいと考えている。

3 実習担当者からのコメント

自分の授業像について、様々な角度から分析を進め、また実際に授業の中で実践が進んでいます。「生徒同士の学び合い」等のポイントにも掲げているように、これからも生徒の目線での分析に心がけ、授業力や生徒理解力等の力をつけていきましょう。

1. 課題設定

(1) 課題

授業を通して学級作りをする。

(2) 課題設定の理由

私は、これまでの教育実習では、すべて小学校高学年の配属であった。今回始めて3年生の配属となり、高学年のときと同じ接し方は3年生には通用しないと感じることが何度もあった。そのことがきっかけで、児童とのかかわりが私にとっての課題だと感じるようになった。その中でも授業という場に注目したのは児童がもっとも長くすごくこの時間は、学級作りをする上で重要であると考えたからである。クラスがお互いに助け合いながら一体となって目標に向かう学級作りに向けて、教室の一番前からクラス全体を平等に見ることが出来る授業の中で何が出来るかを見つけたいと考えている。

2. 課題発見実習の計画

6月中旬～7月中旬 学級経営という視点から授業を観察する。

7月上旬 授業をするときに、児童の考えを交流させる。

3. 大学院教員のアドバイス

学級経営を自分の課題とするならば、授業観察をするとともに、担任の先生から学級経営にかかわるお話を聞かせていただくことが必要だと思います。学級経営の目標や方針等の視点から、授業観察をすることで、先生の働きかけの意図がよりはっきり見えてくると思います。また、通常、授業にはその授業の目標があり、その目標の達成に向けて学習活動を構成し、手立てや配慮点等について検討し、授業が行われます。その中に、学級作りの視点から配慮点等がどのように組み込まれているかは、授業内容によって大きく異なってくると思います。

2) 最終報告会

日 時： 平成 20 年 7 月 23 日（水） 10：00～12：30

場 所： 岡山大学教育学部講義棟 5208 室

発表者： 安藤宏恵

（実習校 岡山市立石井小学校 実習担当大学教員 仲矢明孝教授）

大賀基代

（実習校 岡山市立石井中学校 実習担当大学教員 笠原和彦講師）

岡崎亮人

（実習校 岡山市立岡山中央中学校 実習担当大学教員 笠原和彦講師）

香川真吾

（実習校 岡山市立大野小学校 実習担当大学教員 渡邊淳一准教授）

佐藤典美江

（実習校 岡山市立大野小学校 実習担当大学教員 渡邊淳一准教授）

玉木修治

（実習校 岡山市立三門小学校 実習担当大学教員 山崎光洋講師）

時岡宏行

（実習校 岡山市立三門小学校 実習担当大学教員 山崎光洋講師）

南川由理

（実習校 岡山市立石井中学校 実習担当大学教員 笠原和彦講師）

根山夕佳

（実習校 岡山市立岡山中央中学校 実習担当大学教員 笠原和彦講師）

八木雄治

（実習校 岡山市立石井小学校 実習担当大学教員 仲矢明孝教授）

総 評： 青山順子岡山市総合教育センター室長（教育研究・研修室）

1) 最初の自己課題

クラスのすべての児童が学びやすい授業の在り方
—特別な支援を必要とする児童を視野にいれて—

2) 主な実習体験と自己課題の変化

私の当初の自己課題が特別支援教育を視野にいれていたということもあり、特別支援教育にも力をいれている石井小学校の5年生のクラスで実習させてもらった。このクラスには、常に特別支援員の支援のもとに授業を受けている児童が在籍している。その児童以外にも学力に困難を示す児童がおり、学力において一人ひとり大きな幅のあるクラスである。

しかし、学力においては幅があるものの、クラスの雰囲気はよく、授業中、多くの児童が進んで発言しており、大変積極性がある。また、授業内容の理解に困難を示す児童も、授業中、席について一生懸命授業を受けようとする姿勢が見られる。また、そのような児童に対し、周りの児童が支援をしていくような様子もよく見られる。このようなクラス作りができるのは担任の力量であると思われる。私もこのような技術を学びたいと思い、日々授業観察をしてきた。その中で学んだことの主な内容は、授業のテンポと指示や説明の明瞭さである。不要なことを話さない指示は、児童の思考にも残りやすく分かりやすいものとなっている。

以上のようなことを踏まえ、7月9日、実際にクラスで算数の授業をさせてもらった。しかし、1時間の授業をなんとかこなしたものの、課題は多数見つかった。指示をなるべく短く、わかりやすくしたつもりだったが、話す内容が整理されないまま、自分の伝えたいことが伝わりきらないままになっていた。そして、授業後、板書が整理されたものでなかったことに気づいた。板書は1時間の授業の流れを示すべきものである。また、言葉だけでは聞き取れなかったことも目で見ることによって、指示や説明の内容を正確にとらえることができる。さらに、言葉はすぐに消えてしまうが、板書は残すことができる。クラスの児童には聞いて理解することが苦手なため、大事なことを聞き逃してしまう児童もいる。したがって、視覚に訴えかけることは大変重要な意味を持っている。

これらのことを踏まえ、板書や話し言葉による適切な説明のあり方について検討していくことを自己課題としたい。

3) 「課題解決実習」にむけて

8月後半から5週間、引き続き石井小学校の5年生で実習をさせてもらう。自己課題解決のために、今後も5年の先生の授業の中での、指示や説明の在り方について観察していきたい。機会があれば、5年以外のクラスの先生の授業も見せていただきたい。また、自らも授業を行い、板書を生かしたよりよい説明の在り方を検討していきたい。実習と平行して、文献による情報収集も行っていきたい。

1. 最初の自己課題

「生徒の発言を生かした柔軟な授業づくり」

中学校は教科担任性であるため、同じ授業内容を複数の学級で行うことが予想される。そこで、それぞれの学級の個性や生徒の発言を生かした授業展開を行うことが、生徒にとって分かりやすい授業になるのではないかと考え、自己課題を設定した。

2. 主な実習体験と自己課題の変化

1) 現時点の自己課題

「個人の学習意欲を高める授業づくり」

2) 実習体験を通じた自己課題変化の理由

国語の授業では、生徒自身の感想や意見を求める場面が他教科に比べて多い。授業を観察した中で、正解の答えが一つである時には生徒の挙手が多く、限定されない発問をした時には、いつも決まった生徒が答えているよう場面も多いように感じた。私はこの理由の一つが、生徒の学習意欲にあるのではないかと考えた。個人の学習意欲を高めることで、授業全体の雰囲気も良くなり、活発な意見交換が行われ、自己の考えを深めていけるのだろうと考え、この課題を設定した。そして、個人の学習意欲を高める方法を考える上で、私は授業を導入部・中間部・終末部の3つの部分に分け、授業観察を行った。

導入部では、授業開始直後に「漢字テスト」を行うことが多かった。実際に漢字テストの監督をした時には、テスト直前の勉強時間に出題範囲などを確認する生徒が多く、わずか数分の時間でも、勉強時間を与えられることが学習習慣を身に着けさせることにつながるのだろうと感じた。さらに、漢字テストの採点時には、漢字だけでなく平仮名の書き方も丁寧に指導されており、各回で採点の重視項目を明確にすることで、正しい文字の書き方を生徒たちに指導されていることから、この漢字テストの重要性が感じられた。また、授業始めに本時の目標を板書して生徒に示すことで、生徒たちの思考をスムーズにし、生徒にとって分かりやすい授業ができていると感じた。生徒たちも、今日の授業で何が求められているのかが分かり、何をすればよいか分からずに困っている生徒はほぼいなかった。

中間部では、生徒の注意をひきつける手法や、生徒たちが作業する場面を取り入れていることも多く、授業内容を正確に理解するための教師の力量が発揮される場面となっている。その学習形態については、「班学習」だけでなく教室内を自由に使った私的グループの利用など、様々な工夫もなされていた。

授業の終末部では、各回の授業のまとめ方にも様々な視点と工夫が見られた。授業時間を過不足なく計画し、進行することが理想だが、実際に自分が授業をする場合、構想時に生徒の反応や必要な支援方法などを十分に検討し、様々な工夫を取り入れながら実践していく必要性を感じている。授業時間に余裕がある場合には、プリントやワークなどの補充教材を用意しておかねばならないと感じている。

また、授業を行う上で、それぞれにおける生徒の反応を予測しておかねばならないと考えている。生徒のつまづく場面やノートをする速度などについて授業観察をする中で特に注目し、生徒たちへの支援方法を考え、作業時間を確保し、多くの生徒が落ち着いて授業に取り組めるような配慮をしていきたい。

3. 「課題解決実習」に向けて

9月に行う課題解決実習での指導案やワークシートなどを早い時期から作成し、十分な授業準備をして授業実践に取り組みたいと考えている。また、生徒たちは授業中に発表の機会を多くしてほしいという要望を持っていることを知り、発問数を確保し、一問一答形式だけでなく複数の答えを求める発問も用意し、生徒が意欲的・積極的に取り組めるような授業をしたい。

課題発見実習報告

教職実践専攻 岡崎 亮人

1. 自己課題について

(1)最初の課題

- 「授業」を中心とした学習指導の分析
- 学力・生活態度等の評価についての分析
- 部活指導と学級・授業経営の関連についての分析
- 教員として心がけることについての分析

(2)現在の自己課題

- ① 学習指導の分析・実践（板書とノートの取り方を中心に）
- ② 生徒同士の人間関係と学級経営の分析・実践
- ③ 同僚性と教師間の役割分担についての分析・実践
- ④ 学校と部活動の関わりについての分析と支援（野球部を中心に）

2. 主な実習体験と自己課題の変化

- ①について…毎週、国語2時間、道徳1時間の授業分析と国語1時間、道徳2時間の授業実践を通して、学習した結果の整理や学習のプロセスのふり返りのできるノートを中心とした授業記録とそれに関わる板書に重要性を感じた。生徒の学習活動の中でのそれらノートや板書の意味を問い、授業実践の中で考察を深めていきたいと考えている。
- ②について…授業中に机に伏せる生徒や立ち歩く生徒、クラスに無関心な生徒や生徒同士のトラブル等に関わったり、個別の懇談や生活ノートの観察をしたりすることを通して、生徒同士の人間関係や家庭で受けるストレス等の生徒の抱える問題にせまる必要性を感じた。個人の中にある問題やクラスの中にある問題、対人関係等を共感的に理解しようとし、学級経営の中で生徒を支援をすることとした。
- ③について…様々な考えをもつ教員集団の中で、それぞれの思いや考えをくみ取りながら、自分はそのような役割で生徒に関わることができるかについて考えていきたい。クラス担任や教科担任だけでは支えきれない生徒たちの成長を学校全体で支援するためには何が必要で、どのような手段が有効なのか。一年一年が勝負の現場で、自分には、この学校には何ができるかを分析し、それに基づいて実践することとした。
- ④について…部活動に参加する中で、公立学校の抱える様々な問題を目の当たりにした。人手不足、環境整備、指導方針、技術指導の難しさ、生徒への教育的配慮等、指導者の立場で多くの課題に向き合うことで自分なりの指導の観点を構築することとした。

3. 「課題解決実習」に向けて

ひとりの教師として現場に臨みたい。自分が一人ひとりの生徒の人生の一部を背負っているという責任をもって取り組みたい。大きな行事も控えており、教師と生徒、生徒と生徒の関係も深まる時期だからこそできる関わりを大切にしたいと思う。一瞬一瞬が輝き、全員が明日に希望を持てるような毎日を実習校の先生方と共につくり、一年を終えて、このクラスでこの学校で良かったと笑って言えるような時間を共有することを目標としたい。

課題発見実習報告

教職実践専攻 香川 真吾

(1) 最初の自己課題

「教師として自分にしかできない言葉かけ」

(2) 自己課題の変化

課題発見実習を通して、学校生活（朝の時間、休憩中、授業、給食、放課後など）はどの時間帯においても学級経営に関連する場であることを再確認した。また、その中でも授業が時間的に占める割合が多いことから、授業の中での言葉かけが学級経営に与える影響の大きさを実感した。そして、実習での様々な課題（児童へのほめ方、しかり方など）について大学で省察し、児童に対する言葉かけは適切なタイミングやその場にあった言葉選びが重要であると考えた。これらを踏まえ、中間報告会以降の課題を「教師として適切なタイミングで適切な言葉をかける」とした。

中間報告会以降では新たな自己課題をさらに深めていくために、朝の会や授業の支援、自習学級の指導など、実際に児童たちの前に立って言葉をかける機会をいただいた。これらの場における自分の言葉かけについて省察した結果、さらに細かい課題として児童一人一人に対する言葉遣いと学級全体に対する言葉遣いの差が大いと感じたことや、自分の中で適切な言葉（その場に合った正しい言葉や言葉遣い）を常に言わなければならないと意識するあまり、人間味にかける言葉も並べていた。今後は、もっと自分の内面を出し、自分の心から湧き出てくる言葉をかけていく必要がある。

(3) 課題解決実習に向けて

- ・私はどの児童も相手の立場に立つことの出来る学級、いつもだれかに支えられていることがわかる子ども育てたいという願いを持っている。課題発見実習ではこの願いを表面に出すことが出来ていないので、課題解決実習でこの願いを言動として表せるようにしたい。
- ・9月初めに算数の授業をさせていただけることになった。この授業では適切なタイミングで適切な言葉をかけるために、児童の実態をこれまで以上に把握していく必要がある。また、私自身が学習指導要領にある各学年の目標をよく理解して、育てるべき児童の姿も捉えておかななければならない。こうして、児童の実態と育てるべき児童の姿の差から、それぞれの児童に合った言葉かけについて深く考えていきたい。

1. 課題設定

(1) 課題

「教師と児童との信頼関係を築く授業実践」

(2) 主な実習内容と課題の変化

最初は漠然とした課題しか持っていなかったが、実習を通して、児童にとって居場所がある・楽しいと感じられる学級をつくるために、まず教師と児童の信頼関係づくりに焦点を当て、特に学校生活の大半を占める授業について自分の力量を高めていきたいという課題をもつようになった。

そのような観点で実習に取り組んでいると、ある児童が、入学当時は授業中よく叱られていたが、一方でよいところを見つけられ先生からほめられていく中で、何がよくて何がしてはいけないことを学んでいっていることに気づいた。そして、きちんと自分を評価してもらえることで、その先生を信頼しているようであった。他の児童も同様で、自分たちをしっかりと見てくれている、きちんと評価、指導してくれると感じ、先生に信頼を寄せている。小学校生徒指導資料1（1964）にも、「学級担任の教師の温かい言葉や態度は、児童に安心感を持たせ、それが学級担任への信頼感につながっていくのである。」と書かれており、授業内で児童をしっかりと見て、いいところとよくないところをきちんと評価し指導していくことの積み重ねが、児童の成長にとって大切であるだけでなく、児童との信頼関係を築いていく上でも重要な鍵であることが分かってきた。

ところが、「児童をしっかりと見る」といっても、今私は一人一人や一人とその周りの範囲をそれぞれ見ているにすぎず、担任の先生のように全体を見渡しながらも個々を見、出来ているところやつまずきを察知するといった見方がまだ難しい。「きちんと評価する」ことも、ただよいところを見つけてほめることはできるが、結果だけでなく頑張っただ過程に目を向けたり、褒めてほしいところを褒めてほしいときに褒めるといったタイミングを考慮したりする力量は、まだまだ不足している。よくないところを指導する場合も同様である。そこで、それらの点に配慮しながら、教師と児童との信頼関係をはぐくむ授業をすることができる実践力を身につけていきたい。

2. 課題解決実習に向けて

課題解決実習では、授業に臨むにあたって児童との関係づくりのために、授業や休み時間における観察・実践を引き続き行う。関係づくりの実践について、大学院での実習反省（「課題発見実習Ⅰ」）では、叱ってでも絶対に指導しなければならない基準を明確にし、判断がブレたりしないようにすることが重要であると指摘があった。あらかじめ児童全員と約束を作っておき、それに基づいて指導するようにするとよいと評価を受けたので、関係づくりにおいてこの点も重点的に取り組みたい。

授業も何回か行わせていただく。今計画しているのは2回であるが、担任の先生との都合が合えばさらにさせていただきたい。その間に自分の行った授業を省察・改善して、より課題に迫る授業をしたいと考えている。

1 最初の自己課題

「教師と児童，児童どうしのかかわりの在り方」

課題設定前には教師として児童にどのように接し，働き掛ければよいのかが曖昧で，児童とかかわることにあまり自信を持ってないでいた。そのため，まず，教師の児童へのかかわり方や，児童どうしのかかわりの状況を日常の中で観察し，理解することが必要であると考えた。そして，授業や生活の様々な場面で児童の状況をとらえ，毅然とした態度で褒める・叱るなどして児童を認め，学習指導や生徒指導が行えるようになりたいと考えた。

2 主な実習体験と自己課題の変化

「同僚として認められる存在へ」

実習を通して感じたことは，児童どうしのかかわりや児童へのかかわり方を理解するためには，教職員の児童への思いや願いをとらえることが必要であるということである。学校組織は教職員という集団で動いている。児童一人ひとりに合った教育を実践するために，教職員が育てたい児童について共通理解し協働して取り組んでいる。学校教育の中で，自信をもって児童とかかわるためには，教職員の一人，つまり，同僚として認められ，同じ方向性をもって児童を指導できる教師になることが必要である。実習を重ねるうちに，多くの先生方から声を掛けていただいたり，授業で使用する学習プリントの印刷や地域協働に関する仕事などを他の先生方から少しずつ任せていただいたりするようになってきた。自己課題を設定しそれに取り組む以前の段階として，教師として大切な視点を与えていただいたと実感している。

「観察から支援への転換」

教師の児童へのかかわり方や児童どうしのかかわりの状況をとらえるために，授業場面を中心に教材の提示方法や教師の発問，児童の学習の様子等を記録し，授業後に必要に応じて指導の意図や方法について尋ねるようにした。しかし，実習が進むにつれて，児童に適切にかかわったり，児童どうしのかかわりを生かしたりするためには，児童に積極的にかかわり，自らの接し方や働き掛け方に対する児童の反応から直接学ぶ必要があると感じるようになった。そのため，学習の中での個別支援や水泳指導，朝のあいさつ運動，三門タイムなどといった多様な場面で児童と直接かかわる機会を大切に，自ら積極的に働き掛け児童との関係を築くよう心がけた。しかし，児童に適切にかかわったり児童どうしのかかわりを生かしたりするためには，その場の状況に対応したかかわりだけでは十分でなく，自分の考えや意志が伝わるようにかかわったり，伝えるための状況をつくり出したりする必要があると考えようになった。

3 課題解決実習に向けて

課題解決実習では，連続して児童とかかわることができる。また，授業を実施して，授業の中で主体的に児童とかかわったり，児童どうしのかかわりを生かしたりすることができる。そこで，日々の生活の中で児童の状況をとらえて学習活動の中での児童の姿を描き，学習の展開を想定して事前に指示や発問，個別の児童への支援などを考えて具体的なかかわりを準備しておくようにし，実際の授業の中での児童の反応を通して，自分の考えや意志が伝わっているか，伝えるための状況が適切であったかを評価したいと考えている。そのために，大学の授業で学んだことを基に，学習の中で児童の状況をとらえる方法，意図を明確にした指示や発問，児童への支援などの指導方法について，整理しておきたいと考えている。

1 最初の自己課題

「授業を通しての仲間づくり，集団づくり」

授業の中で，児童同士の触れ合いや意見交換などのかかわり合いをもたせることを通して，仲間づくり，集団づくりをしていくためには，どのような活動を授業の中に取り入れ，教師がどのような支援をすべきかを探り，実践できるようにする。

2 主な実習体験と自己課題の変化

(はじめに取り組んだことと取り組みの結果学んだこと)

- ・授業における教師の進め方や児童へのかかわり方と，それらに対する児童の反応や変化から，教師のかかわりの意図と意義を考察する。
- ・授業の中で，児童同士がどのようにかかわり合い，学習を広げたり深めたりしているかを観察し，そのようなかかわりを生む学習指導方法について考察する。
- ・授業以外の時間での教師の児童とのかかわりについても同様に観察し，考察する。
- ・観察した児童へのかかわり方を参考にして，児童を知り学級に受け入れられるよう取り組む。

学習指導や生徒指導には，その先生だからできるスタイルがあること，また，その時々児童の状況によって，同じかかわり方をしていても結果が違ってくることが分かった。そのため，担任教師と同じことをするだけでなく，今の自分にできるかかわり方を見つける必要を感じた。しかし，実習を進めていくうちに，課題をこなしたり新たな課題を見つけたりという自分の立場で児童とかかわっていることに気付いた。自分の考える「先生」のかかわりを意識し過ぎるあまり児童が見えなくなっていた。そのため，児童が今の自分に何を求めているのか，児童にとって何が必要なのかという児童の視点からのかかわり方を考え，もう一度児童との関係をつくりなおそうと思った。

実習校では，学級での実習をはじめ，学校行事の準備をしたり地域協働学校運営協議会等の様々な会議や研修に同席したりする機会を与えていただき，これまでの実習では経験できなかった仕事を知ることができる。これらは，安心して実習に取り組むことのできるよう気遣っていただいているからできる経験であり，教職員の一員として役に立てるよう取り組む必要があると感じた。

(新たに生まれた課題と課題への取り組み)

- ・児童の視点から自分の行動やかかわりを考え，児童との信頼関係をつくる。
- ・実習校の教職員の一員として役に立てるよう取り組む。

児童が自分に求めていることをとらえるために，「一人一人の名前を呼んで声をかけたり顔を見て話をしたりする」「今までかかわることの少なかった児童に，作業や活動を一緒にする機会を見つけて触れ合うようにする」，また，教職員の一員として少しでも役に立てるよう「自分にもできる仕事を探し，積極的に行動する」ことに心がけて実習に取り組むようにした。

その結果，児童と一緒に活動することを通して，児童の新しい一面を発見したり，児童の頑張りやよさを一人一人の普段の様子や性格に合わせて内容や言葉，また時と場所を選んで伝える必要性を感じたりすることができた。また，大学院の授業で学んだ発達段階に応じた児童へのかかわり方や，教職員の人間関係を大切にしたい学校組織を実感することもできた。

3 課題解決実習に向けて

- ・授業の中で，児童の視点から進め方，かかわり方を考え，児童との信頼関係をつくる。
- ・班学習や教え合いなど児童がかかわり合う場面を取り入れた学習指導を考え，実践できるようにする。

仲間づくりや集団づくりという観点で授業を考えるためには，まず，児童の視点から授業を考え，教師の児童へのかかわり方や児童がかかわり合う場面を検討する必要がある。そのためには，児童が自分の力を発揮し，それを認め合ったり高め合ったりできるような授業を構成する必要があり，児童の実態を基に，そのような授業にできるよう教材研究などの準備を進めたい。

課題発見実習報告

教職実践専攻 南川 由理

(1) 最初の自己課題

私は、最初の自己課題を「学びのある授業をどうつくるか」として設定した。これは、短期間ではあるが、1年間実際に現場を経験し、授業の質の向上がいわゆる教師の専門性の一つであると実感したからである。そこで、具体的には授業構造や授業の流れ、発問の作り方、生徒の反応と教師の対応に着目して授業観察することを試みた。そして、実際に授業を実践し、生徒の反応や先生方のアドバイスなどを参考にして自分の授業分析を行った。

(2) 主な実習体験と自己課題の変化

現在の自己課題：『課題追究し、自分の言葉で表現し合う中学校「社会」の授業づくり』

授業観察では、主に生徒同士の学び合いの場に注目して観察した。地球儀を用いた班活動の場面では、生徒同士が互いに教えたり、教わったりする様子が見られた。共同で作業する場を設定することで、生徒の意欲を喚起したり、理解を促したりしていることが伺えた。また、別の授業では、教師の発問に対して一人の生徒が発言するといった教師と生徒の一对一のやりとりもみられたが、教師の発問に対して生徒が意見を出し、さらにその意見に対して新たな生徒の意見が表出されるような場面もみられた。私は、このような場面を設定することによって、学級の仲間の意見から一人の生徒では考えることのできなかつた考えをもつことが可能になると考えた。特に、社会科の目標にもある、多面的・多角的な考察をしていく上では、生徒同士の学び合いの場を設けることが授業での重要な要素になると考えた。生徒の現状を踏まえても、もっと自分の考えを説明したり、相手の話しを取り入れて考えたりする活動を取り入れる必要性を実感している。このことは、新しい学習指導要領で言語活動の充実を図ることが示されている点にも矛盾しないと思われる。そこで、これらの授業分析を踏まえて、以下の2つの授業実践を試みた。

- ・世界の地域や国の名称と位置
- ・うなぎの偽装

2つの授業では、共通して班活動を取り入れた。特に、うなぎの偽装を取り扱った授業では、「なぜ、うなぎの偽装がこれほど社会問題化するのか」と投げかけて個人で考える時間をとり、班で意見を出しあってから全体で発表するようにすることで、全員が意見を表出しやすいように思われた。発表では、買う側の立場や売る側の立場で考えた生徒から多様な意見が出され、生徒の感想からは、「みんなで話し合いをしながら自分の考えとはちょっとちがう考えをもっている人もいるので深く分かる」、「ニュースを新しい視点でみることができた」等の意見がみられた。ただし、「もっと発表したかった」、「もう少しゆっくり言ってほしい」との意見等もあり、これらの生徒の思いを今後の授業で生かしていきたいと考えている。2つの授業実践を通して、自己の課題をより具体的なものにすることができた。

(3) 「課題解決実習」に向けて

課題解決実習では、授業での実践を積み重ねながら、具体的にどのような発問の仕方が生徒の意見を引き出しやすいのか（例えば、「なぜ、うなぎの偽装がこれほど社会問題化するのか」では現象を捉えた発問であるのに対し、「なぜ、偽装したのか」では行為を捉えた発問である）、生徒の思考の流れをどのように生かしていくのか等について分析していく。そのためにも、今後もノートの記述を含めて、生徒の反応を分析し、生徒の興味・関心や既知度をはかりながら授業研究を行っていきたいと考えている。

1. 最初の自己課題

楽しくて「わかる」授業づくり。

2. 主な実習体験と自己課題の変化

◇最終的な自己課題

生徒が意欲的に取り組めて「わかる」授業を計画し、生徒に寄り添いながら授業を進めていくことができるようにする。

6月18日(水)に授業実践を行い、計画通りに授業を進めることの難しさを実感した。中間報告の時点で課題に挙げていた「理想の授業像を確立し、授業計画を短時間で作り、実践した授業を改善すること」はもちろん重要なポイントであり、当然できるようにならないといけないと思う。しかし、その上で実際の授業をうまく進めていくことができなければ意味がない。私は、朝の会・帰りの会で生徒たちに話をした時、いざ生徒たちの前に立つと思っていたように振る舞えなかった。授業においても自信をもって自然に振る舞えないと感じることも多く、その理由は私に「思い切りのよさ」やいい意味での「開き直り」といった「柔軟性」が欠けているからであると思っていた。大学院の先生方からのアドバイスを受けて、授業場面での「柔軟性」は、生徒たちの前で授業や話をしている自分の姿や行動、その時の生徒たちの反応をしっかりとイメージした緻密な計画があつてこそ生まれるものだと教わった。今回の授業実践では、たくさんの時間をかけてしっかりと計画も準備もできていたつもりであったが、本番でうまくいかなかった部分については教師の理想に重点を置きすぎて、生徒の実態を無視した計画になっていたことが問題であったと考えられる。

その後、再び教師の発問や行動に着目して授業観察を行う中で、授業全体のストーリー（前時とのつながりやその授業に出てくる話題と話題のつながり）がしっかりしていること、生徒の変化を見極め適切なタイミングで声をかけることなどを挙げることに加え、教師が生徒に寄り添って授業を進めていくということの重要性を感じた。そのためには、生徒ともっと関わって、つながりを深めていくことが大切であると思う。朝の会や帰りの会での話についても、生徒の実態や今の状況に合った話題を選択し、生徒に伝わるように話すために日頃から生徒とよく関わることは必要である。実際、私はいつも自分の振る舞い（指導、声かけなど）の正しさや効果を考えてしまい、生徒になかなか積極的に関わっていくことができていない。生徒に対する「思い」はあるけれど、それは何らかの形で示さなければ生徒には決して伝わらない。教師の「思い」は言葉だけでなく教師の態度や行動によっても表されるものであるし、それを伝える機会は授業や朝の会、休憩時間など学校生活の様々な場面にある。生徒にわかりやすく、心に響くように伝えるために色々な工夫をすることはもちろん大切であるが、その正しさや効果にこだわりすぎて何もしないよりも、教師も思ったことを素直に口に出したり、とりとめのない話をしたりすることも必要であると現場で実際に生徒と関わる中で実感した。

大学院の講義で、人間関係ができていると仕事に対する意欲が高まるという研究結果を見た。生徒の学習意欲に関しても同じことが言えると思う。教師が生徒とのつながりを深めること、さらに生徒同士のつながりを深めること（学級経営）は、授業をよりよく進めていくためにも、生徒の学習意欲を高めるためにも重要であり、今後、授業づくりと平行して取り組んでいきたい。

3. 「課題解決実習」に向けて

課題解決実習では、授業観察と授業実践、生徒との関わり（授業、授業外、学校行事等）を中心に取り組み、担当の先生やそれ以外の先生とも積極的に関わって、アドバイスをいただいたり様々な仕事をさせていただく中で自分の力をつけていきたいと考えている。

1. 最初の課題

「授業力の向上」

私は大学院を卒業しているときには、教師として即戦力のレベルでありたいと思っている。そのためには何が必要かと考えた結果、当時は「授業力の向上」ではないかと思った。毎日の授業の質を高いものとする中で、教師の役割を果たそうとしていた。

2. 主な実習体験と自己課題の変化

<4～5月>

私は先生というよりは児童にとってお兄さんのような存在だった。児童にとってはいい遊び相手だったようだが、教師に必要な「頼もしさ」はなかった。児童同士のトラブルが起こったときには、児童の気持ちを大切にしたいということから受容的な態度をとってきた。しかし、あまい人という印象を与えてしまい、いつまでたってもお兄ちゃんであった。このように対応はうまくできず、児童を納得させてトラブルを解決することができなかった。このころから課題は児童とのかかわりではないかと変わり始めた。

<6～7月>

前半は児童の間で困ったことがあると自分の力ですべて解決しようとした。しかし、児童同士で助け合いスムーズにトラブルが解決する様子を見て、私が何もかもするのはなく児童が支え合っていく方がよいのではないかと考えた。この頃から学級作りをしていきたいと思うようになった。私自身も児童への接し方を①受容的に接する。②毅然とした態度で接する。③児童に任せる。④待つ、といったやり方を試してみた。

<自己課題の変化>

この4ヶ月の実習を経験して、「学級経営の視点での授業観察と授業実践をする。」という課題を設定した。授業が大切だという気持ちは変わっていないが、今私に必要なことは授業をよりよいものとするために学級を一つにまとめることだと感じた。その手段として、時間が長く、教師が学級全体を平等にみることのできる授業に着目してみた。授業で同じ目標に向かうことで学級の一体感を強めたい。

7月2日に国語の授業実践をさせていただいた。スムーズに授業を進めることがいかに難しいかということに改めて感じた。授業を進めることで精一杯であり学級で考えを交流させるという余裕はなかった。また、児童理解が足りないと感じた。指導案を作る段階で、この発問をしたらどの児童がどのような反応をするかなど全く頭に浮かんでこなかった。課題解決実習ではそれができるように一人一人の児童を理解した上で授業をしたい。

3. 「課題解決実習」に向けて

9月からの実習では、学級経営の視点で授業の観察・実践をしていきたい。そのために「学級経営の視点での授業とは何か」ということを、よりしっかりと把握する必要があると考える。

また、体育指導を中心と考えている私にとっては、運動会の時期にしか学べないことがあると思う。体育主任の先生のリーダーシップや先生方の動き、この時期の児童の様子をしっかりと観察したい。

【総評 : 青山順子岡山市総合教育センター室長（教育研究・研修室）】

失礼いたします。本日は大変お忙しい中、課題発見実習報告会を開催していただきまして、岡山大学教職大学院の関係者の皆様方に厚くお礼を申し上げます。本年度開校された教職大学院には岡山市の現職教員も何名かお世話になっております。ありがとうございます。この教員が研修を終えて学校に帰って参りまして、研修の中で得た最新の知識や技術、それらを習得して各学校で中心的教員として指導力を発揮してくれることを大いに期待しているところでございます。

今日の課題発見実習報告を聞いておりまして、先程も申しましたが、院生の皆様のやる気と熱気を感じ、それから実習で学校に行かれた際には、学校の様子や各先生方の取り組みを非常によく観察をして、分析をされていらっしゃることに感心いたしました。また、そのことを1枚の紙にまとめており、3枚も4枚も書くのは割と簡単なものですが、この1枚にまとめるという作業は本当に難しかったことと思います。この辺りでも、皆さんの努力を感じさせていただきました。

今後に向けてですけれども、実習の中でたくさん課題が見つかったのではないかと思います。今日は一つということで整理をしていこうと努力されていらっしゃるかもしれませんが、このたくさん課題が見つかったときに「これが課題だな」と思うところで止まらないで、「こうしたらこうなるのではないか」という見通しを、文献から離れて、持っていただけたらと思います。

私は岡山市の総合教育センターというところにおります。石井小に来られている院生もいらっしゃるんですが、石井小学校の一番奥の校舎の3階にひっそりと岡山市の総合教育センターがあります。市内の教職員の先生方に教職員研修を提供しております。その中に新任者研修というものがございます。初めて先生として採用された方々が受ける最初の1年間の研修、初任者研修を担当している部署でもございます。毎年、初任者が希望を持ってそれぞれの学校に着任し、初任者研修にもやってくるし、学校でも研修をしながら一生懸命頑張っているところなのですが、どの初任者も本当に大変な苦勞をしています。学級の中に発達障害の子どもがたくさんいるとか、保護者の対応、それから何十人という子ども一人一人への対応、また職員室での同僚とのコミュニケーションなど、本当にたくさんのことで苦勞をしていらっしゃいます。それらは理論研究の枠の中には入らないようなものばかりです。そういう紙の上で、本の中で出会ったことからはみ出たことに対して、毎日待たなしの状態に対応していかないといけない。そういう現実には、初任者になった日から着手していくわけでございます。いわゆる学習指導要領が、児童、生徒につけて欲しいといっている「生きる力」が先生たちにも求められているのではないかと思います。

人としての常識の部分もございます。例えば給食の食器を返すとき、食器にご飯を一粒もつけないで返すようなクラスもあれば、たくさんついたままで、もちろん先生もそのまま返すクラスもあつたりします。着任したら、そういうところから実践が始まるわけです。たくさんの知識をもっている、知識だけで対応していきける毎日ではありません。その持っている知識をいかに使っていくかの判断力や思考力、実践力などが求められます。

そういう意味で、教職大学院で実践されていらっしゃる、学校に実際に出向いて行って教育活動全般にわたって参画し、体験し、そして研修していく、そういう実習を重視されていらっ

しゃるということは、まさに日々刻々と変化している教育現場の実態に合った研修で、受講者の皆様の資質の向上になる成果をあげることになるのではないかと想像しております。大変意義のあることだと思っております。学校と大学、それから教育委員会、そういうものが連携し、教職大学院の在り方について意見交換をさせていただきながら、一緒に勉強していくことで、子どもたちのためによりよい教育が出てくることにつながっていけばと思います。

今日発表をなさった教職大学院の皆様、とても緊張されたのではないかと思います。後ろから見ていると非常に堂々たるもので、様々な質問や意見にも間髪入れず答えられていました。まだ始まったばかりですが、大学のときの教育実習から一步も二歩も経て、実践の場で、本当に自分が何をつかみたいのか、何がしたいのか、どうすることが子どもにとっていいのか、上手くできた自分をイメージするのではなくて、子どもの必要、子どもにとって今一番何が大事なのかということを考えながら実習をしていただけたらと思っております。長々と申しましたが、これからもどうぞよろしくお願いいたします。本日はありがとうございました。

3. 課題解決実習報告会

日 時： 平成 20 年 10 月 8 日（水） 13：00～15：00

場 所： 岡山大学自然科学研究科棟大会議室

発表者： 安藤宏恵

（実習校 岡山市立石井小学校 実習担当大学教員 仲矢明孝教授）

大賀基代

（実習校 岡山市立石井中学校 実習担当大学教員 笠原和彦講師）

岡崎亮人

（実習校 岡山市立岡山中央中学校 実習担当大学教員 笠原和彦講師）

香川真吾

（実習校 岡山市立大野小学校 実習担当大学教員 渡邊淳一准教授）

佐藤典美江

（実習校 岡山市立大野小学校 実習担当大学教員 渡邊淳一准教授）

玉木修治

（実習校 岡山市立三門小学校 実習担当大学教員 山崎光洋講師）

時岡宏行

（実習校 岡山市立三門小学校 実習担当大学教員 山崎光洋講師）

南川由理

（実習校 岡山市立石井中学校 実習担当大学教員 笠原和彦講師）

根山夕佳

（実習校 岡山市立岡山中央中学校 実習担当大学教員 笠原和彦講師）

八木雄治

（実習校 岡山市立石井小学校 実習担当大学教員 仲矢明孝教授）

総 評： 清廣玲子岡山市教育委員会指導課課長補佐

課題解決実習報告

教職実践専攻 22420075 安藤 宏恵
実習校 岡山市立石井小学校
実習校担当大学教員 仲矢 明孝

1 課題

「授業における板書や話し言葉による適切な説明の在り方」

2 課題設定の理由

課題発見実習での授業実践に関わる課題として、指示内容及び板書の整理ができていないことに気付いた。したがって、1時間の授業での板書、授業中での適切な説明の在り方を課題とし、取り組むことにした。

3 取組の概要及び成果と課題

○取組みの概要—授業実践（国語・算数・体育）

●板書について

課題発見実習では特に板書に重点を置くことなく授業を行った。その結果、自分が発した言葉をそのまま文字に表すだけという、整理されていない板書となった。したがって課題解決実習では、1時間の授業の流れがわかるような板書、チョークの色を白、黄色だけにしぼり、見やすく分かりやすい板書になるよう意識して取り組んだ。しかし、今回の実習でまた新たな課題が見つかった。

まず板書は、字の大きさや書く位置も意識するべきであった。今回の授業実践では、字が大き過ぎて改行の位置が曖昧になったり、重要な情報が黒板の一番下に位置し、児童からは見えにくかったりした。また、字が大きいくことで行間もせまく、分かりにくい板書となった。行間についての配慮の必要性にも気付くことができた。

また、書くタイミングも意識すべきことがわかった。児童の中には、教師が板書を書き始めると同時にノートに書き写す児童もいれば、こちらが指示するまで書かない児童もあり、児童によって板書を写すスピードに差ができていた。その上、指導者のタイミングで板書を加え続けた結果、書き写すのが遅い児童にさらに負担をかける結果となり、すでに書き写していた児童も気の緩む場面が何度か見られた。指導者が板書を書くタイミング、児童が書き写すタイミングなどに配慮することが新たな課題となった。

●指示について

指示、説明についてはなるべく簡潔に短い文章で、抽象語を少なくして具体的に伝えることを意識した。しかし、指示においても新たな課題が見つかった。

まず、板書を意識するあまり、言葉での指示、説明が十分意識できていなかった。板書が多くなり、児童がノートを書き写す負担も増えた。その結果、書き写すのが遅い児童においては、十分な時間が確保できず、ノートをとりながら教師の話聞くことになった。指示を出す際には、まず児童の作業をいったん止めて、説明するという意識をすべきだと思った。

また、国語や算数では話し合いのような学習活動、体育では様々な実技を指示した。その際、時間を決めるといった具体的な指示を心がけるべきだと思った。児童の中には、「いつまでやればいいのか」と不安に思った児童もいたと思われる。児童に見通しを持たすためにも、具体的なゴールを提示することが必要だと感じた。

課題解決実習報告

教職実践専攻 22420078 大賀 基代

実習校 岡山市立石井中学校

実習校担当大学教員 笠原 和彦

1 課題

「個人の学習意欲を高める授業づくり」

2 課題設定の理由

学習指導要領の中には、国語の学習目標として「国語を尊重する態度の育成」が挙げられている。そのためにはまず、生徒が意欲的に授業に参加しようとするのが重要であると考えた。しっかりとした教材観の学習や授業の流れ、工夫も大切である。一方で、授業中に生徒を積極的に称揚したり、日々の生活の中で生徒と積極的に会話することが、これら意欲を高めるために重要ではないかと考えた。

3 取組の概要及び成果と課題

9月に実習が行われ、実習校で「四つ葉祭」という大きな行事がある時期と重なった。時間割の変更などもあったが、生徒の様々な活動に参加することができた。中学時代の部活動経験を生かし、生徒への助言や活動を行いながら、生徒たちと関わる時間が多くもてたと感じている。活動の中で、生徒間での小さな衝突やいさかいなどに実際に触れることがあったが、当事者の生徒たちの話を聞き、途中で担任の先生にも入っていただきながら、生徒たちが活動に戻るまで寄り添うことができた。

課題解決実習では、2年生および3年生のクラスで計10時間の授業実践を行うことができた。複数のクラスで授業したが、同じ教材を扱った授業でも、配属クラスとその他のクラスとでは生徒の挙手の様子や机間指導での関わりで違いがあった。部活動や行事準備などで関わる機会の多かった生徒は、授業でも積極的に発言・質問し、本年度はこれまで発表したことがなかった生徒の举手発表も見られた。休憩時間などでも称揚することで、会話も生まれ、生徒とのよりよい循環が生まれたように思う。廊下での挨拶といった授業外の時間でも生徒とのコミュニケーションを積極的に行うことが、生徒の学習意欲向上や積極的な発表につながっており、今後、教員となった場合にもこのような時間を大切にしていかなければならないことを学ぶことができた。

本実習では行事との関連で時間割変更も多く、授業時間がなかなか確保できない中、教科担当の先生方から示唆の多い指導を受けることができた。自分が意識したことは生徒の学習意欲を高めることだったが、自分の授業力の未熟さを知り、より基本的な事柄についての指摘を受けた。特に国語科教員として、授業中の言葉遣いに注意するよう指摘された。岡山県の方言は比較的標準語の抑揚に近く、これから社会に出て行くためには標準語の発音を意識する必要があることを今後も心にとどめておこうと考えている。また、授業の導入部においては一問一答形式の発問を取り入れ、生徒が発表しやすい環境づくりを意識してみたが、発問数が多すぎてかえって授業の流れが悪くなってしまうこともあった。展開部では生徒たちが作業・相談する時間を設け、机間指導も多く取り入れたが、場面ごとの切り替えができるよう授業規律について十分な指導が必要であると感じている。大学院の授業で学んだことを生かして、生徒にとって身近な歌の歌詞を補助教材のプリントとして作成し利用することで、生徒の興味関心を喚起し、学習意欲向上につながるということも実証できたと感じている。

今回の実習では、様々な活動を通して先生方や生徒、保護者の方々と関わるすることができた。授業を行うにあたり、多くの人とのコミュニケーションを生かして生徒が意欲的に参加できる授業を目指していきたい。

課題解決実習報告

教職実践専攻 22420079 岡崎 亮人
実習校 岡山市立岡山中央中学校
実習校担当大学教員 笠原 和彦

1 課題

- ① 授業記録を中心とした授業実践のあり方の分析と実践
- ② 集団指導と学級・学年経営についての分析と実践
- ③ 教師集団の連携についての分析

2 課題設定の理由

①について…授業分析と授業実践を通して、学習結果の整理や学習のプロセスのふり返りのできる授業記録とそれに関わる板書に重要性を感じた。生徒の学習活動の中でのノートや板書の意味を問い、授業実践の中で考察を深めていきたいと考えたからである。

②について…生徒同士のトラブルに関わり、個別の懇談や生活ノートの観察などを通して、生徒同士の人間関係や生徒の抱える問題にせまる必要性を感じた。生徒個人の問題やクラスの中にある問題、対人関係等を共感的に理解しようとし、集団の中で生徒を支援したいと考えたからである。

③について…クラス担任や教科担任だけでは支えきれない生徒たちの成長や変化を学校全体で支援するためには何が必要で、どのような手段が有効なのか。一年一年が勝負の現場で、自分にはこの学校で何ができるかを分析し、それに基づいて実践したいと考えたからである。

3 取組の概要及び成果と課題

1 単元6時間（2年生3クラス）の授業実践を通して、ワークシートを活用した授業の在り方を考えた。ワークシートを活用することで、生徒が授業の進捗を確認でき、板書と対応した授業の展開、活動の明確化を図ることができた。しかし、生徒自身がノートを作る力の保証やシートの保存方法、評価の仕方など多くの課題が残った。今後の実践と研究の中で解決していきたい。

また、話し合いを中心とした班活動を取り入れ、言語能力の向上を視野に入れた学び合いを実践し、まとめの時間を確保することで学習の振り返りができるようにした。班活動を通して、生徒たちは他の生徒の考えを聞き、自分の考えを発表することで、新たな発見や思考の深まりを感じることができたようである。生徒同士で学び合う習慣が、授業外での活動にも影響し、集団意識の向上にもつながっていることを実感できた。しかし、班やクラスによっては活動が難しい場面もあり、生徒それぞれが自分の役割を考えながら実践できる環境作りや活動の明確化の必要性を感じた。教師と生徒、生徒と生徒の信頼関係作りから授業へ。その方策を模索しながら、今後も生徒たちの中で実践していきたい。

今回、体育大会、文化祭に準備から関わる中で、学級を中心とした学校行事の重要性、必要性を実感することができた。まず、授業中心の毎日の学校生活ではみられない生徒の活躍の場としての役割。全員で1つの作品を作り上げ、1つの目標に向かうことで得られる一体感、達成感、それらの成功体験による自己肯定感の育成。そして何より、将来、心の故郷となり得る思い出作りができる貴重な経験である。学級・学年経営も、集団活動での経験に拠るところが大きい。全員が活動に参加できるための日々の支援が何よりの課題となるだろう。

教師も生徒も共同作業、集団活動によってその連携を強めることができる。課題となっている教師集団の同僚性も、その集団活動によって高められるのではないだろうか。教職員ソフトボールへの参加、体育大会でのリレー、文化祭での合唱。そして何より、打ち上げや決起集会等は課題解決への重要な要素となることだろう。忙しい現場だからこそ、組織としての強い結びつきが大切であると感じた。

課題解決実習報告

教職実践専攻 22420081 香川 真吾
実習校 岡山市立大野小学校
実習校担当大学教員 渡邊 淳一

1 課題

「教師として適切なタイミングで適切な言葉をかける」

2 課題設定の理由

学校生活の中でも特に授業中の言葉かけは学級経営に与える影響が大きいことを実感している。また、実習で得た様々な課題（児童へのほめ方、しかり方など）について大学で省察した結果、児童に対する言葉かけは適切なタイミングとその場にあった言葉選びが重要であると考えた。

3 取組の概要及び成果と課題

自己課題を解決するための方法として、主に以下の2点に取り組んだ。

- I 学校生活を場面ごと（朝の会、休憩、授業、給食、掃除、帰りの会など）に分けて考え、自分のかけた言葉と児童の反応から自分の言葉やタイミングを評価・判断する
- II 授業の際、ビデオ撮影を行うことで授業中の言葉を振り返る

<成果と課題について>

成果として、自分と児童とのやり取りの中から自己課題を深めた場面がある。給食を例にとると、給食準備の際に当番が廊下に並び給食を取りにいくのだが、すぐに並べない現状があった。週を通して、最初は「早くエプロンを着て並びなさい」と言葉をかけ児童を並ばせようとしたが、自分の言葉に応じて並ぶ児童とそうでない児童がおり、その後も声をかけ続けた。途中からは最初に比べて児童にかける言葉を少なくし「並ばないと行きません」という言葉を使った。その結果、お互いに「早く並ぼう」という言葉を口にし、児童同士で並ぼうとする意識が少しずつ芽生えてきた。週の最後には児童に「今日は何も言いません」と一言だけ伝えた。自分としては児童の自主性・自立性・相互性を期待してかけた言葉であったが、いつもよりも早く並ぼうとする児童の姿があった。その場に適した言葉は普遍的なものもあると思うが、学校現場での多くはその場に応じて言葉を変化させ続けていかなければならないと再認識した。週単位でのやりとりであったが、自分が言葉をかけ続けることから始まり、週の最後は一言で並ぶことができた。児童の発達段階や児童の持つ道徳心、自分との人間関係、場の環境などによって言葉を適宜選ばなくてはならないが、今回の経験は自分自身とても実りあるものになった。

課題としては、児童のしかり方をより深く考えていく必要がある。これまでに、ほめる経験は何度もしてきたが、しかる経験が少ないため言葉をかけるタイミングも、かける言葉の内容も考えていく必要があった。また、人前でしかられることを嫌う子やしかる度合いを考えなければならない子など、児童一人一人の人間性を把握し、しかるという行為をしなければならない。

最後に、授業中の自分の言葉や児童との何気ない会話、さまざまな場面での指導など、実習では自分が児童にかけた言葉の内容を常に意識し、出来るだけ省察してきた。この経験から、改めて自分が大切にしていきたいことは、自分が育てたい児童像・自分の作りたい学級像を常に意識し、児童の将来を考えた上で言葉をかけることである。

課題解決実習報告

教職実践専攻 22420084 佐藤 典美江
実習校 岡山市立大野小学校
実習担当大学教員 渡邊 淳一

1 課題

「児童に伝わりやすい指示の工夫（児童との信頼関係を育む授業実践を目指して）」

2 課題設定の理由

児童にとって居場所がある・楽しいと感じられる学級をつくるために、まず教師と児童の信頼関係づくりに焦点を絞り、児童から信頼される授業を行うことができるよう自分の指導力を高めていきたいと考えた。

児童に信頼される授業を行うには、まず、教師の指示が児童にとって明確である必要がある。教師の指示内容がうまく伝わらなければ、児童が混乱し、信頼関係を育むことも難しい。そのため、自分の指導力を向上させる第一歩として、まず児童にとって理解しやすく伝わりやすい指示について実践研究していきたいと考えた。

3 取組の概要及び成果と課題

○取組と概要

今回の実習では、主に次のような機会を得、その中の様々な場面でその場に応じた指示を行うようにした。

- ・全日経営（国語、生活、運動会練習）
- ・授業実践（算数、道徳）
- ・授業の指導補助参加

授業の中での指示や指導については、実践ごとに具体的な工夫を試み、先生方から指導をいただいた。

○成果と課題

先生方から指導をいただきながら、実践をする中でとらえた児童にとって理解しやすく伝わりやすい指示を行う上でのポイントをいくつか次に挙げる。

- ・短い指示にすること。
- ・作業中、児童の活動をいったん止め、こちらに注目させてから指示を行うこと。
- ・具体的にどのように行動したらよいかをイメージができる指示をすること。（「自分たちは全員でひとつの船だ。船が壊れないように、肩を隣の人とくっつける。」など）
- ・授業中の私語など児童に止めさせる際には、「その行為によって自分が困る」ということに気づかせ、その後、どうしたらよいか考えさせたり伝えたりすることで、児童がこれからどのように行動すればよいのか分かるようにすること。
- ・板書する場合、例えば低学年では、児童がノートに書く様式で板書する必要があること。
また、作業について指示をする場合、作業の手順を板書することで児童が次にどう作業をしたらよいか一目でわかるようにし、指示の回数を減らすこと。

今回、実習を行った第1学年では、指示による児童の反応が明確に表れ、自らの指示が適切であったかどうかを把握しやすかった。

半年間、授業や生活の中で試行錯誤しながら指示の工夫を図ってきた結果、指示する側が指示の必要性や内容を十分理解しておくこと、指示を児童がどのように受け取りその結果どのように行動するのかを具体的に想定しておくことなど、児童にとって理解しやすく伝わりやすい指示を行う上で大切なことが徐々にわかってきた。

指示が明確に伝わると、児童の意欲を高めることにつながり、その結果何かが達成できると、児童も私もうれしく、そのような気持ちを共有する経験を積み重ねることにより、児童と教師の信頼関係が築かれていくと感じた。授業をよりよいものにしていくために、これからもこの実習で学んだことを生かし、指導力の向上に努めていきたいと思う。

課題解決実習報告

教育実践専攻 22420085 玉木 修治
実習校 岡山市立三門小学校
実習校担当大学教員 山崎 光洋

1 課題

「児童の反応や活動の様子，児童とのかかわり等を想定した指導」

2 課題設定の理由

課題発見実習では，教師の児童へのかかわり方と，児童同士のかかわらせ方を課題にし，学校生活の様々な場面で児童にかかわったり，児童の様子を観察したりした。そうする中で，児童へのかかわり方に迷ったり，児童同士のかかわりを導くことができないでいたりすることに気づいた。自分の考える児童へのかかわり方や児童同士のかかわらせ方に，児童を育てるという視点が欠けており，状況に応じた児童の具体的な姿が想定できていないことが原因の一つであると考えた。課題解決実習では，計画に基づいて行われる授業を中心に，あらかじめ児童の具体的な姿を想定し，少しでも児童に適切にかかわったり児童同士のかかわりを導いたりしたいと考え，上記の課題を設定した。

3 取組の概要及び成果と課題

課題解決実習では，第6学年の算数科の学習指導に単元を通して参加した。算数科の授業は少人数指導で行われており，児童一人一人の反応や活動の状況を細かくとらえることができる。自らの児童へのかかわり方や児童同士のかかわらせ方を省察できるよう，これまでの授業観察を生かして単元を通しての児童の反応や活動の様子を想定して指導を行った。具体的には，自分の考えをもたせる，自分の考えを明確にするためにグループで話し合う，グループでの話し合いを生かして全体で話し合うという学習の流れの中で，グループでの話し合いのさせ方を工夫したり，グループの話し合いに自ら積極的に参加し，児童同士のかかわりが活発に行われるように働き掛けてみたりした。

実際に単元構成や授業を行ってみると，話し合い活動については，話し合い活動をどのように行わせるかという点については考えていたものの，話し合いを成立させるための前段階として，話し合いに必要な自分の考えを十分に持たせる手立てが不足していると感じた。すなわち，話し合いに入るまでの学習のめあてのとらえさせ方，話し合うために必要な作業の指示が十分でなかった。あらかじめ児童の反応や活動の様子を想定し，児童へのかかわり方や児童同士のかかわらせ方を準備していたつもりだったが，授業中での児童一人一人の反応や活動の状況を細かく観察してみると，児童が分かりやすく，児童同士がかかわりをもちながら学習内容を深めていくことができるような授業にするためには，児童一人一人についての想定が必要であり，そうすることで，その学習の目標に到達できるように児童へかかわったり児童同士のかかわりを導いたりしやすくなると感じた。

今回の課題解決実習では運動会があり，運動会の全体練習に参加することで，一つ一つの練習が，児童の動きを想定して計画・実行されていることが分かった。また，運動会で児童が競技しやすいように毎日グラウンド整備をする等，見えないところでも事前の準備を徹底されていた。児童が活動の達成感を得ることができるようにするために学年別にめあてをもたせたり，先生方がそれぞれ役割をもって児童にかかわったりするなど，個々ではなく，必要に応じて組織的に指導を行うことの大切さも実感することができた。

最後に，今回の実習でも，会議に参加したり，様々な教職員の仕事をしたりする機会を与えていただき，実習校の先生方には，授業の仕方だけでなく，学校現場での仕事や教員としての心構え等も熱心に指導していただいた。ここで学んだことを，将来に生かしていくことができるようこれからも頑張っていきたいと思う。

課題解決実習報告

教育実践専攻 22420086 時岡 宏行
実習校 岡山市立三門小学校
実習校担当大学教員 山崎 光洋

1 課題

「授業を通しての仲間づくり，集団づくり」

2 課題設定の理由

児童が充実した学校生活を送るためには，仲間づくりや集団づくりが大切であり，そのためには，児童が互いをよく知り，互いを認め合うことが必要である。そこで，今回の課題解決実習では，児童が考えをもち，それらを互いに伝え合い，認め合うことができるように授業の構成や児童へのかかわり方を工夫し，少しでも仲間づくりや集団づくりにつながるような授業実践を行うことを課題として取り組むことにした。

3 取組の概要及び成果と課題

今回の課題解決実習では，仲間づくりや集団づくりにつながるよう，児童が考えをもち，それらを互いに伝え合い，認め合うことができる授業を目指して次の三つを工夫し，国語科の授業を連続して5単位時間実践した。

- ・児童が自分の考えをもちやすくなるように，単元の導入で身近なごみ問題に関する話題を取り上げたり，具体物を提示してごみについて話し合わせたりする。
- ・自分の考えを明確にしたり，発表や話し合いで自分の考えを伝えにくい児童のために，授業の中で「挙手」によって意思表示させる機会を意識的に位置付けるようにする。
- ・児童が自分の考えの根拠を示したり，友達の考えの根拠をとらえたりして，互いの考えを理解しやすくなるように，本文を模造紙に書き写したものを提示したり，キーワードを示したりするなどして視覚的に分かりやすい板書を工夫し，それを活用しながら話し合いを進めていく。

実際に授業を行ってみると，導入に身近な話題を取り上げたり具体物を提示して話し合わせたりしたことは，自分の考えをもたせる上で一定の意味はあったが，本文を基にした学習につなぐという点で，課題を残した。また，「挙手」による意思表示については，その内容やタイミングを十分に検討する必要があると感じた。板書の工夫では，児童の発言を理解すること，それらを適切に位置付け，話し合いを広げたり深めたりするのに効果的な板書をするのは容易でないと実感した。

今回の授業実践では，自分自身が考えていた課題ばかりでなく，これから取り組むべき様々な課題も明らかになった。児童からは「板書について」と「授業中の指示や発問の仕方について」，先生方からは，「伝えたいことを絞ること」「簡潔な発問に心がけること」「児童の考えを教師が説明しすぎないこと」「時間の使い方を意識すること」など，多くの指導をいただいた。基本的な授業づくりの仕方や授業の進め方などへの理解が十分でないことが最も大きな課題であり，普段の生活や学習の中で児童の実態をとらえ，学習の導入や毎時間のつながり，授業の内容などを児童の姿を思い浮かべながら，分かりやすく，考えやすくなるように検討すること，児童の声を聞きながら授業を行うことの大切さを痛感した。今回の実習で経験させていただいたことを今後に生かしたい。

課題解決実習報告

教職実践専攻 22420087 南川 由理
実習校 岡山市立石井中学校
実習校担当大学教員 笠原 和彦

1 課題

私は、自己の課題を『課題追究し、自分の言葉で表現し合う中学校「社会」の授業づくり』と設定している。そこで、解決実習では生徒同士の学び合いの場に注目して観察していきたいと考えた。そして、具体的にはどのような発問が生徒の意見を引き出しやすいのか、生徒の思考の流れをどう生かしていくのかなどを分析していきたいと考えた。そのため、ノートの記事を含めて、生徒の反応を分析し、生徒がどのように力を身につけることができたかをはかりながら授業研究を行うことを試みた。

2 課題設定の理由

社会科の目標にもある多面的・多角的な考察をしていく上では、生徒同士の学び合いの場を設けることが授業での重要な要素になると考えている。そして、新しい学習指導要領で言語活動の充実を図ることが示された中、より一層自分の考えを説明したり、相手の話しを取り入れて考えたりする活動の必要性を感じたからである。

3 取組の概要及び成果と課題

授業実践を行うに当たり、手順として、授業前のアンケート（既習度もはかる）→授業実践→授業後のアンケート（既習度もはかる）の順で行うことにした（ただし、実際には5回の授業実践の内、時間との関係などによりアンケートを実施していないものもある）。

まず、授業前のアンケートでは、歴史の授業に対する意識を問う質問を行った。質問では、歴史の授業に対して大半の生徒が普通やや好きであるといった肯定的な意見が大半であった。理由の中では「何百年も前の日本を知るの楽しい」や「いろいろな人物の事を知ることができて楽しい」、「ノートを書くの楽しい」などの意見がある一方、「覚えるのが苦手」や「人物や物の名前を覚えるのは面倒くさい」などの意見があった。また、既習度をはかるために、飛鳥時代と奈良時代について知っていることを記述してもらうことにした。授業前の記述では、約7割の生徒が1つ以上の記述を行い、飛鳥時代では聖徳太子がもっとも多く、奈良時代では大仏がもっとも多い傾向にあった。約3割の生徒については、どちらの時代も知らない、約5割の生徒がどちらかの時代は知らないという結果であった。

次に、授業実践については、具体的に次のような発問を行った。

飛鳥時代の白村江の戦いの場面では、「なぜ、天皇自らが九州に出向いてまで百済を助けようとしたのか」、「白村江の戦い以降の日本の重要課題は何か」の2つの発問を行った。しかし、初めの発問で生徒の意識が高められず、また、この2つの発問が授業の趣旨・目標とずれがあったと思われる。生徒の意識が高まらなかった原因については、この発問が生徒の関心や取り組みの意欲を引き付ける発問でなかったことがあげられると思われる。奈良時代の土地のしくみを取り扱った場面では、「公地公民制のもとで土地は国のものとしてきたのに、なぜ、新しく開墾した土地を自分のものにするのが認められるようになったのか」、「土地の私有化を認めてでも国が望んだものは何か」の発問を行う予定であったが、時間の都合上行うことができなかった。奈良時代の農民の生活を取り扱う場面では、「苦しい生活の中で自分ならどのように行動するか」という発問を投げかけたところ、「逃げる」や「戦う」などの意見が表出され、生徒が意見を表明しやすいように感じられた。最後に行った文化を取り扱う場面では、「飛鳥文化と天平文化の2つの文化に共通していることは何か」という発問を投げかけた。その他にも、中心となる発問ではないが、生徒の意欲を引き出すことを狙いとして、租庸調を取り扱った場面で「岡山県の特産物は何か」という発問を、そして、平城京での市を取り扱った場面で「これまでは物々交換であったのが貨幣を使うことでどんなメリットがあったか」という発問を投げかけたりした。

今回の発問に対する生徒の反応を考察すると、ワークシートには意見を記述する生徒が大半であったが、発表に対する抵抗感が感じられた。しかし、今回はこの抵抗感を薄めるほどの発問ができなかった。また、生徒の発達段階と照らし合わせて、より身近な発問をする必要があったと思われる。既習度をはかつて分かったことであるが、小学校で扱う人物についても人物のエピソードや業績など、親しみを覚えるほどには至っていない場合があることが分かった。特に、現段階では、歴史上の人物の行動の要因を取り上げる発問よりも、自分ならどう動くか問いかける方が、考えやすいように感じられた。そこで、歴史上の人物を取り上げる際には、中学校の段階でも人物やその時代背景についてある程度の復習が必要であることを実感した。したがって、課題として、話し合いに至るまでの知識の土台づくりとそれに関わる時間配分、学級で発表することへの抵抗感をなくす環境づくりの両面が今後の課題になった。

課題解決実習報告書

教職実践専攻 22420088 根山 夕佳
実習校 岡山市立岡山中央中学校
実習校担当教員 笠原 和彦

1 課題

生徒が意欲的に取り組めて「わかる」授業を計画し、生徒に寄り添いながら授業を進めていくことができるようにする。

2 課題設定の理由

課題発見実習での授業実践において計画通りに授業を進めていくことができず、生徒の実態をふまえて授業を計画し、実際に授業をするときには生徒の反応や様子をしっかりと見て、生徒に寄り添って進めていくことの大切さを改めて感じたため。

3 取組の内容及び成果と課題

同じ単元について4クラスで授業実践を行った。毎回の実践ごとに担当の先生からのアドバイスや自己反省をもとに授業改善を重ねることができ、とても勉強になった。

生徒に寄り添いながら授業を進めていくということは、普段から生徒にとって何がわかりにくいのか、なぜわかりにくいのかをしっかりと見て生徒の視点で授業を考え、授業中に生徒の反応や様子から学習内容がわかっているか、意欲的に取り組んでいるか、などを判断しながら進めていくことであるということがわかった。初めの授業実践を終えて、いくら授業の流れを工夫しても、新しい教材をつくっても、それは教師が授業を進めやすくするためだったり、この方がわかりやすいだろうという勝手なイメージだったりして、せつかく授業観察で学んだことも少しも生かしていなかったのだと気づいた。結局、生徒の実態を把握することと自分の授業をつくることとがつながっておらず、教師主体で授業を考えていたのである。私は、今までずっとどんな授業なら生徒が意欲的に取り組めるのか、わかりやすいのか、について大学院の講義で学んだことなどをもとに考えてきたが、その答えは最終的には目の前にいる生徒が教えてくれるのだと気づいた。

授業実践以外にも担任や教科の仕事がたくさん経験することができたが、いくら毎日後ろから担任の姿を観察しているからといって、実際には思っていたようにはできないことが多かった。しかし、ここで経験させてもらったことで、今まではイメージもできなかったことが自分にもできるかもしれないと思えるようになった。授業に関してもそれ以外のことにしても、今までに得た知識をもとに頭の中で考えていたことが、現場を経験していない立場だから言える理想論であると実感する場面が多かった。大切なのは、実際の現場で、その時の立場で、生徒に「こうなってほしい」という願いを持って、自分なりの関わり方や指導の仕方を見つけることであると思った。

課題発見実習の時と比べて、授業以外での生徒との関わりを多くもてたことや学級経営に関わる仕事ができることで、授業でも以前より自信をもって堂々と振る舞えるようになった。しかし、自分のペースで授業を進めることと自分のスタイルで授業をすることとは違う。信念をもって自分らしく授業や学級経営を行うことは大切だが、常に生徒に寄り添おうとする気持ちを忘れてはいけないと思う。授業や生徒指導をする際に、自分が生徒たちをどのように育てたいのかを常に問い直し、自分の思いが伝わるような関わりを心がけるとともに、生徒の視点で教材研究や授業づくりを行っていくことが今後の課題である。

担当の先生をはじめ実習校の先生方と一緒に仕事をする中で、たくさんの指導・アドバイスをいただき、とても有意義な実習を行うことができた。今後も経験できることはどんどん経験して、できることを増やしていきたいと考えている。

1. 課題

「児童が考えを交流していく授業をする。」

2. 課題設定の理由

児童が考えを交流させながらめあてに向かうことで、学級の一体感を強めたいため。また、児童同士で考えを深め合う児童主体の授業を実践したいため。

3. 取組の概要及び成果と課題

<取り組みの概要>

- ・授業実践（国語 算数 体育 音楽 学級活動 道徳）
- ・生活指導（朝の会 給食 掃除 帰りの会など）

<成果>

9月の2週目に担任の先生が、学級の児童に対しそれまでとは違った発表の仕方をすることを提案された。ただ、発表をするのではなく、同じ意見でも前の人とどのような点が同じなのか、どこが違うのかを言うことなどの説明が行われた。それまでは、個人がそれぞれの意見を発表しただけであったが、この提案の後、「〇〇さんと似ているんだけど」や「〇〇さんと少し違って」といった、人の発表を聞いていることがわかるような発表になった。私も授業実践の際にはそのことを意識させるような言葉かけをしてみた。すると同じように、クラスメイトと意見を交流させて自分たちで考えを深めていると感じられる場面がいくつかみられた。

<課題>

児童の考えを交流させるといっても、ただ単に、「考えの同じ点や違うところを見つけよう」と言うだけでは、考えを深め合うことには至らないと感じた。今回成果と思われたことでも、一部の児童による話の深め合いにとどまり、話し合いについていけず、とり残されてしまった児童もいた事に気づいた。そのような児童も話し合いに参加させるためには、すべての児童に同じことについて考えようとする意識を持たせなければならないと感じた。

今回、授業実践や生活指導を行う中で、新たなことに気づくことができた。なぜこの時期に担任の先生が、今までよりもレベルの高い話し合いを求め、提案したかについて考えてみた。その理由の一つに、話を交流させるためには人の話を聞く姿勢が大切なことがあげられる。先生は聞く態度についての指導を一学期から継続して取り組まれていた。そして現時点の児童の実態を見て、この時期に始めたのだと思った。私の力では児童に話を聞かせることができなかった体験から、聞く態度の重要性に気づくことができた。

<課題解決実習を終えて>

課題発見実習で見つけた課題は難しいものであり、まだまだしなければならないことがあると感じた。しかし、そのように感じる事ができたことが進歩であると思う。今回の実習を通して得たことと、見つけた課題を分析して、これからの研究に臨みたい。

【総評 : 清廣玲子岡山市教育委員会指導課課長補佐】

失礼いたします。岡山市教育委員会指導課の清廣と申します。本日は教職大学院課題解決実習報告会に参加させていただきまして、本当にありがとうございました。まずは、熱心にご指導くださっている先生方、そして様々な面で協力をいただいております関係者の皆様にお礼を申し上げますとともに、日々熱心に研修・研究を重ねていらっしゃる院生の皆さんに敬意を表したいと思います。実は私が小学校の時に教えた教え子の方が今日発表されまして、小学校の時に「先生になりたい」と言っていたらよかったと思いますが、とても嬉しい気持ちで聞かせていただきました。

さて、本日は課題解決実習報告会ということで院生の方の発表がありました。皆さんの熱意あるとても真摯な態度での発表を聞かせていただきまして、この5週間の実習が皆さんにとって、本当にかげがえのない日々であり、そこで得たものが皆さんにとって大きな宝物であったのだなということを強く感じました。そして、とても頼もしく感じました。

まず感心したのは、皆さんの課題設定の理由が明確であり、かつ具体的なものであるということでした。色々な切り口から一つのことに焦点を絞って、どのような活動や支援が効果的であるかをしっかりと考えて取り組んでおられることを素晴らしいと感じました。皆さんの設定した課題はどれも、現在、実際に学校現場で先生方が考え、時には悩んでいるものばかりで、皆さんの今回の取組は、今後教師となった時に実際に生きてくるものと考えています。また、皆さんが、その取組がどうであったかということについて、子ども達の姿をしっかりと見ていたことにもとても感心しました。私達、教える側はともすれば、自分が試みたことは、子どもたちの指導にとって効果的であるだろうと考え、一方的になってしまいがちですけれども、皆さんは指導する側の自己満足ということではなくて、それが子ども達にとってどうであったかをしっかりと見て、そこから学ぼうとしておられました。この子どもから学ぼうという姿勢を大切にしていきたいと思います。時には、なかなか発言をしない子どももいますし、書こうとしない子どももいますけれども、そういった子ども達がどのように学んでいるか、そういったことについてもしっかりと、私達は把握していかなくてははいけませんし、指導していかなくてはなりません。今言いました、子どもから学ぶということ、それから一人一人を大切にすることというのはどういうことなのか、しっかりと考えていただければと思っています。

さて、教育三法の改正、それから学習指導要領の改訂によって、教育改革は議論の段階を終え、いよいよ実践という段階になってきたわけです。私達は今後、子ども達に生きる力を育むことを目指して、創意工夫を活かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能の確実な習得、そしてこれらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を活かす教育の充実ということに努めていかなくてははいけません。思考力・判断力・表現力等の育成について先程言いましたが、これは子ども達が生涯学んでいくための基盤としてとても大切なことです。私たちは、子どもが基礎的・基本的な知識、技能を活用し、思考力・判断力・表現力を伸ばしていくために、どのようにしていったらいいのかをしっかりと考えていかなくてはなりません。そして知識、技能の定着から活用という一方向だけではなくて、活用していく中で、様々な技能が身に付いていくような学習活動を設定しなくてははいけません。例えば、話し合いの活

動において、話すとか聞くとか話し合うなどの技能があるわけですが、それらがしっかり一人一人の身に付くようにしなくてははいけない。話し合いをする活動の中でそういった技能を身に付くようにしなくてははいけないし、また子ども達が自分の伸びを実感できるようにしなくてはなりません。また話し合うということが単なる伝え合いではなくて、そこから新しい状況が生まれていったり、新しいものが創り出されたり、そういうことで子どもたちは満足感、成就感を味わっていくものと考えます。

本日皆さんは、色々な視点から課題解決に取り組んでいかれました。それらが例えば、思考力・判断力・表現力の育成にどのように関わっているか、生涯にわたって学び続ける力にどのように関わっているか、といったことから考えていただくのもいいのではないかと思います。そして、また今回見つけた新しい課題にも積極的に解決に向けて研究を深めていただければと思っています。私は先程、教え子が…という話をしましたけれども、教育委員会に来る前は、20年間小学校の教員をしておりました。学校においては、一見別々のことのように思われる事柄や課題が実は元のところでは深く関連していたり、一つのことを解決していくことが他の事柄の解決につながったりということがよくありました。院生の皆さんには様々なこと、たくさんの課題があると思うのですが、色々な事象を構造的・体系的に捉えて分析し、そして実践的な理論を構築して解決する力をしっかりと身に付けていただくとともに、それらを他のことに活用したり、今日のことでも一般化したりするような手法を身に付けていただければと思っています。今後もこの岡山大学教職大学院において、確かな理論に裏打ちされた実践的な指導法の開発など、先進的で意欲的な取組が進められますことを願っております。教育委員会といたしましても、連携を密にしていきたいと考えておりますので、どうぞよろしく願いいたします。本日は本当にありがとうございました。

4. 新卒院生の成長と自己評価

新卒院生が「学校における実習」を通してどの程度成長したかを評価するために、三つの方法を用いた。一つ目は、学部段階で獲得・形成すべき教育実践力が実習を通してどの程度積み上げられたかについての自己評価である。二つ目は、実習と大学院での授業がどのように連関し、どのような学びをしていたのかに関する新卒院生2名へのインタビューである。三つ目は、新卒院生が実習をどのように受け止めていたかを短いフレーズで表した実習の定義付けである。これらを通して、新卒院生の成長について報告する。

1 教育実践力についての自己評価

岡山大学教育学部では、より実践的な指導力を身に付けた教員を養成するために、教育実習・体験的授業科目を軸（コア）にした「教員養成コア・カリキュラム」に取り組んでいる。このカリキュラムでは、「学習指導力」「生徒指導力」「コーディネータ力」「マネジメント力」の四つの力で構成された教育実践力を獲得し形成することを目標としている。

そこで、教職大学院の「学校における実習」を通してこれらの力が更にどの程度積み上げられたかについて、新卒院生による自己評価を行った。評価時期は2月末で、その時点で実習前・実習後の自分の力を振り返って5段階で自己評価するものである。評価項目は学部4年後期の「学校教員インターンシップ」の項目を加筆修正した（表1）。16項目のうち14項目は自分に身に付いている行動レベルの力を評価するようになっている。

(1) 項目ごとの評価点の変化から

実習前後の項目ごとの評価点の変化について、新卒院生10人の合計を示したのが図1である。大まかな傾向として、いずれの項目についても実習を通して力が上積みされたと自己評価していることが分かる。また、行動レベルの評価ではなかった2項目（マネジメント力の①④）

についての伸びが若干ではあるが比較的大きくなっている。一方、授業力の③の伸びが比較的小さい。これは、評価までを意図して授業を工夫し展開することは必ずしも十分ではなかったことをうかがわせる。さらに、生徒指導力の③の伸びも同様に小さくなっているが、これについては次項で

表1 自己評価項目

	*評価は5が最高	実習前	実習後
学習指導力	① 単元の目標を基に、教材・教員を選定・開発したり、それらを効果的に活用した授業を実践したりすることができる。		
	② 児童・生徒の主体的な学習になるよう、学習活動を工夫改善したり山場を設定したりした授業を展開することができる。		
	③ 評価の場面や方法を工夫し、学習の状況を評価しながら授業を展開することができる。		
	④ PDCAサイクルによって繰り返し授業実践し、より望ましい授業にするよう授業改善に努めることができる。		
生徒指導力	① 児童・生徒の欲求や意思をとらえ、それらに積極的に応えようとすることができる。		
	② 学校生活の様々な場面で、児童・生徒の成長を見付けたり認めたりすることができる。		
	③ 基本的な社会規範やルールを踏まえ、楽しく集団生活を送ることができるように、必要に応じて指導することができる。		
	④ 児童・生徒の生活場面で、状況に応じた適切な対応をしたり必要な指導をしたりすることができる。		
コーディネータ力	① 学級通信づくりや地域学習など、保護者や地域に開かれた学級・学校づくりに積極的に参加することができる。		
	② 学級経営、学習指導、生徒指導等についての方針を教職員と共有し、学校の一員として協働することができる。		
	③ 年間指導計画を基に、学級経営、教科指導、生徒指導等について、教職員と積極的に連携・協力して実践することができる。		
マネジメント力	① 学校経営が保護者や地域住民の参加により組織的に行われていることを具体的・実感的に理解することができる。		
	② 実習における自分のスケジュールを基に、柔軟に管理・実行できる。		
	③ 児童・生徒の個人情報、学年や学校の情報を管理することの必要性を常に意識し、実行することができる。		
	④ 教育活動中の想定内外の出来事に、学校組織の一員として臨機に対応することができる。		
	⑤ 採用当初から教育実践していくための力を培うという自分の目標にどれだけ到達できたか。		

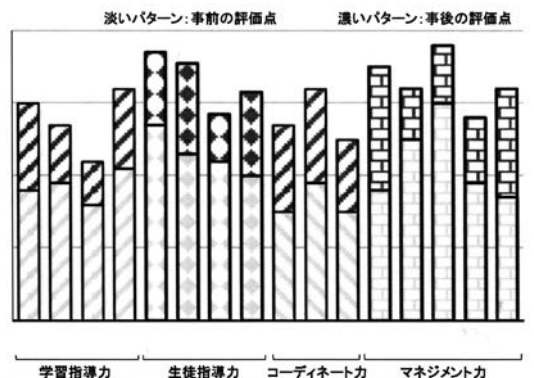


図1 実習前後の項目ごとの評価点の変化

触れる。

(2) 個別の評価点の変化から

実習後の評価点の伸びを項目別・個別に表したのが表 2 である。色の濃いセルほど評価点の伸びが大きかったことを示している。この表で特徴的だと思われた 3 人の新卒院生 (F・G・I) の自己評価について、評価の説明をした記述から分析してみた。

まず新卒院生 F についてである (図 2)。F は 16 項目のうち 15 項目について実習前後の力が変わっていないと評価しているが、実習前の評価点が 3 点から 5 点と比較的高い。自分の教育実践力について自信と自負を持って実習に臨んでいたことが分かる。しかし、生徒指導力のいずれの項目にも「生徒指導の面においては、できるだけ生徒と積極的に関わったが、どうしても実習での限界があった。」と説明しているように、短期間の実習では F 自身が自己の成長を実感できるほどの体験も成果もなかったために評価点が変わらなかったというのである。

F の実習を指導した大学教員・実習校教員によれば、F の教育実践力は決して伸びていないことはなく、特に授業などは生徒による授業評価を活用し、短期間で格段に工夫を凝らした授業ができるようになった。にもかかわらず、これらのことが自己評価に反映されなかったことから、今後 F のような評価基準を持っている新卒院生に対しては、評価方法とともに評価に直結する実習の在り方を工夫していく必要があると考える。

次に、新卒院生 I についてである (図 3)。I には 10 人の新卒院生の中で唯一事後の評価点を下げている項目がある。これが、生徒指導力の③「基本的な社会規範やルールを踏まえ、楽し

表 2 項目ごとの個別の評価点の変化

分類	項目	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
学習指導力	①	2	1	1	1	1	1	2	0	2	1
	②	2	1	0	1	0	0	2	0	1	1
	③	1	0	0	0	1	0	2	0	1	1
	④	3	2	0	1	0	0	2	1	0	2
生徒指導力	①	1	1	1	0	1	0	2	1	2	1
	②	1	1	2	0.5	0	0	2	1	2	3
	③	1	1	0	0.5	1	0	1	1	2	3
	④	1	1	2	0.5	0	0	2	1	2	2
コーディネート力	①	3	1	3	1	0	0	2	0	0	2
	②	3	1	1	1	0	0	3	1	2	1
	③	2	1	1	1	1	0	2	1	0	1
マネジメント力	①	3	2	3	2	1	0	2	1	0	3
	②	2	1	0	1	1	0	2	0	0	0
	③	1	1	1	2	0	0	2	0	0	1
	④	1	1	1	0	1	0	2	0	2	1
	⑤	3	2	2	1	1	0	2	0	2	2

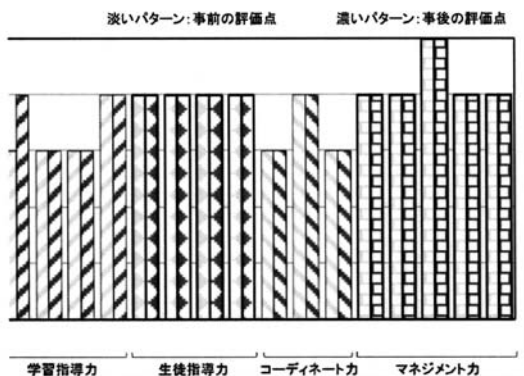


図 2 新卒院生 F の評価点の変化

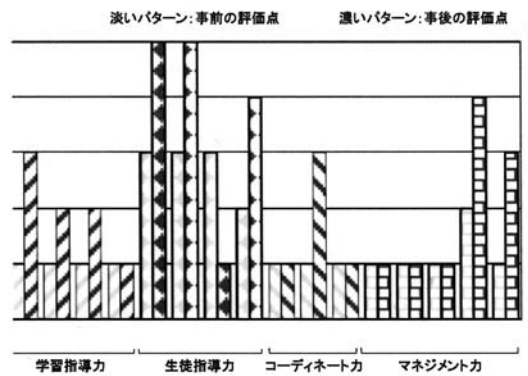


図 3 新卒院生 I の評価点の変化

く集団生活を送ることができるように、必要に応じて指導することができる。」である。このように評価したことについてIは「現実に直面して力不足を痛感した。思ったほどできないことが分かった。」と説明している。生徒指導面で児童を指導することについて、それまでの実習経験を通してIなりに自信があったのが、思ったほどできないという現実に直面して評価を修正したというのが実のところであろう。このように、現実に直面できるのも「学校における実習」の特徴の一つであり、身の丈に合った自分を知ることこそ教育実践力を伸ばしていくのに欠かせないことである。

最後に新卒院生Gである(図4)。Gは平均して2ポイント伸びたと自己評価しており、事前の評価点の低さとともに全項目において教育実践力の伸びを実感しているのが特徴である。Gは「単元をみて、授業のだいたいの流れが短時間でイメージできるようになったから。」(学習指導力の①)、「実習前よりもはるかに積極的に生徒にかかわっていけるようになり、生徒の考えていること・望んでいることを汲み取ることができたと感じるから。」(生徒指導力の①)などと説明しており、スモール・ステップではあるが着実に力が伸びたと実感していることがうかがわせる。こうした評価の仕方は多くの新卒院生に共通している特徴である。また、「実習中に、それぞれの先生の思いや、それを生徒に伝えようとする工夫が見て取れて、それぞれの先生の考えを尊重しながら自分のやり方を考えることができたから。」(コーディネート力の②)からは、視野が広がって自分がとるべき言動を考えやすくなったことが分かる。

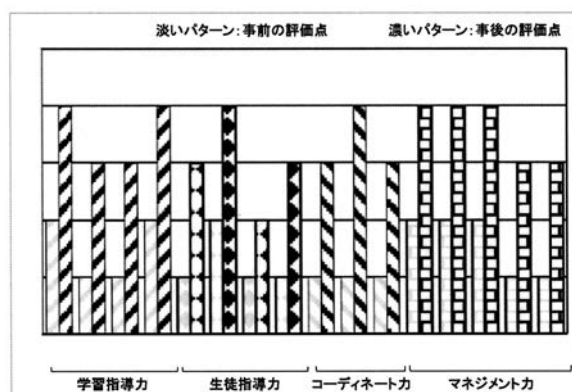


図4 新卒院生Gの評価点の変化

2 実習における学び—新卒院生2名の話から—

このたびの実習では各自が自己課題を設定して臨んだが、その自己課題は実習を通して明確になり、各自の課題探求も深まっていった。課題発見実習初頭(4月)に設定した自己課題と、課題解決実習(8月末~9月末)で設定した自己課題を比較したのが表3である。実習を始めたころの自己課題はあいまい・過大といった特徴を持つものが多い。それが約5か月後には焦点が絞られて明確になってくるが、そこに至るまでにどのような学びのプロセスがあったのか、特に実習と大学院での授業がどのように関連していたのかについて、成果報告会の場で新卒院生2名にインタビューした。次に示すのはその逐語記録(抄録)である。

渡邊：それでは二人の院生に話を聞きたいと思います。

(新卒院生2名登壇)

渡邊：八木君は小学校での実習でした。佐藤さんは別の小学校での実習でした。二人ともよろしくお願ひします。ではお二人に伺ひますが、まず、自己課題を鮮明にできたのはどういう学びの場やプロセスがあったからですか。

八木：私の自己課題は(表3の)⑨なんですけど、最初は授業ができるようになりたいと思い、授業力の向上を自己課題にしました。しかし実習をする中で、けんかなどのトラブル対

表 3 自己課題の変容

	最初の自己課題（4月）	課題解決実習での自己課題（9月）
①	教師と児童との信頼関係を築く授業実践	児童に伝わりやすい指示の工夫
②	学習指導，学力・生活態度等の評価，部活指導と学級・授業経営の関連，教員として心がけること	学習指導，生徒同士の間関係と学級経営，同僚性と教師間の役割分担，学校と部活動の関わり
③	教師として自分にしかできない言葉かけ	教師として適切なタイミングで言葉をかける
④	授業を通しての仲間づくり，集団づくり	授業を通しての仲間づくり，集団づくり
⑤	教師と児童，児童同士のかかわりの在り方	児童の反応や活動の様子等を想定した指導
⑥	学びのある授業をどうつくるか	課題追究し，自分の言葉で表現し合う授業づくり
⑦	楽しくて「わかる」授業づくり	意欲的に取り組めて「わかる」授業の計画・実践
⑧	すべての児童が学びやすい授業の在り方	板書や話し言葉による適切な説明の在り方
⑨	授業力の向上	児童が考えを交流していく授業
⑩	生徒の発言を生かした柔軟な授業づくり	個々の学習意欲を高める授業づくり

応をした際，うまく対応できないで困ったことが何度かありました。そのときに，授業も大切だがそれだけでなく児童の人間関係を育むことも大切だと思いました。そこで，授業の中で考えを交流することを通して人間関係を育みたいと考えるようになり，「児童が考えを交流していく授業」という課題を設定しました。

渡邊：なるほど。具体的にはどんなことをしましたか。

八木：この課題を持つまでは一問一答式の授業をしていました。しかし，この課題を持つてから，児童が自分たちで話し合いを進めさせてみんなで目当てに向かっていくというような授業を心がけました。たとえば，児童が前の人の発表を聞いて，同じ所や違う所に目を向けて発表するようにするなどです。

渡邊：なるほど。「児童が考えを交流していく」というのはそういうことなんですね。ところで，八木君は教職大学院が始まる前の年の試行段階でも実習に行っていたそうですが，今回の実習と違いはありますか。

八木：試行段階では，用務員の先生，図書先生，保健室の先生の仕事をお手伝いさせていただきました。その手伝いの経験から，学校全体の仕事に目を向けることができました。しかし，自分の中での役割が明確でなく，今一つ何をしたいのか分からなかったです。今回の実習では，実習の振り返りをして考えを持ち，また次の実習で何をしたいか，何をすべきかを見つけて実習に臨めたので，意欲的・積極的になることができました。その姿を多くの先生方が認めて下さって，仲間として声をかけていただけたようになりました。

渡邊：なるほど。八木君が成長することによって職場の仲間入りができたというわけですね。それでは，佐藤さんはどのように自己課題を鮮明にしたのですか。

佐藤：私の当初の自己課題は，①の「教師と児童との信頼関係を築く授業実践」でした。この課題を設定した理由は，私の目標が「児童にとって居場所があり楽しいと感じられる学級づくり」だったからです。そしてこの自己課題を解決しようと第一学年の実習に臨んだのですが，いざ授業をしてみるとまったくうまくいきませんでした。理由を省察する

と、私の指示が長かったり、言葉が難しかったりタイミングが適切でなかったりしたために、児童が指示を理解できなかったということに気がきました。

授業や生活の中で、教師が指示をすることはよくあります。しかしその内容がうまく伝わらなければ、児童が混乱し、信頼関係を育むことも難しいと分かりました。このことから、児童との信頼関係を築いていくには、児童の話をしっかり聴くとともに、教師の指導したいことや伝えたいことを児童がしっかりと理解できるように、効果的な指示の仕方・手立てを行うことが大切であると考え、課題をこのようにしぼりました。

渡邊：なるほどね。ところで、大学院の授業が実習に役立ったことはありますか。

八木：私が一番役に立ったと感じるのは、教育実践研究です。実習に慣れたころ、教室の後ろからなんとなく授業観察をする日が続きました。そのことを教育実践研究で相談すると、「教室の前から子どもの表情を見たらいい」というアドバイスをもらいました。それを実践すると、それまでに気づけなかったことに気がきました。たとえば、先生の話を理解できたとき、または今一つ理解できなかったときなど、こんなにも児童の表情に表れるのかということに気がきました。その経験から、教室の様々な角度から授業を観察するようにしました。このようなアドバイスをいただける場として、実践研究は、役立ったと思います。

渡邊：なるほど。他にもありますか。

八木：はい。もう一つは、教育相談の授業です。教育相談の講義を受けて、児童に対して教師がどのような立ち位置や距離を取るかで心理的な安心感や圧迫感が違ってくるということを学びました。私はそれまではそのようなことを特に意識することなく児童に接していました。

あるとき実習中に、激しく泣いている児童がおり、助けを求めていると感じたので斜めから覗き込むようにして顔を見ながら話をしました。少し落ち着くと、それでは話しくさそうだったので、安心感が持てるように横並びになり同じ方向を見て話をしました。すると児童も少し話しやすそうでした。このことから、児童の問題を解決するためには、理論も大切だと思いました。

渡邊：理論につながるちょっとした知恵ですよ。佐藤さんは何かありますか。

佐藤：たくさんありますが、ここでは三つ挙げたいと思います。

一つ目は、生徒指導のロールプレイングの授業です。院生がそれぞれ、先生役、切れやすい児童役、はやし立てる児童役、傍観者役、注意するまじめな児童役になり、授業をするというものです。切れやすい児童やはやし立てる児童が授業妨害になるような発言や態度をするため一現職の院生がこの役をされたのでとても迫力がありました。先生役のストレート院生は大変困ってしまいました。私も、自分が先生役だったらきっとそうなるだろうな、どうしたらいいのだろうと思って見ていました。ロールプレイングの後の協議で、切れやすい児童役の院生が、「叱ってくれたら無視されたような気にならなくて良かったのに」とか「傍まで来て注意してくれた方がよかった」と言っているのを聞いて、対応の鍵を知ることができました。特に、現職の先生がしてくださるアドバイスには自分が知らなかった対応方法がたくさんありました。私の自己課題である「指示の仕方」で児童が切れにくくなるということもあります。実習で似たようなことがあ

った際には、学んだことを実践してみるようにしました。

二つ目は、発達段階について学んだ授業です。「発達段階に即して」とよく言いますが、私はその言葉を「年齢が小さいから難しい言葉は分からないとかそういうことだろう」といった浅いレベルでしか考えていませんでした。だから、指示を出してうまくいかないことが多かったのも今ではよくわかります。例えば、第一学年の児童に「集まれ」と行っても、「集まる」という概念がなければ集まりようがありません。第何学年ではおおよそこのくらいのことが理解できるようになる、このようなことはまだ理解が難しい、ということを知ることにより、自己課題である指示の仕方も変わっていきました。第一学年が理解できる概念や言葉を考慮して使うことで、分かりやすい指示についてのヒントを得ることができました。

渡邊：なるほど、「発達段階に即して」の意味が具体的に理解できたわけですね。それから？

佐藤：三つ目は、現職の先生と研究授業をする授業です。この授業では、現職の院生とストレートの院生が混ざって教材研究をし、指導案を作成し、授業を行い、その後研究協議も行いました。この授業で教材研究の仕方や指導案の書き方を学ぶだけでなく、指導の内容や自分の授業の仕方について意見がもらえたので、授業をつくる上で大変勉強になりました。実習先で授業をさせていただけることになったときも、この授業で教材研究や指導案作成の仕方が分かってきたので、以前よりそれらを行いやすくなったと感じます。

渡邊：そうですね。現職の先生と一緒に学ぶことにはそういうメリットもあるんですね。そういえば、授業や控室での様子などを見ていると、新卒院生は現職院生にいい意味でかわいがってもらえているというのがよく伝わってきました。みなさんととても仲良しで、一緒に研修会に参加したり、親睦旅行に行ったりもされたそうですけど、そういった機会を通じて自分の課題意識を現職教員にぶつけて鮮明になってきたとも言えそうですね。はい、お二人ともありがとうございました。(拍手とともに降壇)

この話から、実習で遭遇した身近な出来事や課題を教育実践研究で相談し、解決のヒントを得て実習で実践するといったサイクルのあることが分かる。また、共通科目や選択科目で学んだ内容を実習で抱いた課題意識と結び付けて実践するといったサイクルのあることも分かる。

ところで、この話で新卒院生が実習に結び付けている大学での学習内容は、理論というよりは知恵のレベルであって、体系立った理論を学習できているのかといった疑問が浮かぶかもしれない。専門職大学院であるからには、新卒院生の学習が知恵のレベルでとどまってしまっただけではいけないのである。しかし、体系立った理論が実践の知となるとき、まるで果実を搾ったエキスのような知恵として学習され伝承されることは珍しいことではない。したがって、新卒院生が実践と理論とを往還した学びを深める触媒として実践の知恵を得ていると考え、今後の課題探求を一層深めることを期待したい。

二人の話からは、新卒院生が現職教員と共に学ぶことのメリットもよく伝わってきた。報告会の昼食パーティーで、ある現職院生が「この現職院生と新卒院生とで学校をつくることができたら、どんなにかよい学校になると思う」と発言したとき、院生はみな拍手をした。同期の院生として共に課題解決の方略を探究するという点では、新卒院生と現職院生は同士・同僚である。また、教職経験ではフォロワーとリーダーの関係である。新卒院生にとっては、そのど

ちらも体験的に学習できることで、視野の広いバランスの取れた新採用教員になりやすいと思われる。

3 学校の一員になるということ

新卒院生が実習をどのように受け止めていたかについて、「××実習」と短いフレーズでネーミングし、その内容にふさわしい漢字一字を当てることを試みた。新卒院生と実務家教員とで開いた年始の懇親会の余興として行ったものだが、新卒院生が学校という組織・社会の一員になっていくプロセスがよく表れていたので紹介する。また、組織・社会の一員になることを促進し、新卒院生の成長を育んでくださった実習校の先生方の御配慮（それはこの紙面では書き尽くせないほどであるが）についても触れておく。

(1) 実習のネーミング

まず、課題発見実習（4月～7月、毎水曜日）についてである。

★まずは学校に慣れよう実習 【慣】

子どもも先生もよく分からなかったのでまずは慣れようと思いました。

★土台づくりと顔見せ実習 【悩】

児童や先生方に顔と名前を覚えてもらうのに精一杯で、自分の課題なんて考えられませんでした。

★先生にドギマギ実習 【緊】

週1回だったのでどう接したらよいかがなかなか分かりませんでした。

新卒院生にとって最初の関門は、顔と名前を覚えてもらうことと教員や児童生徒との人間関係を築くことである。しかし、それは決して易しいことではないということがよく伝わってくる。しかも、教師としての自己課題を発見するのがこの実習のメインテーマであったが、実際に現場に入ってみるとまともにできることはほとんどないわけで、やることなすことすべてが課題のように感じたのが実のところであろう。だから次のようなものまで出てくる。

★「課題って何？」を発見した実習 【謎】

特に解説はありません。このまんまです。

★自分の人生課題だらけ実習 【腐】

自分のこれまでの生き様を反省しました。

この二つのように、課題とは何かについて苦悩する自分や、学部の時にもっとまじめに取り組んでおけばよかったと後悔する自分を発見してしまう者も出てくるのである。新卒院生にとって、課題発見実習には学校という組織・社会の一員になるという大きな課題が潜んでいたことがよく分かる。

ところが、課題解決実習（8月最終週～9月末 毎日）の受け止め方はずいぶんと異なってくる。

★えらい気遣った実習 【疲】

授業の指導が怖いくらい厳しい先生に最後までムチャクチャ気を遣いました。感謝です！

★ダメ出し実習 【実】

子どもとの関係が深まったせいか、授業後に子どもからダメ出しされることも

ありました。勉強になりました。

「えらい気を遣った実習」からは、実習校の先生に自分が行う授業について厳しく温かく指導していただいたことがよく分かる。逆にいえば、それくらい指導していただけるほどに新卒院生が成長したということであり、実習校の教員との人間関係ができてきたということである。また、「ダメ出し実習」からは、児童生徒との人間関係を築くことに成功していることが分かる。

★担任がうらやましかった実習 【羨】

様々な場面で生徒とかかわれるし、衝突もあるけど、生徒の成長を間近に感じることができる担任が羨ましいと思いました。担任になりたい！

そして、教師の喜びをたくさん味わえる担任を羨ましく感じ、教職に就くことの決意を固くしているのである。

このように、「学校における実習」には、いかにして学校という組織・社会の一員になるかを体験的に学べる潜在カリキュラムもあると言えよう。

(2) 新卒院生の成長を育む実習校

次に示すのは、ある新卒院生が別の機会に実習を振り返ったものである。

地域との交流の中で、PTA 会長さんをはじめ、保護者の方や地域の方をとても身近に感じることができた。自転車で通勤する途中で地域の方から声をかけていただき、とてもうれしくて、自分も地域とつながりが持てたと思えた。

行事を行うにあたって、初めは教員が中心となって苦勞して企画・運営しなければならないと思っていた。しかし、実際に地域との交流をする中で、教員の努力だけでなく地域の方が快く協力してくださるおかげで成り立っている部分があると思えるようになった。あたたかい学校づくりをするには、あたたかい地域づくりをしていくことがとても重要だと感じた。

初々しい内容ではあるが、地域協働学校という特色ある学校で実習できた成果だと言える。

このような感想を持つことができたのも、また、新卒院生が実習校の一員として受け入れてもらったのも、実習校の先生方の多大な御配慮によるところが大きい。実習校の先生方は、例えば観劇会、音楽会、運動会、学習発表会、文化祭、清掃活動などの **on time** の行事が教員の一人として体験できるようにして下さっただけでなく、職員スポーツ親睦会、昼食会（給食のない日）、懇親会（夜）、土日の行事・部活動など、**off time** の活動にも誘って下さっている。いわば教師として一人前扱いをして下さったわけで、新卒院生はこうした生の体験を通して自己課題を鮮明にし、探究を深めていくことができたのである。さらに、新卒院生の中には実習校の先生から「あなたのことは同僚だと思っている」という声をかけてもらって大変勇気づけられた者もいる。実習校の先生方の御指導・御配慮にはいくら感謝しても足りない。紙面を借りて御礼申し上げる次第である。

（渡邊淳一 山崎光洋 笠原和彦 文責：渡邊淳一）

IV 成果発表に対する所見・評価 (H21. 3. 7)

1. 他大学等関係者

【小松郁夫玉川大学教職大学院教授】

失礼いたします。玉川大学の小松です。総評ということですが、まず私はそういう立場ではないということを申し上げたいと思います。私は、実は昨年3月まで文部科学省の国立教育政策研究所で教育政策の研究をしてまいりました。行政の立場で、日本の教育政策も含めてどうあるべきかということについて、中央行政の末端で専ら調査研究の仕事をしてきたという人間であります。昨年の4月から久々に教職大学院というところに移って、岡山大学と同じように1年間の経験をしてきたという立場の者でありますので、そういう点でご了解いただきながら話をしていきたいと思っております。

私自身は、三つほど今日の話に関連をして関わり合いを持っております。一つめは今申し上げました、教育政策や行政ということの実務といいますか、調査研究をやってきた者であります。さらに昨年の4月から、研究所を辞めた後に東京都足立区、人口65万人の23区の中でも大変大きな区で教育委員を引き受けて、これも間もなく1年が経ちます。そういう面でいうと、研究者をやりながら教育行政も、これも教育委員もほとんど事務局ではありませんので、大したことはできませんけども、最低月何回か事務局の人達と教育行政について関わるということをやってきました。二つめは、岡山の地域協働学校と関わることだと思っておりますが、学校に保護者や地域の人に関わるということについて、研究者として30年近くやっております。きっかけはイギリスの学校のマネジメント、学校経営を研究する中から、保護者や地域の人が公立学校の管理運営、教育活動、あるいは学校づくりに関わってくることに對して、なぜか大変興味を持ちました。1986年に最初にイギリスに留学をするのですが、その時のテーマとして、保護者・地域と一緒に公立学校をつくるとは一体どういうことなのかということの研究のために、1年間留学いたしました。

今、私は東京都杉並区の小学校と横浜市の中学校の、文部科学省でいう地域運営学校の学校運営協議会の会長を引き受けてやってきました。横浜の方は忙しくてなかなか毎月の会に出られないのですが、杉並区の小学校はほとんど毎月会議に出ると同時に、色々な行事にも出させていただいて、この地域運営学校についての研究をここ何年間かやってまいりました。実は、先程の岡山の学校にヒアリングに伺ったこともあります。さらに、去年4月からは3校目として京都の大原地区で、地域運営学校になったので理事になってほしいということで引き受けて1年間。こちらも、ほぼ毎月のように京都にまいりまして会議に出席をしています。この4月から、この大原の学校は小中一貫校になりまして、京都大原学院という新しい校名でスタートいたしました。これも地域の人達は、小中一貫校が皆学園だったので京都大原学園というネーミングをしていたのですが、私が「そんな陳腐な名前は止めよう。大原だったら三千院、寂光院と全部院でしょう」と言って、強引に最後の文字を園から院に変えさせました。しかも園と院は、教育的な考え方が随分違うのだと。園は基本的には楽しいという言葉のイメージで、国語辞典にもそうあります。それに対して院は、最悪のパターンだと少年院が院ですね。閉じ込めて鍛えるというものですから、「世間が何と言おうと、この小中一貫校はしっかりした学力

を付けて、躰もしてきちんと育てるのだということのメッセージを出しましょう」と強引に言って、且つ京都市では初めて小学生に制服を着せるということも行っています。ただし、その制服は三千院から何十万円もの寄付をもらって全額ただで子ども達に寄付をするという、埋蔵金のある地域であるものですから、そういったこともさせていただきました。

そういう面でいうと、この岡山大学教職大学院が地域協働学校との連携を大きな柱にされたということに対して、私はこれが一つの大きな特色なのだろうと思います。まさに岡山大学らしいという。今日発表を伺って最初の印象は、岡山大学らしいものがこの教職大学院の中でできているということです。その一つが、やはり優秀なスタッフを揃えていらして、私も何人か知っていますので、このアイディアはこの先生のもの、このアイディアはあの先生のもの、ということが何となく見えます。それはやはり岡山大学がこういう教授陣を揃えたが故の、先生方の顔が見える形というか、「この先生がいるから岡山大学の教職大学院はこういうことができているのだな」と感じられる部分です。逆にいうと、「〇〇先生がいなくなったらどうするのか」ということを若干心配いたしましたけれど、その時はその時として、非常に優秀なスタッフを揃えていて岡山大学らしいという印象が第一です。二つめは、非常に評価ということをしかりと押さえていらっしゃるということです。まさに自己評価がしかりと行われている教職大学院づくりだと実感いたしました。これもおそらくは、スタッフがそういうことを考えながらなさっていることだろうなと思っています。

中身の話で、三つほどかいつまんで申し上げたいと思います。一つめは、これは玉川大学教職大学院、あるいは岡山大学教職大学院もそうですし、新しい教職大学院という制度の目指すべきことの一つとして、私なりの言い方をすると、やはり知の構造化を目指すのだろうということです。これは佐藤先生の言葉を借りれば、専門職、プロフェッショナルを育てる場合の、単なる理論ではなく、まさに現場に即した実践的な知恵をどういう風に理論的な知と結びつけるのか。このことが、試行錯誤から始まり、この岡山大学ではかなりカリキュラムの中に構造化されつつある。それが非常に意識されています。その背景は、例えばこれからの社会がよくなるように、知識基盤社会になっていく。また、午後の研究科長の話にありましたことであると、多様性、あるいは大学のカリキュラムにあった課題発見といったようなキーワードを押さえた上で、まさに教職大学院らしい知の教授、演習ということが行われているということをおもいました。

二つめのキーワードは、やはり地域です。学校が、特に義務教育学校を中心で考えれば、学校と地域の問題、それから北神先生が提案者の一人だと聞きましたが、その地域をどう発展させるか、あるいはその地域をどう興していくかといったときに、それをこれから支えてくれる子ども達がしっかりしていなければいけない。あるいはその子ども達を育てるために、学校地域の垣根なく、どういう風に関わるのか、そういうことがこの岡山の中で、岡山らしい形でできていると。これが私の関わっている、例えば横浜の中学校、新興住宅街で、大体家が最低でも5千万するようなところにつくった学校だと、かなり違います。また、杉並区の小学校のように地域の人達が70数年前に寄付をしてつくった、しかし今は東京の杉並の高級住宅街の中にあるのですが、この杉並区の学校はもちろん、東京都は全国の中でも大変レベルの高い、学力の高い学校になってきています。小学校6年生の半分以上が受験をして区立の中学校に進学をしないという東京のような特殊性の中だと、この小学校ではそれが一つの姿だと。逆にいうと、

小学校では算数とか国語とかの受験的な学力ではないものをしっかりと教えるということが学校でできている。この学校の自慢は、総合的な学習をかなりしっかりやってきて、校長先生の言い方でいうと、徳・知・体のバランスがとれているということです。普通は知・徳・体という順番であるところを、特を最初に持ってきているという形や、教科が孤立しないでまさに教科横断型の授業がされている。こういう点でいうと、その地域地域にあった教育が、これからの教師には必要なものだという風に押さえられているのだらうなと思います。

三つめは、個人も組織も成長という概念でカリキュラムや実践が考えられている。それは大学院にいらっしゃる間はもちろんのこと、現場に戻られてからも、自分が教師としての職務成長をすることが学校の組織の成長につながっていくということを踏まえた、あるいはそういうことができる先生方を育てていらっしゃるのではないだろうかということを、今日伺った中で私は感じました。お互いにまだ1年目で、今後この人達がどういう風に育っていくのか。玉川大学の違いでいうと、例えば玉川大学では、実習は10週連続で学校に出します。特にストレートマスターはそういう形でやっています、1年目の後期はほとんど授業がない形でした。ストレートと現職が玉川大学にもいますので、現職の人は「せっかく学校の現場を離れて初任者の指導をしなくてもいいと思ったら、大学院に来て初任者の指導をしなきゃいけないのか」とぼやきながらも、割合仲良くやっています。ただ私達は、やはりストレートマスターと現職はかなり違うということで、来年度は2年目なのでまだカリキュラムがいじれませんが、3年目に入ってカリキュラムの改定ができることをにらんで、大幅に授業の見直しをする予定で、今は既にカリキュラム委員会の中で検討をしております。一番つまらないレベルでいうと、先程の昼食会のようなことのマネジメントをきちんとできる教師を育てるということですね。そろそろ終わり、という頃合いになったら、さっさと片付けて午後のセッションに移れるようにというような、そんなことの気配りをきちんとできる教師を育てるということや、マスコミへの対応や親への対応をどうすべきかということをもう少し実務的にやろうかといったことも考えたりしています。そういうあまりアカデミックではないカリキュラムも含めてですが、一方で、私はいわゆる実務家教員ではありませんので、やはり大学院としてのレベルの高さは下げるべきではないと思います。先程、論文を書かせるか書かせないか、どう書かせるかといった話があったと思います。今年1年は私も十分指導ができなかったのですが、たまたま私が受け持った現職の教員が私のところで学校評価の論文を書かれた時に、他の先生からも「現職の教員の中では一番レベルが高い院生だね」と言っていたので、今年の6月の私が関わっている学会と一緒に発表しようと考えています。彼女も、将来はできれば自分も一旦現場に戻るけれども何年か後には実務家教員として大学院で教えられるような教員になりたいということです。4月からは指導主事になるらしいのでそんな暇があるのかどうか分かりませんが、玉川大学としては、現場に行ってから大学院とのつながりを重視しようということを考えてやってきました。

玉川大学は東京都がメインですが、その他に神奈川県横浜、川崎の二つの政令市からも院生として教員が来ています。ちょうど玉川大学がそういうエリアにありますので。それからたまたま今年、札幌の教員が休職をして来ています。その辺でいうと、東京にばかり焦点を当てると、他から来た人達に不満が出てきますので、岡山大学とは少し事情が違うかと。逆にそれを活かしてあげたいと思っています。神奈川県教師と東京都教師が議論をすることを通

して、自分の県だけに収まらない、他の県のことにも分かるように、ということをしています。関連する取組でいうと、たまたま機会があって、私が研究代表者で、文部科学省から学校評価に関わる委託研究ということで約1千万円いただいてさせていただきました。実務家の先生達にも全国に行っていただき、大学院生も連れて全国の学校にヒアリングに行くということをやらせていただきました。それからもう一つは、これは私自身の個人的なことと関わりますが、どうせ1年間いるのだから外国の学校に行こうということで、昨年9月、10日間ほど私と希望した3人の大学院生がイギリスの学校訪問に行くということをやりました。

それぞれの大学院が持っている人材を活用して、どういう教師を育てるのか、どういう現職の先生を受け入れてもう一回現場に帰すのかということは、それぞれの教職大学院の大きな課題であると同時に、今それが大変注目をされていると思っています。今後はどういう形になるか分かりませんが、現在ある教職大学院が横の連携をとりながら、日本の教師の、個人として同時に組織人としての指導力の向上に貢献できれば、やや危ない日本の教育に関して我々教育界からしっかりと答えを出すことができるのではないかと。その意味では我々が担わなければいけない責任は非常に大きいと思いますし、同時にそのことを大学院生と一緒にやっていくということも課題と思っています。

私の、岡山大学教職大学院の実践あるいは研究の、総評というよりは感想的なことでも言わせていただくと、非常に素晴らしいものがあり、私が玉川に帰りましたらこれをお伝えすると同時に、ぜひ一緒に日本の教育あるいは日本の教師達のために一緒に仕事ができればと思っ、話を伺っておりました。こういう機会をいただいたことに対して改めてお礼を申し上げたいと思います。と同時に、また明日以降研究を進めていければと思っております。

最後にもう一言。先程佐藤先生の話をお伺いしましたが、北神先生は私にほぼ近い後輩ですけれど、佐藤先生は大分離れた後輩で、大学院生時代の佐藤先生を見ていて、その時は彼がアートを語るなんて想像もできませんでした。セオリーを語るということは極めてよく分かって、この人は優秀な研究者になるだろうなと思っていたのですが。佐藤先生からアートなんて言葉が出てきたのですから、岡山大学が大変に、まず大学院生よりも教師を育ててくださったなと思って、ほとほと感心いたしました。彼の話はとても面白くて、いつも色々教えていただいております。本人には失礼かもしれませんが、そういう先生達に院生が学ぶことができるということはいいことだと、私もできればまた大学院に戻って勉強したいなと思い始めながら、お話を伺っておりました。今日は本当にどうもありがとうございました。

【国士舘大学教授 北神正行先生】

色々な先生から度々名前が出ましたが、実は昨年3月までこちらにお世話になっておりました。教職大学院を作るところまでは責任を持ったのですが、できてからはもう外へ出てしまったというところなんです。

本日の発表を午前中から聞かせていただいて、感想を持たせていただきました。一つはやはり、失礼ですけど、院生の方がこの1年で急成長されたということです。伸び代があったのだなと思いました。そういう学生をとれたということと、その伸び代を最大限引き出すことが

できた大学の先生方、そして実習校や、送り出していただいた勤務先の学校のサポートがあったからこそ、これができたのだろうなど、そのような感想をまず持たせていただきました。

確かに制度設計をしていた昨年段階では、あくまでも机上のプランだったのですね。こんなことができたらいいたとかこういう人材を目指すのだということはもう作文レベルで、いかに文部科学省と設置審を納得させるかという形で力を注いできました。僕は、1年目は作ったプランをどう具現化するかという段階に入ったところで、相当大学の方がご苦労された部分があったと思うのですね。プランというのはあくまでもプランであって、中身はやはりこの1年間から伴うものです。ただそれにあわせて、ちょうどこのGPが2年間、教職大学院スタートの1年前から動いたということがあって、おそらく岡山大学ならではの特色をこの1年間、フルに発揮できたのではないかとも思います。

ではその岡山大学の特色とは何かというと、他の教職大学院と比較すると、一つは学校支援機能を中核に持った形の中で地域貢献、さらには派遣された現職院生の勤務校の学校力の向上と連携したいということ。また、新卒の学生については、岡山市内の地域協働学校と連携をする中で、院生を育てるだけではなくて、いかにその学校が抱えている課題解決を大学院が連携して協力できるかどうかという部分が、やはり岡山大学の最大の特徴としてあったのだろうと思います。そのことは、今発表を聞いていても、うまく花が開いてきたのではないのでしょうか。

特にそれは、学校支援だけではなくて、大学側の教育研究能力の向上にも相当つながっているのではないかと思います。大学教員の変容という部分もあります。やはり大学教員が現場に出ることによって、初めて現場の課題を大学教員が発見できるということもある。その意味では相互の連携、相互ではなくて、学部長曰くトリニティ改革という形ですね。トリニティというのは、学部研究、既存の研究。それは教職大学院だけではなくて、大学と学校と教育委員会、さらには大学教員と院生と現場の先生と、色々な意味でトリニティという形の部分が動いている。そういう部分が、2番目の特徴としてあったのだと思います。

それとやはり教職大学院は、課題解決能力を育成するということに特化する形で、プログラムを組んでいる。私は、専門職大学院や専門職養成にとっての鍵は何かというと、専門的な判断能力をいかに上げられるかだと考えているのですね。誰でも判断はできる。その判断のレベルと質をどう上げられるかが、まさに専門職かどうかということの判断の見極めになるはず。ではその、いわゆるプロフェッショナル・ジャッジメントというのですが、プロフェッショナル・ジャッジメントという部分をいかに大学の講義と実習と課題の中で向上させていくか。約1年が終わって、こういう形で2年間のGPの検証と、そして1年終わったところの教職大学院の総括がされて、次年度に向けてまた新たなスタートが切られると考えます。

おそらく、一つの形が決まるには3年は最低かかると思うのですね。今年の院生は1期生ですから、優秀な方が集まってきているはずですが。2期目はもっと優秀でなければいけないというプレッシャーの中で、やはり最初の3年間で、それぞれの研究会、大学院を新たにした時の形を作る。これはもう教員側も一緒です。その意味では、この3年間の間にいかに基礎固めをしていただいて、岡山大学ならではの特色を全国発信という形の中でやっていただけるか。出て行った人間がこんなことを言うのは非常に心苦しい部分があるのですけれども、大きな期待と関心を持たせていただいて、また機会があれば見せていただきたいと思います。本日は本当に、一日どうもありがとうございました。

【高田清福岡教育大学教授】

この4月から第2期として教職大学院を出発します。岡山大学は第1期ですけれども、こちらでもう残り1ヶ月を切っております。この時期、全国の教職大学院で公開シンポジウムや発表会が開かれているので、皆で分担してあちこち行っています。そして、私もいくつか発表会に参加しているのですが、それぞれの大学が非常に独自の取組をしているというのが印象です。中教審の答申は、内容的にもかなりがっちり決められたものがあったものですから、同じような形になるかと予想されたのですが、実際にあちこちらの教職大学院を見て回ると、実に多様な形で教職大学院がつくられているという印象を持ちました。従ってやはり、まだないのですけれども、全国の教職大学院が連合教育機関のようなものを作って、そこでそれぞれのよいものを取り入れていくというようなことも必要なのかなということも思っています。

あと1ヶ月切っているということで私が一番関心を持っているのは、かなり具体的な、細かな小さなことだったりします。例えば予算はどう配分しているのかとか、そういうところに関心があるのですが、今日のシンポジウムを聞かせていただくと、指導体制や実習の在り方というのは、やはり私達が今予定していることとはかなり違ったものがあって、非常に多様であると。多様であるだけに、学ぶ点が実にたくさんあったと思います。

それから、もちろんかなり違いますから、そのまま学ぶことはできないのですが、検討しなければいけない課題がいくつか見えてきたという感じがいたしました。一つめは、午前中の発表の中で感じたのですが、現任校との関係ですね。現任校の校長先生からのお話もありましたし、院生の方からのお話もありましたが、現任校の課題を背負って教職大学院に来る。現任校の方もそこで何か学んでくることに非常に大きな期待を持っている。そういう意味では関係が非常に密接であるということを感じました。我々のところでそれだけの環境を作り得るのかどうかということで、私達も課題の一つははっきりしたところがあります。特に実習に関わってですが、こちらの教職大学院の実習は、附属と地元の連携協力校で行います。宗像区というのですが、宗像市、福津市の小中学校全32校を連携協力校にしているのです。私達は32校全部回り、こういう実習をやりたいと説明しました。今日、「実習は現任校であるのですか」と聞いたら、実習はないとのことでしたが、福岡教育大学では中堅の人達にも全部実習を課しています。これをどういう形で、各学校の持っている課題を背負って実習に行くかということを考えなければいけないと感じました。

そしてもう一つは、午後の発表の中で、実習の成果を個人的なものに留めるのではなく、それを持ち帰って大学の授業で皆で検討して、そこでまた次の実習に持って行くという、このサイクルを作っていらっしゃるところがありました。我々も最初に計画を立てた時は一緒だったのです。つまり実習と授業とを密接に結びつけてカリキュラムを組みたいとしていたら、文部科学省に持っていった時に単位のダブルカウントだと言われて、切り離さなければいけなくなった。それを岡山大学ではこういう形で取り組んでいるのかということで、これもまた勉強になりました。

今日一番聞きたかったのは、1年間やってみて、院生の方達がそれをどういう風に受けとめているのかでした。今日のこのシンポジウムの中で、先生の発表と同時に院生の方も発表されて、それをどう受け止めているかが聞けたということは非常に面白かったです。特に渡邊先生の報告の中の、院生が実習を受けてそれをどう受けとめたか、〇〇実習という名前をつけなさ

いというところ、これが非常に面白かったですね。院生がどう受け止めたのかが実に素直に表現されている。院生が本当に肯定的に、あるいはマイナスの課題を受け止めた部分もあっても、それをどういう風に表現したかというところで非常に面白いと思いました。それが聞けたことが一つの成果だったと思います。本当に学ぶことの多かったシンポジウムだったと思います。どうもありがとうございました。

【梶原憲次独立行政法人日本学生支援機構参与】

日本学生支援機構の参与をやっております梶原でございます。私がここに呼ばれましたのは、平成18年4月から2年間、岡山大学の理事並びに事務局長をさせていただきました縁でございます。その前は上越教育大学で、教職大学院の設置に向けて学長や先生方と色々議論を進めてまいりました。こちらにまいりました時、ちょうど教育学部で教職大学院を設置するということもございまして、学長にも「ぜひ設置するんだ」、あるいは高橋研究科長にも、「先生、二番煎じは駄目ですよ、絶対に一番に作らないといけませんよ」と、私はただ口を出しただけでございます。

今日、大学の先生方、県の教育委員会、市の関係者の皆様、また現場の校長先生からも色々お話を聞きましたが、午前中の現職の院生さん、新卒の院生さんのお話を聞いて、やはり素晴らしいなと思いました。この数ヶ月でこれだけのことをしっかり実践されているということは、やはり学校現場で学ぶ子ども達が素晴らしい先生に学べるということで、いい人材が育成されていくのではないかと考えております。

先程から評価という話が出ていますが、教員評価を全国に先駆けて導入したのが岡山大学でございます。それで色々ないいことをされています。学生さんの授業参画でもGPをとりまして、全国に先駆けて行いました。そういういい先生がいらっしゃるわけでもございまして、当然、教職大学院にもいい先生がいらっしゃいます。けれども、それを学んでいくのはここに入ってくる院生さんでございます。やはりその方々が自分のものとして学んでいただいて、学校現場でそれを実践していただく、これが岡山県の教育に貢献し発展したのではないかと考えております。岡山大学の教職大学院がますます発展されることをお祈りしまして、簡単ではございますが、ご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

2. 県教育委員会

【乙部憲彦岡山県教育委員会指導課総括副参事】

失礼いたします。先程大学の先生方からの最後の報告を聞きまして、教育委員会としても大変嬉しく思っております。特に現職の先生方の成果等も確認させていただきまして、大変頼もしく思いました。逆に、我々に今度送り出す側としての責任というものも突きつけられたなど思っております。

一点だけ、岡山市の方からの話の中にも出てまいりましたけれども、異校種の経験や体験、これは大変大事だと思っております。特に学校の中に色々な方が入ってこられるようになっていきます。今年度から、岡山県もインターンシップを少し組織的にということで、大学生のインターンシップといった事業も進めてまいりました。その事業と教職大学院の方が入られているところとの大きな違いというのは、やはり裏付けされた理論です。インターンシップだけで単なる受け身だというのは、非常に中身が薄いものになってきております。ただ、我々としても充実していかなければならないと思っております。特に大学3年生、4年生のインターンシップの実習、その辺りのものも受け入れている。その辺りが次の課題なのだろうと思っております。その中で、お互いの学び合いが発展して、益々岡山県の教育が向上していけばと思っております。

今日のお話を聞きまして、来年度に向けて、県の行政としてどのようにしていくか、その辺りのご示唆もいただいたと思っております。これを持ち帰りまして、また次年度につなげていきたいと思っております。今日はどうもありがとうございました。

3. 市教育委員会

【長瀬尚樹岡山市教育委員会指導課課長補佐】

失礼いたします。岡山市教育委員会指導課の長瀬と申します。サブテーマに地域協働学校という名前をつけていただいています。おそらく国の制度で言いますと、地域運営学校ということで、いわゆるコミュニティスクールですね。岡山市版のコミュニティスクールということで、地域協働学校という名前を使わせていただいております。コラボレートということが非常に大事であろうということが、このネーミングのスタートだと思います。

では、この地域協働学校の源泉がどこにあるのかについて。平成11年でしたか、ミレニアムプロジェクトとして、今日お見えになっています北神先生を総括する立場にいただき、市内の二つの中学校と五つの小学校をいかに統廃合して、数合わせだけでない新しい魅力ある学校をつくっていくかという流れの中で出てきたのが、小中の一貫した教育でした。その時点で、岡山市教育委員会としても、まだ義務教育期間の小中の接続、連携というところの域を出なかった。ところが、北神先生はその時に、学びの連続性と地域の一貫性ということを強く主張してくださいました。子ども達はいずれ地域に帰ってくる、ではこの地域で学ぶということをどう保証していくのか、ということが先生から最後に課題として突きつけられた部分であったように記憶しています。

これを上手く実践の中で活かすことができないだろうか、そういう貴重なご示唆をいただいたことを何とか次につなげていけないかというところで、たまたま文部科学省が「新しいタイプの学校運営の在り方に関する実践研究」を平成14年度から始めました。北神先生がおっしゃったのが平成12～14年の3年間であったと思いますが、その後を受けて、やはり地域を巻き込みながら学校運営をどう考えていくか本気で取り組もうということで、市内中心部のある一中学校区をモデル校としまして、3年間の取組を行ってまいりました。既にこの学校は皆さんもよくご存知の学校だと思えますが、非常に深刻な教育課題が突きつけられていた学校で、地域のイベントから始まり、何とか地域の方を学校の中に取り入れながら再生を図ろうとしていました。この学校が最後に行き着いたのが、やはりこの地域協働学校ということ。3年間、時間がかかりましたが、3年経ってこの中学校区が出した結論が、やはり中学校区で物事を考えていかないと駄目だということです。その中で多様な人が関わるのが大切なのだと。その後、2年間継続したコミュニティスクール推進事業という国の事業を受けていただく中で、最後に行き着いたのは、やはり最後は授業だということです。この学校は今授業改革に向けて取り組んでいます。5年間かかりましたが、最終的にたどり着いた場所が授業づくり、授業改革だった。その授業改革の、授業で勝負する基盤づくりとして、地域協働学校というのが有効な手だてなのだということが分かってまいりました。

そういった経緯を踏まえながら、現在岡山市では7中学校区35校園を地域協働学校として指定しております。来年は、本日もお見えになっている岡山市立操南中学校、その他2校入れまして10中学校区ということになります。実は、コミュニティスクールの指定は京都市が一番多くて、110校くらいの指定になります。その次は出雲市。出雲市は全学校が指定されているので、今49校くらいです。岡山市が今35校なのですが、来年は出雲市を抜いて岡山市が、数だけでは全国第2番目のコミュニティスクールの指定を持っている地域ということになります。

そういう有効な手だてとしての地域協働学校をいかに活かしていくかということで、例えば今岡山市立石井中学校へ大学院生の方が入っていらっしゃるんですが、入ることのよさは何かという、地域がやはり、学校をサポートするだけではなくて実は教師を育てている。そして生徒を育てているということです。その典型例が、最初に指定した岡山市立岡輝中学校区に生まれたシニアスクールという、シニアの方で構成された教室です。こういう、ある意味異質な方が学校の中に入ることによって、子ども達はその方々の学ぶ意欲に触発され、自分達も頑張ろうという気持ちを起こします。一方教員も、実はこのシニアを教えていらっしゃるの、もう退職された、いわゆるスーパーティーチャーのような方々がケアをしようといらっしゃっているのですが、そういう中で我々も頑張らなくては行けないと、当初は反発も多かった異質なものが入ってきたことが、結局は大きな授業改革の舵取りにつながっていく。実は我々も、こういった学校の関係者以外のツールが入ってくるということは非常に歓迎しております。そういった意味において、これから教職大学院とのコラボレーションが期待できるという風に思っているところです。

ただ課題をもし挙げるとすれば、学校の受け方の問題があると思います。当然、教職大学院の方は目当て意識を持って、課題も焦点化されて、課題の解決を図るため、あるいは課題を発見するためという明確な目的を持って学校に入られていますが、受ける学校側には、今はもうこういう時代ですから、色々な立場で入って来ている学生がいます。そういう学生との、いわゆる差別化をどう図っていくかということと同時に、この学生の落差をいかに解消していくか。要するに、入ってくるインターンシップ学生達の同僚性をいかに担保してやるかということも、今後は少し考えていかないと行けないのではないかと。それから一番大事なことは、やはり学校側は、まだインターンシップ学生をある意味お客様として扱っているし、誤解を恐れずに言えば、いいように使っているという部分もあります。学生さんによっては、本当は授業をしたかったり研究協議に加わりたかったりするのだけれど、ずっと特別支援のことだけをして、跳ね回る子ども達の世話を一日させられていたという逆転現象も起きている。その中で、こういった本当に意欲を持って入ってくる学生の方々を、いかに満足して、それから自信とやる気を持ってもう一回現場へ向かう力をつけて帰してあげるかということは、これは多分行政に突きつけられている今度の新しい課題ではないかと思うところです。

もう一つ我々が期待しているのは、私の個人的意見かもしれませんが、こういう地域協働学校と教職大学院とのコラボレートができることが、第三者評価としての大きな機能を持っているのではないかと。今年から自己評価書を、今私も受け付けているところですが、やはりこの自己評価の分析はまだ甘い部分がある。それから、立てられている改善方策というのも非常に抽象的です。これをいかに具体化・焦点化し、重点として教育課程の中に組み込んでいくか。仮説を立てる段階での正当性や検証する時の妥当性といったところを、大学の先生方のご示唆もいただきながら、一緒に学校経営プランのようなものも提案していける形になっていったらいいなということをおぼろげながら感じています。そういう意味もあって、あえて地域運営学校ではなく、地域協働学校という言葉を使っている教職大学院の意図を我々もしっかり受けとめながら、来年度以降のまた新しい学校づくりに励んでいきたいと感じています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

4. 実習校代表

【池田智則岡山市立石井中学校長】

失礼いたします。岡山市立石井中学校の池田と申します。どうぞよろしく願いいたします。本校は先程紹介いただきましたように、地域協働学校を進めている、それによってよりよい教育を提供していこうという学校の一つです。この場ではその視点でお話ししますので、多分ピントがずれた話になるかと思いますが、お許しいただければと思います。

今年度、2名の方をお迎えいたしました。もうご存知のように、最初は毎週水曜日、課題発見実習ということで13~14回程度おいでいただきました。本校としては、多くの人に入っていただくというのは本当に嬉しいことです。話が逸れますけれども、学校支援ボランティアという形で地域の方、岡山大学の学生さんにも大変お世話になっています。学習の支援、補助や部活動のお世話、保健室の補助、そういった様々なところでお世話をいただきながら、教育を進めております。少し観点が違うかもしれませんが、そういった意味では、人がどんどん入ってきていただくことは本当に嬉しいことです。それから、指導してくださる実務家教員の先生方にも来ていただいて、子ども達に声をかけていただいたという場面が多々ありました。本当に嬉しかったです。子ども達も刺激を受けましたし、同時に教員がとてもいい刺激を受ける機会を与えていただきました。非常にありがたかったと思っています。

それから、来られた二人は早朝から、例えば私が7時半頃学校へ行くわけですが、そうしたらもう生徒の昇降口の辺りで、雨の日の翌日でしたら砂が上がっているのを丹念に掃いてくれるながら子ども達を迎えてくれている、というスタートを切ってくれていました。それから授業はもちろんのこと、放課後の部活動や職員会議にも出てもらったり、学年会の方にも出席してもらったりというような、本当に積極的な入り方をさせていただきましたので、本当に同僚に近い形で学校での実習が行われたのではないかと思います。これは二人の意気込みの成果だと私は思っています。

しかし、実際に学校としてはどれだけ支援ができたのかということと言いますと、本当にできておりません。ただフィールドをお貸ししたという程度かなということ、今振り返ってみますと、申し訳なかったと思っています。いわばスーパー学校支援ボランティアのような、先程長瀬先生もおっしゃいましたが、いいように使わせてもらったという部分は確かにあったと思います。お詫びしたいと思います。

さて本題に入りますけども、地域協働学校が実習校ということで、共通科目の他に、他にどうかその中にも大きく入っているのかもしれませんが、地域協働という部分が一つ柱としてあったのかなと思っています。果たしてその辺が院生の課題になり得たのか、課題解決の糸口につながったのかということ考えてみますと、その辺りはやはり共通科目から少し外れかけている部分であったのかなと、私個人としては思っています。従って、その辺りを課題として挙げられた方は多分ほとんどいなかったのではないかなと思えるわけです。その部分と地域協働学校とのつながりはどうなのか、今後どうなっていくのか、おぼろげながら疑問も持っているということです。

その辺が課題として挙げられなかった原因としていくつか考えられるのですが、一つはカリキュラム自体、今回のように毎週水曜日を13~14回ということであれば、その毎週水曜日という

固定的な曜日の計時的な学校の動きや変化は捉えやすいです。例えばその日であれば職員会議が入ったりしますので、その面でのメリットは大きかったと思いますが、月曜日や金曜日でない経験できないことはやはりありますし、連続して学校を見ていただく中でないと課題がなかなか見つけにくいという部分もあるのではないかと思います。大学のカリキュラムの関係でそれは難しいのかもしれませんが、また今後の課題であるかなと捉えております。それから、地域協働学校として、本校が取り組んでおりますのは、学校支援ボランティアが一つあります。木曜日、これは本校の事情ですけれども、木曜日の教育課程外の時間を使いまして、基礎基本ということで、子ども達が自分の力を知ってさらにそれを伸ばそうという個別の勉強をする時間を設けています。それに地域の方や大学生にどんどん入っていただいて、極力マンツーマンになるようにということで、現在は30数名来ていただいております。その部分は、水曜日でしたら見ることはできなかったということもあります。それから地域との絡みでの行事や会合、そういうつながりはやはり土日であったり、夜であったり、水曜日以外の日がほとんどですので、なかなかそういう部分を感じていただけなかったかなという反省もあります。そういったところが地域協働学校という辺りでの課題という部分につながりにくかったかなと思っているところです。

最後に、1年目のカリキュラムと中学校の現場という視点で少しお話をしますと、これは先程の話にも重なるのですが、毎週水曜日という中からは見えにくいものもあったかなということが一つですね。それから、課題解決実習の期間が5週間ほどあったと思いますが、本校の実態からいえば、ちょうどその時期が地域を巻き込んでの文化祭の準備の真っ最中で、発表の日も9月でしたので、来られた方々の、授業で勝負をしていく、解決をしていく、足がかりをつくっていく、というそれらの時間保証をなかなかさせてあげられなかったという部分があります。ですから本校でいうと、その8月終わりから9月の下旬までという辺りが難しい部分かなということ、それからその期間でやはり解決というところには、皆さんご存知のように全然至りませんで、その足がかりが少しでも見えたらというような期間であったかなと。本来であれば、もう少し期間的にあれば課題解決していただくための充実した期間があったかなと思います。以上、とりとめのない話をしましたけれども、終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

V 研究成果報告一覧

1. 検証分析の原理と考察

1) 研究成果発表一覧

本教職大学院 GP の研究推進に伴って得られた知見・成果をまとめ、平成 20 年度には教育系学会・協会の講演論文集並びに研究誌へ投稿し公表した。その一覧を以下に列挙する。

- (1) 稲田佳彦、住野好久、高橋香代、橋ヶ谷佳正、小山朝子、泊直希、近藤勲 (2008. 7. 5): 教職大学院の学部新卒者を想定した「学校における課題発見実習」の試行の一検討, pp. 69-76, 日本教育工学会研究報告集 JST08-3, 日本教育工学会
＜会場：金沢大学教育学部＞
- (2) 稲田佳彦、住野好久、高橋香代、橋ヶ谷佳正、小山朝子、泊直希、近藤勲 (2008. 8. 23): 教職大学院生を想定した教育実習日誌の分析結果とその可視化の検討, pp. 265-266, 日本科学教育学会第 32 回年会論文集 2008, 日本科学教育学会
＜会場：岡山理科大学＞
- (3) 稲田佳彦、住野好久、高橋香代、橋ヶ谷佳正、小山朝子、泊直希、近藤勲 (2008. 10. 11): 教職大学院専用遠隔教育研究指導システムの開発と試用結果の考察, pp. 251-252, 日本教育工学会第 24 回全国大会講演論文集 JSET 24, 日本教育工学会
＜会場：上越教育大学＞
- (4) 住野好久・黒崎東洋郎・小野擴男・橋ヶ谷佳正・稲田佳彦・笠原和彦・中尾道子・仲矢明孝・山崎光洋・渡邊淳一・泊直希・横山真由子・近藤勲 (2009. 3): 岡山大学教職大学院における新卒院生の課題発見実習とその成果に関する研究, pp. 175-190, 日本教育大学協会研究年報 第 27 集, 日本教育大学協会

2) 研究成果の抽出・処理方法

以上列挙した 4 篇の研究成果をまとめるに当たって、考案あるいは採用した分析手法について、以下に述べる。

2) - 1 前提

分析・集計に当たっては、以下の 4 つの事項を前提とした。

- (1) 体験・経験の件数が多いことは、力量形成に実効あると看做される。
- (2) 体験・経験の件数が多いことは、実習校の担当教員・同僚から信頼されている証左である。
- (3) 限られた空白に記述する内容は、特筆される強烈な印象、あるいは省察し特に伝えたいことに限定される。
- (4) 表 1 に示すように学生一人ひとりの課題目標・意識が異なるので、到達評価は個人(個別)評価とし、かつ、プロセスが重視される。

2) - 2 意図

「課題発見実習」並びに「課題解決実習」の成果について可視化を図ることによって、実習

生である新卒院生（以後、院生という）自身のみならず企画実施者である指導教員が実施内容・方法の成果と今後の改善点等について共通認識を得る。これらの実習では院生は大学及び実習校の指導教員と直接対面により指導助言を受けるだけでなく、2つの実習とそれぞれ一対をなす演習形式の「教育実践研究Ⅰ（課題発見）」並びに「同Ⅱ（課題解決）」を受講する。ここでは、後述の共通科目5領域と理論の裏づけと枠組みを関連付けながら、集団リフレクションを通して、実践と理論の往還、融合、還元の相互作用を経て理論づけ・体系付けを行なう。このような循環系は、デマンドサイドのニーズに応えるカリキュラムを標榜する本教職大学院の理念そのものである。

2) - 3 実習日誌

前述の2つの実習「課題発見実習」並びに「課題解決実習」において、新卒院生には「実習日誌」を毎回あるいは毎日提出することを義務づけた。「実習日誌」の提出に当たっては、本教職大学院専用のSNS（Social Networking Service）「こらみゆ」が利用された。「こらみゆ」はSNSエンジンの一つである「OpenPNE」を本教職大学院専用カスタマイズした情報通信システムである。つまり、テキスト及び画像ファイルを添付することができるWeb上のコミュニケーションシステムである。各実習生である院生から実習日における実習記録が「こらみゆ」に投稿されると、大学の指導教員のみならず院生全員が随時閲覧できるので、情報の共有が即座に実現される。閲覧結果にもとづいた所見あるいは指導助言内容が「こらみゆ」に投稿されると、もとの投稿者である院生は直ぐに閲覧できる。指導助言に対して院生から何度でも再投稿できる。もちろん、指導教員も閲覧・投稿を繰り返すことができる。

「実習日誌」に記述された字数は約600字～約4200字の範囲であった。そして、実習報告書に言及される内容は、1日の実習における学校の授業時間割、学級・学校行事、児童・生徒との対話、院生自身の省察に基づく内面描写等に及ぶ。限られた紙面（字数）に実習内容を記述する場合、実習生である院生が特に重視したこと、印象に残ったことなどに限定されると仮定した。つまり、院生自身の心の内奥又はその一端が顕在化されていると看做した。

2) - 4 処理の枠組み

「実習日誌」を精読して一人一人の日々の実習内容を分析するに当たって、以下の認知・意識面と行動・活動面の2面について、それぞれ3つの段階を設けた。実習日誌に記述された内容分析には、質的研究の一つの手法である文脈解析法（context analysis method）を適用した。

1) 認知・意識面

- (1) 「再認・再生」
- (2) 「発見」
- (3) 「意識の変容」

2) 行動・活動面

- (1) 「参加」
- (2) 「参画」
- (3) 「自立行動」

これらのそれぞれ3段階については、「実習日誌」に記述された内容を深化の視点から汎化させ概要事例とし、文脈解析の際の弁別を容易にした。それを表6-1に示す。

表 6-1 文脈解析の枠組み

領域	段階	分類	評点	分類項目の概要事例
認知・意識面の深化の段階	1	再認・再生	1.0	<ul style="list-style-type: none"> ・学部レベルでの教育実習で事前指導並びに附属学校・実習協力校における教育実習で指導教員から指示され聞かされていたことを思い出す。 ・専任教員は板書する際、子どもが読み易くなるように黒板を2分割あるいは3分割して使っている。 ・教材研究を十分やらないと想定通りの授業運営は思うようにできない。
	2	発見	1.5	<ul style="list-style-type: none"> ・授業内容を的確に理解している子どもは、板書を漫然とノートに転記するのではなく、自分なりに工夫して見やすく書きまとめていることに気づいた。 ・授業内容を一度自分なりに反芻し体系づけて書きまとめている実態に気づいた。 ・教員は授業ばかりでなく校務分掌や会議等やることが多く、実に多忙である。 ・教員は運動会・文化祭など学校行事や委員会活動で互いに都合をつけ助け合っている。 ・台風時の対応は学校独自に判断するだけでなく教育委員会が主要な対策を立て周知徹底を図っている。
	3	意識の変容	2.0	<ul style="list-style-type: none"> ・単に板書するだけでなく、板書に当たっては、子どもが転記し易くなるように黒板面の利用に留意する。 ・授業運営を円滑に、且つ、活気溢れる雰囲気で行うためには、単に教材研究を行うだけでは十分でなく、子どもとの信頼感に裏打ちされた堅固な人間関係ができ上がらなければならない。つまり学級経営が適切にできなければ、授業そのものも円滑にできないと思った。 ・子どもの方からの挨拶や声かけを期待して待つ姿勢であったが、自分から声かけをすると、以後、話がし易くなるので、積極的に話しかけることにした。 ・低学年の子どもに対しては、授業などで指示する内容を順序良く、且つ、一度に二つ以上のことを指示しない。口頭で伝えるだけでなく、指示内容を板書するように心がけたい。 ・子どもの体調的、心理的变化を見抜いて声かけできるように、常に教師としての感覚を研ぎ澄ましたい。
行動・活動面の深化の段階	1	参観	0.5	<ul style="list-style-type: none"> ・専任教員が担当する授業を参観する。 ・校内の各種委員会に陪席する。 ・専任教員が行なう教育相談に関わる個別指導の場面に立ち会う。
	2	参画	1.0	<ul style="list-style-type: none"> ・学校行事などについて、専任教員と共に企画段階から参画し、実施の際にも共同で作業などを行う。 ・授業運営の場合、TT (Team Teaching) の補助的な役割者として、授業中に児童・生徒の指導に関わる。 ・運動会・文化祭のような学校行事の準備を専任教員の指示のもとで一緒に作業を行う。 ・校門指導に立会い、挨拶の励行などを行なう。
	3	自立行動	1.5	<ul style="list-style-type: none"> ・専任教員が担当している授業を代わりに担当する。指導教員の指導助言を受けながらも指導案の作成から実施に至るまで自力で担当する。つまり、主体的な判断と意思決定ができる。 ・子どもの行動に対し注意指示を与える際、判断基準を揃えるように意識し、見て見ぬ振りをしない。 ・子どもたちの諍いにたまたま遭遇し両者の間に入り言い分を傾聴して、納得させるように働き掛ける。担任等には事後報告する。 ・職員室の窓の開閉、出入り口周辺の清掃などを自発的に行なう。

表中「評点」は、「認知・意識面」と「行動・行動面」の3つの段階、つまり「再認・再生」「発見」「意識の変容」並びに「参加」「参画」「自立行動」に対して、それぞれその習得の困難さある

表6-2 共通科目5領域と該当項目一覧表

(' 09 / 1 / 31 現在)

領域	該当項目	該当活動群	備考
1. 学校教育と教員のあり方	a. 地域連携・交流 b. 研修 c. 課外指導 d. 職員室での活動 e. 安全管理 f. 自発活動	地域連携交流 校内研修（授業、情報教育、視聴覚教育、教育相談等） 校外研修 個人指導（担任、大学教員による） 安全点検 部活動（指導、支援） 訪問者（児童・生徒を含む）への対応 雑務（窓あけ、お茶汲み、清掃、印刷作業、物品の管理・貸し出し） 保守管理（営繕、剪定） 校舎内外の清掃（玄関周辺の清掃、運動場の整備）	
2. 学校・学級経営	a. 学校行事等×0.5 b. 教職員行事 c. 校務分掌 d. 学級活動×0.4	運動会（練習、準備、当日） 文化祭（練習、準備、当日） 修学旅行（準備、当日） 始業式 定期検診 職場体験学習準備・実施 防犯・防火訓練 各種委員会（生徒会、整美委員、広報委員） 学年会 職員会議 職員朝礼 授業参観 保護者会 日直（校内巡視、プール管理、ウサギ小屋掃除） 資料の校内掲示 対面会 朝の会 帰りの会 教室の清掃 備品保守・管理 お別れ会 学級分掌・委員 給食指導	
3. 教科指導	a. 授業実践×0.5 b. 授業観察×0.5 c. 授業準備×0.5 d. 学習評価	各教科（総合的な学習の時間、道徳、特別活動等を含む）の授業実践（直接担当、TT） 各教科の授業参観（担任又は院生担当授業の参観） 児童・生徒理解（対話、個別指導、課題の点検等による学習状況の把握） 指導案の作成 プリント教材作成（プリント作業を含む） テスト・宿題の採点・点検	
4. 教育課程	a. 年間授業計画立案 b. 年間行事計画立案 c. 教育課程評価 d. 学校行事等×0.5 e. 授業実践×0.5 f. 授業準備×0.5 g. 学級活動×0.2	時間割表作成 アンケートの集計 行事等の反省会 運動会（練習、準備、当日） 文化祭（練習、準備、当日） 修学旅行（準備、当日） 始業式 定期検診 職場体験学習準備・実施 防犯・防火訓練 各種委員会（生徒会、整美委員、広報委員） 各教科（総合的な学習の時間、道徳、特別活動等を含む）の授業実践（直接担当、TT） 指導案の作成 プリント教材作成（プリント作業を含む） 対面会 朝の会 帰りの会 教室の清掃 備品保守・管理 お別れ会 学級分掌・委員 給食指導 対面会 朝の会 帰りの会 教室の清掃 備品保守・管理 お別れ会 学級分掌・委員 給食指導	教科外活動（学校・学級行事など）
5. 生徒指導	a. 児童・生徒理解 b. 教育相談 c. 保健室指導 d. 校門指導 e. 児童・生徒間調整 g. 授業観察×0.5 h. 学級活動×0.4	生活ノートの点検 課題作文の点検 業間での児童・生徒との遊び・対話 個別相談・対話 保健室での個別学習指導 校門指導 登下校指導 児童・生徒間の諍い仲裁 各教科の授業参観（担任又は院生担当授業の参観） 児童・生徒理解（対話、個別指導、課題の点検等による学習状況の把握） 対面会 朝の会 帰りの会 教室の清掃 備品保守・管理 お別れ会 学級分掌・委員 給食指導	積極的／予防的生徒指導

いは有効性の視点から重み付けしたものである。例えば、前者の場合は、後者とそれと比べて重み付けの評点が低いのは、本教職大学院の教育研究の指導指針である“実践重視”が反映された結果である。つまり、実践を重視しているため、前者よりも後者を意図的に体験する機会を見つけないと、後者の評点を高めることができない。また、段階ごとの評点差については、実習日誌の記述内容の文脈解析を行なう際、分解能、つまり容易に弁別できる程度と段階間の難易度を0.5と看做し、前者では、1.0、1.5、2.0とし、後者については、0.5、1.0、1.5とした。以上述べた評点化は、後述するように2つの実習を通して習得した成果を一瞥できるように可視化を図るために有効である。新卒院生を対象とする本教職大学院のカリキュラムの構成理念は、共通科目として「学校教育と教師のあり方」「学級・学校経営」「教科指導」「教育課程」「生徒指導」の5領域の理論を学修する。一方、「課題発見実習」及び「課題解決実習」で実践力を高め、実習で体験・習得したノウ・ハウをもとに、演習方式による「教育実践研究Ⅰ（課題発見）」及び「教育実践研究Ⅱ（課題解決）」において集団リフレクションの手法を応用することによって、個人課題を学校課題までに昇華させる手がかりを得る。このためには、5領域の専門知識が学校現場における実習を通して、どのように生かされ汎化されているかを検証する必要がある。

作業手順として、まず、実習日誌の記述内容を文脈解析によって文節あるいは単文単位で抽出した内容を更に5領域に分類した。5領域に分類される概要を実習日誌の記述から抽出して例示したのが、第6-2表である。なお、表6-2の「該当項目」の項目名のうち、斜体フォントについては、「研究成果一覧」に示した4編の研究をまとめた以後、さらに改善点を検討して得た分類項目である。例えば、「学校・学級経営」の項目のうち、「学級経営」については、「教育課程」が教科外活動（学校・学級行事など）を包含すること、また、「生徒指導」には積極的／予防的生徒指導の概念が包含されることを考慮した。実際の分類に当たっては、「学級経営」の該当項目を「学校・学級経営」と「生徒指導」に0.4ずつ、「教育課程」に0.2を分割配点した。

表中の個々の事例は、実際に実習日誌に記述あるいは言及されている用語を抽出し、前後の文脈から判断して5つの領域のいずれに該当するかを弁別した。表6-3に示す書式を用いて集計した。

表 6-3 実際に集計作業を行なうための様式

月 日	方 教 学 校 の 教 育 と あ り	レ ベ ル	認 知 ・ 意 識	行 動 ・ 活 動	経 営 学 級 ・ 学 校	レ ベ ル	認 知 ・ 意 識	行 動 ・ 活 動	教 科 指 導	レ ベ ル	認 知 ・ 意 識	行 動 ・ 活 動	教 育 課 程	レ ベ ル	認 知 ・ 意 識	行 動 ・ 活 動	生 徒 指 導	レ ベ ル	認 知 ・ 意 識	行 動 ・ 活 動
		1			1			1			1			1			1			
		2				2				2				2				2		
		3				3				3				3				3		
		小計				小計				小計				小計				小計		

3) 可視化の方法

可視化に当たっては、表6-3の様式で集計された評点をもとに個人ごとに5領域について1日ごとの該当する件数を記録し、それに3段階に応じた重み付けを掛け合わせた評点の小計を求め、それら評点のうちの5領域を通しての最大値を分母として比率を求める。この操作によ

って、評点の正規化を図る。このような前処理を行なうことによって質的研究の手法の一つである文脈解析で得られた結果を数値化させる。この数値化されたデータをもとに可視化を図るため、星座グラフあるいは円形を用いた。前者については、研究成果報告一覧の(1)を、後者については同(4)を参照されたい。以下に星座グラフと円形を用いた可視化の表現方法について概要を述べる。

星座グラフは『統計辞典』にも説明されているほか、ウェブ上で星座グラフ描画専用ソフト事例も紹介されているほど、多変量解析結果を表現させる有力な方法として普及している。任意の半円と直径が座標面であり、円弧に沿って評定段階が等分に目盛りされる。本稿では、偏角0度から180度を10等分し最小目盛りを0.5とした。半径の長さを変数で除した線分を基本ベクトルとする。本稿の場合は、共通科目5領域(「学校教育と教師のあり方」「学校・学級経営」「教科指導」「教育課程」「生徒指導」)であるので、半径を5で除したものが基本ベクトルである。5つのベクトルを描画する方法は、以下の計算式で得られた数値が用いられる。

$$(10 \times \text{実習日ごとの5つの各項目の集計件数} * / (10 \text{人全てについて全項目の件数の最大値})) \times 0.9$$

なお、上式で集計件数に対しては、3段階に配点された重み付けの数値が配点される。例えば、「認知・意識面の深化」では、「再任・再生」「発見」「意識の変容」のそれぞれの評点について、1.0, 1.5, 2.0が重み付けとして配点されている。各件数と重み付けの積が該当評点となる。「認知・意識面の深化の段階」及び「行動・活動面の深化の段階」の各段階の該当評点の総計が1回(1日)当たりの総合点である。この総合点が共通科目5領域ごとに得られれば、その数値をもとに星座グラフのベクトルを描画原理に沿って順次描くことができる。

星座グラフの表現の特徴としては、総合点である評点を変数ごと、つまり本稿では共通科目の5領域について一様であれば、円弧に近い周辺にベクトルの最終点(ターミナル)は分布する。

一方、5領域の総合点について相互に大小の差が大きい場合には、ベクトルはジグザク状に配置され、ベクトルの最終点(ターミナル)は円弧から離れた座標面に到達、分布する。さらに5領域の総合点が高くなるにつれてベクトルの最終点(ターミナル)は座標面の右領域から左の領域へ移動する。つまり本稿の趣旨から言えば、5領域の力量が向上(総合点が高くなる)すれば、その力量形成過程としてベクトルの最終点(ターミナル)は星座グラフの座標面の右領域から左の領域へ移動すると判断される。

次に成果報告一覧の(4)で用いられた可視化の表現方法について概説する。5領域の「認知・意識面の深化の段階」及び「行動・活動面の深化の段階」ごとに評価得点を算出する処理過程は、星座グラフ描画の際と同じである。評価得点を円の直径に対応させて、2つの深化の段階ごとに円を描いた。つまり、評価点が高いほど円の直径は大きい。実際の円の表示に当たっては、円をフォントとして扱い、評価点とフォントサイズとを対応させた。円を用いた表現の特徴としては、5つの領域の「認知・意識面」と「行動・活動面」とを独立させて時系列的に表すことができる。

本稿の目的では、「課題発見実習」を通して、一人ひとりの院生の実習前の課題意識の領域が別の領域へ移るのか否かを見極めることが容易になる。もし、別の領域へ移るなら、どのような変遷を経るかということも容易に把握できる。さらに課題意識が強化されたり(円が大きくなる)、逆に弱化(円が小さくなる)される様子も時系列的に容易に把握できる。

教職大学院の学部新卒者を想定した「学校における課題発見実習」の 試行の一検討

A Study of Simulation on the Problem Finding Practices at Schools for Novices in
Master Programs

稲田佳彦 住野好久 高橋香代 橋ヶ谷佳正
Yoshihiko Inada Yoshihisa Sumino Kayo Takahashi Yoshimasa Hashigaya

小山朝子 泊直希 近藤 勲
Asako Koyama Naoki Tomari Isao Kondoh

岡山大学大学院教育学研究科
Graduate School of Education, Okayama University)

〈あらまし〉 教育実践と理論の往還・融合を重視した教職大学院のカリキュラムの一環として、学部新卒院生向けに「教育実践研究Ⅰ」と「学校における実習(課題発見)」という授業科目を設けた。両科目間の連携・運営を予測し、その有効性を検証するため、同大学院発足3ヶ月前に学部4年次生3名と院生1年次生1名の計4名を実習校へ一人当たり週1回2ヶ月にわたり1日中派遣した。印象も含め実習中の体験などを整理してSNS系ブログに彼らの実習日誌を投稿させた。その内容を分析し検討したところ、所期の結果を得たので報告する。

〈キーワード〉 教師教育 カリキュラム開発 SNS システム開発 シミュレーション

1. まえがき

平成20年4月全国一斉に教職大学院^{注1)}19大学が発足した。同大学院の設置趣旨は、多角的視野を持って今日の教育課題解決に向けた実践力とリーダーとしての資質を備えた高度職業人の育成である。設置認可が与えられた19大学の一つである岡山大学は、平成19年度において同申請と並行して「文部科学省 専門職大学院等教育推進プログラム」(以後、教職GPという)を申請し採択^{注2)}された。本教職GPの主眼は、本教職大学院のカリキュラムを展開・運営する際の手がかり・知見を事前に得るための試行である。

2. 研究の枠組み

2.1. 研究の意図

本教職大学院のカリキュラムの構成理念は設置趣旨にもとづいて構想されたが、基本理念は多角的な視野を持った、課題発見・分析・解決の実践力の育成であり、理論と実践に精通したリーダー養成である。本研究は、カリキュラムの一環として、図1に示すように学部新卒者を対象とした授業科目「学校に

における実習(課題発見)」(本稿では、以下、「課題発見実習」という)の実施にあたり、院生の学校現場への適応行動と課題発見の意識・意欲の変化・変遷を事前に分析し、その結果を'08年4月からの実施で反映させることを意図した。なお、課題発見実習の知見・成果は趣旨、運営形態が類似している「学校における実習(インターンシップ)」の実施にも応用される。

2.2. 課題発見実習の位置づけとモデル学生の派遣意図

本教職大学院の学生定員は20名であるが、県教育委員会の派遣者を含め現職教員が10名程度であり、残り10名は学部新卒者を想定している。本教職大学院のカリキュラムでは、入学生が教育課題を認識あるいは発見し、その分析を通して課題解決に至る実践力を育成できるように、図1のように構成されている。共通科目6領域^{注3)}と「教育実践研究」を教職経験の有無に拘わらず必修化させ、多角的な視野の育成と実践的な課題解決に向けた実践力の育成を図る。この「教育実践研究」は「学校における実習」と連動して、実習しながら自己課題や学校課題を発見し、実習の

中でそれを解決していく。10年以上の教職経験者は、審査を経て、「教育実践研究」の一部と「学校における実習」を免除される。10年未満の教職経験者並びに教職未経験の学部新卒者は、「課題発見実習」で参観したこと、体験したこと、省察したことをもとに「教育実践研究Ⅰ（課題発見）」において自己課題を認識するようにしていく。実習校は学校間連携・地域連携など新しい課題に取り組んでいる地域協働学校^{注4)}とし、「課題発見実習」は毎週1回1日実習を行なうこととした。その後、明らかになった自己課題を解決するために、8月末からは「課題解決実習」で1ヶ月集中的に実習を行ない、その成果を「教育実

践研究Ⅱ（課題解決）」で省察し、発展させていくカリキュラムになっている。

モデル学生を地域協働学校へ派遣する意図は、このカリキュラムが目指している、学部新卒者が教育課題を発見し、自己課題として認識し課題解決に向けて取り組む過程あるいは実態が想定どおりであるか否かを事前に検証し、その知見・成果を教職大学院における教育研究指導に活用するためである。換言すれば、本教職大学院カリキュラム開発の一環として、学部新卒者に対する「教育実践研究（課題発見）」と「課題発見実習」の往還的連携を前提にした後者の実施シミュレーションと見なすことができる。

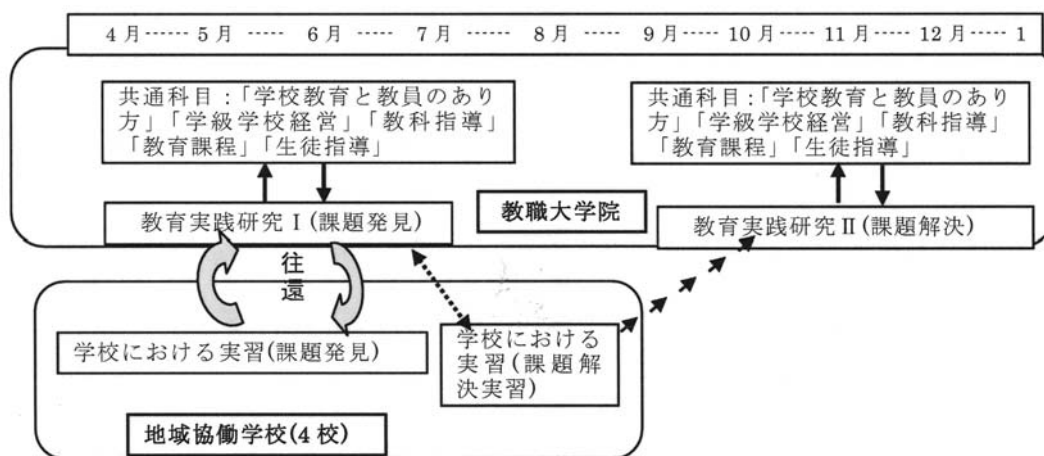


図1 学部新卒者を対象とした本教職大学院の1年次カリキュラムの主要構造

3. 実施方法

① 協力者

表1に示すように学部4年次生3名(男1名、女2名)、院生1年次生1名(女)の計4名である。ここでは、彼らをモデル学生と呼ぶ。

② 派遣先

表2に示すように地域協働学校4校である。内訳は、小学校3校、中学校1校でいずれもO市立学校である。

③ 期間

表3に示すように'08年1月8日～同2月28日

④ 事前準備

教職大学院設置申請に当たり、県教育委員会へは従前の連携協力と併せて現職教員の派遣を要請したところ、10名派遣の確約を得た。併せて、O市教育委員会へ

は'07年10月下旬から11月上旬にかけて学部長、教職大学院設置検討委員会委員長らが地域協働学校4校を順次まわり教育実習の受け入れとモデル学生の教育実習を受け入れるよう協力を要請し、了承を得た。

4. 情報通信手段による支援

4.1. 必要性

本教職大学院では、この人材育成の目的と学校現場を重視したカリキュラムの展開及び教育研究指導体制を具現化させるため、複数の指導教員による少人数あるいは対面個別指導を基本指導理念としている。本教職大学院が遠隔教育研究指導システムを必要とする主な理由として、以下の3点が挙げられる。

- ① 実践からの課題発見・分析・解決、改善の方策提言と理論の構築を図るため、

実践と省察の蓄積・発展過程が必要に応じて一瞥できること。

- ② 基本指導体制は複数指導教員体制であり個別指導が重視されるが、同時に指導内容・過程が明示化され、それを関係者が即時に共有できること。

表 1 モデル学生のプロフィール

No	学生名	学年等	専攻名	性別
1	学生 A	大学院 1 年生	保健体育	女
2	学生 B	学部 4 年生	教育学	女
3	学生 C	同 上	理科	女
4	学生 D	同 上	英語	男

表 2 地域協働学校の規模（'07 年度現在）

No	学校名	教員数	児童・生徒数
1	P 小学校	22 名	297 名
2	Q 小学校	21 名	401 名
3	R 小学校	25 名	261 名
4	S 中学校	32 名	416 名

4.2. 具備する機能

課題発見から課題解決に至る過程を時系列、且つ、関係領域と統合して把握するためには、各段階における対応・対策の企画立案と試行、処理結果等とその都度、文字・図表・画像等を用いて整理し蓄積する。そして、蓄積された情報を必要に応じ、本人のみならず他者も参照・照合でき、それをもとに議論、あるいはアイデアを提供し合えることが望まれる。逐次蓄積されたものは、学生にとって、デジタルポートフォリオ(digital portfolios)の一つとみなされる。以下に主な機能をまとめる。

- ①「課題発見実習」の体験を記した日記あるいはそれを省察したレポートを特定のコミュニティ、例えば、受講生と授業担当教員で構成される講義題目別コミュニティに投稿すると、構成員（以後、メンバーと言う）が相互にそれを閲覧しコメントなどを投稿できる。
例えば、mixi^{注5)}のようなもの。
- ②「課題発見実習」の最中に実習校にいる受講生と研究室にいる指導教員とが直接

- ③ 2 年次には学校における通常勤務を通して、研究課題の解決あるいは改修・改善の方策・提言に向けた検証を行うため、遠隔教育研究指導体制の構築が不可欠なこと。

表 3 モデル学生の派遣日一覧

No	学生名	派遣月日(曜日) : 平成 20 年	派遣先
1	学生 A	1 月 23 日(水) 同 30 日(水) 2 月 6 日(水) 同 13 日(水) 同 20 日(水) 同 27 日(水)	P 校
2	学生 B	1 月 7 日(月)* 1 月 8 日(火) 同 15 日(火) 同 22 日(火) 同 29 日(火) 2 月 5 日(火) 同 19 日(火) 同 26 日(火) *始業式での挨拶	Q 校
3	学生 C	1 月 10 日(木) 同 17 日(木) 2 月 7 日(木) 同 14 日(木)	S 校
4	学生 D	1 月 10 日(木) 同 17 日(木) 2 月 7 日(木) 同 21 日(木) 同 28 日(木)	R 校

映像・音声を通して質疑応答等ができる他、電子ファイル等の画面共有ができる。例えば、iChat。

- ③ 受講生が個別に課題別のレポート、模擬授業で使う自作デジタルコンテンツ、報告会でのプレゼンソフトなどをウェブ上で投稿・閲覧できる。例えば、個人ごとの Web サーバ。
- ④ 指導教員と受講生同士、あるいは教職コラボレーションセンター教職員相互の連絡用に専用メールシステムを設ける。
例えば、専用メールサーバ。

4.3. 「こらみゅ」の概要

前項の①の機能については、オープンソースで提供されている「OpenPNE」(詳細は、<http://www.tejimaya.com/openpne.shtml> を参照のこと。)を本教職コラボレーションセンターの技術職員が管理画面を通してカスタマイズし、本教職大学院専用に改修させた。この愛称を「こらみゅ」と呼ぶ。

利用者は管理者側で登録され、利用者間のコミュニケーションは相互の認証と了解が前

提となるので、透明性が保証される。登録者間で必要に応じてコミュニティを形成できる。コミュニティは、教員、学生というメンバーの属性だけでなく、講義題目別あるいは入学年度別にも形成できる。講義題目別コミュニティの場合のメンバーは、その講義の担当教員と受講生である。

4.4. 「こらみゆ」の試用事例

本教職大学院では、学校における日常の活動に生起する多様で複雑な課題に対して、論拠に基づいて検証し適切に対応できる能力の育成をめざす。

学生指導体制としては、各分野の専門家である研究教員と学校現場で長年実践に携わり、豊富な体験と事例ごとのノウ・ハウを持つ実務家教員が連携協力・協働して、教育研究指導に当たる。研究課題としては、学生一人ひとりが意識化し更に探究する課題は、広汎であり千差万別であると予測される。日々の学校現場で生起する現象・事象に関わる多様で複雑な課題解決に向けて、一人の教員または1分野の専門家が指導・助言を行うことには、自ずと限界があると考えられる。このため、必然的に指導体制は、研究教員と実務家教員という組み合わせだけでなく、複数の専門家が連携協力して対応することが求められる。

今回の試行では、図2に示すように様々な専門分野の研究教員と教職コラボレーションセンター教職員が、それぞれの専門性や課題意識に基づいてコメントできる仕組みをつくる。この中では、ある教員のコメントに他の教員が絡んでコメントするなど、一つの記述内容をめぐって複数教員が多角的な視点からコメントし、学生に対する指導を重厚化させることをめざす。

学生一人ひとりには研究課題に応じて組織責任上、研究課題と専門分野等を考慮して、研究指導教員が特定される。しかし、こうし

たシステムを活用することで学生の研究状況を共有しながら、複数教員が協働することが求められる。そのため研究指導教員には、研究課題に応じ、随時、自分以外の専門分野の指導教員を学生に紹介あるいは推薦する、いわゆるコーディネータ役が求められる。

その上、一人の学生に対する教育研究指導を複数の指導教員が担当することに加え、教育研究指導過程を本大学院に参画する教員全員が共有することが、理念の次元に留まらず現実的対応として望まれる。この指導体制は、指導過程の透明化を実現し促進させることであり、従来の大学院における指導体制との差別化を図るためにも不可欠である。

5. 星座グラフによる表示

4で述べた集計方法と結果をもとに一瞥性に優れたグラフ化を試みた。グラフ化に当たっては、順序尺度あるいは名義尺度のデータの多次元表現に優れた星座グラフを採用した。但し、5つの項目の件数はいずれも等価とみなし、ベクトルの基本単位は1、最小目盛は0、最大目盛は10、分解能は0.5とした。ベクトル表示に当たっては、表4に示すような計算式を創案し適用した。

以上述べた作図方法によって得られた星座グラフは、図3～図6である。

なお、星座グラフによる本表示方法では、実習内容の項目が増え、且つ、それに対する自己認識、省察が自己変容に直結する内容になれば、ベクトルの終点が座標面の右側領域から左側領域へ移動（円周上の目盛0から10の方向へ）する。また、5つの各項目の件数、つまり換算された評点も含めて項目ごとの評点が一様に増加すると、ベクトルの終点は、目盛が付された円周周辺に近づく。逆に項目ごとの評点差が大きいとベクトルの終点は円周周辺から遠ざかるという特徴がある。

表4 星座グラフのベクトルの計算式

$$(10 \times \text{派遣日ごとの各項目の集計件数}^* / (4 \text{人全てについて全項目の件数の最大値})) \times 0.9$$

*：集計件数には、実習日誌（日記）に簡条書きされた活動項目のほか、自由記述された内容を3段階に弁別した際の重みが加算されている。つまり、「再認的な内容」「発見的な内容」「自己変容的な内容」とし、それぞれ、0.5、1、2という重みが付けられる。

2008年01月 ☆実習1回目☆

09日
12:23

大変遅くなりました・・・
私の勘違いと(パスワードなど)パソコンの不具合で、
日記の更新が1日遅れてしまいました(III-ω-)
申し訳ありません。。

昨日、小学校へ実習に行ってきました☆
チャリで30分、とってもいい運動です(・V・)

しかし昨日は8時からあいさつ運動、
ギリギリに出てしまったので25分で到着しました。
まだ2回目ですが新記録だと思います。
もう更新はしたくないです・・・

そんなことはどうでもよいとして(*-ω-)♪

昨日はあいさつ運動や相談室での子どもとの関わり、
授業に入るなどの経験ができました。
子ども達はみんなかわいいです♪♪
「なんで火曜日しかこんのお～～」
って言うってくれる子どももいたりして、キュンとしました。

しかし、かわいいだけではダメですね。。
授業に集中できない子どもをどう集中させるか、
どう間違いを改めさせるか、
まだまだ考えるべき所はたくさんあります！！

頑張ります(・ω・。))

しかし、給食なしたったので、
子どもが帰ってからの時間はとても長く感じました。

会議なども見せていただき、することがある時間はいいの
ですが、
自分ですることを見つけなければならぬ時間は、
なかなか積極的に行けず、
たまに座っているだけになってしまう時間もありました(・X・ω・)

勤務が終了し、
家に帰ってからは眠気に襲われました(人-ω-)

昨日はデビュー戦ということで、
あまり積極的になれなかったのですが・・・

来週は給食もあるのもっと子ども達と関わること、
職員室にいる時は自分から進んで仕事を見つけていくこ
と、
を目標に頑張っていきたいです！！

できれば、教壇にも立ってみたいなあと思っています。
来週お話ができたらいいなと思います ε=ε=(o・`ω・o)ノ

みなさんはどうするのでしょうか？

コメント

1番～5番を表示

2008年01月 1

09日
12:32

職員 A

パソコンの不具合等もあわせて、
おつかれさまでした-----!

学生 B

さん第1号、良いスタートをされたと思います。

一日目からあいさつ運動とか、会議に参加したりとか、がんばりましたね!!!!

こんな感じの報告だと、こちらも読みやすいし、コメントも書き込みやすいので、いいと思います。

最終的にレポートを出してもらうことになるんだと思いますが、。。。。

報告は、実習先のマックブックで実習の終わりにしてくれて
ありがとうございますよ^^

2008年01月

09日
13:24

教員 A

削除

初日の報告、拝読。密度の濃い1日になったようですね。
「かわいいだけではダメ」のくだりとその対策に目が向けられている点が課題意識の発露と見受けました。

2008年01月 3

09日
17:31

職員 B

初日お疲れ様です。
何も知らないところに飛び込むのは難しいですね。小学校の先生方はいい方ばかりなのでぜひ、積極的に頑張っ

図2 「こらみゆ」でのモデル学生の実習日誌(左欄)とそれに対する教職員によるメッセージの一事例(右欄)

左欄の記述は、モデル学生Bによる地域協働学校Qにおける第1回目('08年1月8日)の実習報告事例

右欄の記述は、それに対する指導教員あるいは教職コラボレーションセンター教職員によるコメントである。このような実習報告とコメントの投稿・閲覧が4人のモデル学生と教職員との間で2月末まで続けられた。

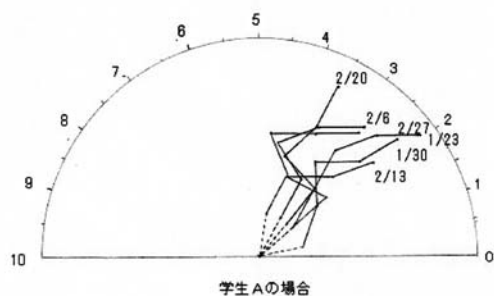


図3 学生A (大学院1年生:女子)

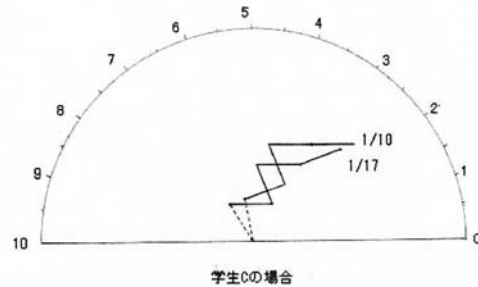


図5 学生C (学部4年生:女子)

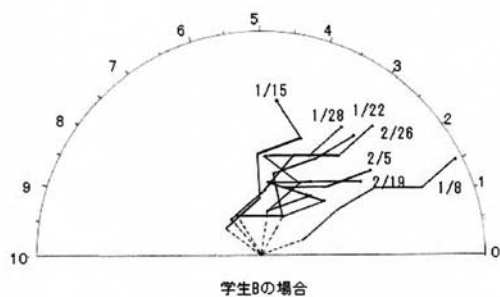


図4 学生B (学部4年生:女子)

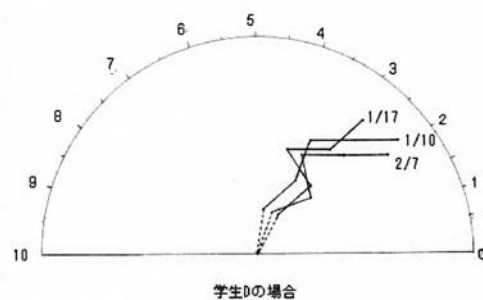
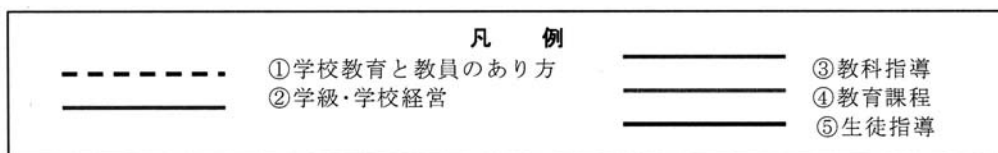


図6 学生D (学部4年生:男子)



6. 考察

本研究では、上述のように学部新卒者を対象とする「教育実践研究Ⅰ(課題発見)」と「学校における実習(課題発見実習)」との往還が構想どおり運営できるか否かを検証する手がかりを得ることをめざした。ここでは、「こらみゆ」に投稿されたモデル学生一人ひとりの活動レポートである日誌(日記)の記述内容を時系列的に分析した結果を基に考察する。更に星座グラフを参照して考察する。また、モデル学生による記述内容の真意・意図を確認し傍証とするため、必要に応じて当該モデル学生に対面聴取した。以下にまとめた上で補足説明する。

(1) 新任教員として新任校で学部新卒者が体験する不安と期待が錯綜した心理状態は、モデル学生もほぼ同じである。

派遣先学校の所在地を確認し、当該校の校長あるいは教頭と事前に面識があるとは言え、大半の教職員及び児童・生徒とは面識がないまま、派遣先校で人間関係を新たに形成する必要がある。これについて、モデル学生4人は異口同音に期待と不安を吐露していたが、当該校教職員や児童・生徒と挨拶を交わすことによって、緊張を緩和させ親近感を感じるようになる。ひいては、実習意欲を高め、自信回復を促進させる波及効果を生ずる。

(2) 彼らの実習レポートである日誌(日記)に対する専任予定教員、あるいはコラボセ

ンター教職員からの教示的、激励的なコメントは、彼らの実習への動機付けを強化させる効果を与えている。

モデル学生が実習日誌(日記)を投稿すると、24 時間以内にはそれを閲覧した教職大学院専任予定教員、あるいは教職コラボレーションセンター教職員から、教示的、激励的なコメントが投稿される。

(3) 実習の回数が増え派遣先校教職員から信頼を獲得するにしたがって、次第に任される仕事・業務の内容が増大するなど量的な変化に加え、教務事務処理の手伝いなど、質的变化が見られる。

学習指導面でも当初は、授業参観者の立場であるが、次第に TT(Team-Teaching)の授業運営に直接参画し指導するようになる。また、授業担当教員から学習指導理念や授業実施の事前・事後対応について、指導助言を得るようになっていく。

(4) 校内の各種委員会・部会に陪席することによって、学部段階での教育実習では認識されなかった学校運営に関わる校内組織の存在とそれぞれの機能に注意と関心が向けられるようになる。

学校運営に当たり各種委員会組織が存在し、それらが連携して機能していること、教員は教職経験や教科・学年担当等などが考慮されて校務分掌を担っていること、教員相互のチームワークの重要性などを認識するようになった。そして、教員の使命の重要性と責務の大きさを実感している。

(5) 教育相談室において関わる児童・生徒を通して、個別に子どもの発達・成長と多様性を認識するようになる。

学級・学年集団の中の児童・生徒を観察する認識とは異なり、個として関わる児童・生徒に対しては、一人ひとりの性格・心理状況・学習履歴などを推察し、その上で働きがけの結果を予測して対応する必要性を実感している。つまり、個としての児童・生徒一人ひとりの内面と顕在化された反応を注意深く観察するようになり、以前と異なる反応・変容が見られると、それを喜び充実感と自己効力感を持つようになる。児童・生徒を個として観察するという認識・行動様式が、TT による授業において、個別指導を必要とする児童・生徒を弁別することに応用されている。

(6) 実習内容を共通科目の 5 領域の項目名で分類すると、「教科指導」が体験件数、時間とも突出して多い。

モデル学生自身「教科指導」の授業への関心が高い上に、受け入れ先である学校側の意向・対応が「教科指導」を除いては各委員会・部会への陪席程度に限定されること、背景・経緯の事前の認識が不可欠な「生徒指導」、「教育課程」等へ関わる内容への参画・関与は回避する配慮がされたように見受けられる。勿論、「生徒指導」「教育課程」に関わる案件は、一般に不定期的であり、生起頻度が「教科指導」に比べ低いと推測される。このような実習内容の偏りは、派遣先校教員に準ずる待遇を受けながらも守秘義務のない学生に対して、今後起こりうると考えられる。

(7) 独善的でない積極性に富んだモデル学生は職場への適応が円滑に行われ、本人自身の充足感、自己効力感も高い。逆に周囲から消極的と見なされるモデル学生は不適応を起こす傾向が見られる。

前者の場合は派遣先校で教員だけでなく児童・生徒に歓迎されていると実感し、周囲の人間関係が早期に形成され、親密度が増す傾向が顕著である。張りのある声で受け応えできることが好感度を増すように見受けられる。後者の場合は周囲の人間からの働きがけが次第に乏しくなるとともに、言動を批判的に見られるようになるので、益々不適応が強化されると危惧される。この状況を打開するためには、モデル学生自身が自分自身を対象化でき、より積極的に行動しようという意識をもつこと肝要である。

図 3～6 の星座グラフから容易に弁別できることは、以下の通りである。

5 つの領域のうち、「学級・学校経営」「教育課程」「生徒指導」への関わりが極めて少ないこと。他方、上述のように「教科指導」への関わりの頻度は、突出している。

① 対象要素(ここでは、「学級・学校経営」～「生徒指導」の 5 領域に対する省察の深さを加味した体験内容の件数)は、知識あるいは技能という対象の違いに拘わらず、到達度から判断すると、実習回数の増加、つまり時間経過にしたがって、表示ベクトルの終端は、座標の右領域から左領域へ移動すると仮定される。

② 対象要素(ここでは「学級・学校経営」～「生徒指導」の 5 領域)の達成水準が高低に拘わらず等質化あるいは平衡化すると、表示ベクトルの終端は円周周辺に接近し、不平衡であれば逆に遠ざかると仮定される。

しかし、実際にはモデル学生の場合、4人仮定どおりではない。このような現象が見られる要因としては、以下のようなことが推測される。

- ① 一般に繰り返し練習すれば上達程度が比較的容易に弁別できるという技能習得とは異なり、意識の変容を伴う認知・思考面の変化は、対象要素の測定自体が困難、かつ、同定しにくい。
- ② 上司・同僚から信頼を得ると、任される業務内容が拡大し、併せて件数も増える。但し、信頼を得るまでにある程度時間が掛かるし、信頼を得る過程は直線的でないといと推測される。
- ③ 省察による記述内容は、当初、皮相的かつ印象的な内容に終始する傾向が見られるが、体験を蓄積することによって視野が広がり、次第に深化された内容に変わる。記述内容が変わるにはある程度時間が掛かる他、その変化は直線的でないといと推測される。

7. あとがき

本研究を通して得た知見・成果は、平成20年4月に発足する本教職大学院の運営に反映、応用される。それと平行して、本研究の2年目に当たる平成20年度の研究を推進する過程で、本格的に展開される共通科目6領域における「教育実践研究」と「学校における実習」を通して、現実の学部新卒者である本教職大学院生による実習報告並びにそれに対する指導教員のコメント等が「こらみゅ」を介して、収集される予定である。これら収集された実習報告及び課題レポートの内容を精査すること、あるいは直接彼らに直面聴取することによって、更に精緻な知見・結果が改善点と共に得られるであろう。

注

- 1) 教育職員養成審議会第一次答申（'97年7月）「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」、同審議会第二次答申（'98年10月）「修士課程を積極的に活用した教員養成の在り方について——現職教員の再教育の推進——」、教育職員養成審議会第三次答申（'99年12月）「要請と採用・研修との連携の円滑化について」、

とも一進一退を続け、必ずしも上述の2つの中央教育審議会（'02年12月）「今後の教員免許制度の在り方について」、同審議会（'05年10月）「新しい時代の義務教育を創造する」を受けて、大学教育部会がより高い専門性を育成させる具体策として提案し、文科省令（専門職大学院設置基準及び学位規則の一部を改正）を2007年4月1日に施行。高度専門職業人の育成を目指して、2008年4月に全国の国公立を含め19大学に設置された。標準修学期間は2年、必要習得単位数は45単位以上、実践を重視し少人数授業運営とする。

- 2) 研究題目『真に課題解決能力を育てるカリキュラム開発——地域協働学校と教職大学院のコラボレーション——』（研究代表者：高橋香代〈学部長〉）
- 3) 「学校教育と教員のあり方」「学級・学校経営」「教科指導」「教育課程」「生徒指導」の5領域と「教育実践研究の方法」の1領域
- 4) 岡山市「市民協働の人づくり条例」にもとづき、市教育委員会が学校と家庭・地域の連携強化をめざしたプロジェクト。学校・保護者・地域住民の役割と責任を明確にして地域教育力を高め、子どもの健全育成を図るプロジェクトの指定校を指す。
- 5) 2004年2月に運用開始したソーシャル・ネットワーキング サービス(SNS)である。企画当初より、「居心地の良いサイト」「身近な人や、趣味・興味が同じ人との交流」をコンセプトに開発が行われ、今では1401万人以上が利用していると言われていた。(2008年3月31日現在)。

参考文献

- 岡山大学(平成19年6月):『岡山大学大学院教育学研究科 教職実践専攻(仮称)設置構想(案)』
- 岡山大学教育学部(平成20年3月):『平成19年度 文科省 専門職大学院等教育推進プログラム 中間報告書 —— 真に課題解決能力を育てるカリキュラム開発 —— 地域協働学校と教職大学院のコラボレーション —— 』

教職大学院専用遠隔教育研究指導システムの開発と試用結果の考察 A Study of Proper Remote Communication System for Advising/Counseling Novices in Master Programs

稲田佳彦 住野好久 高橋香代 橋ヶ谷佳正
Yoshihiko Inada Yoshihisa Sumino Kayo Takahashi Yoshimasa Hashigaya
小山朝子 泊直希 近藤 勲
Asako Koyama Naoki Tomari Isao Kondoh

岡山大学大学院教育学研究科
Graduate School of Education, Okayama University)

<あらまし> 教育実践と理論の往還・融合を重視した教職大学院では、院生が学校現場での教育実践を通して、教育課題の発見・分析・解決を図ることを重視している。専用 SNS 系ブログに彼らの印象も含めた実習中の体験などを整理して実習日誌として投稿させ関係者へ公開するだけでなく、教育課題解決に向けた教育研究活動で随時複数の指導教員等から適切な指導・助言が得られるような遠隔教育研究指導システムを開発し構築した。平成 20 年 4 月からの本格的実施前に丸 2 ヶ月モデル学生を使って試用したところ、所期の成果を得たので報告する。

<キーワード> 教職大学院 遠隔教育システム SNS システム開発 開発研究

1. まえがき

平成 20 年 4 月から岡山大学を含めた 19 大学に教職大学院が全国一斉に発足した。本学は平成 19 年度において同大学院設置申請と並行して「文部科学省専門職大学院等教育推進プログラム」(教職 GP という)を申請し採択された。本教職 GP の主なねらいは、本学教職大学院のカリキュラムの一部の試行を通して、本格実施の際の展開・運営に関わる知見・手がかりを事前に得ることをめざした。

2. 本教職大学院のカリキュラムの概要

2.1. 基本理念

本教職大学院のカリキュラムの基本理念は、多角的な視野を持って今日的教育課題の発見・分析・解決を図る高度な教育実践力の育成であり、理論と実践に精通したリーダーを養成することである。

2.2. 特徴

上述の基本理念と学校現場並びに実践を重視したカリキュラムの展開及び教育研究指導体制を具現化させるため、複数の指導教員による少人数あるいは対面による個別指導を指導原則としている。「学校における実習」とそれを共同省察する「教育実践研究」をコアとしたカリキュラム構成となっている。教職未経験の学部新卒者を対象とした授業科目「学校における実習(課題発見)」の実施にあ

たっては、学校現場への適応行動と課題発見の意識・意欲の変化・変遷を事前に試行して分析し、その結果を平成 20 年 4 月からの本格実施で反映させることを意図した。なお、課題発見実習の知見・成果は趣旨、運営形態が類似している「学校における実習(インターンシップ)」という授業科目の実施にも応用される。

3. 遠隔教育研究指導システムの概要

3.1. 必要性和機能

本教職大学院では、多角的視点で課題解決できる能力を養うため、複数教員の視点を利用した指導を重視している。この複数指導体制を具現化させ有機的に機能させるために、以下のような仕組みが必要となる。

- ① 指導内容・過程を明示化させ、関係者が即時に共有できる仕組み
 - ② 指導教員のみならず院生自身が実践と省察の蓄積・発展過程を必要に応じてレビューし一瞥できる仕組み
- 一方、2 年次には現任校へ復帰又は新任校へ赴任し通常勤務をしながら、課題解決の方策を実践・検証する。このため、機能面で 1 年次の対面指導に相当する以下のようなシステムが必要となる。
- ③ 対面指導を補足して、課題解決への指導・助言が指導教員から継続して得られるよう、遠隔教育研究指導システムの構築

3.2. モデル学生による利用事例

平成20年1月8日から2月28日の約2ヶ月にわたり、教職大学院の学部新卒者を想定したモデル学生4人(学部4年次生3人、大学院1年次生1名)を実習校である地域協働学校4校へ別々に一人週1回1日中(8:30~17:30)派遣した。モデル学生が実習体験の省察も含めて、インターネット経由で随時報告できるように、オープンソースのSNSエンジンであるOpenPNEをカスタマイズして教職大学院専用コミュニケーションツールとし、愛称を「こらみゆ」と命名した。右図は、モデル学生が実習日誌として投稿した事例であり、それを閲覧した本学の複数の教職員がコメントを投稿した事例である。

生Aによる初日の実習日誌の一部である。

右の枠内は、「こらみゆ」に投稿されたモデル学生Aによる初日の実習日誌の一部である。

会議なども見せていただき、することがある時間はいいのですが、自分ですることを見つけなければならない時間は、なかなか積極的に行けず、たまに座っているだけになってしまう時間もありました(ω・X・ω)

勤務が終了し、家に帰ってからは眠気に襲われました(人ω人)

昨日はデビュー戦ということで、あまり積極的になれなかったのですが・・・

来週は給食もあるのでもっと子ども達と関わること、職員室にいる時は自分から進んで仕事を見つけていくことを目標に頑張りたいと思います!!

できれば、教壇にも立ってみたいなあと思っています。来週お話ができたらいいなと思いますε=ε=(ω・ω・o)ノ

みなさんはどうするのでしょうか??

4. 試行結果と考察

モデル学生が実習日誌を「こらみゆ」に投稿すると、大学の指導教職員あるいは他のモデル学生がそれを閲覧し、24時間以内に教示的、激励的なコメントを「こらみゆ」に投稿するという仕組みとサイクルが定着された。このようなハードウェア、ソフトウェア及びユースウェアが構築されたことによって、3.1.で述べた要件を満すシステムが名実共に機能するようになった。

投稿された実習日誌を分析することによって、「こらみゆ」への投稿・閲覧の意義・利点を学生、教員双方の立場から集約し以下の知見を得た。投稿の記述内容が不明な場合は、当該のモデル学生に個別に聞き取りを行い、記述意図や状況描写について再確認した。

- ① 指導教職員からの教示的、激励的なコメントは、モデル学生の実習への動機付けを強化させる効果を与える。
- ② 指導教職員からの指導・助言を随時得られる環境にいることは、モデル学生に安心感を与える。
- ③ 新任教員として新任校で学部新卒者が体験する不安と期待が錯綜した心理状態は、モデル学生もほぼ同じである。
- ④ 教職員は、モデル学生の実習日誌を閲覧することによって、彼らの実習校での処遇を含めた活動状況のみならず内面をかなり正確に、かつ、迅速に把握できる。
- ⑤ モデル学生の実習日誌の投稿時間帯が彼ら一人ひとりの生活態様・リズムを表している。
- ⑥ 4年次のモデル学生同士は「こらみゆ」を通してコメントのやり取りが行われた

コメント 1番~5番を表示

2008年01月 1: 職員 A

09日 12:32 パソコンの不具合等もあわせて、おつかれさまでした-----!

学生 A さん第1号、良いスタートをされたと思います。

一日目からあいさつ運動とか、会議に参加したりとか、がんばりましたね!!!!

こんな感心の報告だと、こちらも読みやすいし、コメントも書き込みやすいので、いいと思います。

最終的にレポートを出してもらうことになるんだと思いますが.....

報告は、実習先のマックブックで実習の終わりにしてくれてもかまいませんよ^-^

2008年01月 2: 教員 B

09日 13:24 初日の報告、拝読、密度の濃い1日になったようですね。「かわいいただけではダメ」のくだりとその対策に目が向けられている点が課題意識の発露と見受けました。

2008年01月 3: 職員 C

09日 17:31 初日お疲れ様です。何も知らないところに飛び込むのは難しいですね。小学校の先生方はいい方ばかりなのでぜひ、積極的に頑張る

図 「こらみゆ」への投稿事例

が、院生のモデル学生に対してはコメントの提供は皆無であった。但し、院生からは4年次生に対して、コメントの提供が散見された。

- ⑦ 指導教職員間ではモデル学生を支えるという一種の連帯感が次第に醸成された。
- ⑧ 実習日誌の記述内容から、一人ひとりのモデル学生の指導理念や価値観などがある程度把握できる上、行動様式、考え方の変遷が容易に把握できる。

以上のまとめの詳細は発表の際、補足する。

教職大学院生を想定した教育実習日誌の分析結果とその可視化の検討 ——OpenPNE を援用した実習日誌の分析結果を星座グラフに表示して——

A Study of Visualizing Results Based on Analyzing Contents of Report by Model Students in Professional Activities in Schools; Presenting the Analyzed Results with Constellation Charts

稲田佳彦 住野好久 高橋香代 橋ヶ谷佳正 小山朝子 泊直希 近藤勲
Y. Inada Y. Sumino K. Takahashi Y. Hashigaya A. Koyama N. Tomari I. Kondoh

岡山大学大学院教育学研究科
Graduate School of Education, Okayama University

[要約]本研究は教育実践と理論の往還・融合を重視する教職大学院のカリキュラムの一環として、学部新卒者を想定し設定した授業科目「学校における教育実習(課題発見)」と「教育実践研究Ⅰ」の有効性を検証するために、発足に先駆けてモデル学生を教育実習校へ派遣して実施したシミュレーションの結果をまとめた報告である。

[キーワード] 教職大学院教育 カリキュラム開発 SNS システム開発 星座グラフ

1. 本研究の契機と経緯

平成20年4月に全国一斉に教職大学院19大学が発足した。その中の一つである岡山大学は、平成19年度に同大学院の設置申請を行う一方「文科省専門職大学院等教育推進プログラム」(以後、教職GPという)を申請し、採択された。同大学院の設置趣旨は、多角的視野を持って今日的教育課題解決に向けた実践力とリーダーの資質を備えた高度職業人の育成であるが、本教職GPでは学部新卒者に教育課題発見を促し、その課題解決に向けた実践力の育成を図るカリキュラムの開発をめざした。

2. 本研究の必要性和概要

本教職大学院の設置趣旨の具現化に向けて体系づけたカリキュラムの開発を行ったが、入学定員20名の内、教職経験者と教職未経験の学部新卒者はそれぞれ10名を予定していた。後者に対しては、教育課題を発見しそれを自己課題として認識した上で課題解決に向けた実践力を想定どおり育成できるか否かを検証する必要があった。

このため、本研究では図1に示すように学部新卒者を対象に設定した授業科目「学校における実習(課題発見)」の実施に当たり、院生の学校現場への適応行動と課題発見の意識・意欲の変化・変遷を事前に調査・分析し、その結果を知見としてまとめた。

3. 実施方法

3.1. 関係諸機関への事前の準備

- ①協力者 想定される学部新卒者として、学部4年生3名(男1名,女2名),院生1年次生1名(女)の計4名
- ②派遣先 O市立地域協働学校4校。内訳は小学校3校,中学校1校の計4校。地域協働学校とはO市教育委員会が学校と家庭と地域の連携強化を目指したプロジェクトの研究指定校。
- ③実施期間 '08年1月8日~同2月28日。一人毎週1回1日中地域協働学校へ派遣。
- ④事前準備 県教委には現職教員の派遣を、また、O市教委には教育実習の受け入れを要請し、協力の確約を得た。

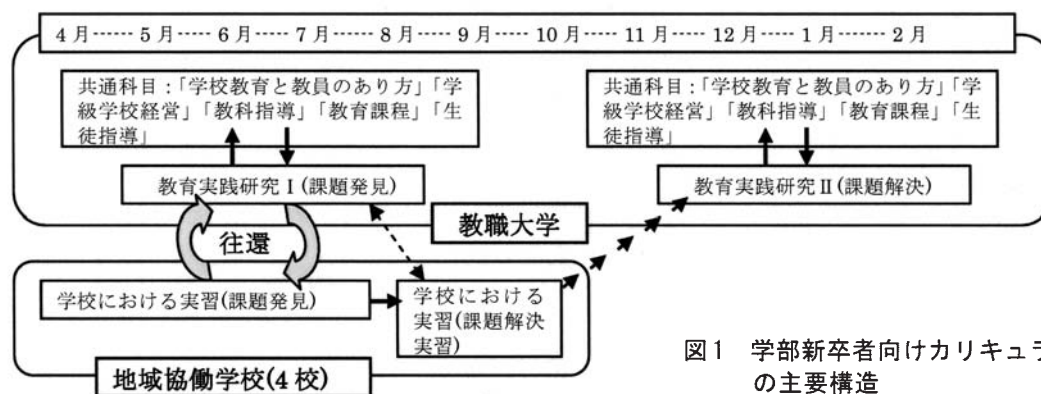


図1 学部新卒者向けカリキュラムの主要構造

3.2. 情報収集の方法

「学校における実習（課題発見）」の受講において、その体験を帰した日記あるいはそれを省察したレポートを特定のコミュニティ、例えば、受講生と授業担当教員で構成される講義別コミュニティに投稿すると、構成メンバーが相互にそれを閲覧しコメントなどを投稿できる。本研究では、SNSの一つである mixi のような機能を持った専用システム「こらみゆ」を OpenPNE のカスタマイズによって構築し、協力者である4名の学生（以後、モデル学生という）に使わせた。図2が「こらみゆ」の一事例である。

4. 分析及び表示方法

4.1. 分析及び集計の方法

4名のモデル学生のそれぞれの実習日誌は「こらみゆ」に投稿された。それを本大学院専任予定教員並びに新たに学内に設置された教職コラボレーションセンター教職員が閲覧し、教示的あるいは激励的なコメントを投稿した。それをモデル学生が閲覧し再投稿するというインタラクティブ性も多見された。

本研究では、モデル学生からの実習日誌の記述内容を「学校と教員のあり方」「学級・学校経営」「教科指導」「教育課程」「生徒指導」の5領域に分けて、該当する出現頻度を計数した。また、自由記述された内容については5領域に弁別し、「再認的な内容」「発見的な内容」「自己変容的な内容」の3段階に弁別し、それぞれ0.5, 1.0, 2.0という重み付けを行って5領域の件数に加算した。

4.2. 表示方法

前項で述べた集計結果をもとに一瞥性に優れたグラフ化を図るため、順序尺度や名義尺度のデータの多次元表現に優れている星座グラフを採用した。星座グラフのベクトルの算出には、表1に示す計算式を創案して適用した。図3が得られた星座グラフの事例である。

5. 考察

星座グラフを描くことによって、モデル学生一人ひとりの実習の総合的な成果と過程の概要を一瞥し把握できる見通しを得た。又、集計表と照合することによって、変容の要因もある程度推測できる見通しを得た。星座グラフの表現上の特性から判断すると、実習回数を重ねると、終端ベクトルは右領域から左領域へ移る一方、目盛り軸である円弧に接近すると予測される。しかし、実際には一進一退を繰り返す予測通りではない。このような要因としては以下の

ことが推測される。

- ①意識の変容を伴う認知・思考面の変化は、技能習得と比べ測定自体が困難、且つ、同定しにくい。
- ②5領域のうち、「学級・学校経営」「教育課程」「生徒指導」はモデル学生が関わる頻度が極めて低い。
- ③モデル学生が次第に派遣先で信頼を得ると、業務内容の質・量両面が増大する。
- ④実習の進捗状況の動向をある程度推測できる。

表1 星座グラフのベクトルを求める計算式
 $(10 \times \text{派遣先ごとの各項目の集計件数} / (4 \text{人すべてについての} 5 \text{領域全項目の件数の最大値})) \times 0.9$



図2 「こらみゆ」の一事例

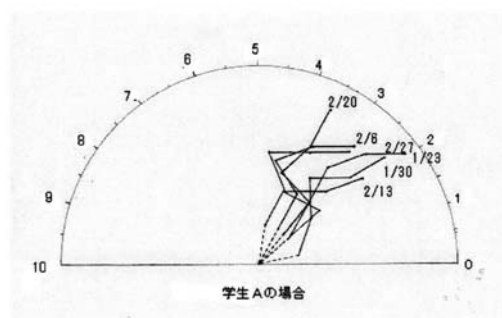


図3 星座グラフの一事例

岡山大学教職大学院における新卒院生の課題発見実習とその成果に関する研究

住野好久・黒崎東洋郎・小野擴男・橋ヶ谷佳正・稲田佳彦・笠原和彦・中尾道子・
仲矢明孝・山崎光洋・渡邊淳一・泊直希・横山真由子・近藤勲

(岡山大学大学院教育学研究科)

キーワード：教職大学院 実習日誌 実習 Web ポートフォリオ

はじめに—本論文の目的

岡山大学大学院教育学研究科は、平成20年度、教職大学院「教職実践専攻」(以下、本専攻と称す。)を開設した。本専攻の教育課程は、勤務校をはじめとする教育実践現場の抱える課題を解決していく力量を身につけることが目指される現職教員の大学院生と、自分自身の教育実践力を向上させていくための自己課題を発見し、それを解決していくことで即戦力的能力を身につけることが目指される学部新卒の大学院生(以下、新卒院生又は院生と略す。)とでは、その編成原理が異なっている。

本論文では、必ず「学校における実習」を実施する新卒院生の教育課程とその実施体制を検討する。そのために、平成20年度前期の実践を振り返ることを通して、①学部とは質の異なる「実習」、②実習での体験を振り返る「教育実践研究」、③その過程で院生の学びを支援する遠隔教育研究指導システムなどの支援体制が有効に機能しているかを明らかにする¹⁾。

1 1年次「課題発見実習」と「教育実践研究」

新卒院生には、1年次に自己課題を発見し解決することができるように、前期の間毎週水曜日に1日中実習校へ行く「課題発見実習」と、そこでの実習体験を「共通科目」と関連づけながら省察する「教育実践研究Ⅰ(課題発見)」を実施する。これらを通して鮮明になった自己課題について、9月におよそ1ヶ月間集中的に実習する「課題解決実習」の中で取り組み、それを「教育実践研究Ⅱ(課題解決)」で省察し、2年次の学校現場での実践・研究につないでいく(図1参照)²⁾。

「課題発見実習」は学部での教育実習と異なり、①技術的な指導力よりも自己課題の発見に目的がある、②実習校は地域と連携した学校づくり、幼・小・中の連携など特色ある教育を体験できる「地域協働学校」である(中学校2校、小学校3校

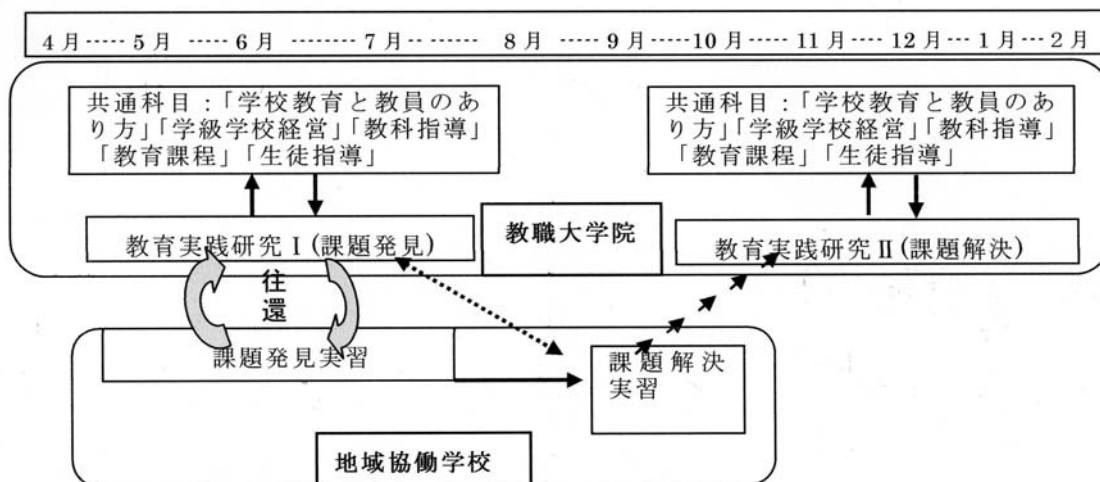


図1 学部新卒者を対象とした本教職大学院の1年次カリキュラムの主要構造

に2名ずつ), ③学校での教師の一日の仕事すべてを参観・実習する, ④実習期間中に大学教員による直接・間接の指導を継続的に実施する, といった特徴がある。

「課題発見実習」で体験したことは, 毎週月曜日に大学で実施される「教育実践研究 I」において, 3~4名の新卒院生と研究者教員・実務家教員各1名で構成するグループで共同省察する。そして, 共通科目等を通して学んだ理論知と実習を通して学んだ実践知を融合するとともに, それぞれの自己課題を認識するように導く。

実習の記録は, その日の実習内容を記入する「実習日誌」と, そこで学んだことや各自の省察を記入する「実習分析」に分け, 後述する遠隔教育研究指導システム「こらみゆ」内のWEBポートフォリオに記入し蓄積していく。こうすることで, 個々の院生が記入したことがリアルタイムで教員及び院生間で共有される。さらに, 個々人が書いた「実習分析」は, 上述した「教育実践研究 I」で共同省察される。

では, このように設計された本専攻の教育システムは, 実際に平成20年度に入学した10名の新卒院生に対し, 自己課題の拡大・深化を支援するものとして有効に機能することができたのであろうか。今年度前期4月下旬から7月中旬までの実践状況から評価し, その有効性と課題を明らかにする。

2 「課題発見実習」における実習体験の拡大・深化

(1) 実習体験の領域的拡大

まず, 「課題発見実習」においてどのような領域において実習が行なわれたのかを明らかにする。その際, 院生が「実習日誌」に記述した13回分の実習記録を, 「共

通科目」の領域として文部科学省³⁾が示している5領域「教育課程」「教科指導」「生徒指導」「学級・学校経営」「学校教育と教員のあり方」に分類して考察した。

①「教科指導」領域はほぼ全員が毎回体験している。教師の仕事の中心であり、新卒院生の自己課題の多くがこの領域であることも反映している。中学校では、配属された学級で一日実習する中で、自分が担当する教科以外の授業も参観している。

②「学級・学校経営」領域は、特定の学級に所属しながら実習を行なった小学校での実習生がほぼ毎回体験している。特に、「朝の会・帰りの会」「給食」「掃除」などの学級活動への参加が目立っている。

③「生徒指導」領域は、特に中学校で実習を行なった院生が数多く体験している。継続的に実習を行なう中で、問題行動を繰り返す子どもに注目し、その子に対する学校の働きかけを注視したり、自分自身も働きかけたりしている。

④「学校教育と教員のあり方」領域は特に実習前半に体験している。実習前半は、年度初めなので校務分掌の会議等が多くあり、さらに実習校も多様な体験を提供しようという配慮があったために、地域での学校運営協議会への参加など学部の教育実習ではできない体験をしている。

⑤「教育課程」領域はほとんどの院生が実習記録には記述していない。これは学校で教育課程に関する活動は年末から年度末にかけて取り組まれるからである。しかし、「共通科目」の「教育課程編成の理論と実践」の中で各実習校の教育課程及びその編成方法について調査し報告することが要請され、各実習校の教育課程に関する学習は行なわれている。

以上のように、「課題発見実習」では多様な領域での多様な実習体験が行なわれている。そしてその体験は、実習校の受け入れ方や各院生の自己課題に応じて個性化していることが分かった。

(2) 実習体験の質的深化

「課題発見実習」での院生の実習体験は、領域的に広がっているだけでなく、実習体験の質的な深化も見られる。

①実習を通して発見したこと＝「発見的な内容」の深化

「課題発見実習」において多様な領域での多様な体験をする中で、新しい実践知を発見し深めている。例えば、それは次のような記述に見られる。「教科指導」領域では「私自身、授業をこなすことに精一杯で児童がどこでつまずき、分からないのかということが把握しきれていなかった。『分かっただろう』という前提で授業を進めてしまっていたことが分かった。」(院生A)。「生徒指導」領域では「児

童同士のけんかに止めに入った。先生方の対応を見たり、実際自分が働きかけることで生徒指導や教師のすべき働きや態度など色々参考になった。」(院生 I)。

②「発見的な内容」から「意識変容的な内容」への深化

実習前半は多様な実習体験が追求されたため、初めての体験の中で様々な「発見」を蓄積しているが、その体験を通して自らの教育観や指導観を見直し深めている。例えば「生徒指導」領域では、配属学級の児童から聞いた話として「前年度に授業中抜け出したり、言葉遣いが荒かったり、大変な状況であつたらしい。児童に対してやさしいばかりでは、教師として成り立たないのだと感じた。ただし、叱るタイミング、場所、言い方など考えなければならないことはたくさんある。」(院生 A)という記述に見られる。指導の難しさや実践者としての悩みや意識が深まっている。

③実践者としての主体的な実習体験の深化

実習後半には、担任の教師の代行を体験する中で、教育実践の主体として実習体験し、学びを深めている。例えば、「学級・学校経営」領域では「朝の会、帰りの会での話をさせていただき、限られた時間で何か意味のある話をする事の難しさを感じた。それと同時に伝えたい思いはたくさんあるけれど、その中からテーマを絞り、生徒に分かりやすく、面白く話す技術が足りないと感じた。」(院生 C)という記述の中に読み取ることができる。「教科指導」では「1年生のドリル学習の時間に担任の先生が不在で自分ひとりで関わったが、最初にすべての指示を与えることができずに児童がドリル学習をしている合間に指示を出す形になってしまい、あまり言うことを聞いてもらえず、苦勞した。・・・(中略)・・・特に低学年では口頭で一回で分かる子は少ないように思う。そのために分かり易い言葉を用いる、板書する、復唱させることを繰り返す・・・」(院生 I)とある。ここでは、責任ある立場での自らの主体的な対応を省察し、この体験を通じての学びを深めている。

④自己課題としている領域から他の領域を重ねて体験しようとしている。

実習前に授業力の向上を自己課題としている院生が、他の領域についても体験を蓄積している。例えば、「不登校の生徒の家庭訪問に同行させていただき、担任の先生の働きかけの一端を見ることができた。」(院生 D)という記述に見られる。

3 「課題発見実習」における学習履歴の可視化とその考察

本項では「課題発見実習」における自己課題の発展の拡大と深化を分析し、その過程を精査した結果を考察する。このため、先ず、本研究の前提を述べた後、分析対象である実習日誌の分析の枠組みと手順について、その概要を以下に説明する。

(1) 分析・集計に当たっての前提

- ①体験・経験の件数が多いことは、力量形成に実効あると看做される。
- ②体験・経験の件数が多いことは、実習校の担当教員・同僚から信頼されている証左である。
- ③限られた空白に記述する内容は、特筆される強烈な印象、あるいは省察し特に伝えたいことに限定される。
- ④表 1 に示すように院生一人ひとりの課題目標が異なるので、到達評価は個人(個別)評価とし、かつ、プロセスが重視される。

表 1 新卒院生に関わるプロフィール

No	院生	性別	院生の出身大学等	教採	大学教員	実習校	年度当初の課題
1	A	女	国立系 K 大学教育学部	—	N, Ku	I 小	授業力向上。特別支援教育を視野に入れた授業構成の研究
2	B	男	本学教育学部	合	Y, H	M 小	子ども理解。集団作り
3	C	女	同上	—	Ka, Ku	C 中	分かる授業をつくる
4	D	女	私立 H 大学他学部	—	Ka, H	I 中	意欲を引き出す授業作り
5	E	男	本学教育学部	合	Ka, Ku	C 中	授業力の向上
6	F	女	同上	—	Ka, H	I 中	生徒理解。柔軟な授業作り
7	G	女	私立 N 大学他学部	—	W, Ku	O 小	子ども理解と人間関係作り
8	H	男	国立系 Y 大学教育学部	—	W, Ku	O 小	子どもへの適切な声掛け
9	I	男	国立系 N 大学教育学部	—	Y, H	M 小	教師と子ども、子ども相互の関係作りとその分析
10	J	男	本学教育学部	—	N, Ku	I 小	子どもの行動の観察力向上

備考：「教採」の“合”は平成 20 年度教員採用候補者に登録済みのもの

(2) 実習日誌と分析方法

「こらみゆ」に毎週投稿された実習日誌並びにそれを閲覧した指導教員から投稿された事例を図 3 に示す。これらの記述内容を表 2 に示す共通科目 5 領域に対応した領域に大別し、更に各領域については、表 3 及び表 4 に示すように「認知・意識」並びに「行動・活動」の 2 つのレベルに分けた。更に各レベルについては 3 つの水準を設定して、弁別の指標及び基準とした。

表 2 共通科目 5 領域に対応させた教職専門領域名と弁別の例示

No.	教職専門領域名	例示
1	学校教育と教員のあり方	教員の業務内容・勤務態様の受講，学校／学年行事・職員室での手伝い，部活の補助
2	学級・学校経営	職員朝礼，各種部会，職員会議，HR 等への陪席
3	教科指導	授業参観，TT，特別支援指導補助，授業担当，採点などの実務
4	教育課程	教育課程会議
5	生徒指導	校門指導，教育相談室での補助，児童・生徒間の誹りへの関わり

表 3 認知・意識レベル

No.	レベルの段階	評点	例	示
1	再認的な内容	1.0	事前に十分教材研究をする必要があると改めて思った。	
2	発見的な内容	1.5	学校行事で教員同士が助け合っていることが分かった。	
3	意識変容的な内容	2.0	特別支援の子どもたちと直接関わってみて、子ども一人ひとりの気持や考えが異なるので、対応を考え直さないといけない。	

表 4 行動・活動レベル

No.	レベルの段階	評点	例	示
1	参観・傍観	0.5	担任教師が授業されるのを参観した。	
2	支援・補助的活動	1.0	学校行事の準備で担任教師と一緒に作業を行った。	
3	直接的関わり	1.5	担任教師から授業運営を任されたので、1時間授業を行った。	

以上述べた弁別基準に則って、実際に実習校で課題発見実習(以後、実習という。)を行なった第2週から第14週の実習日誌の内容を精査した。実際の実習日誌の記述内容を弁別した事例が表5である。それらをさらに図2の様式で集計した。

表 5 実習日誌の記述内容と弁別の事例

【記述事例1】教員という職業の事務的な面について考えるとその量は、一人当たりに対して多いと感じた。それぞれの教員が授業や生徒指導、部活動を持ちながら印刷など事務的な仕事量も多い。今日は、放課後、職員研修で出された自己目標シート37枚1組を約150部作る作業をさせていただいたが案外時間がかかってしまう。教員の職業の事務的な側面をみせていただき、物理的に一定の時間がかかるこのような単純作業を、より効率的にすませることが、生徒とのかかわりなど他の時間にあてる時間を作ることに繋がると感じた。				
『学校教育と教員のあり方』		認知・意識	行動・活動	
<ul style="list-style-type: none"> ・教員の業務は多種多様 ・作業効率向上で指導時間の確保 		レベル2 (2件)	レベル3 (1件)	
【記述事例2】先生の発問と生徒の意見や様子を記録し、発問の意義を考えたり、どのような発問が生徒の意見の広がりを引き出しているのかを分析したりした。また、授業での生徒の思考の流れに着目した。				
『教科指導』		認知・意識	行動・活動	
<ul style="list-style-type: none"> ・発問の工夫 ・思考の重視 		レベル2 (2件)		

月 日	方 教 学 校 の 教 育 と 教 員 の あ り 方	レ ベ ル		レ ベ ル		レ ベ ル		レ ベ ル		レ ベ ル		レ ベ ル	
		認 知 ・ 意 識	行 動 ・ 活 動	認 知 ・ 意 識	行 動 ・ 活 動	認 知 ・ 意 識	行 動 ・ 活 動	認 知 ・ 意 識	行 動 ・ 活 動	認 知 ・ 意 識	行 動 ・ 活 動	認 知 ・ 意 識	行 動 ・ 活 動
		1		1		1		1		1		1	
		2		2		2		2		2		2	
		3		3		3		3		3		3	

図 2 実習日誌分析集計表の様式

2008年
06月04日
19:59

12: 院生 C
課 日誌

5月28日の実習日誌

<実習の目標>

自分が授業をすることを意識して、「自分ならどうするか」という視点を持って授業を観察するとともに、生徒と関わることにもっと努力する。

<実習内容>

授業観察では、活動の場面での生徒の様子を追いながら、必要に応じて声をかけるようにした。また、教師の生徒への関わり方を観察した。

<取組の結果>

顕微鏡での細胞の観察では、細胞が見えたときに「すごい」など歓声が上がっていた。また、他の生徒の顕微鏡と見比べている生徒もいた。教師は、難しい作業に手間取っている生徒を支援したり、細胞が観察できるように助言、または顕微鏡を調整したりしていた。授業で一番面白いところに生徒が時間をかけられるように呼びかけ・支援をすることが大事だと思った。

<目標と取組についての自己省察>

生徒の活動の様子を見たり、実際に話をしてみたりすることで、生徒がどんなことに興味があるのか、どんなときに感動するのかなど、生徒の実態が見えてくるのだということがわかった。

<教育実践研究Ⅰを通しての省察>

実験に対する目的意識を持たせるためには、生徒が興味を持ち、疑問を感じ、それを解決したいと思うのは、何を見たり聞いたりしたときか考えてみる必要があると感じた。

<今週取り組みたいこと・目標>

自分が授業をすることを意識して、「こんな授業がしたい」というイメージを持ちながら授業を観察し、生徒の実態をふまえた授業を計画できるようにする。

実務家教員 Y

授業をするのは教師ですが、学習をするのは生徒ですね。生徒の興味・関心や問題意識を想定しないで授業をいくら練ったとしても、生徒の学習は成立しないこととなります。生徒の興味・関心や問題意識の想定には、生徒のこれまでの学習経験や生活経験を理解しておく必要があります。学習や生活の中で何をどのように獲得してきているかです。学問的な系統性だけでなく、生徒の学習の系統性を十分に考慮するようにしましょう。生徒の実態を把握する意味でも、前時までの授業をしっかりと観察しておくことが大切ですね。また、自分がしようと思う授業については、しっかりとイメージしておくことが必要です。生徒の動きと自分の動きを具体的に考えることができ、どうしてそのような動きが起こるかははっきりさせておくとういでしょう。

図 3 「こらみゆ」に投稿された実習日誌（左）と指導教員のコメント（右）の事例

(3) 分析結果のグラフ化

以上述べた分析方法に沿って得られた集計件数と表 3 及び表 4 中の「評点」との積で得られた数値を円形の大きさ（直径）に対応させて変換し、10 人分について整理したのが、図 4-1～図 4-10 である。

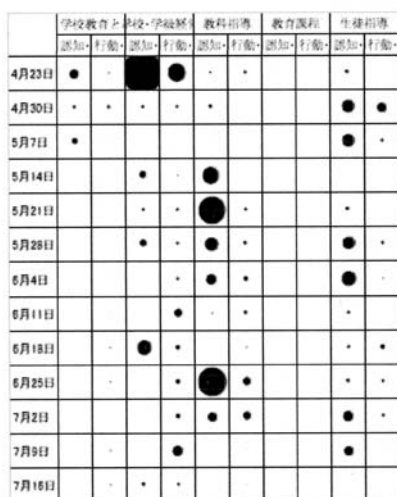


図 4-1 院生 E

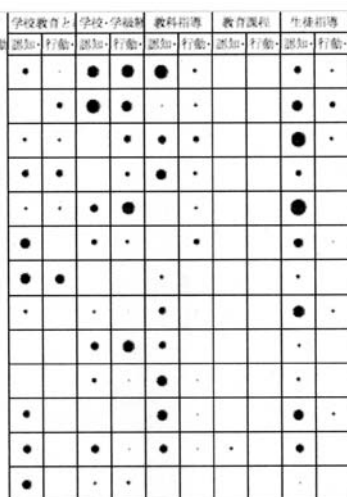


図 4-2 院生 F

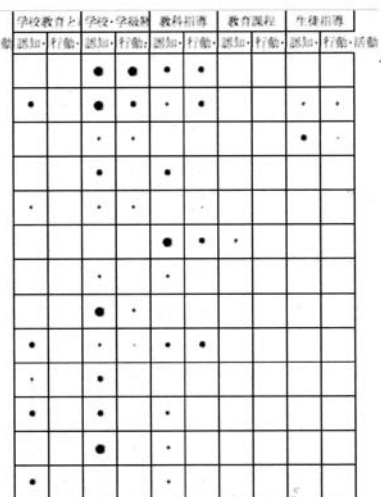


図 4-3 院生 G

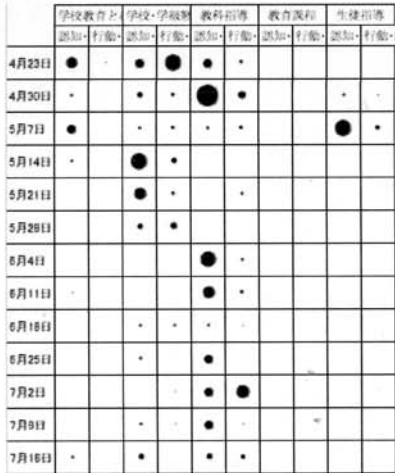


図 4-4 院生 I

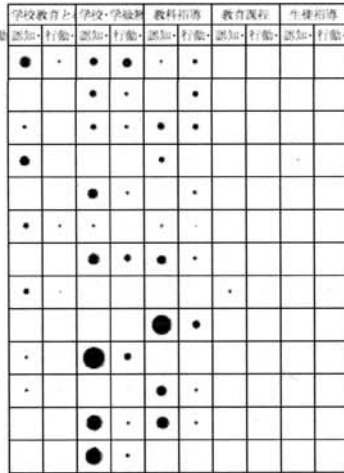


図 4-5 院生 H

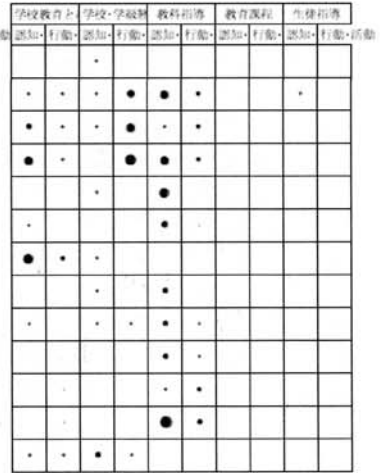


図 4-6 院生 D

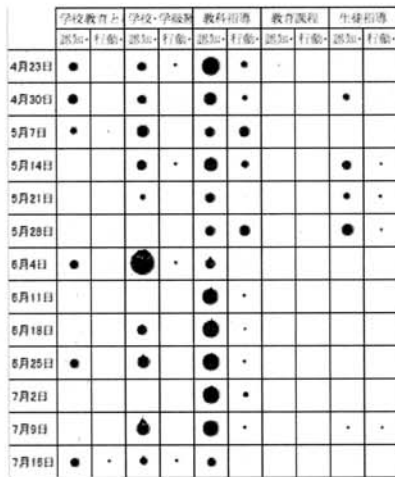


図 4-7 院生 J

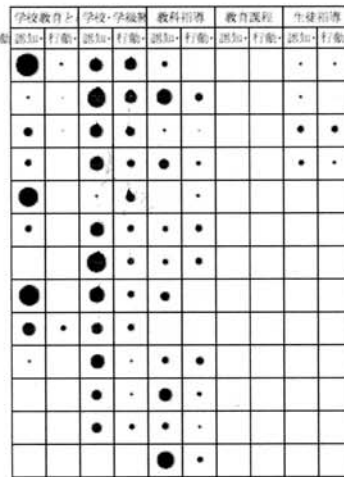


図 4-8 院生 B

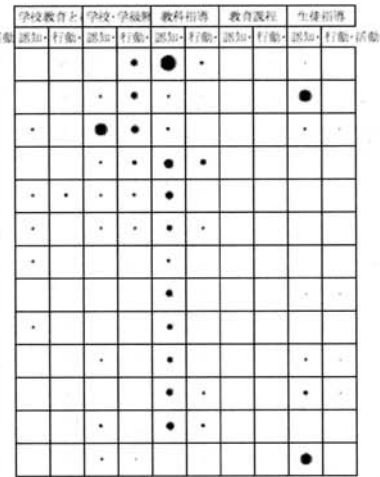


図 4-9 院生 A

学生氏名	学生ID	実習校名	C中学校		分析者名	大学教員No				
			教 科 専 門 区 域 名							
			学校教育上	学校・学級科			教科指導	教育課程	生徒指導	
月 日	認知	行動	認知	行動	認知	行動	認知	行動	認知	行動
4月23日			●	●						
4月30日	●		●	●						
5月7日	●		●	●						
5月14日	●		●	●						
5月21日			●	●						
5月28日			●	●						
6月4日			●	●						
6月11日			●	●						
6月18日	●		●	●						
6月25日	●		●	●						
7月2日			●	●						
7月9日			●	●						
7月16日	●		●	●						

図 4-10 院生 C

図 4 集計結果のグラフ化

(4) 考察

「課題発見実習」を通して、新卒院生は、大学の指導教員、実習校の教員及び同期生らの支援を受けて、各自の自己課題を発見し深化させるという所期の成果を得たと判断される。以下に図 4-1~同-10をもとに成果について考察する。自己課題の発見及び深化の過程と到達段階の考察に当たっては、以下の3つの要因から考察する。

- 1) 個人の要因
- 2) 実習校の要因
- 3) 大学側の要因

1) については、以下の5つにまとめられる。

①入学時までの学習履歴の相異が実習開始当初の意識や行動に顕著に見られる。

新卒院生 10 人はそれぞれに年度当初の課題発見実習のオリエンテーション（4月16日）において、入学試験時の口頭試問で確認されたように、改めて教育に関わる自己課題を持つよう指示された。その概要は表1に示したが、ほぼ一様に学部における教育実習の経験から発想される域を出ていない。“子どもについての理解”に言及しながらも“授業を上手にやる”という授業運営面の力量形成が当初の主要な課題となっている。しかし、この課題意識も精査すると出身大学・学部の違いによって、関心の広がり及び意識の深まりは異なることが分かる。

教員養成系学部出身者は、学部の教育実習については入学時から体系的に履修し、実習期間も5～7週間にわたる。一方、教員養成系以外の学部出身者は、教員免許法で定められた基準（実習期間は2週間）で、かつ、出身校で教育実習を行なう、いわゆる“母校実習”に委ねられている。このような実態は教員養成系学部であっても教育実習が卒業要件でない総合教育課程出身者においても同様である。

学部での教育実習経験の差異は、実習期間の第1週に「学校・学級経営」「学校教育と教員のあり方」「生徒指導」の関心領域の拡大（●の散布）と意識の深化（●の大きさ）の違いとして見られる。例えば、図4-1、同-2、同-4、同-6、同-7である。

②すでに教員採用試験に合格し、採用候補者として登録されている者は、関心を持つ領域が年度当初から幅広く、意識面のみならず行動面においても高い水準を維持していると推測される。例えば、図4-1、同-8である。採用候補者ではない教員養成系学部出身者にも同様な傾向が見られる。例えば、図4-2、同-7、同-10である。

③教員養成系大学以外の出身者は、関心の領域の広がりやや欠け、深化の程度も全般に浅いと看做される。例えば、図4-3、同-6、同-9である。

④ある一つの領域に関わる課題意識を持って実習を継続している者が、実習期間の途中で別の領域に関心を持って課題意識を変える事例が見られる。具体的には、「教科指導」に関わる課題意識を持って実習を継続している者が実際に授業を担当して以降、「学校・学級経営」あるいは「生徒指導」に関心を持つ事例が見られるが、その逆の事例も見られる。例えば、図4-4、同-7、同-8、同-10である。

⑤個人の性格によって課題意識の広がりや深化に顕著な差異が見られる。

学部における教育実習が同一の学習履歴の場合でも、個人の性格、とりわけ外向性の者とそうでない者とは顕著な差異が見られる。例えば、図 4-1, 同-2, 同-7, 同-8, 同-10 である。

2) については、以下のように要約できる。

課題実習の受け入れ先である学校の方針などによって、実習体験の質・量両面にある程度の差異が見受けられる。

「教育課程」の領域が皆無に近いことは、既述した通り、本実習期間が次年度の教育課程・学校年間行事等について検討する時期でないからであろう。「生徒指導」については、児童・生徒との人間関係が十分できていない新卒院生が関わることを実習校自体が回避させたいだけでなく、院生自身も深く関わることを回避する傾向が見られる。このような状況下でもほぼ継続して「生徒指導」に関わる体験を持つ事例も見られる。例えば、図 4-1, 同-2, 同-7, 同-9 である。

特定の学級担任教員のもとで実習を行なう体制の実習校と、配属学級を特定しないで新卒院生の意志で諸教科の授業あるいは学校・学級経営等に参加できる体制の実習校に大別できる。

実習期間の後半には、教壇実習として授業を担当する機会を与えられる者が見られるが、授業担当後には意識・行動の両レベルでかなり顕著な変化が見られる。例えば、図 4-1, 同-6, 同-7, 同-8, 同-9, 同-10 である。

3) については、以下のように要約できる。

前述したように新卒院生の教育実習の学習履歴は一様でない。特に学部教育において体系的な教育実習を履修していない者は、自己課題としての意識化に迷いと悩みがあるだけでなく実習校に適応することさえ当初は困難を伴った様子が窺われる。このような新卒院生に対して、教育現場を熟知している実務家教員が「こらみゅ」を通して適切な指導助言を与えるだけでなく、授業終了後に対面で個別に相談に応じて、いわゆるカウンセリングを行なった。実務家教員による新卒院生に対する具体的で、かつ、現実的な指導助言は、彼らの実習校への適応促進と実習意欲の動機づけに多大の効果があつたと特筆される。例えば、図 4-5, 同-6 である。

また、図 4-1～同 10 から推測されるように、新卒院生が自己課題を焦点化し深化させる過程は、決して一様な線形ではなく紆余曲折を経ている。彼らが実習期間中に自己課題の焦点化と深化の過程で迷い苦悩した場合には、実務家教員が教職経験 20 年以上にわたって蓄積したノウ・ハウを駆使して、適切な指導助言を与えた。

更に実務家教員は研究者教員と相談の上、随時、実習校を訪問して新卒院生によ

る実習の実態を把握することに努めた。具体的には、実習校の校長、教頭だけでなく直接新卒院生を指導している教員に会って、課題発見実習の円滑な実施・運営に支障となる課題の抽出とその解決について検討し、改善に努めた。

4 新卒院生の実習体験と学びを支援するシステム

新卒院生の課題発見を促進し深化させる上で以下の3つの方策・手段が極めて有効であった。

(1) 「教育実践研究」における共同省察

「教育実践研究」では、多様な実習校で実習する院生と研究者教員・実務家教員によってグループを編成し、多角的な視点から共同省察できるように配慮した。「共通科目」5領域を分析の観点とし、三者間での分析・討論を通して、各院生の自己課題を構造的に把握できるようにした。院生は毎授業時に先週の実習についてWEBポートフォリオに記入した「実習分析」を印刷・配付し、「子どもの実態」「教員の実態」「学習指導の実態」「生活指導・学級経営」「教育相談・個別指導」「学校行事」等をめぐって気づいたことや自己省察をめぐり討論を行なった。その結果、実習開始時にそれぞれが設定していた自己課題は焦点が絞られていき、一層明確なものとなっていった。例えば、ある院生は当初自己課題を「児童とのよりよいかかわり」というぼんやりとしたものにしてしたが、グループでの討論と実習の繰り返し・往還を通じて自己課題に対する考えが次の①～⑥ように変容していった。

①自分が追求しようとしている「児童とのよりよいかかわり」は、学校生活でのどの場面におけるかかわりなのかを絞らないといけない。

②児童がありのままの姿を見せる場面（例：休み時間）と、教師がねらいをもって意図的に指導する場面（例：授業）とではかかわり方は必然的に異なるだろう。

③取り組みやすいし、結果も明確に分かるのは授業におけるかかわりである。まずはそちらから取り組み、授業以外の場面でのかかわりはその後の課題としよう。

④授業のねらいに到達するために教師が状況をつくり、その状況における児童の反応や活動に意図的にかかわるのであるから、授業において「児童とのよりよいかかわり」を検討するためには、どのような状況をつくるとどのような反応が予想されるかを検討することが必要不可欠である。

⑤授業のねらいや指導の価値観が明確であれば、その授業における望ましい児童像も明確となる。また、自分が設定した状況の中で児童が行う活動に対し確かな根拠を持って指導することができる。そして、指導の結果が分かりやすい。

⑥授業以外の生活場面においても、望ましい児童像や指導の根拠となる指導観・児童観を持っていれば、おのずと「よりよいかかわり」になっていくだろう。

このように、「教育実践研究」において共同省察する中で、この院生は自己課題を明確にするとともに授業観を養うことができたのである。また、教育実践研究には、院生の実習上の悩みや迷いを解消・軽減し、次回の実習への活力源となる隠れた役割もある。ある院生は実習3週目が終わった教育実践研究で「実習協力校の先生とコミュニケーションが全く取れておらず、自分がやってよい範囲・やってはいけない範囲の境界がいまだに見えていません」と悩みを打ち明けた。これに対し、研究者教員・実務家教員・院生の三者から共感と激励の意見が交わされ、この院生は「自分は失敗を恐れて消極的になっていた」「自分が現在持っている力を出せばよい」との気づきを得るに至った。そして、その翌週の実習で、手紙を用いてコミュニケーションの不全状態を解消する糸口をつかみ、積極的に実習に臨むことが可能となったのである。このように「教育実践研究」には実習生に対する集団メンタリングの働きもある。

(2) 実務家教員による訪問指導

1) 訪問指導の体制

実習期間を通して実務家教員はたびたび実習校を訪れ、各学校との良好な関係性を築き、院生がスムーズに実習に入っていけるように、また有益な実習体験が数多く経験できるように担当者との連絡や調整にあたった。実務家教員の訪問指導では単にその日の院生の活動状況を確認するだけではなく、「この問題に悩んでいる」「こんな取り組みにも関わっていきたい」「実習校側に伝えてほしいこと」等の考えや意見の聴取を適宜行ない、院生にアドバイスしたり、実習校側の担当者と話し合って今後の方向性を確認し合ったりした。

また、後述するTV会議システム(iChat)を活用することで、実習中の緊急連絡やリアルタイムな授業実践の観察、放課後等に顔を見ながらの指導等で実務家教員と院生とが相互に連絡を取り合うことができ、院生のサポートに効果をあげた。

2) 授業実践への支援

院生の自己課題は「教科指導」に関する内容のものが多く、実習後半になると授業実践を行なう機会も与えられた。授業前の指導案作成の際には、院生の実習校での授業観察や担当教員からの指導、自らの課題意識等を参考にして、実習生は授業の流れや何をどのように工夫して取り組むかを実務家教員と共に考え指導案を作成

した。そして、実際の授業実践においては、実務家教員は学校からの許可のもとに授業観察とビデオ撮影を担当した。このことにより、事後に院生と共に複数の実務家教員で実際に行なった授業を検討することができるとともに、院生が実際に自分の姿を視聴することで新たな発見や気づき、次回の授業に向けた課題も鮮明になり、院生のより意欲的な実習への取り組みへと発展的につながった。このような事後のきめ細かい指導により院生は更に授業力を高めようとし、自己課題を掘り下げ、自ら解決策を企画・立案しようとする態度の変容が見られるようになった。

3) 院生の実習体験の拡大・深化への関与と指導

実習校へも依頼し、院生には様々な活動への積極的な参加を心がけるよう指導した。その結果、例えば所属する学年や学級の生徒指導上の問題に強い関心を持っている院生が生徒の個人面接等の実際の指導場面に直接的に関わることもできた。また、実習日以外にも集団宿泊的行事への参加や体育的行事、部活動の公式試合や夏季休業中のプール指導等の教室外での活動にも積極的に参加している院生も多い。これらの院生は自己課題との関連性から学校という組織に貢献し、充実感を味わうことができたといった感想を多く寄せた。また、このような院生の取り組みの事前や事後には、参加の仕方や留意すべきこと、指導の方向性等の院生の問題意識に対して研究者教員と実務家教員が助言や指導にあたった。これらの指導の中で、さらに試してみたい問題の解決策やかかわり方を提案する院生もあり、児童・生徒との関わりにさらに意欲的となり、課題意識を深めることができた。

(3) 遠隔教育研究指導システム

院生と指導教員との双方向コミュニケーションを実現させる2つの専用の遠隔教育研究指導システムを構築した。一つはSNS (social networking service) エンジンをオープンソースで提供している「OpenPNE」を本学教職コラボレーションセンター技術職員が平成19年12月下旬から同20年1月初めにかけて一部改編し、専用システムとして稼働させ「こらみゅ」と命名した。「こらみゅ」は、図5に示すようにインターネット経由で文字を主体(静止画である写真を最大3枚まで添付可能)とするブログ様式の情報交換機能を持つシステムである。二つ目は、多地点テレビ電話機能ソフト「iChat」である。

「こらみゅ」は会員登録制ブログであるmixiと同じ機能を備え、コミュニティと呼ばれるコミュニケーション・グループ単位で構成される。ここに「課題発見実習」のコミュニティを作成し、そこに「実習日誌」「実習分析」を記述して投稿し、

それを閲覧した大学教員が専門家の立場からコメントを投稿する。このコメントは院生の課題発見を支援するだけでなく、実習体験を意味づけ、励ますことで実習校への適応や実習への意欲の向上に役立った。

実習日誌は大学教員のみならず新卒院生相互も閲覧できるので、実習中の院生同士が体験を共有することにもなる。このため、「こらみゆ」上に新卒院生で構成されたコミュニティでは、投稿・閲覧を通して自由に体験や情報交換が行なわれ、自然発生的に学びの場が創られた。

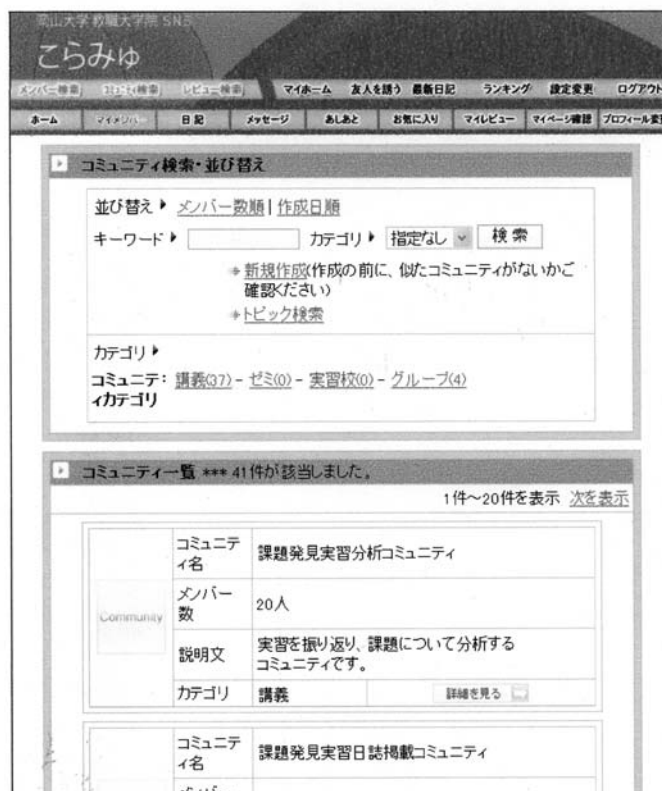


図5 「こらみゆ」のコミュニティ一覧の事例

<注>

- 1) 「課題発見実習」は教職大学院が開設される前年（平成19年）に学部4年生による試行を行ない、そこで明らかとなった成果と課題をふまえてカリキュラム化されている。この試行については、参考文献1)を参照されたい。
- 2) 本専攻の全体的な教育課程については、参考文献2)及び本専攻のホームページ (<http://ed-www.ed.okayama-u.ac.jp/~kyoujissen/>) を参照されたい。
- 3) この「共通科目」5領域は、中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」（平成18年7月11日）で提起されたものである。

<参考文献>

- 1) 稲田佳彦，住野好久，高橋香代，橋ヶ谷佳正，小山朝子，泊直希，近藤勲（2008.7.5）：「教職大学院の学部新卒者を想定した『学校における課題発見実習』の試行の一検討」、『日本教育工学会研究報告集』JST08-3，pp.69-76。
- 2) 岡山大学教育学部（2008.3.31）：『平成19年度文部科学省専門職大学院等教育推進プログラム中間報告書—真に課題解決能力を育てるカリキュラム開発—地域協働学校と教職大学院のコラボレーション—』。

**A Case Study of the Problems Finding Practices
at Schools for Novices in Master Programs
at the Graduate School of Education, Okayama University**

SUMINO Yoshihisa KUROSAKI Toyoo ONO Hiroo HASHIGAYA Yoshimasa
INADA Yoshihiko KASAHARA Kazuhiko NAKAO Michiko NAKAYA
Akitaka YAMASAKI Mitsuhiro WATANABE Junichi TOMARI Naoki
YOKOYAMA Mayuko KONDOH Isao

Graduate School of Education, Okayama University

Key words: professional graduate school of education, school practice, report of practice, Web portfolio

Abstract

In this paper we describe the successful results obtained on novices recognizing/acquiring teacher professional competence based on problem solving/finding abilities with practical know-how related to contemporary school education problems. Over the past academic year, we have developed the curricula of master programs for teachers' higher professions, including a course program for novices treated as a teacher at public schools practicing through one-day school practices every week for a period of 15 weeks. The graduate school with the master's program started in April 2008.

The 10 novices who graduated from our university or other national/private universities at the end of March 2008 were asked to make a report concerning practice or experience at each school. They loaded up their reports to the proper blog system, the so-called Collammu, formed by Collaboration & Communication," reformed "OpenPNE" by us, one of the sns engine, social networking services, available through the internet.

After their academic advisers read each report thoroughly, they interactively loaded up their comments with professional and encouraging aspects to assist the novices into "Collammu." Moreover, each novice has an opportunity every

week to meet his or her own two academic advisers and to get direct advice and comments from them. Each group has of three or four novices and two advisers. They have chances to make themselves conscious of self-problems regarding the teacher profession through group discussions and self-group reflections.

We analyze or scrutinize each content of the practice reports at school, based on individual practices by 10 novices, from the five aspects of the teaching profession: "school education and teachers' professionalism," "school/classroom management," "subject teaching," "curriculum/course standard," and "student guidance." In analyzing the reports as mentioned above, we extract each unit of word or context from the contents of the reports from the five professional aspects, and we assign each aspect with two viewpoints, namely, perception/awareness and behavior/activity. Also, each viewpoint is divided into three levels from the aspect of evaluation. We summarized and formalized the results as shown in Fig. 4-1~4-10, according to each novice through the processing ways mentioned above.

We can conclude that the curriculum with school practice programs for novices is thoroughly able to recognize his/her self-problems in the teacher's profession and to achieve the high levels of competence prominently functioned as expected.



学校支援活動 成果報告書

岡山大学大学院教育学研究科



岡山大学

I 序論

学校支援活動の中核を担う岡山大学大学院教育学研究科教職実践専攻は、平成20年4月全国19大学に設置申請が認められた中国地区では唯一の教職大学院である。教職大学院のカリキュラムは、今日の教育現場のニーズに立脚した内容であること、理論と実践の融合を中核とすることに加え、大学院での研究成果を学校現場に直接還元することに大きな特徴がある。

平成20年度、福武教育文化振興財団による特定教育助成を受けた「学校力向上プロジェクト—教職大学院の学校支援機能を利用して—」は、教職大学院スタートにあたって岡山市石井学区地域協働学校4校、岡山市立岡山中央中学校、岡山中央小学校の計6校を対象に、次年度からの岡山県下各地の院生現任校での学校力向上プロジェクトのモデル事業として展開したものである。

具体的には、平成20年3月までにそれぞれの学校教育目標と学校力向上のための改善計画、教育実践の行動計画をたて、4月より、教職コラボレーションセンターを介して教職大学院院生ならびに教員がそれぞれの学校教職員・保護者・地域と協働して教育実践を行い、成果を検証して、次の段階へ進むための新たな課題を明確化する作業を行った。このプロセスを公表し、他地域・他校の教育実践に活かすとともに、教職大学院の学校支援機能、教員養成機能を充実していくプロジェクトであった。

〈実践報告〉

岡山市石井学区地域協働学校4校が組織する連絡協議会の委員として教職大学院教員が参加し、各学校の改善・行動計画や評価への意見・助言を行うとともに、その実践には、教職大学院教員に加え、活動内容に関連した専門領域の教育学研究科教員や院生・学生が参加・協力する。また、岡山中央小中学校においては、学校評価委員として教職大学院教員が参加して、学校課題を明確にする。

教員養成機能に関しては、小学校での英語教育導入を先がけて行っている石井小学校のイメージ教育や、学力向上を目的として行っている三門小学校の三門タイムなどの、各学校の特色ある授業や活動に参加（見学、意見交換）・参画（実習、学校ボランティア）することで、現職教員院生の現任校の検証・評価や、ストレート院生の学校理解・学校づくりの事例として有効であり、教員養成の教育課程充実に活かせるものであった。なお、これらは教職大学院の「教職実践研究」とも関連しており、岡山県教育庁、岡山市教育委員会、各対象校関係者を招き、一般公開で、「中間報告会」「最終報告会」を開催し公表する。

さらに、学校支援の一貫として、学力向上において学力と人間力はひとつのものであるという視点から教職大学院教員が取り組む研究であるCharacter Education（品格教育）の教材開発で作成したポスター（小学生対象）を県内の小学校に配布し、道徳教育や生活指導での活用を提案する。アンケート調査も依頼し、調査・検証を行い今後につなげることを考えている。

〈ポスター〉



この初年度に引き続き，平成21年度から各年度10校を対象校として継続し，平成24年度まで合計46校で，学校力向上プロジェクトに取り組む予定である。特に平成21年度は，「学校力向上プロジェクト—学校力向上を学力・人間力育成につなぐ—」として，対象校を岡山県教育委員会から派遣された現職教員10名の現任校に対象を拡げ，学校力向上を学力・人間力育成につなげる事業として展開したいと考えている。

岡山県教育委員会から派遣された10名の現職教員の現任校での取組については，すでに下記のように，大学院と岡山県教育委員会，ならびに現任校において，課題の調整がなされており，平成21年度は，学校現場での課題解決と検証を指導教員共々担い，チーム解決力・解決策の企画力を現場での実践を通して育成して，学校力向上を目指すことを到達目標としている。

〈現職院生の課題テーマ〉

- ・ 『校内研修に関する研究～特別支援教育の教師の専門性を向上するために～』
(岡山県立早島養護学校 教諭)
- ・ 『小学校のカリキュラム開発に関する研究～国語力育成を中心に～』
(美咲町立美咲中央小学校 教諭)
- ・ 『人間性豊かな地球市民として育ち合う教育研究』
(津山市立久米中学校 教諭)
- ・ 『地域と学校との協働に関する研究～校内に地域の方々の居場所を設置するための具体的な方策と提案～』(備前市立伊里中学校 教諭)
- ・ 『中学校の通常学級における特別支援教育を視野に入れた生徒指導の研究』
(岡山市立操南中学校 教諭)

- ・ 『コミュニティースクールに関する研究～学校運営協議会の組織運営と教育活動の改善～』
(岡山市立富山中学校 教諭)
- ・ 『学校経営に資するミドルリーダーに関する研究～ミドルリーダーの資質向上につながるスクールリーダー(管理職)の働きかけ, コーチングの際のポイントの明確化～』
(岡山県立岡山一宮高等学校 教諭)
- ・ 『これからの時代に求められる学力形成の在り方～算数教育を通して～』
(矢掛町立山田小学校 教諭)
- ・ 『授業研究における組織の活性化および授業力の向上～確かな学力を求めて～』
(倉敷市立倉敷西小学校 教諭)
- ・ 『学校における危機管理に関する研究～学校安全に対する教職員の危機管理意識と組織体制の改善～』(瀬戸内市立行幸小学校 教諭)

Ⅱ 院生による学校支援活動報告

1. 現任校での活動

1) 教育実践研究中間発表会

日 時： 平成 20 年 10 月 8 日（水） 9：30～12：00

場 所： 岡山大学自然科学研究科棟大会議室

発表内容：

1. 校内研修に関する研究

—特別支援教育の教師の専門性を向上するために—

青田後喜 （仲矢明孝教授）

2. 小学校のカリキュラム開発に関する研究

—国語力育成を中心に—

池上敏子 （佐藤博志准教授）

3. 人間性豊かな地球市民として育ち合う教育

江森享子 （橋ヶ谷佳正教授）

4. 地域と学校との共同に関する研究

—校内に地域の方々の居場所を設置するための具体的な方策と提案—

岡武俊樹 （熊谷慎之輔准教授）

5. 中学校の通常学級における、特別支援教育を視野に入れた生徒指導の研究

國富聖子 （住野好久教授）

6. コミュニティスクールに関する研究

—学校運営協議会の組織運営と教育活動の改善—

佐藤成実 （佐藤博志准教授）

7. 学校経営に資するミドルリーダーに関する研究

—ミドルリーダーの資質向上につながるスクールリーダー（管理職）の働きかけ、
コーチングの際のポイントの明確化—

萩原康正 （淵上克義教授）

8. これからの時代に求められる学力形成の在り方

—算数教育を通して—

平松克茂 （小野擴男教授）

9. 授業研究に置ける組織の活性化および授業力の向上

—確かな学力を求めて—

廣田巨史 （小野擴男教授）

10. 学校における危機管理に関する研究

—学校安全に対する教職員の危機管理意識と組織体制の改善—

山本俊美 （田嶋八千代教授）

総 評： 乙部憲彦岡山県教育庁指導課総括副参事

校内研修に関する研究
－特別支援教育の教師の専門性を向上するために－

22420074 青田 後喜
指導教員 仲矢 明孝先生

1. 研究の目的

2007(平成19)年4月1日、学校教育法等の一部が改正され、「特別支援教育」が新たな教育制度として法令上に明確に位置づけられた。これに先立ち2001(平成13)年の「21世紀の特殊教育の在り方について」(最終報告)を初めとする答申等には、特殊教育関係教職員の専門性の向上が提言されている。

現任校においても、学校経営目標の一つに、「専門性の向上」があげられ、その目的を達成すべく様々な研修が行われている。確かに現任校は、一般校に比べ研修の機会は保障された恵まれた状況にあるといえる。しかし、それらの研修が、教職員一人一人の専門性向上にどの程度結びついているかについては、不確かな部分も多く、現状分析とともに、より効果的な研修の在り方について検討することが必要と考える。

本研究では、専門性向上の具体的な方策の一つである校内研修に着目し、現任校の事例研究を通して、特別支援学校の研修に関する現状分析及び文献研究等により、特別支援学校の教師の専門性を向上するための校内研修プログラムを作成することを目的とする。

2. 研究の方法

- (1) 文献をもとに、国や県の政策の動向や専門性についての考え方、研修のあり方について整理し、まとめる。
- (2) 研修に関わる特別支援学校の資料収集及び現任校で行う教職員への意識調査の結果分析等により、現任校の研修に関する課題や改善策について検討し、校内研修プログラムを作成する。

3. 教育実践研究報告書の構成

序章 研究の目的と方法

第1節 研究の目的と方法

- (1) 研究の目的
- (2) 研究の方法

第2節 先行研究の検討

第1章 特殊教育から特別支援教育への転換と教師の専門性

第1節 国、県の政策の動向

- (1) 特殊教育に対する答申等と政策の動向
- (2) 岡山県における特別支援教育の動向

第2節 特別支援教育の教師の専門性をめぐる考え方

- (1) 専門性をめぐる議論
- (2) 特別支援教育の専門性の在り方

第3節 専門性向上のための校内研修について

- (1) 岡山県立 B 養護学校の事例

(2) 京都市立 C 総合養護学校の事例

第 2 章 A 養護学校における校内研修

第 1 節 A 養護学校の概要

- (1) 学校の特徴と組織
- (2) 教育目標および学校経営目標
- (3) 肢体不自由部門の教育課程

第 2 節 校内研修に関する学校の現状

- (1) 組織の変遷と研修の現状
- (2) 教職員の意識調査結果
- (3) 聞き取り調査結果

第 3 節 A 養護学校の校内研修に関わる課題と改善の方向性

第 3 章 校内研修プログラムの作成と試行

第 1 節 プログラム作成に関わる基本的な考え

- (1) 主体性を促す校内研修の理論
- (2) 「知識創造」モデルでの校内研修の理論
- (3) 個別の指導計画に基づく校内研修

第 2 節 A 養護学校肢体不自由部門における校内研修プログラム

- (1) 年間計画案とその内容
- (2) 試行
- (3) 反省と課題

終章 研究の結論

4. 実践的考察

特別支援教育における専門性については、一般の小・中学校等で求められる教師の専門性に加えて、様々な障害に関する専門的知識や理解、障害に対応した技能、さらには人間関係を構築する力等様々な要素がある。そこで、これらの特別支援教育における教師の専門性を「形式知」と「暗黙知」の視点を中心に捉え、現任校の校内研修について、専門性向上のためのより効果的なプログラムを作成していきたい。

5. 今後の計画

- ① 現任校で実施したアンケート調査の分析
- ② 文献や他校の取り組みをもとに専門性向上のための校内研修のあり方についての検討
- ③ 校内研修プログラムの作成

6. 主要参考文献

- 北海道特別支援教育センター『特殊教育における専門性について』研修資料, 2002 年。
- 中原淳『企業内人材育成入門』ダイヤモンド社, 2006 年。
- 姉崎弘『特別支援教育』第 2 版 大学教育出版, 2006 年。

① A 養護学校肢体不自由部所属職員の教職年数等の実態 (単純集計)

		全体 N=81 (100%)
所属	1 小学部	35 (43.2)
	2 中学部	23 (28.4)
	3 高等部	23 (28.4)
教職経験年数	1 5年未満	21 (25.9)
	2 5年～15年	21 (25.9)
	3 5年以上	39 (48.2)
現任校肢体不自由部門での勤務年数	1 1年未満	18 (22.2)
	2 1～2年未満	12 (14.8)
	3 2年～3年	32 (39.5)
	4 4年以上	19 (23.5)
障害児教育に携わった通算年数 (障害児学級を含む)	1 5年未満	37 (45.7)
	2 5年～15年	29 (35.8)
	3 15年以上	15 (18.5)
特別支援学校教諭免許状の保有	1 あり	52 (64.2)
	2 なし	29 (35.8)

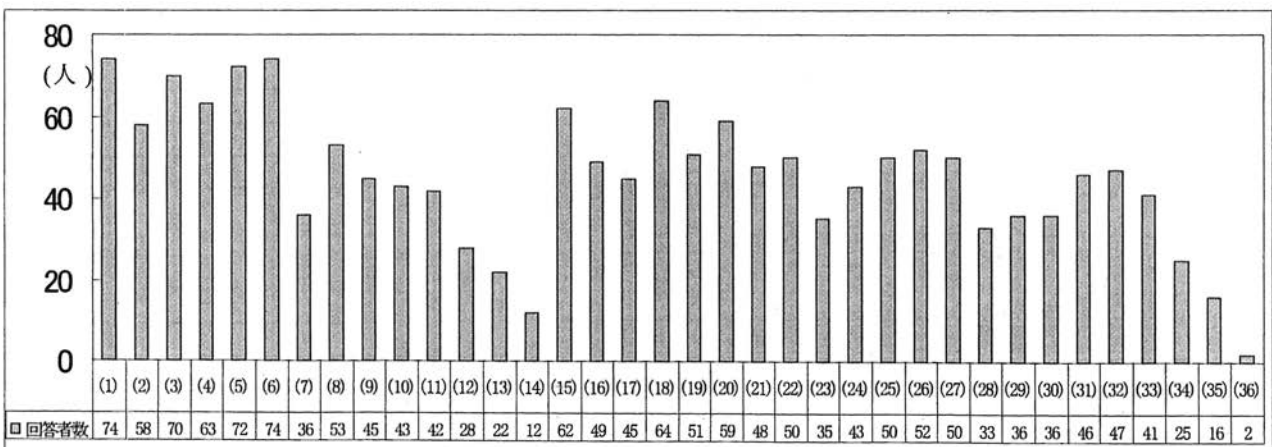
※教職経験年数の分類は、「授業研究と教師の成長」木原俊之 日本文教出版, 2004 を参考にしました。

② 「A 養護学校の教師が専門性として必要と思う項目」調査結果 (単純集計)

専門性として必要と思われる項目

(1) 肢体不自由に関する知識と理解	○	(19) 教材・教具の開発に関する知識と技能	
(2) アセスメント(実態把握に関する知識と技能)		(20) 発達障害に関する知識と指導力	
(3) 障害や病気に関する知識と技能		(21) 個別の教育支援計画や個別の指導計画を策定する能力	
(4) 医療的ケアに関する知識と理解		(22) 個に応じた教科指導能力	
(5) 自立活動(身体)に関する知識と技能	○	(23) 評価に関する知識と技能	
(6) 摂食に関する知識と技能	○	(24) 豊かな感受性	
(7) 教育相談に関する知識と技能		(25) 子どもを思いやるやさしさ(共感)	
(8) 車いす・補助具等に関する知識と取り扱い技能		(26) 保護者と連携して教育を進める力	
(9) 代替コミュニケーションに関する知識と技能		(27) 他の教職員との協調性	
(10) 障害者福祉に関する知識と理解		(28) 学校以外の様々な分野の人との協調性	
(11) 進路指導に関する知識と技能		(29) 指導に関する根気強さ	
(12) 教育課程に関する知識と理解		(30) 責任感	
(13) 情報機器(IT)に関する知識と技能	▲	(31) 人間尊重の精神(人権意識)	
(14) 国際生活機能分類(ICF)に関する知識と理解	▲	(32) 特別支援教育に取り組む意欲	
(15) 重度重複障害児の指導に関する知識と技能		(33) 安全・危機管理能力	
(16) 児童生徒を理解する能力		(34) 小中学校等の児童生徒の指導力	
(17) 授業を見る力(解釈・評価)		(35) 特別支援学校(養護学校)教諭免許状の保有	▲
(18) 授業を作る力		(36) その他	

備考 ○印は上位3項目、▲印は下位3項目を示す。



(補足資料)

③「A 養護学校の教師が、専門性として必要と判断した上位5項目の内容」調査結果(単純集計)
特別支援学校教師の専門性として特に必要と思う上位5項目(番号)

全体		(1)	(5)	(6)	(3)	(18)
所属						
	1 小学部	(1)	(5)	(18)	(6)	(3)
	2 中学部	(5)	(1)	(16)	(25)	(3)
	3 高等部	(5)	(1)	(3)	(6)	(15)
教職経験年数						
	1 5年未満	(1)	(5)	(16)	(3)	(2)
	2 5年～15年	(5)	(1)	(25)	(16)	(6)
	3 15年以上	(5)	(1)	(18)	(6)	(3)
現任校肢体不自由部門での勤務年数						
	1 1年未満	(1)	(5)	(18)	(25)	(16)
	2 1～2年未満	(5)	(16)	(25)	(1)	(18)
	3 2年～3年	(1)	(5)	(3)	(15)	(6)
	4 4年以上	(1)	(5)	(6)	(3)	(18)
障害児教育に携わった通算年数(障害児学級を含む)						
	1 5年未満	(5)	(1)	(25)	(3)	(16)
	2 5年～15年	(1)	(5)	(6)	(18)	(3)
	3 15年以上	(5)	(1)	(25)	(18)	(6)
特別支援学校教諭免許状の保有						
	1 あり	(5)	(1)	(18)	(6)	(3)
	2 なし	(1)	(5)	(6)	(3)	(25)

④「研修に関する教師の意識調査」質問紙

Ⅲ 以下の質問に「⑤とても思う」「④思う」「③どちらともいえない」「②思わない」「①全く思わない」の5つの選択肢から選んで番号でお答えください。(該当の番号に○をつけてください) 校内研修とは、毎週火曜日(16:15～)に行われる研修・研究、または、長期休業中に計画的に設定された研修・研究を指します(公開講座も含まれます)。	⑤ とても そう 思う	④ 思 う	③ ど ち ら と も い え な い	② 思 わ な い	① 全 く 思 わ な い
(1) 専門性向上のために、校内研修は必要である。	⑤	④	③	②	①
(2) 現在の校内研修の内容は、自分の専門性向上に役立っている。	⑤	④	③	②	①
(3) 外部講師を招いての継続研修(自立活動)は、自分の日々の指導に役立っている。	⑤	④	③	②	①
(4) 校内研修の内容は、過不足なく適切である。	⑤	④	③	②	①
(5) 校内研修は、計画的・体系的に行われている。	⑤	④	③	②	①
(6) 校内研修の内容は、すぐに授業に反映できるものがよい。	⑤	④	③	②	①
(7) 校内研修で行われているもの以外に研修したい内容がある。	⑤	④	③	②	①
(8) 校内研修の内容は、直接授業に結びつかないものも必要である。	⑤	④	③	②	①
(9) 校内研修の中に、個人研修の時間が必要である。	⑤	④	③	②	①
(10) 本校の勤務年数や特別支援教育の経験年数によって、校内研修の内容も変えることが必要である。	⑤	④	③	②	①
(11) 研修したい内容によってグループ編成して行う研修方法も取り入れることが必要である。	⑤	④	③	②	①
(12) 個別の指導計画が、自分の授業作りの際の基本となっている。	⑤	④	③	②	①
(13) 主指導者として、研究授業(公開授業)をする気持ちをもっている。	⑤	④	③	②	①
(14) 研究授業(公開授業)は、実践力向上のために必要である。	⑤	④	③	②	①
(15) 研究に関する研修会は、自分の専門性向上に役立っている。	⑤	④	③	②	①
(16) 授業はいつでも公開するべきである。	⑤	④	③	②	①
(17) 研究授業の授業者になった場合、授業反省会は、指導を受けるような会よりも共に学びあうような会がよい。	⑤	④	③	②	①
(18) 重複障害児童生徒を対象とした、教科以外の授業では、主指導より副指導がよい。	⑤	④	③	②	①
(19) 研究授業(公開授業)の反省を生かした授業を行っている。	⑤	④	③	②	①
(20) 「実践のあゆみ」を自分の授業づくりの参考にしている。	⑤	④	③	②	①
(21) 研究授業の指導案作りは負担である。	⑤	④	③	②	①
(22) 個別の指導計画を基に、授業や指導をするのは難しい。	⑤	④	③	②	①

小学校のカリキュラム開発に関する研究
—国語力育成を中心に—

22420076 池上 敏子
指導教員 佐藤 博志先生

1. 研究の目的

小学校の現場に勤務して 19 年。毎日、子どもたちとその日その日の生活を楽しく過ごしてきたが、ここ 10 年くらい「言葉が通じない」「言葉に含まれた意味を読み取る力が弱い」と感じるようになってきた。

私が漠然と不安を感じていたこのころ、子どもを取り巻く教育界では、2000 年頃からの「学力低下論争」や 2006 年 OECD による PISA 調査での日本の子どもたちの読解力低下の指摘を受け、学力向上に向けての動きが活発になった。新学習指導要領では、授業時数も大幅に増え、配慮事項の第 1 に「言語活動の充実」があげられている。このような状況のなか、子どもたちに確かな国語力をつけるためには、私たちはどうすればよいのか。

以上の問題意識から、本研究は、小学校の事例研究を通して、国語力育成カリキュラムを作成することを目的とする。

2. 研究の方法

- ①文献をもとに、国や県の政策の動向や国語力育成カリキュラムについて理解を深める。
- ②事例研究として、現任校の校内研修のあり方を考察する。

3. 教育実践研究報告書の構成

序章 研究を進めるにあたって

第 1 節 研究の目的と方法

- (1) 研究の目的
- (2) 研究の方法

第 2 節 先行研究の検討—国語の取組として—

- (1) 今泉博の授業論
- (2) 松下佳代の授業論

第 3 節 概念の定義

第 1 章 学力・教育改革をめぐる理論と政策の動向 —国語を中心に—

第 1 節 国の理論と政策の動向

- (1) OECD・PISA—読解リテラシー—
- (2) 読解力向上プログラム
- (3) 全国学力・学習状況調査—小学校国語—
- (4) 新学習指導要領—小学校国語—

第 2 節 岡山県の政策の動向

- (1) 言葉の力向上委員会
- (2) 学力向上の取組

第 2 章 公立 M 小学校の事例研究

第1節 学校の概要

- (1) 学校の特徴と組織
- (2) 教育目標
- (3) 教育課程

第2節 学校の経緯と課題

- (1) 学校の経緯—統合まで—
- (2) 学校の経緯—統合1年目—

第3節 校内研修—統合2年目・3年目—

- (1) 研究主題
—岡山県学力・人間力育成推進会議モデル地域研究助成指定校として—
- (2) 研究組織
- (3) 研究方法
- (4) 市川伸一の「教えて考えさせる授業」
- (5) 楠木良夫の「教えて考えさせる授業」
- (6) M小学校教員の「教えて考えさせる授業」

第4節 考察

補論 他の学校の授業観察をして

第3章 国語力育成カリキュラムの開発と試行

第1節 聴き合い、育み合う国語の授業の理論

第2節 聴き合い、育み合う国語の授業の実際

- (1) 学習指導案
- (2) 試行
- (3) 反省と課題

第3節 居場所のある教室づくり

第4節 同僚性と校内研修

終章 研究の結論として

4. 実践的考察

「普通」の子どもたちが自然に学び合える授業、「普通」の教師が力むことなく実践できる授業をめざし、このような授業に必要なものは何かを考えていきたい。

5. 今後の計画

- ①文献をもとに基礎研究をする。
- ②現任校の校内研修に参加し、授業のあり方や校内研修の進め方を考察する。
- ③国語力育成カリキュラムを作成する。

6. 主要参考文献

- 今泉博『学びの発見 よみがえる学校』新日本出版社,2001年。
- 汐見稔幸・上西信夫・今泉博『【教え】から【学び】への授業づくり③ 国語』大月書店,1996年。

人間性豊かな地球市民として育ち合う教育

22420077 江森 享子
指導教員 橋ヶ谷 佳正先生

1. 研究の目的

2007年度、教育に関して全国的に大きな話題になったことの一つに、初めて実施された全国学力・学習状況調査がある。この調査の結果を受け、現任校でも2学期末から県による「学校改善支援促進事業に係るモデル校事業」に取り組んだ。

確かに学力向上は大切なことであり、私も大きな関心を持っている。ただ、学力について最近の取り上げられ方を見ると、一部ではあるが結果公表の是非が取り沙汰されたり、調査結果による予算配分が話題になったりする等、競争を助長し格差を広げてでも、とにかくテストで高得点が出る学力をつけていかなければならないというような風潮が見られるのは気になっている。霞が関のエリート役人がなぜ自殺をするのか。東京大学で精神疾患のために休学する学生がなぜ急増しているのか。いわゆる学歴も地位もある人々による事件や不祥事がなぜ次々に起こるのか。彼らは高い学力を持っているはずの人々である。そう考えると、テストでよい結果が出る学力をつけるだけでは、心身ともに健康な社会の形成者を育成するという教育の目的は達成されないことになる。

「民主的で文化的な国家を更に発展させるとともに、世界の平和と人類の福祉の向上に貢献することを願うものである」（教育基本法）という理想に近づくためには、何のためのどんな学力をどのように高めてどういう人間を育てていくかということにもっと関心を向けていかなければならないのではないかと。広い視野と人間性に関わる教育を充実させていくことによってこそ、学力が社会で生かされるものになるのではないかと改めて思った。

2007年度、現任校に転勤して道徳の担当になり、最初の担当者会で、「これまでこの学校では平和教育をあまりしてこなかったもので、今年度は何かやっていきたいと前年度末に話し合っている」と前任者から話があった。平和教育にはかねてより関心があり、様々なNGO、NPO等の活動に参加して勉強しながら、教科の授業、道徳、総合的な学習の時間等で少し取り組んできたことがあった。ただ、それはその時その時の思いつきで行う単発的なものだった。そこで、担当になったからには学校全体で取り組んでいける平和教育をつくっていききたいと意気込んだ。しかし、せっかくよい機会を与えていただいたにも関わらず、2教科かけもちの授業やほとんど経験のなかった吹奏楽の勉強と指導、その他多くの分掌の仕事に追われて、やはり単発的なものの羅列に終わったという反省がある。

「人間性豊かな地球市民として育ち合う教育」というテーマの着想は、以上の経緯の中で生まれた。勤務校は学力偏重主義ではないが、人間形成に関わる面が特に意識されているわけでもなく、個々の教員の思いでそれぞれに行われている。そこで、少なくとも平和教育を勤務校の学校教育目標に向けて体系的に位置づけたいと考えたのが出発点である。

前述したように私なりに平和教育を模索してきた中で、社会の変化とともに国際理解、国際協力、環境問題、南北問題等の視点も少しずつ平和教育の中に取り入れつつあった。それらを包括するよい言葉はないかと思案していたところに出会ったのがグラハム・パイク、デイヴィッド・セルビーによる「地球市民を育む学習」という本であり、「地球市民」という言葉はそこから使わせていただいた。「人間性豊かな」という言葉は勤務校の学校教育目標に由来する。そして、「育ち合う」という表現にしたのは、私たちもまた地球の一員

として、子どもたちと共に学び続け、育っていききたいからである。

このテーマは学校生活のすべてに関わってくるものではあるが、本研究ではテーマの趣旨に照らし合わせて学校内の「隠れたカリキュラム」に目を向け私たちの意識を高めることと、道徳及び総合的な学習の時間における特設授業を計画して教材を準備することを中心にし、学校全体で取り組んでいける形を提案して実践につないでいくことを目指す。

2. 研究の方法

- ①文献研究
- ②先行事例研究
- ③これまでの実践の振り返り
- ④計画作成
- ⑤実践とまとめ

3. 教育実践研究報告書の構成

序章 研究の目的と方法

第1章 地球市民教育

第2章 事例研究

第3章 実践計画と実践記録

終章 結論

4. 実践的考察

- 地球市民とは、文化、宗教等における多様性を尊重し合いながら共生し、地球上の諸問題に対峙していける知識、態度、スキルを持つ人々である。
- EUの取り組みは、異文化理解の地道な努力を重ねる以外に戦争回避のカギは存在しないと断言する厳しい反省の上に立っており、その考え方は参考になる。
- 世界の問題と自分たちの身近な問題を結びつけて考える一体的視野が必要である。
- 日本における多文化共生を考える時、在日外国人、アイヌ等、日本独自の問題がある。
- 学校の中には「隠れたカリキュラム」がたくさんあり、実はそれがかなり重要である。

5. 今後の計画

- ①文献をもとに、地球市民教育についての理解を深める。
- ②学校内の「隠れたカリキュラム」を検討する。
- ③今までの取り組みや先行事例を参考にして、特設授業の計画及び教材の準備をする。

6. 主要参考文献

- 大谷泰照 2007年 日本人にとって英語とは何か―異文化理解のあり方を問う 大修館書店
加藤幸次 浅沼茂 1999年 国際理解教育をめざした総合学習 黎明書房
高橋和夫 2004年 国際政治 放送大学教育振興会
パイク セルビー 1997年 地球市民を育む学習 明石書店
バンクス 1996年 多文化教育―新しい時代の学校づくり サイマル出版会

地域と学校との協働に関する研究
―校内に地域の方々の居場所を設置するための具体的な方策と提案―

22420080 岡武 俊樹
指導教員 熊谷 慎之輔先生

1. 研究の目的

現任校は 10 数年前、生徒指導上の問題に頭を痛めた。そこから立ち直ったのは地域との連携があったからだが、その当時を知る教師は転勤し、地域の主だった方々は代替わりをして学校から離れている。さらに今後学習指導要領の改訂に伴う時数増加で、授業や行事で生徒が地域で活動する時間も減少していくことが考えられる。また現任校の学区地域も他校と比較すれば、昔ながらの地縁からなるコミュニティが健在であるが、それも年々薄れつつある。

地域の方々の教育力の活用が有効であることは、私を含めた現任校教師の共通の認識である。しかし、そのための具体的な方策は講じられていない。校内に地域の方々の居場所をつくることで、このジレンマを解決できないかと私は考える。校内に地域の方々の居場所をつくる実践は小学校を中心に紹介されているが、設置に至るプロセスについて触れられているものは少ない。これを明らかにすることは、今後の研究の参考にもなるのではないだろうか。

教師が転勤しても、地域の世話役的な方が代替わりしても継続して、学校との関係を保ち続けられるシステムづくりは学校にとって有効であるだけでなく、学校を核とし、地域と学校が共に新たにコミュニティを形成する手始めになるのではないかと考える。

以上のことから、本研究の目的は、学校と地域の協働のために校内に地域の方々の活動のための居場所を設置するプロセスに注目し、具体的な方策を検討し提案していきたい。また、設置前後の学校と地域の方々の意識の変容にも触れていきたい。

2. 研究の方法

- ①文献をもとに地域との連携及び協働の取組の国や県の動向について理解を深める。
- ②地域連携・地域協働を進める先進校を研究する。
- ③事例研究として、現任校の地域住民との協働を探る。
- ④事例研究から、生徒・教師・地域住民の意識の変容を考察する。

3. 教育実践研究報告書の構成

序章 研究の目的と方法

第 1 節 研究の目的

第 2 節 研究の方法

第 3 節 先行研究の検討

第 1 章 地域と学校との協働に関する政策・制度

第 1 節	地域と学校との協働に関する国や県の動向
第 2 節	地域と学校との協働に関する制度
第 3 節	地域と学校との協働に関する取組の実際
第 2 章	先進校の取組（居場所づくりについて）
第 1 節	学校の概要
第 2 節	具体的な取組
第 3 節	取組の成果と課題
第 4 節	現任校の協働の現状
第 3 章	実践研究
第 1 節	学校の概要
第 2 節	I 中学校学区の概要（公民館を中心として）
第 3 節	居場所の設置について
	(1)教師と地域住民との協働に関する意識
	(2)協働に関する組織づくり
	(3)組織運営
第 4 節	地域と学校との協働に向けての具体的方策と提案
終章	結論

4. 実践的考察

地域と学校との双方のニーズを補完しあう連携及び協働について検討、考察していきたい。地域住民と学校が自然な形で協働し、教育活動にかかわっていただけるかを追究したい。

5. 今後の計画

- ①文献をもとに基礎研究をする。
- ②基礎研究をもとに現任校職員、地域住民の意識・ニーズを調査する。
- ③現任校内に地域住民の活動場所を設置する方策を検討する
- ④地域住民が校内で活動することによる効果を中心に事例研究を実施する。

6. 主要参考文献

- 大阪市教育センター「学校と地域との連携に関する研究：確かな地域連携をめざすカリキュラムの開発」、『研究紀要』, 2003, 3
- 佐藤晴雄・帝京大学「学社融合時代の「学校のスリム化」を推進するアウトソーシングの可能性に関する研究」、『文部科学省科学研究費補助研究成果報告書』, 2001-2003
- 宮腰英一・東北大学「地域教育経営サポートシステムの構築に関する調査研究」, 『文部科学省科学研究費補助研究成果報告書』, 1999-2000
- 渡邊昭彦・豊橋技術科学大学「学校を活用したコミュニティスクールの計画と管理・運営システム（特別教室・余裕教室の地域開放のための計画と管理・運営システム）」『文部科学省科学研究費補助研究成果報告書』, 1997-1999

中学校の通常学級における特別支援教育を視野に入れた生徒指導の研究

22420082 國富 聖子
指導教員 住野 好久先生

1. 研究の目的

中学校の通常学級において、特別な配慮を要する生徒や不登校や学習困難な生徒の増加が目立ってきた。平成 14 年度に文科省が調査研究会に委託して実施された「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒の全国実態調査」でも、LD、ADHD、高機能自閉症を含む特別な教育的支援を必要とする児童生徒は約 6%の割合で通常学級に在籍している可能性があることが示されている。岡山県で平成 19 年 9 月に実施された「通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする幼児児童生徒の状況」によると、中学校の通常学級において特別な支援を要する生徒は 3.6%であり、およそ 28 人に 1 人の割合となる。

現任校でも、近年発達障害と診断される生徒が増加している。また、校内で起きる問題行動の質が変化し、発達障害を抱える生徒によるものも少なくない。問題行動には、二次障害が要因と思われるものもある。そのような問題に対して、教師が持っているこれまでの経験にもとづく対応では十分対処しきれていない。

平成 17 年に発表された中央教育審議会答申「特別支援教育を推進するための制度の在り方について」においても、「特別支援教育の理念と基本的な考え方が普及・定着することは、現在の学校教育が抱えている様々な課題の解決や改革に大いに資すると考えられることなどから、積極的な意義を有するものである」とされている。

そこで本研究では、中学校の通常学級に在籍する特別な支援を必要とする生徒への教育について、主に生徒指導の分野に焦点を当てて検討する。その際、学校の特別支援教育体制の整備と、学年教師集団の協働の取り組み及び協働体制づくりにも注目する。

2. 研究の方法

- ①文献をもとに「中学校の通常学級における特別支援教育」「特別支援教育コーディネーター」「生徒指導」「発達障害」について理解を深め、国の施策の動向をまとめる。
- ②現任校の生徒指導、特別支援教育の現状を質問紙及びインタビュー調査によって明らかにする。
- ③中学校の通常学級における特別支援教育の先行研究・先行実践を検討し、現任校に活用できる取り組みを明らかにする。
- ④現任校において、特別支援教育コーディネーターという視点で、1)「学年及び全校の特別支援教育の取り組みをコーディネートしていく」、2)「特別支援教育、生徒指導、教育相談の分掌を横断する取り組みをコーディネートする」という両面から実践研究をすすめる。

3. 実践的考察

- (1)「特別支援教育コーディネーター」の定義を文科省他の教育機関、文献で調査した。さらに通常学校・学級における特別支援教育と生徒指導との関わりを明確にする。
- (2) 現任校の特別支援の現状
 - ①現任校の通常学級において発達障害の診断名がついている生徒は全校で数名いる。しかし、グレーゾーンと言われる生徒も含めるとその数は 2.6 倍以上になる。特に今年

度入学した1年生は各クラスに1.3名の割合で特別な支援を要する生徒が存在している。支援員は1名配属されているが、個々の生徒への十分な手立てはできているといいたい。

- ②一方、教師の中で特別支援学校や特別支援学級を経験した者の割合は42名中（内講師4名、非常勤講師3名、管理職を含む）4名と少なく、通常学級において特別な支援を要する生徒に対して教師の理解や支援のスキルは十分とはいえない。

（3）現任校の生徒指導の現状

1学期には市教委に対して「授業放棄・喫煙・対教師暴力・生徒間暴力・器物破損など」を報告したが、特定の生徒が自分の感情をコントロールできないことが原因の事例が多い。また、問題行動を繰り返す生徒でADHDの診断名がついている者もいる。

不登校生徒は上級生になるにつれて増加する傾向がみられる。そのうち1年生で約3割、2年生で約1割、3年生で約4割に発達障害の疑いがある。

このように、中学校の通常学級における生徒指導上の問題行動には、発達障害などの要因も背景にあると推察される。

（4）すぐれた先行実践に学ぶ

特別支援教育と生徒指導とを関連づけた取り組みとして、長崎県大村市立群中学校、埼玉県熊谷市富士見中学校などの優れた先行実践がある。

4. 今後の計画

〈今年度〉

- ①現任校の生徒指導、特別支援教育の現状と課題を質問紙調査により明らかにする。
- ②中学校の通常学級における特別支援教育の先行研究・先行実践を検討し、現任校に活用できる取り組みを明らかにした上で、指導計画を作成し、試行していく。

〈来年度〉

- ①現任校において、特別支援教育コーディネーターという視点で、学年の特別支援教育の実施体制を、「ケースカンファレンスの取り組みの試行」と「授業改善の取り組み」の両面からすすめる。
- ②特別支援教育・生徒指導・学習指導の連携による教育活動・研修活動の体制作りに取り組む。

5. 主要参考文献

- ・中央教育審議会「特別支援教育を推進するための制度の在り方について（答申）」平成17年12月8日。
- ・文部科学省「小・中学校におけるLD(学習障害)、ADHD(注意欠落／多動性障害)高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン（試案）の公表について」平成16年1月30日。
- ・岡山県教育センター『特別支援における中・高等学校連携に関する調査研究』2007年
- ・石野公子「特別な支援を要する生徒の適応を促す生徒指導体制」『教育実践研究』上越教育大学学校教育総合研究センター、2008年。
- ・佐藤暁『発達障害のある子の困り感に寄り添う支援』学習研究社、2004年。

コミュニティースクールに関する研究 —学校運営協議会の組織運営と教育活動の改善—

22420083 佐藤 成実
指導教員 佐藤 博志先生

1. 研究の目的

平成 20 年度より現任校が地域協働学校の指定を受けている。その準備が現任校学区では進んでいる。

現任校は昭和 61 年に開校した。開校以来学校全体が落ち着かない状態であったが、ここ 5～6 年は比較的落ち着いた状態である。しかし、学校が落ち着いた状態が数年続いたため現在は、教師間での生徒指導に対する温度差が生じ、教師間での意思疎通が難しくなり、「目指す生徒像」はあるがそこへ向けての全体の求心力が弱くなってきているという状態である。

この現状を改善したいと考える。しかし、学校を改革するのは中からだけの力では難しい。制度改革のような外からの力が学校改革に大きく貢献する場合があるのではないか。外からの力をきっかけとして、現任校の教育活動の改善を進められないだろうか。

以上の問題意識から、本研究は「地域協働学校」の指定を、教育活動の改善につなげるために、学校運営協議会の組織運営の在り方を解明することを目的とする。

2. 研究の方法

- ①文献をもとに「学校運営協議会」「コミュニティースクール（地域協働学校）」について理解を深め、国と県、市の政策の動向をまとめる。
- ②コミュニティースクールの先進校に学ぶ。
- ③事例研究として、現任校のコミュニティースクールのあり方を探る。
- ④事例研究として、コミュニティースクールと教育活動の改善のかかわりの方策の考察をおこなう。

3. 教育実践研究報告書の構成

序章 研究の目的と方法

第 1 節 研究の目的

第 2 節 研究の方法

第 3 節 先行研究の検討

第 1 章 コミュニティースクールの政策と制度

第 1 節 コミュニティースクールの背景と政策

第 2 節 コミュニティースクールの制度

—地教行法と事務次官通知—

第 3 節 コミュニティースクールの全国的な設置運営状況

第 4 節 岡山県、岡山市のコミュニティースクール

—制度、施策、実践—

第5節	まとめ
第2章	先進校と取り組み 公立K中学校区の実践
第1節	学校の概要
第2節	学校運営協議会の運営
第3節	教育活動の活性化
第3章	事例研究 公立T中学校
第1節	学校の概要
第2節	T中学校におけるコミュニティスクールのありかた
	(1)学校運営協議会の設置
	(2)学校運営協議会の組織
	(3)学校運営協議会の運営
第3節	コミュニティスクールと教育活動のかかわり
第4節	「地域協働学校（コミュニティスクール）」の指定を教育活動の改善をする 方策としての考察
終章	結論

4. 実践的考察

先進校の背景を探ると、特別な状況がある。「特別」ではなく「普通」の公立中学校区でも、自然なかたちで実践できるコミュニティスクールとはどのようなものか検討、考察していきたい。

教育活動をコミュニティスクールといかにリンクさせるかを追求していきたい。

5. 今後の計画

- ①文献をもとにした基礎研究をする。
- ②基礎研究をもとに、地域協働学校について聞き取り調査をする。
- ③現任校について分析し、コミュニティスクールのありかたを考察する。
- ④事例研究の分析の視点を明確にし、事例研究を実施する。

6. 主要参考文献

- 平成16年3月4日 中央教育審議会「今後の学校管理運営のあり方について」(答申)
- 日本教育学会第62回大会報告
 - 「学校のガバナンスとマネジメントに関する総合的研究」
 - 「学校のガバナンスとマネジメントに関する総合的研究」
 - －学校運営協議会の法制化に見る学校ガバナンスの思想と制度－
- 日本教育学会第48回大会
 - 「わが国におけるコミュニティスクールの指定・運用の現状に関する調査報告」
 - －学校経営参加と地域の連携の視点から－
 - 「学校運営協議会の導入による学校運営改善の可能性に関する研究」
- 学校運営協議会制度における評価と支援のあり方を巡って レファレンス 平成18年3月号

学校経営に資するミドルリーダーに関する研究

—ミドルリーダーの資質向上につながるスクールリーダー（管理職）の働きかけ、 コーチングの際のポイントの明確化—

22420089 萩原 康正

指導教員 淵上 克義先生

1. 研究の目的

これまで、学校組織におけるスクールリーダー（校長）のリーダーシップに関する実証的研究が数多くなされてきたが、そのほとんどはスクールリーダーが教職員にどのような影響をもたらすかに関心が寄せられてきた（例えば、吉崎，1979 など）¹⁾。しかし、最近になりスクールリーダーのリーダーシップは、学校の組織システムや職場風土を通して教職員に間接的に影響をもたらすことが実証的に明らかにされてきた（西山・淵上・迫田，2008；鈴木・淵上，2006 ほか）^{2) 3)}。つまりスクールリーダーのリーダーシップは、学校の組織システムや職場風土に一定の直接的な影響力があることが確認された。スクールリーダーのリーダーシップが協働的な職場風土の形成に影響をもたらすことが明らかにされ、その協働的な職場風土の中心となる主任層に相当するミドルリーダーの育成が重要であることが示唆された（淵上，2007）⁴⁾。このミドルリーダーの育成に関わるリーダーシップはコーチング・メンタリング・エンパワーリングと呼ばれ、近年組織研究において開発的リーダーシップとして注目されている（Yukl，2006）⁵⁾。本研究は、学校経営に資するミドルリーダーの資質向上のためのスクールリーダー（管理職）の働きかけの中でもコーチングに注目し、現職校長並びに退職校長のインタビューを通して、学校組織におけるスクールリーダーのコーチングの特徴と教務主任、学年主任等別にコーチングの際のポイントを明らかにするものである。

2. 研究の方法

- (1) 主任の役割，管理職のリーダーシップ，コーチングについて文献研究。
- (2) 第一次インタビュー：岡山県立全日制普通科高等学校長 7 名・退職校長 3 名を予定。人材育成方針・ミドルリーダーに求める資質能力・ミドルリーダーの資質向上のための働きかけ（育成方法），特にコーチングを取り入れた育成方法・コーチングを取り入れた方法と旧来の上意下達あるいは指示命令型の方法との効果比較など。
- (3) 第二次インタビュー（検証）：岡山県立全日制普通科高等学校長・現任校ミドルリーダーを対象。第一次インタビュー結果，提案についての感想・意見を求める。

3. 教育実践研究報告書の構成

- | | |
|-----|-------------------------------|
| 序章 | はじめに（研究の目的と方法） |
| 第1章 | 文献研究（主任の役割・管理職のリーダーシップ・コーチング） |
| 第2章 | 第一次インタビュー（インタビューのまとめ・考察・提案） |
| 第3章 | 第二次インタビュー（提案検証のためのインタビューのまとめ） |
| 終章 | まとめ |

4. 実践的考察

- ・ 12 のリーダーシップ行動のうち開発的リーダーシップの中心的要素がコーチングリーダーシップ (Yukl, 2002)。コーチングリーダーシップがすべてのフォロワー, すべての組織状況, 課題内容について一様に機能するとは限らない (Yukl, 2006)⁶⁾。
- ・ 校長のリーダーシップ行動の二因子は「目標達成」・「集団維持」。「集団次元」に比べて「個人次元」は校長のリーダーシップの影響を受けにくい (吉崎, 1979)¹⁾。
- ・ 校長のリーダーシップの影響力が強いものの, 教頭・教務主任のリーダーシップも少なからず効果がある (松原ら, 1998)⁷⁾。
- ・ 学校改善の促進要因として, 天笠 (1978)⁸⁾ は, 「主導者 (校長・中堅リーダー)」, 「組織の仕組み (複数リーダー, リーダーの権限)」, 「校長の働きかけ (人材育成)」, 「リーダーの資質・力量 (役割意識)」, 「制度 (研修システム)」を挙げている。

5. 今後の計画

- ・ 第一次インタビュー (H20.10 ~ H20.12)
- ・ 考察, 提案事項検討 (H21.1 ~ H21.3)
- ・ 第二次インタビュー (H20.4 ~ H21.5)

6. 主要参考文献

- ¹⁾ 吉崎静夫「校長のリーダーシップ行動測定尺度の作成とその論理的妥当性の研究」『教育心理学研究』第 27 巻, 第 2 号, 1979 年, 253 - 261 頁
- ²⁾ 西山久子・淵上克義・迫田裕子「学校における教育相談活動の定着化に及ぼす諸要因の相互関連性に関する実証的研究」『教育心理学研究』印刷中
- ³⁾ 鈴木薫『養護教諭の自己効力感の形成に及ぼす学校組織特性の影響』岡山大学大学院教育学研究科教育組織マネジメント専攻修士論文, 2006 年, 108 頁
- ⁴⁾ 淵上克義『教師のエンパワーメント向上のための社会的資源に関する総合的研究』平成 16 年度～平成 18 年度 日本学術振興会科学研究費補助金 (基盤研究 (B)) 研究報告書, 2007 年, 229 頁
- ⁵⁾ Yukl, G.2006『Leadership in Organizations (6ed.)』UpperSaddleRiver, NJ: Prentice Hall.
- ⁶⁾ 鎌田雅史・淵上克義『コーチングリーダーシップがフォロワーに及ぼす効果に関する実証的研究』岡山大学教育学部研究集録第 136 号 1 - 11, 2007 年, 2 頁
- ⁷⁾ 松原敏浩・吉田俊和・藤田達夫・栗林克匡・石田靖彦『管理職・主任層のリーダーシップが学校組織行動プロセスに及ぼす影響』実験社会心理学研究第 38 巻第 1 号, 1998 年, 100 頁
- ⁸⁾ 天笠茂『スクールリーダーとしての主任』東洋館出版社, 1978 年, 68 - 71 頁

これからの時代に求められる学力形成の在り方

-算数科教育を手がかりとして-

22420090 平松 克茂

指導教員 小野 擴男先生

1. 目的

様々な課題が山積する教育現場であるが、以下の二つについては、今すぐに取り組み、克服していかなければならない課題であると私は認識している。

一つ目は、「学習意欲の低下」である。数年前から盛んに「学力低下」や「学力の二極化」が叫ばれるようになり現場においてもそのことを実感せざるを得ないが、その根本にあるのはやはり「学習意欲の低下」であろう。なぜ、子どもたちは学習に対して意欲をなくしていくのか。その要因を現在の社会状況や社会システムにも見ることができるが、学校現場にも子どもたちの意欲を喪失させている要因があるのではないか。それが何なのかを真剣に考え改善策を示していく必要がある。「学習意欲の低下」を置き去りにしたままでは、いくら崇高な教育理念を子どもたちに語っても、どんなに教育内容を改善しその実施方法を改善しようとも、そのことによる成果はあまり期待できない。

二つ目の課題は、これからの子どもたちに求められる学力を教師がとらえ直し、その力を子どもたちに身につけさせていかなければならないということである。新学習指導要領、OECDによるPISA調査、全国学力・学習状況調査の「B問題」等からも明らかのように、これから子どもたちに求められる学力は変化している。子どもの意欲は低下しているにもかかわらず身につけさせたい学力はますます範囲を広げ高度化してきているのである。

「学習意欲の低下」と「新たな学力の育成」。これら二つの課題を同時に克服していくことは容易なことではない。どうすれば子どもたちが意欲をもって学習に向かうことができるのか、同時にどうすればこれから求められる学力を子どもたちが身につけていくことができるのか考えていかなければならない。

2. 研究の方法

- (1) 文献や学校現場の様子をもとに、「学習意欲の低下」の原因について考え、その改善策を示す。
- (2) これから求められる学力について考察する。
- (3) 子どもたちのある時点での「国語力」「算数の基礎・基本力」「学習意欲」「応用力」をその時点でのレディネスと定義し、そのレディネスと全国学力・学習状況調査等で示された算数科における学習成果との関係を分析する。そして、その分析結果を手がかりとして、新たな学力の向上のための方策について提案する。

3. 教育実践研究報告書の構成

序 章 研究の目的と方法

第1章 教育現場がかかえる課題

(1) 学習意欲の低下について

(2) これから求められる学力をどうとらえるか

- 第2章 子どものレディネスと学習成果との関係
- 第3章 課題克服に向けた算数科教育の在り方
- 第4章 課題克服に向けた算数科教育の単元構想
- 終章 結論

4. 実践的考察

学習意欲の低下の要因として、一つは物質的な豊かさを手に入れた現代の日本社会そのものが考えられる。あまり苦勞や我慢をすることなく欲しいものを手にすることができ、今の社会では、目標をもつことが難しく、困難なことやすぐに答えが見つからないことに根気強く取り組むことの大切さを実感する機会は乏しい。そのことが学習への意欲を失わせていることは想像できる。しかし、学習意欲の低下を現代日本社会の状況やシステムにだけ帰結することはできない。学校現場における日々の学習が、子どもたちの意欲を低下させていることも考えられる。「生きる力」の育成を目標に掲げながらも学力の向上に偏重した指導、単に知識を覚え技能を身につけることを重視した授業、習得量を学力とし他と相対的に比べる評価等、学校現場にも「学習意欲の低下」を招いている要因はあるのではないか。そのことを具体的に明らかにし改善策を示す必要がある。

また、今後求められる学力については、それを考える一つの手がかりとして、全国学力・学習状況調査の「B問題」があげられる。そこでは多くの非連続テキストが使用されている。高度な知識や技能よりも、場面や状況を読み取りそれをどう利用するかということが重視されている。今後は活用力や思考力の育成が求められ、そのためには非連続テキストの利用や読解力の向上が重要なポイントになると現段階で分析している。今後の授業においてどのように非連続テキストを利用していか、どのように読解力を向上させていこうかが算数科教育の改善の鍵になるものと思われる。

5. 今後の計画

- (1) 文献や学校現場の様子をもとに、「学習意欲の低下」の原因について考え、その改善策を示し、これから求められる学力について考察する。
- (2) 現任校における児童の「国語力」「算数の基礎・基本力」「学習意欲」「応用力」についてアンケートやテストで把握する。そしてその結果と、矢掛町で実施した学習状況調査の結果（第2学年～第5学年）や全国学力・学習状況調査との関係について分析する。
- (3) 算数科を通して、学習意欲の向上と新たな学力の向上を目指した日々の活動や授業を提案する。

6. 主要参考文献

- 田中耕治 『新しい学力テストを読み解く』日本標準 2008年
- 長崎栄三・滝井章 『何のための算数教育か』東洋館出版社 2007年
- 佐藤学 『学力を問い直す』岩波書店 2001年
- 国立教育政策研究所 『生きるための知識と技能3』ぎょうせい 2007年

授業研究における組織の活性化および授業力の向上
—確かな学力を求めて—

22420091 廣田 巨史
指導教員 小野 擴男先生

1. 研究の目的

平成19年度、研究主任として研究組織の編成や研究授業の計画に携わることができた。教師集団の「知」を引き出し、まとめる役割である。研究テーマを決め、授業を提案し、検討する。そこから、日々の授業の質を高め、児童に還元する。行政側からの研究指定以外は、基本的に教師集団の自発的活動として実践され、授業研究が教師文化の一つとして位置づけられてきた。

近年、この教師文化が崩れ始めている。学校に任される指導事項が増え、研修や報告書の作成、生徒指導におけるトラブルの処理、保護者との対応など、教師の多忙感は増している。当然、授業研究に費やす時間は少なくなり、授業研究が形骸的なものにならざるを得ない状態に陥っている。一方で、日本の教師による自律的な授業研究が「レッスンスタディ」という言葉でアメリカを始めとする海外に紹介され、20カ国以上の国の教師たちが授業研究に取り組んでいる。

子どもの教育体験の質の向上を図るには当然、授業の質の向上が望まれる。授業研究を学校変革の中核に位置づけ、授業の質を高めることは、直接、子どもに還元され学校の正当性を高めていくことにもつながる。学習指導要領が改訂され、教育課程の新たな方向性が示された。また、PISA型の学力観を意識した全国学力・学習状況調査も毎年、実施される。学習指導要領の完全実施までの移行期間をよい機会と捉え、授業研究を改善することによって組織の活性化を図りたい。さらに、質の高い授業を目指すことで教師の授業力を向上させ、確かな学力を児童に保障することを目的とする。

2. 研究の方法

- (1) 文献・先行事例研究
- (2) 現任校アンケート・聞き取り調査
- (3) 現任校事例（授業研究・授業反省会）分析
- (4) 授業研究改善プラン作成

3. 教育実践研究報告書の構成

- 序章 研究の目的と方法
- 第1章 新学習指導要領における学力・授業観
- 第2章 授業研究の歴史的な背景
- 第3章 現任校事例分析
- 終章 結論

4. 実践的考察

- (1) 授業研究における組織の見直し

平成19年度の組織編成は教材開発部、授業研究部、学力支援部に分かれそれぞれが

独立して進めた。平成 20 年度は学年中心の組織に一本化。現在のところ大きな変化は見られず、十分に機能しているとは言えない。研究主任自ら方向性をけん引するような従来型のリーダーシップ役から、参加する教師のアイデアを引き出すファシリテーター役を担うことがより有効であると考ええる。

(2) 研究授業から授業研究への質的な転換

研究授業のために指導案作成や教材づくりなど多くの時間を費やして準備するにも関わらず、日々の授業に反映されにくい。したがって、日々の授業の質を向上させるために、指導案を簡素にし、インフォーマルな形での授業研究を促進してゆく。

(3) 授業の分析・評価の見直し

授業研究する際に、教師の支援や工夫に視点が集中する傾向がある。授業を的確に評価するために、分析の観点を整理し教師同士が共通の視点で観察できるようにする。

(4) 授業力の向上

授業を公開した早い段階で指導案に改善点を記入する。次回の授業、あるいは同僚の参考となるようにファイルに蓄積する。自発的な授業研究の輪を広め、誰もが参加しやすい風土を作ることで、個々の教師の授業力の向上につなげる。

5. 今後の計画

- ① 文献・先行研究をもとにした基礎研究。(10月～2月)
- ② 授業研究についての聞き取り、アンケート調査。(10月～1月)
- ③ 現任校の授業研究、授業反省会の分析・評価。(10月～2月)
- ④ 授業研究改善プランの作成。(2月～3月)

6. 主要参考文献

- 斎藤喜博 『授業入門』 国土社版 1960年
中留武昭 『学校改善ストラテジー』 東洋館出版社 1991年
稲垣忠彦 『授業研究の歩み』 評論社 1995年
稲垣忠彦 佐藤 学 『授業研究入門』 岩波書店 1996年
日比 裕・的場正美編 『授業分析の方法と課題』 黎明書房 1999年
木原俊行 『授業研究と教師の成長』 日本文教出版 2004年
ドミニク・S・ライチェン ローラ・H・サルガニク 『キー・コンピテンシー』 明石書店 2006年
佐藤 学 『学校の挑戦』 小学館 2006年
木原俊行 『教師が磨き合う 学校研究』 ぎょうせい 2006年
小島弘道編 『時代の転換と学校経営改革』 学文社 2007年
増田ユリヤ 『教育立国フィンランド流教師の育て方』 岩波書店 2008年
秋田喜代美 キャサリン・ルイス 『授業の研究 教師の学習』 明石書店 2008年
田中智志 『グローバルな学びへ』 東信堂 2008年
久富善之 『教師の専門性とアイデンティティ』 勁草書房 2008年
岸良裕司 『全体最適の問題解決入門』 ダイヤモンド社 2008年
田中耕治 『新しい学力テストを読み解く』 日本標準 2008年
森 時彦 『ファシリテーターの工具箱』 ダイヤモンド社 2008年

学校における危機管理に関する研究
—学校安全に対する教職員の危機管理意識と組織体制の改善—

22420093 山本 俊美
指導教員 田嶋 八千代先生

1. 研究の目的

全国の学校において児童生徒に関わる安全上の危機的事件・事故が頻発する昨今、子どもの安全を保障し尊い命を守り育むことは、教職員の重大な責務であり学校教育の最優先課題である。

危機管理には、平常時、緊急時、収束時という3つの局面がある。平常時の危機管理はリスクマネジメントと呼ばれ、学校危機管理にとっても最も重要なものである。しかしリスクマネジメントは認識論の問題であり、どのような事態を予測される危機と感じどのような対策をするかの判断、つまり危機管理意識が出発点と言える。しかし教職員の危機管理意識には個人差が大きく、学校としてのリスク認知の欠如が大きな課題となっている。

また学校内外の人的資産を有機的に組織化し、学校と地域が連携することで学校の安全を「面」で守ろうとする取り組みも、リスクマネジメントの重要な要素であるが、学校によって大きな差が認められる。現任教校においても、この2点を課題として感じているところであった。

「学校保健法等の一部を改正する法律（学校保健安全法）」が制定されたことから、安全・安心な学校づくりは今日の教育現場において責務である。そこで、本研究は教職員の危機管理意識及び学校内外の組織体制構築に焦点を当て、両者を改善する方策を提案することを目的とする。

2. 研究の方法

- (1) 学校安全に関わる危機管理についての諸問題を、先行研究をもとに考察する。
- (2) 危機管理に関する国や県の政策の動向、危機管理の理論的背景と問題点について、文献等をもとに理解を深める。
- (3) 岡山県内の学校教職員（校長・教諭・養護教諭・学校事務職員）の危機管理意識や組織体制を質問紙法及び面接法により調査し、課題を明確にする。
- (4) 現任教校の教職員の危機管理意識及び危機管理上の組織体制における問題点を把握し改善策を試行し、成果を考察する。
- (5) 現任教校の教職員の危機管理意識を高める校内研修を行い、その結果をもとに、効果的な研修の在り方を提案する。

3. 教育実践研究報告書の構成

序章 研究の目的と方法

第1章 学校における危機管理の諸問題

- (1) 学校教育及び学校の特質に基づく危機管理上の課題
- (2) 近年の社会的背景に基づく危機管理上の課題
- (3) 事件・事故例、判例に基づく考察

第2章 学校における危機管理をめぐる政策の動向と理論

- (1) 国および岡山県の政策の動向
- (2) 学校危機管理に関する理論
- (3) 学校危機管理における問題点

第3章 学校教職員の危機管理意識と組織体制

第4章 現任校における危機管理上の諸問題と改善策

第5章 校内研修と組織体制の整備開発及び試行

- (1) 教職員の危機管理意識を高める校内研修
- (2) 施設・設備及び管理運営体制の整備充実
- (3) 地域、関係機関との連携の推進（学校安全委員会の構築）

終章 結論

4. 実践的考察

(1) 教職員の危機管理意識について

校長、養護教諭、事務職員それぞれ数名に聞き取り調査を行った結果、教職員の危機管理意識の低さ、組織体制の不十分さを懸念していることが明らかになった。また学校事務職員の危機管理に関する研修の参加実態や意欲に差があることを感じた。

現在、岡山県内の校長、教諭、養護教諭、学校事務職員に対し、質問紙による危機管理意識の量的研究を行っており、分析により課題の明確化を図りたい。

(2) 現任校における危機管理上の問題について

現任校の全教職員に対し危機管理意識及び危機管理体制を質問紙によって調査した結果、校長と他の教職員の危機管理意識には若干ずれがあることが分かった。

また、危機発生時の情報収集体制、指示系統の不明確さ、及び危機管理に関する研修や訓練の不十分さなど、校内体制の問題点が明らかになった。

さらに地域、関係機関との連携が十分でなく、学校安全委員会の設置が急務である。

(3) 危機管理に関する校内研修について

実践的訓練と卓上訓練を組み合わせ実施することで、教職員の危機管理意識を向上させ、適切かつ迅速に意思決定するための能力を高めることが示唆された。

5. 今後の計画

- ・ 県内教職員の危機管理意識調査の結果を詳細に分析し、課題を明確化する。
- ・ 現任校教職員の危機管理意識を高め、実効性ある組織体制を構築する方策を考察する。
- ・ 現任校における危機管理研修実践を通して、効果的な研修の在り方を考察する。
- ・ 現任校と地域や関係機関との連携が図られるよう「学校安全委員会」の構築を目指す。

6. 主要参考文献

- 学校保健法等の一部を改正する法律の公布について（通知） 平成20年7月9日 文部科学省
齋藤歎能監修 渡邊正樹編 2006 「安全管理と危機管理」 大修館書店
渡邊正樹 2005 「卓上訓練を用いた学校危機管理研修プログラム」 安全教育学研究紀要第5巻
文部科学省 2001 「「生きる力」をはぐくむ学校での安全教育」 日本体育・学校健康センター

【総評： 乙部憲彦岡山県教育庁指導課総括副参事】

岡山県教育委員会指導課の乙部でございます。本日は、参加していただいております先生方に、まずもって、県の教育にご協力・ご支援をいただきまして、誠に感謝を申し上げる次第でございます。また、今日は中間発表という機会に参加させていただき、教職大学院の先生方におかれましては、現職の教員の学生に対して熱心にご指導いただいている有様を見せていただきまして、これもあわせて感謝を申し上げます。

今年度、県の教育委員会として10名の現職教員の派遣をしてみいました。当然、これはミドルリーダーとしての役割を期待してのことです。県教委としまして、この夏、8月頃だったと思いますが、それぞれ10名に対し、現状どういう研究をしているのか、どのように進めているのか、その辺りでの課題はないか等について面談をいたしました。その中では、我々の思いということで、県が抱えている課題や今行っている行政政策等の説明をさせていただき、今後の研究に役立てていただきたいという思いも伝えた次第でございます。

今まで県教委としても大学院や大学に派遣をしてみいました。派遣が2年間の者、1年間の者、様々あったわけですが、その中の一つの反省として、どうしても個人的な研究になりがちであったということがございます。今回、教職大学院設置の目的に、研究課題として、現職教員が現場に帰って生きる研究、すなわち学校の課題、ひいては大きく捉えて県の課題…と、こういうものを持っていただきたいという思いも伝えた次第でございます。初年度の場合には、募集の段階でそこまで十分に伝わりきれていなかったということで、今年度の募集に当たって派遣要項の中には、「学校の課題を解決するような研究テーマを挙げてください」と付記して募集をさせていただいたところがございます。先生方には、今後学校に帰って生きる研究をお願いしたいし、1年間離れてこちらでじっくり研究をする、その間も当然学校は動いているわけですから、そのことも踏まえた上で、学校に戻ってどう提案していくかを残り半年の中で考えていただけたらと思っております。学校現場を私どもも回って行っているわけですが、どうしても日々の対応に追われ、視点が生徒の視点に近くなって、少し目を離して見るということがなかなか難しいですし、ゆとりが少なくなっているのが現状ではないかと思っております。そういう意味で、1年間現場を離れているということをしっかり生かさせていただけたらと思っております。

では、簡単ですが、お一人お一人に、少し感想を述べさせていただきます。まず青田先生。非常に幅広いテーマですので、どのように焦点を絞って、具体的なプロセス、やり方を提案していくのかということが課題ではないかと思いました。それから池上先生。総合討議の際に、学習指導案の…という細かい話になってきた部分がありました。やはりそこは、学年や教科等、共有できるもののシステムづくりというのか、そういった提案をぜひお願いしたいと思っております。それから江森先生。「地球市民」という言葉が、非常に大きな言葉のように思いがちですが、先生がおっしゃいました、体系化することというのは非常に大事だと思います。ただ、体系化するのは、結構教員は得意なんですね。それを、どう舞台に下ろしていくか。具体的な部分というのは、やはり学校現場もあって、そこが弱いのかなと。ですから、例えば一つのポイント、あるいは教材、対処方法のような、何か具体的な提案ができると先生方の役に立つのではないかと思ってお聞きしました。それから岡武先生。これは、居場所づくりだけで本当に

いいのだろうかということ。質問の中にもありましたが、何を目的にという原点を考えていただけたらと思います。地域人材、先輩の知識や経験、それらをいかに生徒に伝えていくか。更には、当然年齢集団が違うわけですから、その集団で何を学んでくるのかということになるのだらうと思います。その辺りをもう少し整理されたらよろしいのではと思いました。それから國富先生の特別支援。これは、今本当に色々な学校の中で、高等学校も含めて回って、やはりものすごく困られている。ただ、先生方は今の現場の対応にもものすごく追われているというところが、実情だと思います。ですからそういう中で、短期的な面で「対処法としてはこうです」と、それから少し長期的な面で「育成の視点ではこういう提案ができます」と、そういった具体的な提案ができればいいのではないかと思ってお聞きしました。それから佐藤先生のコミュニティスクール。これはぜひ、岡山県だけでなく、他県の事例というものをしっかり調べていただければと思います。やはり先行県がたくさんあると思いますので、その具体的なよいところを岡山県版に直して提案をしていただけたらと思って聞かせていただきました。それから萩原先生の管理職への働きかけですが、学校現場では日々の対応に追われますので、先行研究等、先行のものをしっかりまとめて整理して、それを紹介することを一つの手法としてとっていただいてもいいかなと思いました。更には、それがミドルリーダーの資質向上につながっていくような具体的な提案をお願いできたらと思っております。それから平松先生の学習意欲の低下。これは正にポイントだと思うのですが、ただ、その低下の背景や要因は何なのかということをしっかり分析していただきたいし、ではその分析をどう改善につなげていくかという、ものすごく広がってくると思うのですね。その辺りのポイント化が求められてくるかなと思いました。それから廣田先生。授業分析の視点を、やはり教員に具体的に示すことをしていただくといいかなと思っております。それから山本先生。危機管理ですが、忘れた頃にやってくるというのが、正直なところ、ございます。ですから、現場へどう還元するのか、その辺りまでご提案をいただきたいと思ってお聞かせいただきました。以上、本当に私の感想となってしまうかもしれませんが、簡単に申し上げさせていただきました。

現場を離れて研究をするということで、理論を基にした具体的な提案をお願いできればと思います。近い視点としては、対策、マニュアル、シートのような現場に生きるものを、更に遠い視点としては育成方策等を、そういう2点を持っていただけたらと思っております。その際には、現場への教員の影響や、現場の教員がどう思うのか、といった視点もありますけれど、更にはその裏の、一番大きな目的になりますが、児童生徒への広い意味での学力の育成ということにつながってくるのだらうと思っております。あと半年、しっかり研究をしていただければと思います。

最後に一点、先生方に少し提案をさせていただきます。来年度、現任校に戻ったときに、例えば公開授業とか、もしくは協議会でもいいと思うのですが、地域の学校の先生方をお招きして公開事業なり協議会を開いていただいて、地域の学校の先生方にもそういう動きを広げる、還元する、といった視点を持っていただけたらと思います。

残りがあと半年ということで、学校現場でいうと2学期からということになるのでしょうか、学校現場の2～3月はあまり時間がありませんので、もう3分の2は済んだと考えられると思っております。そうすると、今文献研究をされていたり舞台の動きが見えなかったりということについては若干残念なのですが、これからペースを上げてしっかり研究をして、学校に生き

る研究にしていただけたらと思います。以上，雑駁な感想等にもりましたが，私の感想も含めての助言ということで，お話をさせていただきました。ありがとうございました。

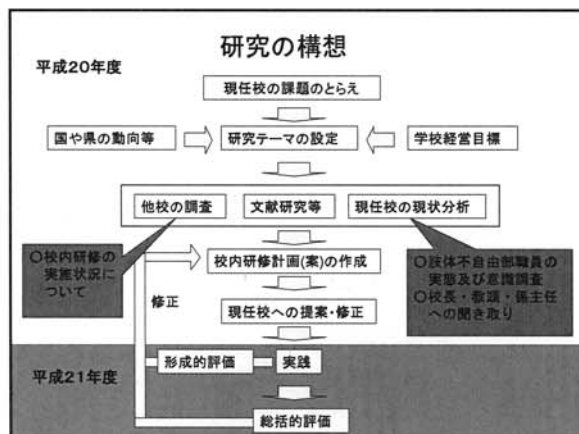
2) 最終報告会 (H21.3.7) での3人の報告

(1) 青田後喜

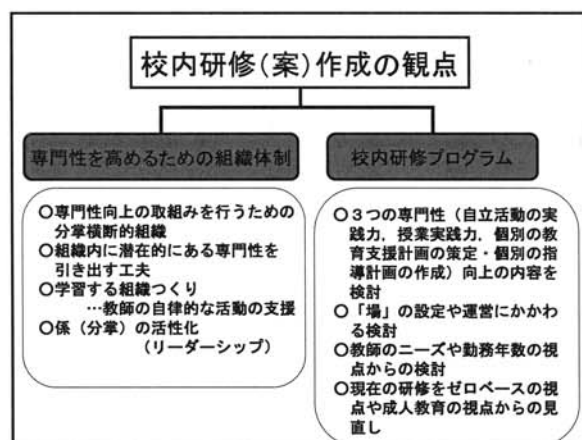
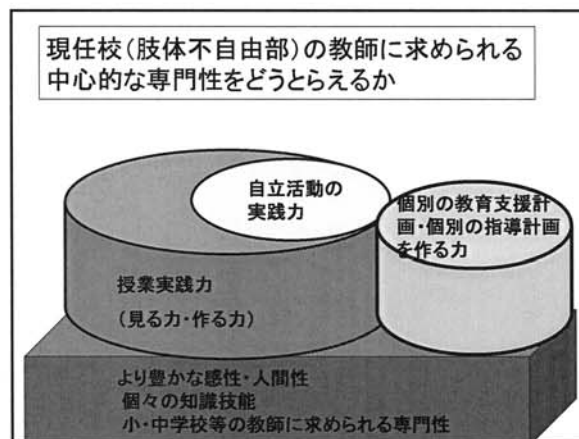
校内研修に関する研究

特別支援学校の教師の専門性を向上するために

岡山大学教職大学院 青田後喜



<h4>国の動向</h4> <ul style="list-style-type: none"> ○特殊教育から特別支援教育への転換 ○個別の教育的ニーズに応じた教育へ ※発達障害や障害の重度重複化に対応する教師の専門性が求められる。 	<h4>県の動向</h4> <ul style="list-style-type: none"> ○岡山県特別支援教育推進プラン(案)の策定(21~25年度) ・高等支援学校の開校(2校) ・特別支援学校の新設検討(1校) ⇒小中学校等との人事交流が増える ○自立活動の指導に関する専門性の向上に向けた取組み等
<h4>なぜ専門性の向上が必要なのか</h4>	
<h4>学校経営目標</h4> <p>病弱虚弱・肢体不自由教育を中心とした幅広い専門性や指導力の向上と研修の充実</p>	<h4>現任教員(肢体不自由部)や児童生徒の実態</h4> <ul style="list-style-type: none"> ○特別支援教育教諭免許状の保有率 65.4% (19年5月1日現在の岡山県66.6%) ○障害児教育経験年数5年以下の教師の割合 45.7% ○本校勤務3年以下の教師の割合 76.5% (うち障害児教育5年以上40.3%) ○医療的ケアの必要な児童生徒の増加(重度化)や多様化(重複化)の進行 ※学校の専門性が、教師個人の専門性に左右される



専門性を高めるための組織体制

- 専門性向上検討部会の設置(戦略的な研修実施)
研修係主任・研究係主任・自立活動係主任
コーディネーター代表・教務代表
- スーパーバイザーの設置
自立活動・重度重複障害児童生徒の指導
- 校内人材バンクの設置と活用
様々な校内研修や課題別研修等の講師として
- 学習する組織作り
…勤務年数別研修と関連して
課題別(個人・グループ)研修

校内研修プログラム

- 自立活動の専門性の向上
外部講師との連携を強化した授業実践
自立活動係主催の研修実施
- 授業実践力の向上
ROMANプロセス法を参考にした授業研究
公開授業の回数を増やす
- 個別の教育支援計画の策定・指導計画の作成
策定（作成）時期にあわせた適切な研修の実施
- 教師のニーズや勤務年数による研修
勤務年数別の研修計画

自立活動の専門性向上

- 外部講師を活用しての継続研修
 - ・講義形式だけではなく、外部講師との交流（話し合い等）ができる形式の研修を増やす。
 - ※時間数や場の多様性確保のため、学部の固定、通常授業での助言等の導入の検討
- 自立活動係主催の研修実施
 - ・感覚遊具、静的弛緩法、動作法等を係のリーダーシップで実施

授業実践力の向上（つくる力・見る力）

- 授業研究（公開授業）の実施（学校公開は除く）—
- ・学部で年4回の公開授業実施※公開は学部内でよい
 - ・1回以上の公開授業参観（公開授業実施者以外）
 - ・参観者による指導案読み合わせ（視点の明確化）
 - ・指導案作成、指導案読み合わせでのスーパーバイザーによる指導・助言
 - ・授業実施者および参観者による授業検討会とその運営方法の検討
 - ・外部講師の招へい
 - ・研究収録の毎年作成を廃止

授業研究モデルケース（10月～11月） 火曜日16:15～17:05

月日 教師	10/6	10/20	10/21 ～26	10/27	11/17	11/24	11/25 ～30	12/1
A	指導案 検討	公開 授業 準備等	公開 授業 実施	授業検 討会	授業に ついて の話し 合い等	指導案 読み合 わせ	公開 授業 参観	授業検 討会
B								
C	授業に ついて の話し 合い等	指導案 読み合 わせ	公開 授業 参観	授業検 討会	授業に ついて の話し 合い等	授業に ついて の話し 合い等	通常 授業	授業に ついて の話し 合い等
D								
E	授業に ついて の話し 合い等	授業に ついて の話し 合い等	通常 授業	授業に ついて の話し 合い等	指導案 検討	公開 授業 準備等	公開 授業 実施	授業検 討会
F								

勤務年数別の研修計画

新着任者

授業研究＋本校勤務に必要な基礎としての研修（肢体不自由教育の経験は加味する）

本校勤務2年目の教師

授業研究＋自立活動を中心にした研修

本校勤務3年以上の教師

授業研究＋課題別研修（個人またはグループ）

※振り返りを促すために、各自が研修計画書を作成して各部教頭に提出し、教頭が確認をする。

評価について（案）

- 個人の専門性の向上（研修効果の評価）
全員を対象として
 - ・研修直後・・・満足度や理解度
本人への質問紙やテスト、インタビュー
 - ・研修2～3カ月後・・・行動や意識の変容
本人、周囲に対するインタビューや観察
- 3年目以上の教師を対象として
 - ・課題別研修の効果
教頭へのインタビューと全員への質問紙

評価について(案)

- 組織としての専門性の向上
 - ・自主サークル的な研修組織の出現
観察と関係者へのインタビュー
 - ・インフォーマルな場での、児童生徒や教育活動に関する会話の増加
観察とインタビュー
 - ・ミドルリーダーを中心とした分掌の活性化
本人や教頭へのインタビュー

現在までの状況

- 各部教頭、関係分掌主任への説明
- 関係各分掌で原案の検討
- 検討結果に基づく修正案の作成

今後の予定(見通し)

- 長期研修についての報告(3月職員会議)
- 修正案に基づく具体的な研修計画の作成(3月下旬~:専門性向上部会・関係各分掌)
- 研修計画による校内研修の開始(4月~)

キャッチフレーズ

つながる 気づく 学びあう
校内研修

(2) 平松克茂

知識・技能の「未習得や剥落」を克服する
指導の在り方
—算数科教育を通して—

岡山大学教職大学院
平松 克茂

研究の目的

知識・技能の「未習得や剥落」を回復させたり
防いだりするための指導方法の解明

「学習不振」や「学習意欲の低下」

「未習得や剥落」(現在進行)

「未習得や剥落」(1年前に学習)

「未習得や剥落」(2年前に学習)

・知識・技能が「未習得や剥落」したまま
積み重なっている
・「未習得や剥落」が
新たな「未習得や剥落」を生んでいる

①過去の「未習得や剥落」を発見する
②過去にさかのぼって学習し直す

・基礎的・基本的な知識・技能の習得
・学習意欲の向上
・学習不振児の解消

知識・技能の「未習得や剥落」の解明

①「算数たしかめテスト」の作成

・1年生から5年生までの教科書から、基礎的・基本的な問題を抽出
・「1学年前」と「2学年前」の知識・技能の習得状況を把握

「未習得や剥落」(現在進行)

「未習得や剥落」(1年前に学習)

「未習得や剥落」(2年前に学習)

「算数たしかめテスト」を実施し、
いつ、どこで、どのように
知識・技能の「未習得や剥落」が
生じているかを発見する

②「学習意欲調査紙」の作成

・学習に向かうエネルギーをもっているか
・授業中、児童の学習意欲に影響をあたえる要因は何か
・学習の意義や意味をどう感じているか

知識・技能の「未習得や剥落」と学習意欲の関係性

③第1回「算数たしかめテスト」
「学習意欲調査」の実施

・2008年11月～12月実施
・対象：現任教3～6年生(45名)、A小学校3～6年生(約200名)
・「1学年前の問題」と「2学年前の問題」に取り組む

第1回「算数たしかめテスト」の結果

視点① どこに「未習得や剥落」が生じるのか
—誤答率の高い問題の抽出—

①【B量と測定】領域と【C図形】領域の誤答率が高い

「1mは1cmが、□個あつまった長さか」 「1kg=□gか」
「どこからみても円に見える形は□」
「半径」「直径」「中心」の名称を入れる」

②【A数と計算】領域の「大きな数」の誤答率が高い

「100を46個あつめた数」「千二百八万二千四百四十三を数字で表す」
「1億は1万の□倍」

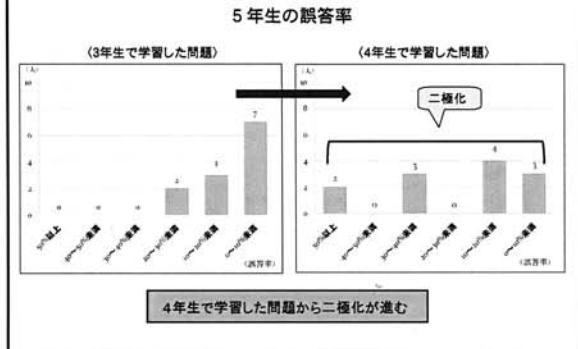
視点② いつ「未習得や剥落」が生じやすいのか

平均誤答率(現任教と協力校を合わせたもの)

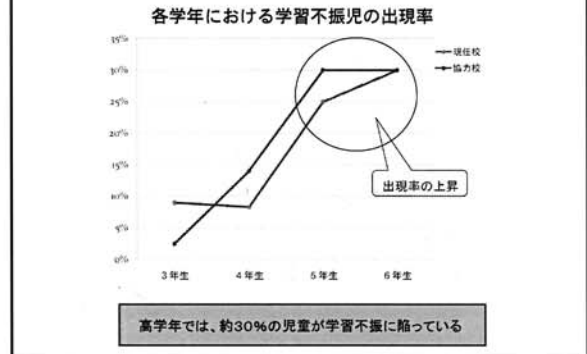
学年	平均誤答率 (%)
1年生で学習	約5
2年生で学習	約13
3年生で学習	約15
4年生で学習	約22
5年生で学習	約23

2年生と4年生で学習する知識・技能の習得は、それ以前に比べ困難さが増す

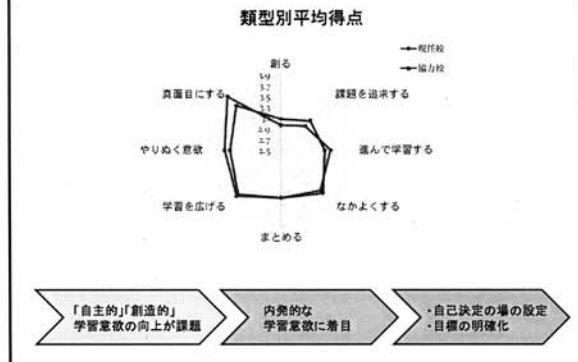
視点③ 「未習得や剥落」の二極化は進むのか



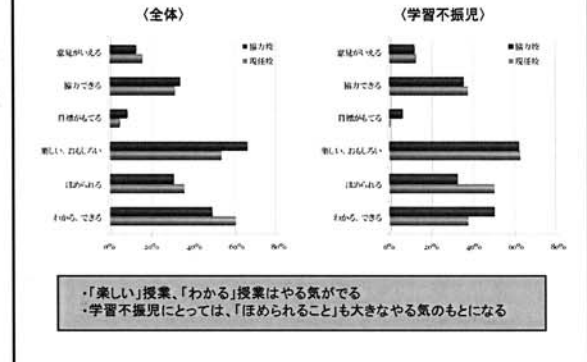
視点④ 学習不振児の把握



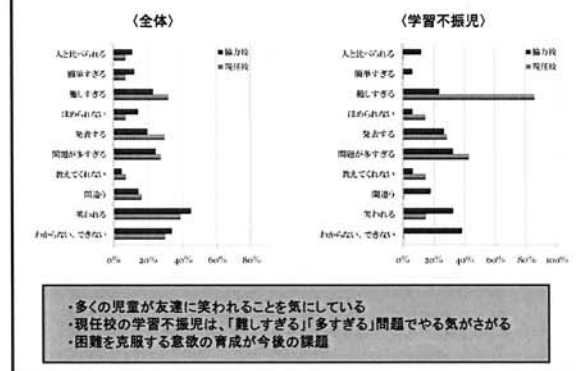
第1回「学習意欲調査」の結果



「授業中、特にやる気ができる」とはどんなときか



「授業中、特にやる気さがるとき」はどんなときか



知識・技能の「未習得や剥落」をどう回復させるか

「算数たしかめプリント」の作成

- ・「テスト」に対応したプリント集
- ・「テスト」の結果集計表の中に
対応する「たしかめプリント」の番号を表示
- ・定着していない単元から優先的に取り組める
- ・校舎2階に設置した棚へ番号ごとに収納し
いつでも自由に取り出せるようにする

「算数たしかめテスト」の結果集計表の一部

領域	A 数と計算						
	1	2	3	4	5	6	7
大問番号							
単元	大きい数のしくみ	わり算の筆算(1)	がら数の表し方	わり算の筆算(2)	計算のきまり	小数	分数
問題数	6問	14問	2問	8問	3問	11問	5問
教科書	上P3～10	上P23～40	下P35～42	下P3～19	下P44～51	上P57～67	上P79～90
プリント番号	4-03、02	4-03、04	4-03	4-03、04、05、06	4-03、01	4-03、03、04	4-03
誤答率	5学年						
1	100.0%	64.3%	100.0%	100.0%	100.0%	27.3%	89.0%
2	Bさん 33.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	27.3%	20.0%
3	Cさん 16.7%	7.1%	0.0%	50.0%	0.0%		
4	Dさん 0.0%	0.0%	0.0%	0.0%			
5	Eさん 0.0%	0.0%	0.0%	0.0%			
6	Fさん 66.7%	57.1%	0.0%	75.0%			

「たしかめプリント」の番号

誤答率

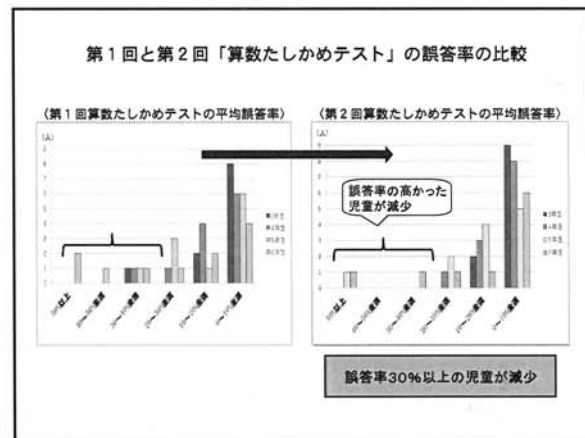
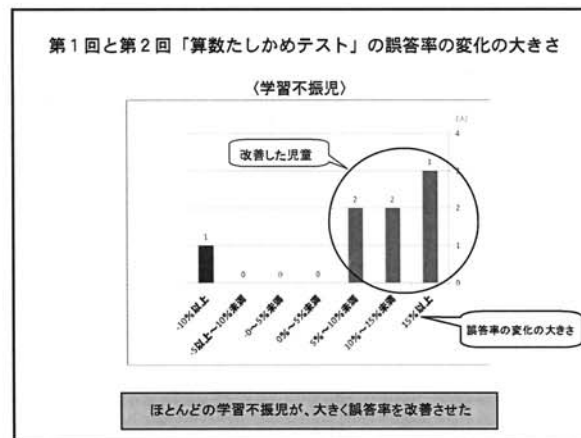
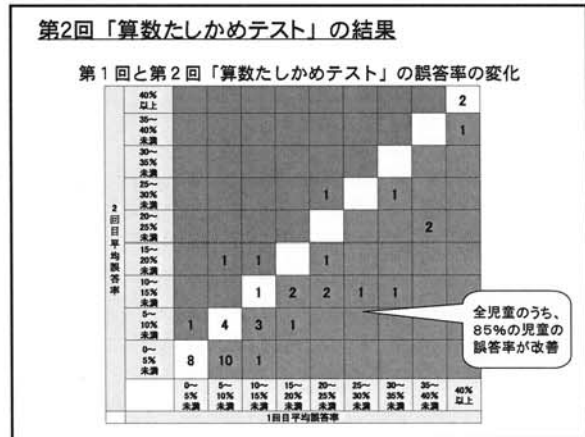
Bさんは、「大きい数のしくみ」の誤答率が高いので、4-(1)のプリントからとりくめばいいね

算数科補充授業
「算数大好き」の実施

- ・2009年1月～2月実施
- ・対象：4年生～6年生
- ・時間：毎週水曜日6限（全4回）
- ・指導者：校長、教頭、地域支援ボランティア、岡大学生ボランティア等

算数科補充授業「算数大好き」の感想

- ・苦手なところがわかるようになった
- ・算数が好きになった
- ・授業のとき、簡単にできた
- ・自分のペースで最後までできるのがよかった
- ・本当に身につけているか、もう一度テストでたしかめた方がよい



本年度の成果と課題

〈成果〉

「たしかめテスト」の実施、「算数大好き」の実施



〈成果〉

・一人一人の「未習得や剥落」を発見・分析
・誤答率の改善＝「未習得や剥落」からの回復



〈今後の課題〉

・一連の取り組みを、教育課程の中にどう組み込んでいくか
・局所的な学習成果を、どう広げ、確かな学力へ結びつけていくか
・調査・分析結果を、どう授業改善に生かすか

来年度に向けての提案

- ① 「算数たしかめテスト」を定期的の実施する
- ② 「未習得」か「剥落」かに注目し
確実な習得を目指した指導法を解明する
- ③ 「算数たしかめプリント」を使った学習を
教育課程に組み込む
- ④ 「未習得や剥落」の大きい単元を重点単元に設定し
授業改善をおこなう
- ⑤ 学習意欲と学習成果の相互作用を意識した
授業改善をおこなう

(3) 國富聖子

研究テーマ
**中学校の通常学級における
 特別支援教育を視野に入れた
 生徒指導の研究**

岡山大学教職大学院
 國富聖子

現任校の現状・・・教職員アンケートより

自分の課題
 発達障害を抱える子どもに対しての対応策が、経験も理論もない
 現場に合う生徒指導上の問題を語る共通のキーワードが見あたらない

現任校の問題点(現任教職員アンケートより)
 慢性化する暴力行為・破壊行為・授業妨害に対する後追い指導の限界
 いじめや不登校が減少する有効な手立てが見いだせない
 意欲的な学びを生み出す実感がない授業
 生徒のコミュニケーション能力の低下
 個人の力の限界を感じている教師集団 特別支援の必要な生徒の増加

職員が求める資質・研修(現任教職員アンケートより)
 充実した授業のためのスキル・研修 特別支援教育に関する正しい知識
 生徒理解のための教育相談研修 一丸となつて取り組める課題

研究仮説

現任校の現状

- 不登校生徒が学年が上がるにつれ増加
- 発達障害などを抱える生徒の増加
- 学習意欲の低下から、授業妨害、授業放棄などの問題行動をおこし、将来の展望がない
- 生徒指導上の問題が減少しない

課題克服のポイント
 「特別支援教育」「教育相談」「生徒指導」「授業指導」
 の連携・協働

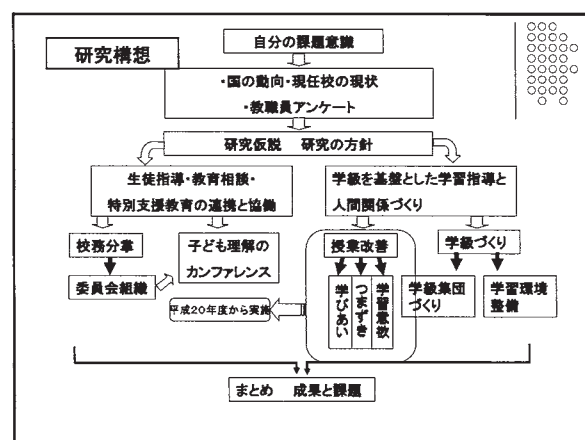
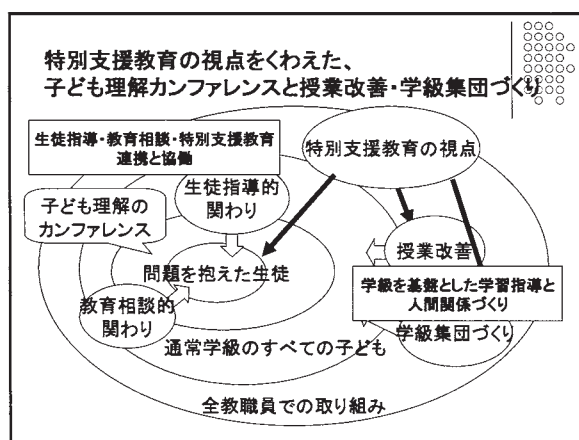
研究の方針

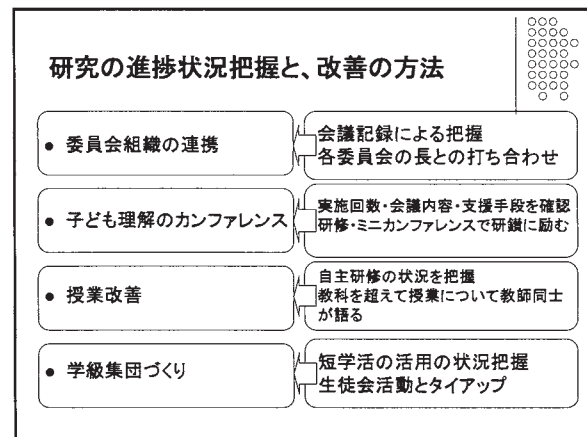
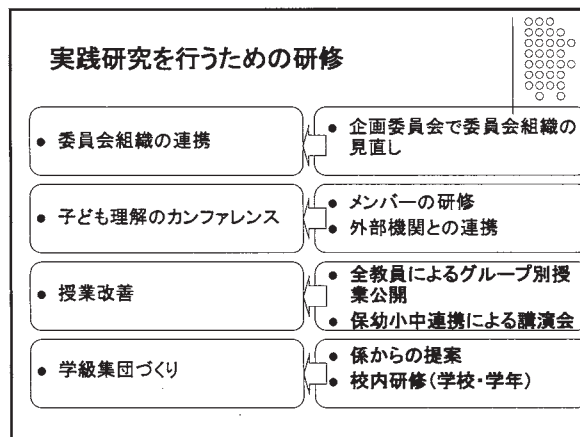
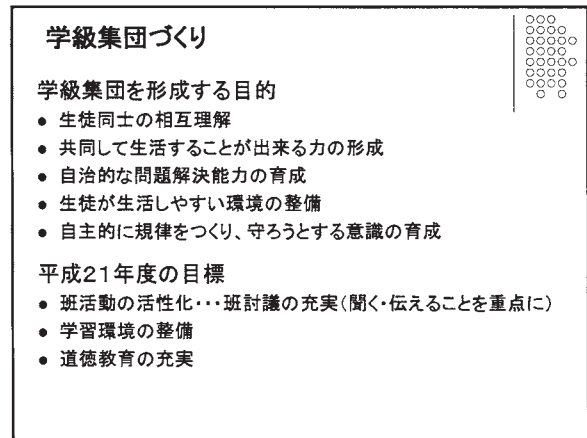
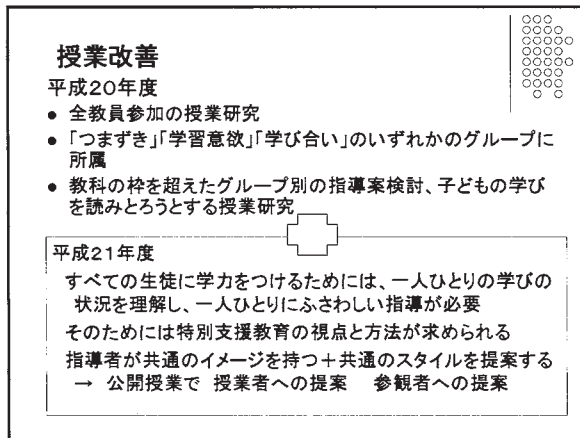
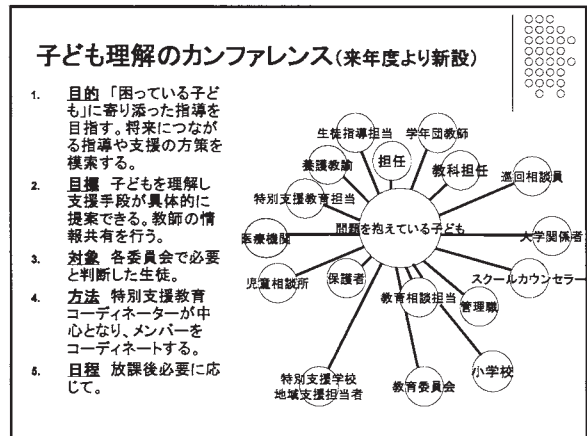
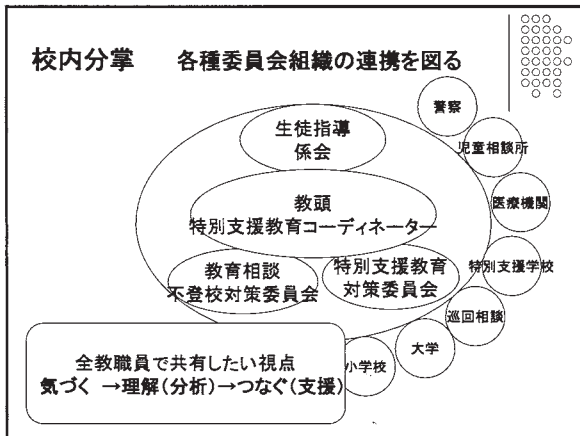
1. 連携・協働による 子ども理解カンファレンスの導入
2. 特別支援教育をふまえた生徒指導・生活指導・学級づくり
3. 特別支援教育をふまえた、生徒指導機能を発揮する授業づくり

子どもへの支援 ← 教師への支援

問題を抱えている
 生徒への支援
 教科指導や学級経営の改善
 わかる授業づくり
 人間関係づくり

指導に
 とまどう教師への支援
 教師の協働体制づくり





2. 現任校からの評価 (H21.3.7)

1) 中野隆重岡山県立早島養護学校長

おはようございます。岡山県立早島養護学校の中野と申します。

今日お話しされる方の中で、青田後喜先生が本年度、それから来年度も含めてこの教職大学院でお世話になっているわけですが、実は、私自身が今の学校に赴任しましたのが今年度です。このため、青田先生がどういう方かも全く分からないまま話をしておりました。青田先生が研究する内容や方法について、度々私のところへいらっしゃいまして、話をし、打ち合わせをしました。その点で、先程話がありました教職大学院の目的である即戦力といえますか、中心になって学校で働ける人材を育てるところで、やはり学校との連携を欠いてはいけないという点で、それはありがたかったと思っております。

本校は、組織が大変複雑でたくさんあります。障害種でいえば、病弱・虚弱等、肢体不自由、肢体不自由部門の中にも小学部・中学部・高等部、それから訪問教育がございます。病弱・虚弱にも小学部・中学部・高等部、それに加えて派遣学級がございます。訪問学級にも派遣学級にも小学部・中学部・高等部があります。今、本校では大きく分けて病弱・虚弱部門の小中高、それから派遣学級、それから肢体不自由部門の小学部・中学部・高等部、それに訪問教育。合わせて八つ、事務を含めれば九つですけれども、八つの部門がありまして、それぞれに教頭がおります。それをまとめる総括教頭がいて、教頭が9人いるのですが、生徒数が164くらいで、教職員も教員だけで123くらい、職員を含めると160程度です。そういう中で学校をどう動かすか、というところは、課題もあるのですが、面白いところもあると思っております。

本校は、早島養護学校という風にまだ「養護学校」という名前ですが、校名につきましては、先日パブリックコメントにありました、岡山県の「特別支援教育推進プラン」の中に、平成21年度を目処に支援学校の名称を変更するということがありましたので、来年度は移行期間として「支援学校」になるだろうと思っております。これも、平成19年度から正式に特別支援教育が発足したことも関係しております。その平成19年4月1日に、文部科学省の初等中等教育長名で「特別支援教育推進について」という通知が出されました。この通知が、現在、とても重みを持っていると思っております。その前書きの中に、通知の目的として、特別支援教育が法的に位置づけられた改正学校教育法が施行されるに当たり、各学校で行う特別支援教育の基本的な考え方・留意事項等をまとめた、という内容が書かれています。項立てとしては八つあるのですが、この中で特徴的だったのが、私どもに「頑張れ」と言っていることがありまして、2番目の校長の責務が新しいところだと思っております。1. 特別支援教育の理念、2. 校長の責務、3. 特別支援教育を行うための体制の整備及び必要な取組、4. 特別支援学校における取組、5. 教育委員会等における支援、6. 保護者からの相談への対応や早期からの連携、7. 教育活動等を行う際の留意事項等、8. 厚生労働省関係機関等との連携とあるわけです。その中の4つめ、特別支援学校における取組の(3)に、特別支援学校教員の専門性の向上について述べられています。少し長くなりますが、この今日の発表とも関係があるかと思うので読んでみます。

上記のように特別支援学校は在籍している幼児・児童・生徒のみならず、小・中学校等の通常学級に在籍している発達障害を含む障害のある児童・生徒等の相談などを受ける可能性も広がると考えられるため、地域における特別支援教育の中核として様々な障害種についてのより専門的な助言などが期待されているところに留意し、特別支援学校教員の専門性のさらなる向上を図ること。そのためにも特別支援学校は特別支援学校教員の特別支援学校教諭免許状保有状況の改善，研修の充実に努めること。さらに，特別支援学校教員は，幼児児童生徒の障害の重複化等に鑑み，複数の特別支援教育領域にわたって免許状を取得することが望ましいこと。

とあります。

これまでも専門性の向上のため，資質向上のために，各盲・聾・養学校ではそれぞれの学校で研修をしっかりとってきていますし，講座として外部からの講師をお招きして色々な研修に努めております。そういうことを認めているのが，「特別支援教育の更なる充実に向けて（審議の中間取りまとめ）～早期からの教育支援の在り方について～」で，これは平成21年2月12日に，特別支援教育の推進に関する調査研究協力者会議から出されています。その前書き，「はじめに」の部分にこんな一文があります。

校内委員会の設置，実態把握の実施，特別支援教育コーディネーターの指名，特別支援教育支援員の配置，個別の教育支援計画や個別の指導計画の作成・活用，さらに教職員研修など教員の専門性向上のための取組が進められており，これらの特別支援教育の体制整備は，「各学校種において一定程度，進みつつある。

という風に，認めている前書きがあります。このような流れの中で，本校でも研修，研究という分掌を中心に，資質の向上，専門性の向上に努めているところです。本校は先程言いましたような職員の数ですが，異動がかなりたくさんあります。異動があるために，小学校・中学校から来られる先生もいらっしゃいますし，先程言いましたように，病弱・虚弱教育と肢体不自由教育なのですが，知的障害の学校から来て初めて肢体不自由を持つという先生もいらっしゃいます。そういった中で，肢体不自由の専門性，病弱・虚弱の専門性がとても大切になってくることがあります。

今年度は，先程改訂された学習指導要領の中にも強く言われている「準ずる教育」ということが，特別支援学校にも言われているわけです。「準ずる」という部分については，小学校・中学校の先生もベテランの先生は随分指導力があると思いますが，その中の専門性，肢体不自由教育の専門性，病弱・虚弱の専門性のところについては，これから一緒に勉強して行く方がいいのではないかと考えています。今までしていた一斉の講義形式の研修，それから今私どもがしているのは，専門家に来ていただいて，現場の子どもを見ていただいて，実際に一人一人の子どもについての指導について指導していただく，アドバイスをいただくということもしています。

ただそれだけでは，やはり初めて来られた先生の指導力にはなかなか結びつかないことがあります。そういうところで，私がかねてから初めて来た人への研修が必要かと思っています。ないわけではなくて，本校でも，4～5月を中心に新任者の研修を何コマか行っていますが，ただ，それだけではなかなか難しい面がありますので，それをもっと充実した方がいいのかなと思っておりました。先日，学校評価委員の方々に色々ご意見をいただ

いた中の一つに、同じような考えがありました。経験年数別の研修というのはとても大切です、ということでした。旭川荘の例を挙げて言っていた方の話では、旭川荘の研修担当の方も色々苦勞して1年目の研修、3年目の研修ということを色々工夫しているようです。学校でも一斉ではなくてそういった目的別の研修が大切ではないでしょうか、というご意見もいただきました。他のお医者さんからも同様の意見をいただいて、よく似ているなど思ったところではあります。

青田先生の研究目的・内容を見させていただいても、私とよく相談しながらやっというということで、よく電話をするのですが、まさに、今いかに専門性を向上するか、学校の全体の力を上げていくかということに着目していて、とてもありがたいと思っています。あと、課題は、これをどういう風に実施していくかということだろうと思っています。実施するということで、学校を動かす、組織を動かすということで、今も青田先生が取り組んでおられるわけですが、まさにこれから管理職等、または中堅教員としての力をつけていって、今一番そういうところが現場で力をつけていって実施できたらそれが本当に身に付くのかなと思います。それが全部できなくても、過程、どういう風に取り組んでいくかということが、本当の力になっていくのではないかと思います。簡単ですが、これで私の話を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

2) 高原康則矢掛町立山田小学校長

失礼いたします。私は、今発表をいたしました平松教諭の現任校の校長の高原でございます。まず、結論から申し上げたいと思います。先程、高橋研究科長の方からも教職大学院の学校を支援する機能を充実していくというお話がありましたが、この1年間で教職大学院の学校支援機能が、十分に私どもの山田小学校に機能したということをご報告させていただきたいと思います。そして、確実に学校力が向上したという感想を持っております。どのようなことにそれが現れたかという、先程の平松教諭の発表にありましたけれども、本校の学力、特に算数の実態が明確になったということでございます。そしてその課題解決に向けて、どのような道筋をとったらいのかということもあわせて明確になったということでもあります。一つ例をとってみますと、本校の児童の実態の中でマイナスの因子として大きく働いているのが、自己決定の弱さであります。73名という小規模校の私どもの子どもには、大規模校の子ども達のような切磋琢磨することに欠けている、ということは私達も十分に把握はしておりました。しかし平松先生が1年間教職大学院で様々な検証をなさって、一番大きかったのは、協力校である岡山市内のM校との比較をしていただいたことです。これで我々の職員は明確になりました。日頃からそうだろうなと思っていた課題が、はっきりしたということなのです。

校長としては、このように来年度計画しているという、その一例を申し上げますと、私どもの山田小学校の子ども達に自己決定の場を与えてやらなければならないということで、県教委から長期の宿泊体験の紹介がありましたので、早速手を挙げて、3泊4日の長期体験活動にも申込みをいたしました。手を挙げる学校は少なかつたし、今まで町内からそれは例を見なかったわけではありますが、やはり自己決定をできる子どもにしてあげなければならない、そのためには長期にわたって、保護者から子ども達を離して、子ども達とそして先生方とで自然体験の中で、自分で物事を決めて自分で計画をしていくような体験をさせなければならないと思ったからです。これも平松先生の教職大学院での研究の成果を受けての我々、私の決断でもあります。

少し遡ってお話をさせていただこうと思いますが、平松先生が教職大学院に進学をされて、一番留意をしたことが、まず平松先生の研究を個人研究に終わらせてはならないということを常に考えておりました。そして本校の研究と常にタイアップしていくことを留意しようと思いました。二つめは同僚性の確保であります。今まで私は4年間、今年を除くと3年間、平松先生と一緒に勤務していましたが、ほとんど学校にお見えになりません。水曜日にお見えになるくらいですので、我々の教職員と関係が疎遠になってはならないということがありました。その辺りに十分気をつけて研究主任や児童支援という立場の職員と平松先生とで十分に連携をとりながら、そこを校長がコーディネートすることにいたしました。もう一つ、今度は校長として気をつけたことは、彼の支援の体制を整えていこうということでもあります。平松先生の研究について、本当に意義あるものだと私も思いましたし、矢掛町では学習不振児の児童・生徒の解消を教育重点の大きな柱の一つにしておりましたので、この平松先生の取組については、ぜひ教育長にも理解を得て、行政からの支援を受けなければならないということで、一緒になって教育長さんにも研究の方法についてご説明にあがりました。また、教育事務所にも一緒にまいりまして、所長、次長

さん辺りにも、ぜひ山田小学校の取組、平松先生の教職大学院での取組を実際に形あるものにしたいということで説明にあがらせていただきました。大変高い評価を得まして、実は教育事務所長さんから県の指導課にもご紹介をいただいたのか、NHK から学力の向上について、小学校の取組のよくやっているところ…と言うと私の口からは失礼なのですが、紹介をしてほしいということがありまして、この2～3月にNHKからの取材も受けました。今プレゼンの中にもありました「算数大好き」や、平松先生を招いての校内の研修等についてもカメラ撮りをして、3月の中下旬にはNHKでその放映があるということです。

来年度についてですが、ぜひこの研修をさらに充実できるようにしたいと考えております。これはまだ人事上の不確定なところもあるのですが、教務主任も担任を持つというような小さな学校ではありますけれども、児童支援の加配をどうやらいただいただけそうでありませぬ。平松先生には学校の方に帰っていただきましたが、児童支援として各学年の特につまづきにあるような、この本年度の研究の中でピックアップできた子どもたちにとって、きめの細かい指導に当たってもらおうと思っております、担任を外れての児童支援の立場を確保できるのではないかと喜んでおります。二つめは、この成果を町内の他の学校へと波及していくということです。実は私どもは、学力・人間力の推進、向上のプロジェクトの方を福武教育文化振興財団からの助成をいただき、来年度から3年間取り組むわけです。そうした中で、今度はこの平松先生の1年間の成果を、まず他校の先生方に情報提供して、一緒になって取り組んでいって、さらにこの1年間の成果と来年の彼の取組を矢掛町全体の取組として充実したものにしていこうと思っております。今それができることがほぼ確定しておりますし、確信を持っております。本当に大変ありがたい機会を得まして、そして学校を、教職大学院の専門性をもって支援をしていただいていることにつきまして、厚く御礼を申し上げまして私の話を終わらせていただこうと思っております。ありがとうございました。

3) 江木英二岡山市立操南中学校長

皆さん、おはようございます。大学では本校の國富が大変お世話になっておりまして、この場をお借りしてお礼を申し上げたいと思います。本校の実情でございますが、先程國富の方から申し上げた通りでございます。とんでもない中学校かなと受け止められた先生方も多かったのではないかと思います。私の目から見まして、市内の公立中学校も似たような状況ではないかと思っております。本校は全校生徒が714名、普通学級が各学年7クラスの21クラス、特別支援学級が6クラスという、中～大規模校というところでございます。私は現任校が、今3年目が終わろうとしていますが、実は色々な勤務の経験がありまして、中学校現場へ立ち返ったのが20年振りです。それが本校でございます。その前に小学校へ4年間お世話になっていたのですが、中学校が20年振りということで、着任した日の感想を今でも鮮明に覚えております。20年の間に随分様変わりしたなと感じたものと、変わらなくてはいけないのに変わってない、教育改革と言いながら現状を見ると非常に辛い寂しいものがあるなという複雑な思いに立ちました。しかし現状を見る中から、まずは先生方に課題といいますか問題といいますか、それを明らかにし、提示し、そしてどういう方向へ歩いていくか、ベクトルだけは自分が自信を持って示していかなくてはならないということで今日まで頑張ってきております。

ちょうど1年前、國富が教職大学院へ行くことについて、本人も大分悩んだようです。私がぜひ行けと勧めたわけではないのですが、本人が案内の文章を見まして、行くべきか、どうすべきか、と少し時間をかけて考えておりました。ですが、私が折々に指摘していた校内の色々な課題に対し、本人も同感という思いを持っていたようです。何とかしなくてはならないと日々悪戦苦闘はしていたわけですが、中途半端なことで終わってしまっていると。彼女は年齢的に考えましても、その能力から見ましても、本校の中堅職員です。本校には53名の教職員がおりますが、その中の中間どころで、上に下につながる幅広く活躍してくれている教員です。1年間といえども抜かれることは非常に厳しいものがあったのですが、いやいや、そうじゃない、本人がそういう課題意識を持った時こそとつぷりと浸かってやってきてくれ、1年経ったらまたそれを何倍にも学校へ返してくれればそれでいいから、ということで背中を押して院へ進ませました。大体週に一度、水曜日でしたか、学校の方へ出向いてきて私と相談したり、学ばせていただいていることの報告を受けたりしておりました。

研究の内容につきましては、先程あった通りです。特段新しいものというのではないかもしれませんが、現状の市内の中学校を見ますと、どこの学校も抱えている、共通することがたくさんあると私は思っております。と言いますのも、いわゆる時間割表の中での空き時間、普通は職員室にいて次の授業の準備をしたり、教材研究をしたりといったような時間ですが、本校の職員室にはほとんど職員はおりません。皆が揃うのは部活が終わった後の時間と研修日で生徒が一斉下校した日です。その時間割の中で空いている時間に何をしているかという、それぞれ校内の所定の場所に行って立ち番をしながら生徒の生活ノートを見たり、添削をしたりといった状況です。これは、事が起きてからでは遅いから、起きる以前に…という思いでやってくれています。これは決して否定するわけではないのですが、どうしても対症療法に終わりがちなところがあります。そして教室に入りづらい生

徒も実際にはおりました、色々な手だてをして何とか学校へ、学習に目を向けようとさせているのが実情であります。部活動も一生懸命やってみたらどうかとか、生徒会活動で様々な取組をしながらやってみましたが、安定した充実した日々を過ごすことができにくくなっている子ども達、やはり学びだなということを強く痛感しているところです。当たり前なことなのですが、何か学びから目を背け、他に救えるものがあればそれでよしといった風潮が現場にはなかったか、ということが私自身の自問自答するところです。といったことから、学校経営上の立場として、私は学校長として職員に求めているものについて、こういう言い方をしております。「生徒の困り感に寄り添い、そして組織的な支援ができる教職員集団であろう」と3年間言い続けてきております。一人一人よく頑張っているのですが、一人一人の頑張りでは打開できない大きな問題、困難な問題が山積しているというのも現状です。そういう中で、学級担任には、集団の相互的な機能を有する学級集団づくりをしてほしいということで、研修もしながらしております。

先程、研究の内容に大きく四つありましたが、特に私が中心的にやっていきたいと思っておりますのは、授業改善でございます。こちらの住野先生のご指導もいただきながら、今やっとその体制が整いつつあるところです。やはり義務教育の出口保証を求められている中学校現場におきましては、学び・学習という学力というものから目を背けることはできません。学びに立ち向かっていけるような生徒を育成していくことが、今の中学校に求められているものではないかと改めて痛感しているところでございます。中学校も3年間ですから、それまで取り残した課題を抱えたままでは、なかなか生徒も回復は厳しいところもございます。ということから、学内の幼小中の連携を色々試みまして、来年度からは市の方からも指定を受け、地域協働学校づくり推進事業ということで、幼小中がそれぞれに計画をもって連携し合っていこうという枠組みもできました。國富がこの4月から学校へ帰りまして、中心的なコーディネーターとして先程の研究内容に取り組んでまいりたいと、それを真摯に一つずつ丁寧に積み上げていくことが学校改善、学校力の向上につながっていくのではないかと考えております。それが、何らかの形で市内の学校へ波及していくことができれば、この上ないことだと考えております。今後とも大学からもご支援、ご協力をいただくとありがたいと考えております。職員の方は、1日も早く学校へ帰ってきて今思っている事を共々やろうということで、週に一度来ました時には、机にかじりつくのではなくて、足らずのところをカバーしに回っていつているというのが実情ですが、そういう現場密着で頑張らせる、これからのリーダーというのもこういうスタイルがあるんだ、必要なんだという事を残せばいいかなとっております。今後ともご支援のほど、よろしく申し上げます。ありがとうございました。

Ⅲ 新卒院生による地域協働学校での活動

1. 『インターンシップ実習』としての活動

(前期報告会：H20. 7. 29, 後期報告会：H21. 2. 10, 教職大学院 GP 最終報告会：H21. 3. 7)

【インターンシップ実習前期報告会】

日 時： 平成 20 年 7 月 29 日（火）14：30～16：30

場 所： 岡山大学教育学部東棟 1229 室

発 表 者： <特別支援学級実習報告>

安藤宏恵

佐藤典美江

時岡宏行

南川由理

根山夕佳

<部活動実習報告>

大賀基代

香川真吾

八木雄治

玉木修治

岡崎亮人

指導・助言： 山本健五岡山市立岡山中央中学校教頭
長瀬尚樹岡山市教育委員会指導課課長補佐

【インターンシップ実習後期報告会】

日 時： 平成 21 年 2 月 10 日（火）10：30～12：30

場 所： 岡山大学教育学部東棟 1209 室

発 表 者： <特別支援学級実習報告>

大賀基代

岡崎亮人

香川真吾

玉木修治

八木雄治

<部活動実習報告>

安藤宏恵

佐藤典美江

時岡宏行

南川由理

根山夕佳

指導・助言： 乙部憲彦岡山県教育庁指導課総括副参事
曾田佳代子岡山市立岡山中央中学校長

1 実習概要

実習校	岡山市立岡山中央小学校
配当学級（学年等）	ひまわり学級1組
担当教師	光畑先生
観察・参加した学習内容	○朝の会：主に副指導者として参加。 ○国語：個別の課題対応（副指導者として参加）。 ○算数：個別の課題対応（副指導者として参加）。 ○音楽：交流学級の付き添い。個別対応。 ○図工：1年生—主に副指導者として参加。 2年生—交流学級の授業に付き添い。個別対応。 ○生活科：主に授業観察し、時々副指導者として参加。

2 児童生徒の実態と指導目標・方針について

知的な障害のある1、2年の児童計8名が在籍している。学力差が大きく、国語は、簡単な文の読解ができる児童もいれば、平仮名・片仮名を練習している児童もいる。授業中、一時間落ちついて学習する児童もいるが、途中で集中力が途切れる児童もいる。また、休み時間には、教室で折り紙をする児童、外で鬼ごっこや、キャッチボールをする児童、交流学級の児童と遊ぶ児童の姿が見られる。友達関係では、時々けんかもみられるが仲が良く比較的安定している。

先生方は、児童一人ひとりの多様な実態に合わせ、様々な手立てをしながら指導を行っていた。

3 学習や学級経営を行う際の留意点等について

ひまわり学級での指導は、主に国語・算数などの教科であった。国語や算数では一人ひとり行う課題が異なっていた。それぞれのボードに一時間の授業の流れが書かれており、順番に課題に取り組んでいた。また、すべての課題を終えた後は、必ず「お楽しみの時間」という息抜きできる時間が設定されていた。

朝の会では、必ず「昨日の話」ということで一人ひとりが話をする機会が設けられていた。ずっと話し続ける児童については、タイミングをみてきりをつけるように指示していた。また、話題が広げられない児童については質問をして、内容を引き出されていた。さらには聞く指導も行っており、途中で質問をはさんでくる児童に対して「～君の話が終わってから質問をします」などと言って指導していた。

また、一人一役もっており（カレンダー係、日付け係など）、児童は自分の仕事を、毎日、きちんとこなす指導もしていた。

4 実習を通して得た成果(自己課題との関連から)

理解できるだろうと思って話したことが伝わらなかったり、できるだろうと思って与えた議題ができなかったりすることがあり、指導の難しさを実感した。このように説明すればわかるだろうと考えながら個別に説明したり、「のりをつける」、「はさみで切る」、「クレヨンや絵の具で色を塗る」など、自分が当たり前で今までできてきた簡単な課題を与えたりしたが、児童には難しすぎることも多くあった。自分が今まで当たり前にしてきたことを、どのようにして教えればよいのか、悩むところだった。常に、児童と向き合って対話し、児童の思いをくみ取りながら指導することの難しさ、大切さを知ることができた。

インターンシップ実習（特別支援学級）報告書

教職実践専攻 22420084 佐藤 典美江

1 実習概要

実習校	岡山市立岡山中央小学校
配当学級（学年等）	ひまわり学級3組
担当教師	影山先生
観察・参加した学習内容	<p>○朝の会：主に交流学級で支援者として参加。</p> <p>○音楽：副指導者として参加。授業中は個別対応。</p> <p>○社会：交流学級に児童を引率し、主に観察。必要に応じて支援者として参加。</p> <p>○体育：交流学級に児童を引率し、授業中は主に個別対応 ひまわり学級の体育では、副指導者として参加。</p> <p>○図工：交流学級に児童を引率し、授業中は全体に関わりながら個別対応。</p>

2 児童の実態と指導目標・方針について

男子3人、女子3人、計6人のクラスである。全員元気で、明るい雰囲気のあるクラスであった。クラス内で児童同士のトラブルはあまりみられない。特定の男子が大声を出すことや、特定の女の子が時々ほかの児童の言動を気にすることなどはあるが、全体的に落ち着いている。クラスの児童同士と一緒に遊ぶことは見られなかった。

3 学習や学級経営を行う際の留意点等について

自分でできることは自分ですること、友達と仲良くすることなどを目標として取り組んでいた。また、児童がかんしゃくを起こしたときには、しばらく見守り、落ち着いてから説明等の指導が行われていた。

4 実習を通して得た成果(自己課題「児童との関係を築く授業実践」との関連から)

・ 教師間の連携

交流学級で学習した様子を先生が随時伝えることによって、学級の先生は児童の学習の達成度や気持ちの流れなどを把握し、それに基づいて指導されており、先生方が一貫した指導を行うことができるとわかった。悪いことを悪いと一貫性を持って指導することや、ゆったりとした心構えで児童に接することが可能になるとわかった。

・ 個と全体

個々の児童の実態をしっかりと把握し、一人一人の児童に適した指導をされていた。個々を見ながらも全体を見、全体が調和的に生活・学習できるよう指導をすることの難しさと大切さを改めて感じた。

1 実習概要

実習校	岡山市立岡山中央小学校
配当学級（学年等）	ひまわり学級2組
担当教師	中村先生
観察・参加した学習内容	<p>○朝の会：交流学級で対象児の様子を見守る。</p> <p>○国語：ひまわり学級で学習支援を行なう。</p> <p>○数学：ひまわり学級で学習支援を行なう。</p> <p>○音楽：交流学級の授業に入り、対象児の様子を見守る。</p> <p>○図工：交流学級の授業に入り、対象児の様子を見守るとともに、活動支援を行なう。</p> <p>○学活：ひまわり学級で活動に参加する。</p>

2 児童生徒の実態と指導目標・方針について

本学級には男子4人、女子2人の児童が在籍している。男子のうち3人は比較的落ち着いており、学習にもすすんで取り組んでいる。女子2人は、その時の感情によって、友達や教師に対して厳しい言葉を言ったり、授業で与えられたプリントも投げ出したりすることも見られる。

児童それぞれのよさやがんばりを認めたり、苦しさを理解したりしようという姿勢の基に、その行動や発言の原因は何かを考えて具体的な対応が行なわれている。また、集団生活の中で必要な「我慢をする」、「友達の気持ちを考える」ことも身につけさせるために、時には毅然とした厳しい態度で接するなど、場に応じた必要な支援が行なわれている。

3 学習や学級経営を行う際の留意点等について

ひまわり学級では、「国語」と「算数」の個別学習が行なわれていた。それぞれに課題が複数用意されており、好きなものから順番に取り組んでいた。わからないことや課題が終わったときは教師を呼ぶことになっており、呼んだとき、教師がほかの児童の対応をしている場合は、待つ順番を守るように言われていた。また、感情が高まってしまった児童に対しては、そばで声をかけたり一人にしたりするなど、時々で対応を変えておられた。

友達に対して厳しいことを言った児童には、その場ではきちんと注意し、その後個別で話しをされていることもあった。教師に対しての発言の場合は、どんなことを言われても児童の目を見て聞いておられた。

4 実習を通して得た成果(自己課題との関連から)

もっと様々な場面で児童とふれあったり様子を見守ったりして、場面変化や教師・友達のかかわり方で、児童の様子がどのように違ってくるかを知らなければいけないと思った。そうすることで、どんな時に児童が集中できていたか、楽しそうに友達とかかわっていたか、逆につまらそうだったかを整理してとらえることが必要である。そうすることで、児童の言動の原因や、児童が何を求めているかを考えることができ、児童それぞれに適したかかわりや子ども同士の関係を作っていくことなどに取り組むことができるようになる。

より多くの場で児童と関わり、その児童の様子から様々な困難さの原因や願いを探り、それをどう受け止めていくか、その願いをどうすれば満たすことができるのかを考えなくてはならない。

1 実習概要

実習校	岡山市立岡山中央中学校
配当学級（学年等）	3年
担当教師	中吉先生
観察・参加した学習内容	<p>○朝の清掃、職員朝礼</p> <p>○国語科：部首を組み合わせる学習を観察した。</p> <p>○数学科：生徒と一緒に問題に取り組み、生徒の相談に応じたり質問に答えたりした。</p> <p>○理科：授業に参加し、実験を行う様子を観察しながら参加した。</p> <p>○社会科：パズルを使って世界地図を埋めたり、個別のワークシートに記述したりする学習について生徒のアドバイスをを行った。</p> <p>○音楽科：授業に参加し、生徒と協力してギターを演奏したり、一緒に歌ったりした。</p> <p>○技術科：生徒と一緒にいちごを植えたり、ボードの飾り付けをしたりした。</p> <p>○学級活動：修学旅行で撮った写真を生徒と一緒に選んだり、生徒が書いた作文をチェックしたりした。</p>

2 児童生徒の実態と指導目標・方針について

一人ひとりの生徒の個性が強く、実態は多様であるが、3年生という学年単位でみると、生徒たちは自己の将来や進路を強く意識しているように感じられた。指導目標についても、一人ひとりの生徒によって異なるようであるが、学級活動などを通して、進路を踏まえた指導がなされていた。また、特別支援学級全体を通してみると、教師間での情報交換が頻繁に行われ、保護者に対しては、窓口の一本化を図りながら、個に応じた協力体制が作られていることが分かった。

3 学習や学級経営を行う際の留意点等について

学習や学校経営を行う際には、生徒が一つひとつの取り組みに対して見通しをもてるように配慮していくことが重要であると分かった。学級の様子について先生からお話を伺い、最初は集団で学習を進めていくこと自体が難しかったが、学級全体でのルールを設定したり、先の見通しを示したりすることで、集団学習が成立するようになったことを知った。そこで、授業でのルールの枠組みを明確にしたり、どんな目標をもって、何をしていく必要があるのかなどを事前に説明したりすることで、子どもの見通しをもてるように心がけた。

4 実習を通して得た成果(自己課題との関連から)

実習では、生徒に寄り添いながら先生方の動きを観察するよう心がけた。その結果、先生方が共通して、必ず子どもの活動の様子を確認しながら、丁寧に学習を進めていることが分かった。そして、何らかのよかったところを見つけて、本人や周りの生徒に伝えるようにしていた。このことは、通常学級でも非常に重要なことではあると感じた。さらに、より丁寧にスモールステップで指導されているのを実感した。具体的には、技術科の授業において、生徒の発達段階に応じ、制作する作品の難易度が異なっており、生徒が一生懸命取り組めばできる場所に目標が設定されていた。このことによって、生徒が取り組みの達成感を感じることができ、活動への意欲が喚起されていることが分かった。

1 実習概要

実習校	岡山市立岡山中央中学校
配当学級（学年等）	F組（知的障害）f組（情緒障害）の1年生とF1クラスを中心に
担当教師	中吉先生
観察・参加した学習内容	朝の会、授業の際に教室に入り、他の先生や支援員の方と一緒に生徒の支援をした。内容は、学習支援や教室移動の際の付き添い、休憩時間に会話をしながら共に過ごすなどである。

2 児童生徒の実態と指導目標・方針について

自分のやりたいことに夢中になると次の行動に移れなかったり、自分の思い通りにならないときや予定が急に変更されたときなどに上手く気持ちを切り替えられなかったりする生徒がいる。また、少しでも気になることがあったり体調が悪かったりすると、教室に入れない生徒や学習に集中できない生徒もみられる。

指導目標・方針については、それぞれの生徒によって抱えている問題や克服すべき課題が異なっているため、先生方が朝の打ち合わせなどの時に、個々の生徒について現状や対処法について共通理解を図っている。集団の中での指導については、先輩・後輩の関係が重視されている。1、2年生は3年生の姿を見たり、3年生に教えてもらったりして自分の行動を見直し、2、3年生は後輩にとっての見本になることで自分の行動を律している。

3 学習や学級経営を行う際の留意点等について

1年生のクラスでは、特に、「友達同士で注意しあわない」という決まりが印象的だった。生徒同士が注意をすることで人間関係にトラブルが起きる可能性があるからだと思う。問題行動（授業に出ない、叫ぶ、寝転がるなど）を起こす生徒がいた場合、いけないことを注意するのではなく、なぜその行動が起きているのかをその生徒のペースに合わせてじっくり分析し、思いを汲み取って対応することが大切であると思われた。

4 実習を通して得た成果(自己課題との関連から)

励ましなどの言葉かけはよく行われていて、全体的に思いやりのあるクラスであった。このような互いを思いやる気持ちは、通常学級の学級経営においても重視したいところである。また、全員が「気を付け」の姿勢をきちんとするまで、日直があいさつをするのを待ったり、授業中は椅子の座り方についてまで教師が細かく注意したりしているのを見て、本来大事にしなければならないのに通常学級では軽視されがちな事柄について見直すきっかけとなった。クラスのすべての生徒にとって受けやすい授業、みんなが参加できる授業の進め方、個々への支援の仕方など通常学級で授業をする際にも参考になるポイントがいくつもあった。ボランティアの経験もあったことで、特別支援学級の多くの生徒たちと自然と関わることができ、自分の振る舞いにさらに自信を持つことができた。通常学級でも当然言えることだが、「こういうときはこう対応すればよい」といった生と一人一人に対する実際的なマニュアルのようなものはなく、やはり個々の生徒としっかり向き合っ、ともに困難を乗り越えていくことが大切だと改めて実感できた。

1 部活動の概要

○実習校	岡山市立中央中学校
○部活動	美術部
○部員数	13名（1年生…5名 2年生…2名 3年生…6名）
○顧問教師	石井先生
○外部指導者の有無	無し
○活動状況	週3日程度
○活動環境	主に美術室（天神山プラザなど美術展の見学など、校外での活動あり）
○実習日以外の参加活動	無し

2 顧問教師の指導方針、連携、工夫等について

実習させていただいている時期の美術部の課題が「風景画」で、主に図鑑などの大きな写真や、デジタルカメラで撮影した写真を拡大して、画用紙に転写したものを彩色するという活動を行っていた。指導場面では、生徒の技術力に合わせて個別に適切な助言や指導をされており、「個に応じた指導」に配慮されているという印象を受けた。モチーフを決定する段階では、まず生徒自身の描きたいものを選び、その後には生徒個人の技術力などから、描き方（絵の細かさ等）をそれぞれに指導されていた。実習当初は、「生徒の話し相手」という立場での関わりを求められた。部活動以外の学校生活でストレスなどを抱えている生徒もおり、彼らの話を聞き共感的な立場で受け入れたり、興味・関心のある事柄についての雑談の中で、生徒たちと部活動の楽しさを共有することが求められていたのだと感じている。また、部活動中に生徒のそばにいる大人としての役割も大きく、美術室以外での活動（資料探しに図書室へ行く場面や、美術展の見学など）での付き添いとしては、役に立てたのではないかと感じている。

美術部での工夫としては、美術展の見学がある。岡山中央中学校は、近隣に美術館などの施設があり、非常に恵まれた立地条件であると言える。生徒に実物の絵画・彫刻を見せることで、その描き方や色の使い方などを細かく見ることができるとともに、公共施設でのマナーを身につけさせることができるという教育的意義もあるのではないかと考えた。

3 生徒の活動実態

生徒数は、3年生6名、2年生2名、1年生4名が主に活動している。それぞれの学年ごとでの結びつきが強く、美術室内の3カ所に分かれて制作を行っている。自分は主に3年生のグループでの活動に参加していた。制作しながらの雑談が多く、時おり手が止まってしまう生徒もいた。

制作に関しては、生徒によって絵の具での彩色と色鉛筆の2つの方法がとられている。2つ並びの個別机で作業が行われているので、隣同士が異なる方法での彩色を行っている場合には水バケツなどに配慮が必要であるが、観察中のほとんどの時間にそのような場面に遭遇することはなかった。

実習当初の生徒たちは、顧問の先生の指示を待ち、言われた通りのことを行っているように感じた。自分で考えて色を塗るといふより先生が言われた通りに作業を行っていることに関しては、顧問の先生も問題視されていて、指示の方法についてだんだんと「考えさせる」ことを意識して指導されていたように思われる。

生徒たちとの会話の中で、「失敗はしたくない」という言葉が印象的だった。今までの美術や図工での失敗経験を繰り返したくないといった生徒の思いにも触れることができた実習であった。

4 実習で学んだことや成果

部活動の在り方として、技術指導の面が大きいように考えていたが、実際は生徒指導関連の事柄や生徒の「居場所」としての部活動の意義も強く感じられた。中学生が学校生活で抱えているストレスも予想以上に大きいようで、「部活動があるから学校にも来ようと思う」という生徒の言葉を聞き、生徒がいきいきと生活できる場としての部活動を指導することの重要性を感じることができた。部活動は運動部が注目されがちであるが、運動部とは異なる文化部の意義について深く考えさせられた実習であった。

最後に、実際に個性豊かな生徒たちと触れ合う中で、生徒たちがコンクール等の目標をもって活動することも大切だが、個人ではなく仲間と一緒に活動を行うことで楽しさを感じ、中学校生活においてかけがえない思い出や友人関係を築いていくことの援助ができればという思いを強くした実習であった。

1 部活動の概要

○実習校	岡山市立岡山中央中学校
○部活動	ソフトテニス部（女子）
○部員数	3年生…9人 2年生…6人 1年生…8人
○顧問教師	末吉先生 関本先生
○外部指導者の有無	無し
○活動状況	月～金（朝、放課後）、土（主に午前中）
○活動環境	ユート2面使用（運動場、屋上コート）
○実習日以外の参加活動	なし

2 顧問教師の指導方針、連携、工夫等について

顧問の先生はチーム作りを中心に指導されている。部活動は3年間メンバーが同じなので、この時間をとても大切にされている。また、勝つことも意識はするが、大前提として部員同士の人間関係を築いていく必要があると聞いた。

中央中学校の生徒はとても落ち着いた部分があるが、その反面、部活に熱くなる生徒が少ないということも聞いた。このことから、顧問の先生は部活を通して生徒に押し付けにならない程度に熱い気持ちを少しでも伝えたいとおっしゃっていた。

部活動の工夫として、はじめに練習のねらいや練習内容をホワイトボードに書くなどして、生徒が見通しをもった練習が行えるようにしている。また、部活動終了後に部員全員で集まり、その日の反省や振り返りを行うことで、次回の部活動に対する意欲の喚起や一人一人が自分なりの目標をもてるような場を作っている。

3 生徒の活動実態

学年ごとにとっても人間関係が良く、生徒同士が励ましあって練習を行えている。しかし、その反面で練習に対して馴れ合いが生じ、良い意味で同学年にライバルというお互いを高めあう存在がいないのではないかと感じる。

異学年間では、上級生が下級生に対して熱心に練習を教えている姿が印象的であった。これに対して、下級生も練習内容でわからないことを上級生に質問する姿も見られた。この事は、実習を始めたばかりの頃には見られなかったことで、時間の経過とともに生徒同士のコミュニケーションが生まれてきたのだと思う。

生徒たちは顧問の先生が不在の場合でも、自分たちで練習内容を決定する力を持っており、今の自分たちに必要な練習はどのようなものかも理解している。

4 実習で学んだことや成果

実習では大きく以下の3つのことを学ぶことができた。

①部活動中の「安全面」の指導

これは部活動中の事故がとても大きな影響を与えている。いつも通りの慣れた練習でも危険は常に隣り合わせであることを忘れてはいけない。今回の事故は、生徒の打った球が他の生徒の目に当たるというものであったが、事故の危険性があると感じた瞬間に練習の中止、もしくは事故の可能性を低くするような対策を自分自身が取らなければならないこと（指示や説明、指導等）がきちんとできるようにしていきたい。また、この事は部活動以外の学校生活においても同じことが言えると思う。児童生徒が学校生活を安全に送れるように常日頃から危険を察知する“目”を持ち続けていきたい。

②指導をするための最低限の知識・技術

実習が始まる以前は、生徒に技術指導や自分が培ってきた知識を伝えたいと思っていた。しかし、実習が始まると同時に、自分自身の技術の低さやソフトテニスの知識のなさに愕然とした。このため、大学でソフトテニスの練習を行ったり、最低限の知識を身につけるようにした。

技術があれば良い指導者になるとは限らないが、最低限の知識と技術はどのスポーツを指導する上でも必要なことだと思う。

③今後に向けての意識の変化

実習を通して女子生徒に対する言葉選びについて深く考えることができた。自分と生徒との距離を縮めるための言葉、生徒同士が関わりをもてるようにする言葉、生徒が練習を意欲的に行うための言葉など、その場に応じた言葉選びの必要性と言葉の選択の難しさを感じた。

今回の経験から学んだことを生かし、より効果的な言葉選びについて考えていきたい。

最後に、インターンシップ実習後も部活動に参加させていただけることになったので、強い熱意をもって学んだことを生かせるように部活動に取り組んでいきたいと思う。また、この先の生徒の成長もしっかりと見ていきたいと思う。

1 部活動の概要

○実習校	岡山市立岡山中央中学校
○部活動	ソフトテニス部（男子）
○部員数	1年生7人 2年生10人 3年生3人
○顧問教師	松末先生
○外部指導者の有無	無し
○活動状況	月一金曜日（朝、放課後）土日は随時
○活動環境	テニスコート二面（運動場 一面、格技場上2F 一面）
○実習日以外の参加活動	なし

2 顧問教師の指導方針、連携、工夫等について

練習を大前提として、基本動作の習得を重視し、個人練習を積極的に取り入れ、試合などでの実践経験を積ませたいと考えている。また、部員一人一人の個性や得意分野を伸ばす指導を心がけ、チーム全体のレベルアップを図りたいと考えている。

3 生徒の活動実態

部員は、練習を大前提として、基本動作の習得を重視し、個人練習を積極的に取り入れ、試合などでの実践経験を積ませたいと考えている。また、部員一人一人の個性や得意分野を伸ばす指導を心がけ、チーム全体のレベルアップを図りたいと考えている。

4 実習で学んだことや成果

実習を通じて、指導者の役割や生徒の成長を支援する方法を学ぶことができた。また、現場での実践経験を通じて、指導者の役割や生徒の成長を支援する方法を学ぶことができた。

1 部活動の概要

○実習校	岡山市立岡山中央中学校
○部活動	野球部
○部員数	24名（1年生…8名 2年生…8名 3年生…8名）
○顧問教師	4名（主顧問：吉田先生）
○外部指導者の有無	有（元PTA会長：御垣さん）
○活動状況	土日の対外試合を中心に毎日
○活動環境	グラウンド
○実習日以外の参加活動	岡山県中学校野球選手権大会 地区予選の試合観戦

2 顧問教師の指導方針、連携、工夫等について

監督をされている主顧問の吉田先生を中心に、顧問の先生方は指導方針を一体化している。方針としては、理論に基づいた練習方法を取り入れており、限られた空間、時間の中でいかに効率的に練習を行えるかということを念頭に置きながら基礎・基本の練習を取り入れられている。他の部活動とグラウンドを分けて使用しているため、フリーバッティングやシートノック等といった広い場所を要する練習方法ができない。そのため、守備面の強化をねらいとして狭い空間でも行うことができる練習方法を取り入れている。具体的には主にバント練習や内野のノックといった細かい練習を行い、基礎基本を定着させ、試合の場面でエラーを少なく、つなぐ野球というものを目指しておられる。

また、生徒が自分で考えて活動することを重要視されている。主将を中心にして練習内容を考えることもあり、それによって生徒が主体的に練習に取り組むことができる。また、考えながらプレーすることで自らのプレーを振り返ることになり、自己改善につながることも考えられる。顧問教師の連携としては、練習時には少なくとも一人の顧問の先生が練習場所につくようにし、練習中の安全の配慮や下校指導をされている。

3 生徒の活動実態

生徒はどの生徒も真面目に練習に取り組んでいる。特に公式戦前後では大きな変化が見られた。公式戦前は試験もあり、集中力に欠けてしまうことがあったが、地区予選が近づくにつれ、練習方法は試合形式の練習に取り組んでいたり、練習の士気も高まっていったりした。私は、7月に行われた地区予選の試合を観戦し、アップから試合の展望まで見守った。一年生が声を出して応援したこと、また試合に出ている生徒が一球一球に集中してプレーしていたことから、真剣に野球に取り組む姿勢や意欲を感じることができた。

公式戦後は、その反省を生かし、野球に取り組む姿勢も変わってきた。特に3年生が下級生に教える場面を多く見られた。下級生の様子を見て注意や指導を行うようになり、具体的にはグループでバント練習を行う際も、全学年の生徒が各グループに入るようにしたり、その中で3年生が下級生に助言したりする等、下級生に対する配慮が見られるようになった。ただ、全体的に時間にルーズな面もある。例えば、部活動の時間になって始める時にまだ道具が用意できていなかったり、最終下校の時刻になってもまだ帰る準備をしていたりすることもある。一日で部活動ができる時間は限られているので、時間を有効に使うという意識をもって練習に取り組んでいくことが生徒に求められると考える。

4 実習で学んだことや成果

- ・ 三間（「空間」「時間」「仲間」）の重要性
- ・ 信頼性を築き、お互いを高めるための「声」
- ・ 「外部指導者」という立場での指導
- ・ 児童生徒と向き合うということ ～生徒のモチベーションを高める指導～

1 部活動の概要

○実習校	岡山市立岡山中央中学校
○部活動	軟式野球部
○部員数	全24人（1年8人、2年8人、3年8人の内3人引退）
○顧問教師	主顧問：吉田先生 副顧問：松田先生、遠藤先生、中吉先生
○外部指導者の有無	1人有り（元PTA会長の御垣さん）
○活動状況	平日朝夕はほぼ毎日、土日は対外試合を中心に活動
○活動環境	運動場（男女テニス部、陸上部と共用）
○実習日以外の参加活動	・課題発見実習（水曜日）の放課後

2 顧問教師の指導方針、連携、工夫等について

《指導方針について》

①基礎基本の定着

②声出しと挨拶

「卒業するまでに形となる成果を」ということで、理論に基づく型の定着を目指している。守備の構えやスローイング、打撃のスイングなどの基本的な動きを身につけさせた上で、パフォーマンスを向上させるという方針である。具体的には、足の向きやステップの仕方、ひじの使い方やスイングの軌道を重点的に指導している。また、試合中の指示の声が出ないという現状から、普段の練習から指示や励ましの声を出せるように練習中、練習後に何度も指導をしている。練習スペースが限られているため、平日に外野の守備や打撃の練習ができない。それを補うために土日、市外の学校を中心に対外試合を多く計画し、試合の中で指導するよう工夫している。

《連携について》

主顧問の吉田先生は、学年主任を兼任されているため忙しく、平日あまり練習に参加できないため、土日の試合を中心に指導している。平日は、吉田先生が計画した練習内容に沿って副顧問の先生や外部指導者が指導するという形をとっている。また、練習内容を主将や副顧問、外部指導者が計画することもあり、バスケットボール部のトレーニングやスポーツ少年団での練習法を取り入れている。

3 生徒の活動実態

顧問の先生の中に野球経験者がいないということもあり、技術指導を非常に熱望している。そのため、練習中の何気ないアドバイスも積極的に実践しようとする姿が見られた。また、練習スペースが限られているため、平日の午後は守備中心の練習が計画されるので、生徒は自主的に早朝、打撃練習を取り入れている。

実習当初は、あまり積極性がないように感じられたが、県大会に続く公式戦を終えたあたりから、練習への積極性がみられるようになった。だんだんと慣れてきたということもあるが、「ここはどうしたらいいんですか？」「〇〇について教えてください」など自分たちからアドバイスを求めることも増えてきた。

また、チームメイトがミスをした時には、相手を非難する声が多く、チーム全体の雰囲気も良くなかったが、「全員を褒めてあげよう」「ミスをしたらどうすればよかったか教えてやろう」という声かけを続けることで、上級生が下級生に指導する場面が増え、「ナイスプレー」という声が多くなってきた。

技術的にも未熟な部分が多く、環境も決して恵まれていないが、野球の楽しさやチームメイトの大切さを感じ始めている。この夏を越え、一回りも二回りも大きくなって市総体で活躍することを期待している。解決実習の実習校でもあるので、このチームで良かったと心から思える支援を続けたいと思う。

4 実習で学んだことや成果

公立学校が抱える問題を触れることができたというのが一番の成果である。

多忙さからくる人員不足、グラウンド等の練習環境の限界、顧問の専門性、練習時間の確保、指導方針の違い、用具等の整備など解決が難しい問題が数多くある。その中で、生徒のために日々努めて指導されている顧問の先生方の姿には学ぶものがあった。

部活動は生徒を、ひいては学校を支えているという思いをこの実習を通してまた強く感じる事ができた。課題発見実習で生徒と関わる中で、部活動に所属している生徒にとって、それが持つ影響は非常に大きいものであることを改めて知った。

また、一人の顧問だけでは支えきれない部活動の大変さと、教員同士の連携や協力の重要性を改めて感じるいい機会となった。

これ以降も野球部に関わる事となるので、今回の実習で発見できた課題を少しでも解決の道へ導けるように自分のできる支援を続けていきたいと思う。

【指導・助言 : 山本健五岡山市立岡山中央中学校教頭】

お疲れ様でした。最初に、インターンシップ実習をやっていただいて、岡山市立岡山中央小学校及び中学校がとても助かったということで、お礼を申し上げたいと思います。

それでは、まず特別支援教育についてですが、21世紀の特別支援教育のあり方として、もう学校教育の中ではどこでも、特別支援教育を取り入れながら対応していくのがそのあり方だと思います。特別支援学級へ入って行ってやっていただくわけですが、その中で意識してほしいのは、普通学級にもたくさんの特別支援が必要な子ども達がおりますから、その人達への対応をどう広げていったらいいか。それから、特別支援教育のかかわり方について、健常の生徒達にどのようにかかわることで、そういった人に支援ができるか。それらをぜひ広げて行ってほしいということが学校としての思いです。まだまだそういった面では、難しい場面が非常に多いと思います。生徒の人権意識や人と人のかかわり方については、中学校の時期はできる・できないで判断してしまうことが非常に多いです。そういった面で、その子の持っているパフォーマンスの少し上辺りを教員がやりながら、その子の力を伸ばしていこうとしてかかわりをしていると思います。それを生徒に分かってもらいながら、やっていくということ。非常に難しいとは思いますが、それをいかに分かっていくか、知ってもらうか、その場面をどうつくっていくかということが、一番大事な部分ではないかと思っています。彼らをとりにまく社会、その多くが成長して行って一般社会の一員として関わっていくのですが、そういった面での旗揚げを、ぜひもっていかせたいなということを岡山中央中学校では思っている状況です。まだまだそれができているわけではありません。いじめもありますし、指導しないといけないこともたくさんあります。でもそれを繰り返すことで、そういうことが少しでも緩和できて、サポーターとしてやっていけるようになってほしいと思います。

皆さんがインターンシップ実習の中で触れることについて、まず学校としてどういった体制をとっているかについてお話しします。学校の教員として特別支援教育に関わっていくために必要なレクチャーを実施しています。4月当初に2,3年生の状況をレクチャーする研修会、それから家庭訪問が済んで、1年生を中心とした、新しく入ってきた子について気をつけなければいけないことの研修会、それから夏期休業中に、1学期やってみて新たに分かったこと、その上での特別支援に関わるときの注意点の研修会、このような形でレクチャーを行っています。それを通して、一般の教員も、特別支援の生徒が日常的に学活に入ってきたり、それから総合的な学習等の場面で一緒に生活したりしていきますから、その中で気をつけてほしいことを知ってもらうということをやっています。あとは皆さんの発表の中にもあったように、個々の対応の状況、家庭での状況、一日の状況を見て、いろいろと子ども達の行動は変わってきますから、その都度、朝の朝礼のときに連絡をし合ったりしながら、対応をしていっているところです。それから、特別支援学級に関わることであれば、その後に特別支援学級の職員で今日の状況だとか、今目指している目標についての打ち合わせ会をしています。どこの学校でもそういったことを通して、その子の今日の状況等を把握しながら、教員自身もその子の実態を汲み取りながらかかわっていくことが当然必要になってきます。そういうことをしてもらえたらと思います。

それから、これは9月からの特別支援に関わっていかれる方について。多分もう特別支援教

育のレクチャーは色々聞いているとは思いますが、特に今言われているのは視覚支援の方、今日もいくつか毎日の時間の機能の理解、それから一日の流れの理解等が出ていたと思うのですが、それらの支援のあり方についてもいろいろな本が出ていますので、情報を得た上でかかわってほしいと思います。特に小学校の場合は、それがとても大きな意味を持っていると思います。私も養護学校に行っていて、小学校低学年の子ども達へそういった対応をすることで格段に違いが出ました。本人の一日の流れや今日何をするかという見通しが分かるということが確保できると、行動の仕方が変わってきます。我々自身も「今日、行ったら何をするのかな」という不安感をもったらやりにくいと同じ、子ども達の方はもっとそれが大きい意味をもつということで、「今日はそこへ行けば何がある」「こういうふうにやればこれが分かる」ということを用意していくということが大事だと思います。その辺りは若い方に求めたいと思います。

また、ぜひパニックを起こしたり混乱したりした時の落ち着かせ方についてのノウハウを聞いてからかかわってほしいと思います。そうしないと、本人が興奮した状態では何も入りません。それをまず落ち着かせて、言っていることを聞ける状態にしてあげることがとても大事だと思います。そういった面での、学校の課題や保護者の課題等がとても重要な形になってきますから、それらを皆さんも聞いて、質問して、そういった子との接し方を知ってほしいと思います。

それから、実際にインターンシップ実習に行く際、学校も大学も負担をかけなくていいのではないかと、メモや感想等は出さなくていいと配慮してくださっているのですが、やはり当の担当は、それぞれ来てくださる皆さんと、「どんなふうに思っているのか」ということでのやり取りをしたいとのことでした。ですので、メモや感想のようなものを少しでよいので、渡して帰ってもらえるようにしたらありがたいと言っておりました。そういうことを、次に来ていただける時にはやっていただけたらと思います。

岡山中央中学校はかなり重度の子もいるので、そういった面でのやり取りでは教員も悪戦苦闘している状況です。それからここに来ることが逆に本人の精神的な状況を追い込んでしまうことがあって、それも避けながら、ということもあります。急に予定していたものが変わることによってパニックになるという話はよく聞くと思うのですが、それがかなり厳しい状況にあるので、今いろいろ試行錯誤している状況です。ただ、子ども達の様子、受け入れられる状況になったかなという判断があった時に、いかにこちらの意図していることが本人達に伝えられるか。これは積み重ねだと思うので、そういった辺りのところを、手を替え品を替え、かかわっていただけたらと思います。

それから、パニックを起こした時の本人達の受け取り方なのですが、マイナス思考で受け取ってしまって、自尊感情を非常に低くしてしまうことが多いです。ですから、それをどうやってプラス思考にしていけばいいのかということで、できるだけ課題がクリアできそうなものを尽力するという。難しいのですけれども、それが原因で二次障害となって精神的な傾向になっていったりするということもあるので、その辺りを一番大事にしないといけないと思います。

本当に我々の時代から皆さんの時代は随分変わっています。特別支援教育をどのように浸透させていくか、それを一般の人達にいかにしてもらうか、ぜひそういったノウハウを勉強していただきながら、やっていただけたらと思います。よろしく願いいたします。

次に、部活動について。学校の現状として、岡山中央中学校では各部活動複数顧問という形で対応していますが、先程の話にもあったように、専属的にやっていた先生がいません。中学生の運動部活動については技術的なものが求められているのが現状ですから、やはりある程度吸収をしながら、教員の方も勉強しないといけない状況があると思います。ただそれを全部学校でやっていくのかについては少し考えないと、学校が疲弊してしまうところもあります。外部講師の話も出ていましたが、それらをいかに取り入れるか、学校運営がうまくいくかという面も見ていく必要があると思います。

ただ、我々の学校で皆さんにとっても迷惑をかけてしまったのが、顧問の教員との話がなかなかできていなかったのではないかとということです。日頃の活動について最初に話をして、ご意見等については取り入れながら、かかわり方の方向性について話したり、何かトラブル等が気になった時にどうすべきかについては連絡を入れたりといった形でやりたいと思っています。野球部では、運動場の処理の仕方とか、非常によいアイデアをいただいたりしました。そういった面では学校も遅れている部分があるのですが、それを指摘してもらうことで、よい情報を得られたと思います。それから、生徒同士がどうしても技術志向になっていったら、けなし合いとかになってしまうので、プラス思考での励まし合いとか、声を出していただいたおかげで進歩していくこともありますので、そういうところを大事にしていきたいと思っています。それから安全面の配慮については、これも申し訳ない状況があったと思います。やはり安全面はとても大事なことです。気になったところは話をしながら改善していきたいと思っています。

文化部については、本人達のいろいろな先のことですか、少し先のことを子ども達に見せながら、その中で何をチョイスするか、選ばせられるような成長を我々教員が促していくことで、彼らの生き甲斐のようなものを見つけ出すことにつながればと思っています。私達もそういうものを目指しながらやっていく必要があると思います。

いずれにしても、インターンシップ実習をやっていただくことで、学校の方はとてもありがたい状況があるのですが、それについてお返しできることがあまりなかったかと思っています。ただ、同僚ではないのだけれども、それに近いような状況でかかわっているということで、正しい指摘をすることができる存在であると思いますので、積極的に思うところを出していただければと思います。これからもぜひよろしくお願いします。それから部活動については、それが負担にならないように、無理をして学校に来るということがないようにしてほしいと思います。皆さんの大学の生活もありますので、無理なく来ていただけたらと思います。

【指導・助言 : 長瀬尚樹岡山市教育委員会指導課課長補佐】

思いもかけず、9年ぶりに教壇の前に立ち、子ども達の目が近寄ってくるという緊張感を徐々に感じて、とても嬉しく思います。岡山市教育委員会の長瀬と申します。よろしく申し上げます。今日、10件の発表を聞かせていただいて、座学では得られない貴重な体験を皆さんがされて、この報告会を迎えたのだなど。そして、また教職への思いを高められてこの場を今日迎えられているのだなど、今寄せてくるものを感じ、輝く目に圧倒されています。とてもいい体験

をされたのだなと嬉しく思っています。

私は、皆さんが実践されたことを類型化して、日々の、まさに座学で学ばれた理論と照らし返り振り返ったり検証したりということ、これからの活動の中でやっていていただきたいと思えます。キーワードとしては、どの発表からも個に応じた指導と手だてというお話が聞かれました。あわせて、皆さんがそういう個への支援の必要性を非常に強く実感されたのだなということも思い至りました。ただ大事なのは、やはりその中には、学級としての願い、担任としての思いがあるわけですし、同時に教科としての願いが存在しているはず。個への支援はあくまで、そうした教師の思い・願い、学級づくりの思いや教科としての願いを達成するための個への支援であるということをお忘れなほしいと思えます。

何が言いたいかというと、例えば特別支援学級に入った時に、岡山市立岡山中央中学校や岡山市立岡山中央小学校がそうしているかは分かりませんが、教室に「おはようございます」と書かれた紙が貼られていませんか。あるいは、片付けをするところにテープを貼って、かごを置く位置なども全て決めてあったりしませんでしたか。または、紙の時計を貼って、「この時間からこの時間まではこの活動をします」ということを明確にする指示が、授業の中で出されていなかったでしょうか。どうでしょう。振り返ってみてください。こういった一つ一つの個への支援は、実は教科の願いや教室の中での人間関係づくり、それから個を成長させるためにある理論に基づいて作られているものと私は考えます。これは何かというと、指示の精選と端的な指導、つまり教室の扉を開けるたびに「今日、挨拶は？」と言わなくても、戸口に貼ってある「おはよう」という言葉を見ると、子どもは自然に入ってくる時に「おはようございます」と言います。これはいらぬ指示を削ります。「きれいに片付けようね」と言われても、課題のある子ども達は、きれいに片付けるそのすべを知りません。ところが枠があって、この枠の中に入れればいいのかということが分かれば、子ども達は、よく分からない無理な指示を受けるよりも、枠の中に片付けるのだという具体的な見通しをもつことができるわけです。きっと、特別支援の学級の中にはそうした宝物がいっぱい隠されています。これも、先程も出ていましたけれども、視覚的な部分ということと、特に情緒障害の課題をもっている子ども達は、聴覚に対して非常に敏感なので、しつこく言われるような指示をできるだけ減らしてやっていくということが大事だと思えます。そういう理論に基づいた実践といったものが、教室にはなかったでしょうか。確かに情報トレーニングで、トレーニングをしながら学んでいくことも大事なのですが、皆さんがこうやって学びの場で得た理論が、実践の場でどのように活かされているのかという視点で、今のように、例えば学級を見つめ直すということは、まさに皆さんが今やっている教職実践専攻の課題に合った対応なのではないかと思えます。これからそうしたところも考えていただきながらやっていただき、ぜひ岡山市の方へこの熱意を持った皆さんがたくさん集まってくださることを期待しておりますし、そういう本当に実践につながるような、実践が理論と結びついて、先生方のものがより実行あるものになってくるようにということ、これからの学びの中でやっていただけたらいいなと思えます。

最後に一点。こういう場では、皆さんの喋り言葉は、普段の学生言葉とは異なりますね。私、実は国語の教師をしておりました。「おっしゃられる」という言葉を、何名かの方が使われていました。これ、二重敬語と言いまして、通常は使いません。私も今、話の中で敬語の間違いをたくさんしていると思うのですが、このような場で話す時には、やはり鍛えておかないとそう

という言葉が突然出てくることがあります。教員はいろいろなところで求められますし、いろいろなところで評価が決まります。「おっしゃる」と言うか「おっしゃられる」と言うかで決まるということもあります。このような発表会をされるということは、またそういった別の意味ももっているわけです。といったことも含め、こういう実践的な発表会等を繰り返していただきながら、現場へ出る力をしっかり蓄えていただけたら、そしてぜひ岡山市へ希望していただけたらありがたいということを最後に申し上げまして、私からの話を終わらせていただきたいと思います。ともに手を携えていい子ども達の輝く笑顔を育てていけたらいいなと思います。これからもどうぞよろしくお願いいたします。今日は本当にありがとうございました。

1 実習概要

(1)実習校 岡山市立岡山中央中学校

(2)配当学級等 F組 第1学年 12名(男8 女4)

(3)実習内容

○朝の会：主に観察者として参加 ○学活：主に観察者、時に個別対応として参加

○技術：主に個別対応として参加 ○国語：主に観察者、個別対応として参加

2 児童生徒の実態と指導目標（方針）について

生徒の実態としては、情緒障害や身体障害などさまざまな障害のある生徒が在籍している。また、作業などに時間のかかる同級生を「待つ」ことが難しい生徒もいる。そのような中でも先生方は、生徒同士の協調性を高めようとされているように見えた。

指導の方針としては、校外学習などで耳にした「みんな仲良く」と「ルールとマナーを守る」ということが重視されている。教室の前方の壁には授業を受けるときのルールなどが掲示され、朝の会や帰りの会などの話でも、授業中や休み時間の態度などがよく取り上げられていた。自分が生徒たちの中に入って遊びに参加するときも、「ルールとマナーを守る」ことに注意するよう心がけた。

3 学習や学級経営を行う際の指導法（留意点等）について

指導法については、障害の状態にあわせて多様である。

障害の重いクラスの技術の授業では、授業の開始時に本時の内容だけでなく授業のパートナーとなる支援員を生徒にも伝えていた。このことは、生徒のみならず支援する人間にとっても安心感を与えられていると感じた。

国語の授業については、特に読むこと、書くことの学習を重視されているようで、毎回漢字の学習を行っている。また、受験も意識されているようで、作文などを通じた原稿用紙の使い方の指導も行われ、中央中学校の先生方の名前を漢字で書く学習も取り入れられていた。

4 実習を通して得た成果(自己課題との関連から)

前期の授業や実習での生徒との関わりの中で、授業中だけでなく授業外での生徒との関わり的重要性を再確認し、今回の実習でも心がけていた。特に称揚の仕方については、生徒の行動を誉めることを重視し、生徒が何を褒められたのかが分かるように心がけた。また、褒めるだけではなく注意することも前期と比べて増えたように思う。今回の実習では主指導者として生徒の前に立つことは少なかったが、個別支援や休憩時間などでの関わりを通じて、生徒に教師の一人として受け入れられることができたのではないかと感じた。

1 実習概要

(1)実習校 岡山市立岡山中央中学校

(2)配当学級等 3年生

(3)実習内容

- 職員朝礼への参加 ○学活：生徒の観察分析 ○国語科：授業への参観と支援
- 技術科：個別支援 ○音楽科：活動への参加と観察分析 ○体育科：活動への参加
- 自立活動：授業観察と支援 ○給食：生徒理解と談話 ○朝、帰りの会への参加

2 児童生徒の実態と指導目標（方針）について

特別支援学級の生徒は体調や気分によって活動への取り組み方が大きく左右される生徒が多く、生徒同士のトラブル、家庭での関わりによって精神状態が不安定になることもしばしばあるようである。また、個々によって発達のレベルや障害の状態が様々であるため、生徒の実態に添った形でのカリキュラム作成、指導や対応についての共通認識がはかれられており、全員が平穏な集団生活を送れるような支援がとられていた。

「服装をきちんとする。挨拶をきちんとする。時間を守る。」をF組の目標として掲げ、上級生は下級生の手本となれるように、下級生は上級生を見本として望ましい態度がとれるようにとの指導がなされていた。また、その中でも教師間での情報交換が頻繁に行われ、担当学年に関わらず全員で生徒を支援する体制が確立されていた。

3 学習や学級経営を行う際の指導法（留意点等）について

こだわりのある生徒が多く、1つのトラブルが学校生活に大きく影響するため、生徒同士で注意したり、批判したりしないこと。人のものに勝手にさわらないこと。休憩場所に勝手に入らないことなどの学級内でのルールが決められおり、常に教員を仲介しての指導がとられていた。また、全ての活動の始めに活動順序とその内容を明示することで、生徒が取り組みの見通しを持てるような配慮がとられており、切り替えが苦手な生徒にとって、無駄な混乱を避け、円滑な学校生活を送ることに大きな役割を果たしていた。

それぞれの抱える課題をクラスで全体化している点が非常に大切であると感じた。特に特別支援学級では、一人一人の課題が他の生徒の生活に及ぼす影響が大きいので、クラスで課題の共有をはかっているようである。

4 実習を通して得た成果(自己課題との関連から)

生徒自身が抱える課題をクラス全員が共有することの大切さを痛感した。何か問題が起きたときでも当事者と教員だけでなく、クラスで考える時間を確保することで教室に居場所ができ、つながりができる。私の研究テーマである「個が活かされる学級づくり」を考える上で、個人の課題の全体化は大きな鍵となるに違いない。

1日の生活の見通しを持つことは、普通学級でも大切な要素である。その場や周りに流されることなく、自身で生活を形づくっていくという意識が日々の充実や生きがいの発見に役立つことだろう。また、目標を持って過ごすことは学校生活の質の向上にもつながる。集団がひとつの目標を共有することは、協同を促し、お互いがお互いを高め合う意識を生むことにつながるだろう。実践で活かしたい。

1 実習概要

(1)実習校 岡山市立岡山中央小学校

(2)配当学級等 ひまわり学級1組

(3)実習内容

- | | |
|---------------------------------|------------------------|
| ○朝の会：主に副指導者として参加 | ○体育：主に副指導者として参加 |
| ○国語：個別の課題対応 | ○音楽：交流学級へ付き添い、授業中は個別対応 |
| ○算数：個別の課題対応 | ○生活：課外活動の引率、副指導者として参加 |
| ○図工：交流学級へ付き添い、授業中は個別対応。学級での授業実践 | |

2 児童生徒の実態と指導目標（方針）について

1～3年生までの児童8名（男子4名、女子4名）が在籍している。国語や算数の授業では児童は個々によって学習形態が異なり、例えば国語では文章の読解を学習する児童もいれば、カタカナの学習をしている児童もいる。ひまわり学級の授業では個別に課題をこなすことが多いが、与えられた課題に意欲的に取り組もうとする姿が見られる。しかし、問題につまずいたり問題の意味がよくわからなかったりした場合に極端に意欲が低下する児童もいる。学級内での人間関係に関しては、一人一人が友達を仲間として認めている。時々、言い合いになる場面もあるが、休憩時間に一緒にボール遊びをしたり、友達の話すことをきちんと聞こうとしたりする態度も見られる。

先生方は、児童一人一人の自立や社会参加へ向けた指導をされている。児童が発表する際の言葉遣いの指導や、生活指導、自分に与えられた役割（朝の会の司会、カレンダー係など）をこなす機会を作るなどの工夫をされている。

3 学習や学級経営を行う際の指導法（留意点等）について

- ・児童が頑張ったときにはそれを認め、評価したり、ほめたりすること
- ・児童のできることでできないことを教師自身がきちんと把握しておくこと
- ・一年間の中で児童一人一人をどのように育て、どのような力をつけさせたいのかを明確にしておく
- ・子どもが感じるわかりにくさを教師が知ろうとすること

4 実習を通して得た成果(自己課題との関連から)

ー授業中に意欲が低下した児童への対応からー

児童が何らかの困難に直面したとき、一度の挑戦でその困難を解決しなければならない場合がある。その時、教師として自分が出来ることは児童に寄り添い、共に困難を解決していくことが大切だと思っていた。しかし、特別支援教育実習を通して、一度の挑戦で解決しない場合のことにについて、より深く考えるようになった。目の前の困難を一度で乗り越えられない場合には、困難を乗り越えるために違う機会を設け、再度チャレンジすれば良いのである。困難に直面したときにいつもすぐに乗り越えるのは難しく、大きなエネルギーを必要とする。そこで、しばらく時間を置き、力を蓄えてもう一度挑戦してみようと思ったときにこそ困難と向き合えば良いのではないだろうか。困難を感じているということは、少なからず困難に対する解決策を子どもなりに考えているはずである。困難を解決するための考える時間があっても良いのではないか。そこに成長がある。今回の場合においては、もう一度挑戦する時までには子どもの心を応援し、力を蓄える支援を行っていききたい。

1 実習概要

(1)実習校 岡山市立岡山中央小学校

(2)配当学級等 ひまわり学級2組

(3)実習内容

○国語・算数：ひまわり学級での学習支援 ○音楽：交流学級の授業に入り，参加

○図画工作：交流学級に入り，支援 ○体育：ひまわり学級で活動に参加

○総合的な学習の時間：地域の古民家での町見学の引率補助

2 児童生徒の実態と指導目標（方針）について

本学級には第3学年から第5学年まで，男子4名，女子2名，計6名の児童が在籍している。学級内での児童は明るく，児童同士で遊んだり，教え合ったりするなど，学年を越えて仲がよいことが分かる。特に高学年の児童は，下学年の児童の面倒をよく見ている。学級では，児童が一人でできることは児童自身が自主的に行うことができるように，児童が自分自身で意思決定して実行できることを目標に指導をされていた。学習では個人差があるため，一人一人の実態に応じた学習指導が行われている。指導は2名の教諭で分担して行い，TTで児童にかかわっている。

3 学習や学級経営を行う際の指導法（留意点等）について

児童は，登校してから下校まで，連絡帳や宿題の提出，着替え等，生活に関する様々な取り組みを行っている。教師は，児童が活動する前に活動の留意点を喚起したり，活動中には児童に次に何をするかを尋ねたりすることで，児童自身が次に行うことを考えさせながら指導している。

また，児童は実態に応じて交流学級で行われる学習に参加している。例えば，算数や国語等はひまわり学級で行い，実際の活動を伴う学習が多い教科に参加を設定しており，その日に児童に状態を尋ね，学習状況から参加の仕方を児童とともに考え，判断している。児童が支援を必要としない場面では声をかけたり手助けしたりするのではなく，交流学級に在籍している児童との活動やかかわりを大事にしている。交流学級での担任教諭と連携をとり，時間割の設定，児童の実態に関する意見交換等，児童が交流学級においても力が発揮できるように様々な指導の工夫が行われている。音楽では歌いやすい場所に誘導したり，リコーダーの練習をする際，音符に印をつけて練習をさせたりしていた。また特別支援学級でも異学級の児童との授業も行われている。体育では，個々の能力に応じて活動の内容を設定して指導されていた。

4 実習を通して得た成果(自己課題との関連から)

実習以前，「支援」について，児童の学習活動を「手伝う」というイメージを持っていた。しかし，実習を積むにつれ，児童にとって必要なことは何か，と考えるようになり，「支援」には「見守る」という面も含まれていることに気づいた。児童の学習活動を「見守り」，必要な場面で最適な支援を行うことが，児童の意欲を大切にしながら「育てる」ことが大切だと考えた。

1 実習概要

(1)実習校 岡山市立岡山中央小学校

(2)配当学級等 ひまわり学級3組

(3)実習内容

- 朝の会：主に観察し、時々副指導者として参加
- 図工：交流学級に児童を引率し、授業中は個別対応
- 理科：交流学級に児童を引率し、授業中は個別対応
- 音楽：副指導者として参加
- 体育：副指導者として参加

2 児童生徒の実態と指導目標（方針）について

男子3人、女子2人、計5人の情緒障害児学級である。全員元気で、明るい雰囲気
の学級であった。交流学級でうまく他の児童と関わることができずにイライラとする場面
も見られたが、ひまわり学級で過ごすときは落ち着いているときが多い。自分でできる
ことは自分ですること、友達と仲良くすることなどを目標として取り組んでいた。

3 学習や学級経営を行う際の指導法（留意点等）について

- ・学習や学級経営を行う際には、流れをあらかじめ掲示しておき見通しを持たせていた。
- ・個人のスペースを板で仕切っており、そこで時間を過ごすことが多く、各個人でそれぞ
れの目標に向かって学習している。

4 実習を通して得た成果(自己課題との関連から)

自分の児童に対する関わり方を見直す機会を得た。特に、児童にはその児童なりの頑張
りがあり、それにあった関わりをしていかなければならないと思った。もし先生が指示し
た通りのことができていなかったとしても、その児童なりに理解した目標に到達していれ
ば、それを認めるような指導をされていた。このように各個人の実態に応じた対応をして
いく必要があると思った。その際、他の児童が不平等だと感じないような配慮をしながら
学級経営をしていくことが重要であると感じた。

また児童の支援をし過ぎてもいけないと思った。例えば着替えのときに、親切のつもり
で手伝いをしたが、児童が何もしない状況を作ってしまった。着替えをすることがその児
童にとって大切な学習であるということを理解していなかったために、その機会を奪って
しまう結果となった。児童の力を引き上げるという点で、個々の活動にしっかり取り組ま
せることが必要であり、時には、何も支援をしないで見守ることも大切な関わり方だとい
うことを感じた。これからは、どうかかわることがその児童のためになるのかを考えて接
することを心がけたい。

今回、特別支援教育に携わり、自分の児童との関わり方について考えてみた。このこと
は通常学級でも大切なことであると考え。これからはこの実習で学んだことを生かして、
児童が成長していくための接し方について考え、取り組んでいきたい。

1 部活動の概要

○実習校	岡山市立岡山中央中学校
○部活動	バスケットボール部（女子）
○部員数	10人（2年生…10人）
○顧問教師	主顧問：大島先生 副顧問：松本先生（2人）
○活動状況	月～金（朝、放課後）、土曜日
○活動環境	体育館（男子バスケットボール部と共用）

2 顧問教師の指導方針、連携、工夫等について

公式戦などがなく、練習も30分から1時間程度しかできないという実情のため、体力作りや基礎・基本の練習メニューが中心であった。顧問の先生は多忙ながらも必ず部活動に顔を出し、生徒たちに一声かけていた。「顧問自身が部活動に対して手を抜かずやる気を見せることが、生徒のやる気にもつながると思うから、少しの時間でも顔を出すようにしている」と話をされていた。顧問の先生は中学高校とバスケットボールをされていたため、専門的なアドバイスも十分にできるので、練習の中で積極的に声を出してアドバイスをを行い、また、生徒たちにはその指導を熱心に聞こうとしている場面が多く見られた。また、試合形式の練習では、特にチームごとの試合前後の話し合いを重要視されていた。「教師が話したことをただやるだけでなく、生徒が自発的に考え行動する」ということをうかがったが、練習の中には生徒自身が自分で考え、解決していく機会が積極的に取り入れられていた。

3 生徒の活動実態

2年生のみで構成されており、縦のつながりががないものの部員間の仲は非常によく、キャプテンを中心に声を掛け合いながら練習を進めている。ただ、仲がよい分、馴れ合いが生じ、レギュラー争いをするといった競争意識が感じられないという側面がある。そのためか、顧問の先生がおられない時は緊張感がない、だらだらした練習に陥ることが多々あった。体育館に来る時間も生徒によって差があり、帰りの会終了後すぐに体育館に来て着替えを済ませ自主練習に取り組んでいる生徒がいる半面、体育館にやって来るのも遅く、部室でだらだら友達と話をするなどして、練習を始めるのが遅い生徒もいる。しかし、そういった雰囲気を買払しようとして、キャプテンや部員の誰かが積極的に声をかける場面も、時間を追うことに見られるようになった。

また、休日練習試合で、フリースローの決定力が低かったことから、チーム全体でフリースローの決定力をあげるということを部員間で課題とし、顧問の先生に部活動終了後5分間を使ってフリースローの練習をしたいと申し出る場面があった。試合の結果から部員間で話し合いを行い、課題を見つけ、課題を解決するために積極的に練習メニューを提案するということが部員だけで行うことができる側面も垣間見ることができた。

4 実習で学んだことや成果

練習に積極的に参加し、コミュニケーションを取っていく中で、部員の部活動に対する思いや意識を聞くことができた。中央中学校は部活動に所属することを強制していない。したがって、バスケットボールが純粋に好きな生徒が集まっているようで、部員の口からも「バスケットボールが好きだ」・「楽しい」という声を聞くことができた。さらに、部員同士の仲も大変良く、部活動外での学校生活でも一緒に行動していると話をしていた。そういった気の合う仲間とバスケットボールができることも、部活動の楽しさの一つにつながっているようだった。部活はただ技術向上の場だけではなく、生徒の学校内の居場所であり、楽しみの一つとなっているのだからと感じた。生徒にとっての居場所、楽しみの場となるような部活動作りの大切さを知ることができた。

また、実習後半に顧問の先生から新しい練習メニューを考え、部員に指導するという機会を与えてもらった。自分なりに今の部員たちに必要な身につけさせたい技術を考え説明したのだが、うまく伝えることができなかった。体育館という広い場で説明することの難しさを感じた。体で体感させた方がわかりやすいと思い、実際に何人かの生徒に動いてもらいながら説明したのだが、どうしても私自身も一緒に動くことになり、ここにいる生徒には聞こえるがここにいる生徒には聞き取りづらいという場面ができてしまったということが原因の一つだと思う。まずはホワイトボードなどを使い私の説明が部員全体に伝わるような配慮をした後、実際に動かすといった指導をすべきだったと思った。また生徒自身、この練習メニューが試合のどの場面で生きてくるのかということが理解しづらかったことも原因の一つといえると思う。生徒が知りたい、必要だと考える練習メニューは、やはり試合に活かすことができる練習メニューだと思う。そのため、私が教えたような試合の中の一部を切り取ったような練習メニューは、「とりあえずこなす」という練習になりがちなものといえる。したがってこの練習が試合のどの部分で活かされるのか、ということをも自分なりに説明したものの、言葉が整理されておらず、伝わりにくかったように思う。一つの練習メニューにおいても生徒にとって初めてのことを「教える」とは、不断の研究と準備が必要なのだと強く感じた。

1 部活動の概要

○実習校	岡山市立岡山中央中学校
○部活動	吹奏楽部
○部員数	24人（2年生…14人 1年生…10人）
○顧問教師	矢吹先生 寺尾先生
○活動状況	午後練習（毎日），不定期に休み有り，演奏会有り
○活動環境	音楽室

2 顧問教師の指導方針、連携、工夫等について

顧問教師は二人とも吹奏楽未経験者であるため、技術面についての研究をされながら他の練習方法や生徒の人間関係の指導について力を入れて取り組まれていた。顧問教師が3年生を担当しているため、放課後に毎日、部活動を指導することが難しい。そこで、練習の予定表を渡しておいたり、練習内容を音楽室に板書したりするなどして、部員が自ら自分たちで練習できるように工夫されていた。また、生徒が部活動中に顧問教師に質問に行ったり、部活動後にその日の活動の様子や出来事等を報告したりするよう指導することにより、できるだけ部活動の状況が把握できるような取り組みがなされていた。

顧問教師との話し合いは実習初日だけだったので、指導方針や指導の仕方について等、もう少しお話をうかがう機会を自主的につくることができればよかったと考えている。

3 生徒の活動実態

2年生と1年生は、全体的に仲は良いようである。縦の関係が厳しくなく、それをお互いに好意的に受け止めている。人間関係は、よく見ると2年生と1年生それぞれにグループがある。同学年グループに対して直してほしいところを見つけた時、お互い向上しようと注意し合いたいようだが、同年代を注意することに難しさを感じている面がある。

練習はまず基礎練習、そしてパート練習と進むはずであるが、仲の良いもの同士で練習したり、雑談、または個人で練習をしたりするなどばらばらである。意欲はみんなにあるはずだが、なかなか練習にとりかからない生徒もいる。このことについて、それぞれの生徒が疑問を感じているが、流されていたようだった。

しかし、自分たちの問題は自分たちで解決しようとする事ができる。部活動内の人間関係や練習の進め方について自分たちが疑問を感じれば、全員で話し合う時間をつくり解決に努めていた。

4 実習で学んだことや成果

この実習で特に学んだことを、三点挙げる。

一点目は、経験のないことでも、児童生徒と一緒にやってみるということである。私は吹奏楽未経験であり、指導について多少不安があった。しかし、生徒と一緒にやっているうちに、自分の技量も少しずつ高まっていく。その中で自分がぶつかる壁や課題は、生徒も感じていることであり、個々の課題に気づきやすくなる。また、一緒に練習していて教師に技術的向上がみられると、生徒もそれを感じ、自分もがんばったら上手になるだろうといった励みにもつながり得ると考えた。

二点目は、児童生徒に真剣さややる気を出させるための方法についてである。生徒の技術面で伸びたいという気持ちに教師がしっかり答えられるように、部活動研修で指導法や部活動の在り方について学ぶことや、教師が部活動に頻繁に顔を出すようにして信頼関係を深めること、また個々の生徒の課題に気づく指導の目を持ち、課題に即した指導を盛り込むことによって、本人のやる気を向上させることができる。

三点目は、自分が感じている部の課題や問題は、実は生徒も同じように感じている場合が多いということである。そしてその問題を、生徒も解決したいと切に思っていることである。練習中、部員は1年生も2年生も私語や自由なことをしている生徒が多く、練習に精を出している生徒が少なかった。部員の一人に尋ねると「いつもこういう感じなので」と答えたので、そうなのかなと思いあまり口出しをしなかった。しかし毎回同じような練習の様子なので、練習の仕方に疑問を感じるようになった。私はこの疑問を生徒に伝えたかったが、それまでに生徒に助言をしたり話をしたりすることが十分でなく、そのようなことが言えるような関係ではないように感じたので、つい遠慮をして声をかけることができなかつた。ある日、音楽室に行ってみると、生徒が全員前を向いて席に座っていた。見ると、部員全員で話し合いをしていた。内容は、1年生、2年生のお互いのいいところや直して欲しいところ、今後どうしたらよいか、また基礎練習のメニューはどうするかなどについてであった。「もっとちゃんと練習したい」、「1年生と2年生で協力したい」、「練習の内容をきちんと決めたい」。生徒が思っていることは、私がいつも感じていたことと全く同じであった。今後どうしたらよいかについては、直して欲しいところの問題をうまくまとめ、解決策を出していた。私はこの話し合いを聞いていて、生徒たちがこんなに痛切に部活のことを考えていたのに、私はそのことについて何も助言や指導ができなかつたことを後悔した。指導者として生徒がよりよく活動できるように導く存在でなければならなかつた。

これらのことから、部活動とは技術的な指導だけでなく、生徒の成長を願い、臆せず生徒とぶつかり合っていくことが大切であるのではないかと考えるようになった。教師と生徒が相互に思っていることや考えをぶつけ合うことで、理解し合い、高まり合い、よりよい部活動集団が形成されていく。

1 部活動の概要

○実習校	岡山市立岡山中央中学校
○部活動	バスケットボール部（男子）
○部員数	15人（2年生…6人 1年生…9人）
○顧問教師	是清先生、白石先生
○活動状況	朝・午後練習（月～金）、土曜日
○活動環境	体育館
○実習日以外の参加活動	1年生大会の応援（1月25日）

2 顧問教師の指導方針、連携、工夫等について

顧問の先生はバスケットボールの経験はなかったが、ルールや指導法について本を調べたり、女子の顧問の先生に相談したりしながら熱心に学ばれたそうである。練習は、はじめのうちは基礎的なもの、試合が近づくと実戦的な動きの指導が増えていった。冬休み明けに実習に行くと、1年生大会に向けて攻撃パターンの練習をしていた。普段は、顧問の先生は忙しく指導ができないこともあっただけに、冬休み中の部活動ではできる限りのことを生徒に対してされていたことが伝わってきた。

また、生徒に少し真剣さが欠けているのが見られた時には、厳しい口調で指導し、よく動けていたり集中して良いプレーができていたりした時には、きちんと声をかけて評価することを欠かさないという指導をされていた。指導方針についてうかがうと、部活動を通して自分たちの力で協力して高めあうことの大切さや、一人ひとりに達成感や充実感を体験させることを重要視しているということであった。

3 生徒の活動実態（活動の様子、意欲、目的意識、人間関係等）

部活動内の生徒の人間関係をみると、1年生と2年生がとても仲が良い。お互いに気軽に話ができる雰囲気である。だからといって1年生が2年生を軽く見ているわけではなく、自分たちの中での上下関係のけじめはついている。しかし、もっと2年生が自信をもって練習に対する指示を出したり、率先して声を出したりすることができれば、部活動全体として前向きに練習に取り組めると考えられる。

顧問の先生がおられない時は、一見すると真剣に練習しているようには見えない。しかし、部活動に所属し練習に参加しているということは、全員バスケットボールが好きで、上手になりたいという気持ちを少なからずもっていることは確かだと思う。また、生徒たちとの触れ合いを通して、練習に来ている生徒はみんなまじめな生徒だという印象も受けた。それにもかかわらず、「なぜ練習に真剣に取り組めないのか」ということを疑問に思った。その答えとして自分は、「自分たちの力はどれくらいか（現状把握）」、「自分たちは今何をする必要があり、どんな練習をすればいいのか（目的）」、「自分たちは上手くなっているのか（達成感）」等の、いわば自らを見つめて評価し、どういったステップを踏んでどんな力をつけていくのかがはっきりしないためだと考えた。そのため、練習にも身が入らず、とりあえず動いているという状態なのだと思う。生徒たち自身が自分たちで活動できるという見通しがもてるような、指導者のかかわりや支援は必要だと感じた。それだけでなく、指導者が技術の向上や活動の意欲を認めて評価することで、もっともっと主体的な部活動になっていくのではないかと考えた。

4 実習で学んだことや成果（その他、保護者との連携や起こった事例等も）

技術的な指導はできない自分は、生徒と一緒に練習に参加して関係をつくっていくことを重要だと考えた。今まで中学生とかがかわることがまったく無かったため最初は不安だったが、自分から声をかけていくことで、生徒とのコミュニケーションも増えた。同じ時間や体験を共有することが、関係をつくるきっかけとして重要なことであることを学んだ。

また、自分にできることとして、技術的なこと以外に外から見て思ったことを積極的に伝えるようにした。例えば、「声を出すこと」の大切さについては何度か話をした。雰囲気が緩んでしまった時は、声を出すだけでも練習の空気を変えることができ、身の入った練習ができる。他にも、生徒が自信や意欲、目的をもって活動できることを意識し、活動の様子を見て良かった点や時には気になった点なども話した。

自分たちの力で協力して高めあうことの大切さや、一人ひとりに達成感や充実感を体験させることは、学校生活のどの場面でも、また小学校においても重要なことである。そうすることで、仲間の大切さを知ることや自分を成長させること、自分に自信をもつことができる。そのような体験は、はじめから全てを生徒任せにしてできるものではない。子どもたちが、互いのかかわり合いの中で成長していけるだけの力をつけること、問題が起った時に解決の見通しをもたせるために、個人やその場に応じた支援を行う教師の役割の重要性を、この実習を通して学ぶことができた。

1 部活動の概要

○実習校	岡山市立岡山中央中学校
○部活動	ソフトテニス部（女子）
○部員数	14人（2年生…6人 1年生…8人）
○顧問教師	末吉先生、関本先生
○活動状況	月曜日～金曜日（朝、放課後）、土曜日（主に午前中）
○活動環境	コート2面使用（運動場、屋上コート）

2 顧問教師の指導方針、連携、工夫等について

顧問の先生は、部員同士の人間関係づくりを基盤としたチーム作りを行っている。技術的な面においてのみ強い生徒を育てるのではなく、生徒が考えた部活動の目標に向けて、互いに協力したり、切磋琢磨したりしながら練習することで互いに成長できるように指導をされている。そのための具体的な手段として、適切なタイミングで生徒同士が話し合う場を設定し、何らかの問題が起きた時にも、決して簡単に流さない姿勢をとられているのが印象的だった。その際には、生徒が出した意見を受け止めた上で、再び生徒に返していくといった生徒との双方向での意思疎通を繰り返し行われている。この取り組みを重ねることで、生徒は自分のあり方やチームとの関わり方を見つめ直す習慣を身につけているように思われる。したがって、上級生になるにしたがって、より成長した姿をみる事ができた。さらに、後輩はその姿をみながら成長するため、その点で異年齢集団としての部活動の教育的な価値を実感することができた。

なお、部活動での工夫としては、ホワイトボードがその日の練習メニューや生徒の意気込みを書くツールとして有効に使われており、生徒が見通しをもって練習に取り組む姿が見られた。

3 生徒の活動実態（活動の様子、意欲、目的意識、人間関係等）

女子の部活動では、ややもすると人間関係でのいさかいなどにエネルギーが使われることも多いが、生徒は自分たちで決めた目標に向けて、本来の部の活動にエネルギーのベクトルが向いている点特徴的である。部の目標を話し合う場面では、生徒全員が考え、1年生では、「己に厳しく」や「年上の人への礼儀や敬語を大事にする」等の目標が、2年生では、「挨拶をする」や「提出物を出す」「走るテニス」等といった目標があげられていた。目標を分析すると、部活動での技術的なことだけでなく、自己と向きあったり、人間関係の中で必要となる資質を大切にしようとしていたりしていることが感じられる。

普段の活動の様子についても、テニスに対する意欲が全体的に高く、積極的にボールを追いかけることはもちろん、ネットの片づけやボールひろい等、部活動を支える面でも自分の役割を果たそうとする生徒の姿をしばしば目にした。そして、生徒全員が声をかけ合って練習に取り組む姿勢を伺うことができた。

4 実習で学んだことや成果（その他、保護者との連携や起こった事例等も）

実習では、第一に、なるべく一緒になって活動に取り組むことを意識した。また、アドバイスをする際には、次の一本に対して、さらに意欲的に取り組めるように肯定的な言葉を一つ以上使うことを心がけた。同時に、何を意識して打てばよりよいボールが打てるのか生徒がイメージをもてるように、実際にどんなフォームで打っているのかを実演したり、体をどのように動かせばよいのか、見本を示したりしながら具体的な説明を行った。コミュニケーションを充実させることで生徒の悩みや喜びを一緒に考え、共感することができたように思う。バックストロークが打てなくて悩んでいた生徒と一緒に悩みながらアドバイスを考え、やっとボールがネットを越えるようになって生徒が喜んでくれた時は、やりがいを感じることができた。

第二に、部活動が生徒のどのような力を育成するのに役に立っているのか考えるため、チームづくりに着目して取り組んだ。そこで、顧問の先生の取り組みを観察し、先生がどのように人間関係を基盤としたチーム作りをされているか分析した。その結果、社会で必要となるコミュニケーションの力を育てていることが分かった。そのことは、技術面だけでなく人間関係を重視している生徒自身が決めた目標からも分かる。そして、それは、生徒が部活動を自治的に運営することで、人間関係を大切にすることの重要性を実感できるようになっていることが影響していると思われる。具体的には、生徒が、自分たちでチームの目標を決めたり、自分を見つめ直したりすることができるよう、話し合いの機会が適切に設けられていたことがあげられる。そのような取り組みを通して、生徒が互いに共通の認識をもって取り組む土壌を築くことができたと考えられる。

1 部活動の概要

○実習校	岡山市立岡山中央中学校
○部活動	ソフトテニス部（男子）
○部員数	17人（2年生…10人 1年生…7人）
○顧問教師	松末先生
○活動状況	月～金（朝、放課後）、土
○活動環境	テニスコート（運動場、格技場2階）

2 顧問教師の指導方針、連携、工夫等について

基礎練習を回数や時間で区切って行ったり、試合と練習を交代でさせたりするなど、メリハリのある指導をされていた。1年生と2年生で練習メニューを変えることなく平等に機会を与えていることや、個々の生徒のフォームや動きなどについての課題を把握して、適切に指摘や助言をしていることが生徒のやる気につながっていると感じた。

3 生徒の活動実態

全体的に、顧問の先生が不在の時には練習に真剣に取り組めないことが多く見受けられた。「ちゃんとやろう」と全体に声をかけている生徒の姿も見られたが、耳を傾けず好きなことをし続ける生徒もいた。しかし、他の生徒が遊んでいても休まずに練習を続けている生徒や、後輩にフォームや打ち方を熱心に指導している生徒の姿も見られ、個々の生徒の部活動に対する思いの違いが見て取れた。顧問の先生が指導されている時には、練習には熱心に取り組めるが、やはり女子部や他の部活動に比べると少し活気がないように感じた。また、短縮授業の日などの練習が長時間にわたる時には、特にやる気が持続しない生徒が多かった。技術の高い生徒は、基礎練習にも比較的真剣に取り組める傾向があるが、技術があまり向上していない生徒に関しては、練習の成果が感じられないためか、練習に目的意識を持っていないように感じた。また、練習に真剣に取り組めない生徒が多かったり、声をかけても効果がなかったりすることで、本来やる気のある生徒も意欲を喪失してしまう場面も見受けられた。

4 実習で学んだことや成果

やる気が持続しない、活気がないという現状からもわかるように、生徒の部活動に対する意欲を高めることが、部活動の活性化のためにまず必要であると感じた。生徒の意欲を高めるためには、個々の生徒が部活動に求めているものを知り、個々の生徒の克服すべき課題を見極めて、ニーズに応じた指導を行うことが必要であると考えた。早い段階から私自身がそのことに気が付いていれば、経験がなくてももっと違うアプローチができたのではないかと思う。しかし、実際に指導場面を見たり一緒に練習に参加したりすることができたことは、とても貴重な体験であったと思う。現在、顧問の先生がされているようなメリハリのある練習メニューや、個々の生徒の課題に応じた指導・助言は、とても大切なポイントであると感じた。部活動の充実、ひいては授業など学校生活の他の活動への取り組み方にも影響を及ぼすと考えられる。例えば、練習に真剣に取り組んだ結果、技術が向上するという経験によって自信をつけ、学習面での意欲が高まることも考えられる。また、大会などを目指してチーム全体で練習に取り組もうとする姿勢は、学校生活の中での授業におけるグループ活動を活発にしたり、学級における協力や団結の意識を高めたりすることにつながる可能性がある。そして、リーダーの育成や人間関係構築力の育成にもつながっていくと思われる。

自分が顧問として指導する場合には、所属しているすべての生徒の部活動に対する思いや意欲に目を配り、目的意識を持って集団として活発に活動できるようにしていきたい。そのために、できるだけ時間を作って部活動に参加し、個々の生徒の課題やニーズを常に把握しておくことや、生徒の成長を見逃さず声をかけたり、試合形式の練習などで生徒自身が成長を実感できる場面をつくったりしていこうと思う。また、それぞれの練習ごとの目的や意味付けを明確にすることを心がけ、顧問不在でも生徒同士で主体的に練習に取り組めるように、リーダーの育成や集団づくりこそ重視したいと考える。

【指導・助言： 乙部憲彦岡山県教育庁指導課総括副参事】

岡山県教育庁指導課の乙部と申します。実は私は、指導課での教職大学院の担当をしております。これまで現職教員の先生方の発表会は聞かせていただいていたのですが、皆さんの発表は今日初めて聞かせていただきました。感想になるかもしれませんが、話をさせていただきたいと思います。

まず、私自身も部活動をしていた経験があります。私の場合は高校だったのですが、経験のある部活動をしていたこともありますし、また、初めて、全くやったことのない部活動をやったこともあります。その中で、最後に話が出たように、やはり自分でやるのが一番なのだろうと思います。それは若いからこそできるのだと。なかなか歳をとってからやると躊躇があったり、上手くできなかったり、教師としての形ができて、なかなかできません。そういうことで、若いうちにどんどん色々なことを経験しておくことが肝心かなと思います。その中でこれは自分の感想なのですが、やはり生徒の成長力と教師の成長力では、絶対教師の成長力の方が早いんです。早くなかったらもう教師を辞めた方がいいかもしれません。教師の成長力はやはり早いんですね。1年ごと1年ごとに教師の方に蓄積がある方が絶対成長が早いので、それはもう数年間続けていけば、おそらく自ら求める気持ちがあれば、そのくらいにはなるのだろうと。あとの指導法や伝え方といった辺りは何でも共通なんですね。要するに技術の部分をごだけ押さえるか。そうすると、顧問であれば、おそらく練習試合に連れて行って、いい先生のいい指導というのを生徒に受けさせるし、また自分のものにもできる。だから色々なところに、色々なよさがあるので、そこから引っ張って行くことができる。早く言えば、これはマネジメントだと思うのですが、部活動でもそうなんです。だからその中で、生徒に対してどれだけかかわっていけるかということがあれば、まず教師としての第一歩は合格なのではないか。これはおそらく今のインターンシップ実習の全ての部分でもいえるのではないかと思います。

もう一つ今日感じたのは、教職大学院の意味合いも含めて感じたのですが、今あなた方の話を聞いてみて、やはりまだ学生さんだなと思いました。確かに教職大学院生ですから学生なのだろうと思うんです。ただ、教職大学院が何のためにあるのか、なぜつくるといったことになったのだろうか。今までは、おそらく大学もしくは大学院を出てすぐ教員になっていた。ところが、そのすぐ教員になるというのでは難しい部分もたくさん生じてきました。その中で、理論と実践という言葉が岡山大学教職大学院では言われていますけれども、やはりそれらのつなぎをする部分としての教職大学院の役目があるのだろうと思っています。私自身も今日の話聞いて全てが見えているわけではないのですが、かかわり方として、確かに顧問の先生がおられ、それから指導の先生がおられ、その中で動きというのは難しいと思います。当然自分が勝手に動くわけにもいかないし、非常に難しい。けれども、自分はその中で、どう先生方に話をかけ、その中で生徒とのかかわりの中で何を学んでくるか。ひょっとしたら実際はそうではないかもしれませんが、今話を聞く限りでは、やはり学生さんなのか、お客さんの部分が若干あるのではないかと思います。「こういうことをしたい」という気持ちを、若いのだから、もう少し前面に出してもらって、発表の中で聞かせていただくとよりよいのではないのでしょうか。私達が若いとき、教員になりたての頃は、試行錯誤でやってきた部分があるんです。今君達に与えられているチャンスというのは、大学院生という立場であって行けるという、そういう

うものが与えられているわけですから、より今度は理論的な面で、大学の勉強とのつながりの中で理論的な面での実践でつなぎをしっかりとつけてほしい。我々は昔のことを考えてみると、どちらかという実践ばかりで、経験論だけでずっと積み重ねてきた。それでは今、振り返ったときに、本当に経験論ばかりで理論の部分はどうだったのだろうかと反省させられる部分もあります。ですから、あなた方の強みというのは、こういう経験を通しながら、理論的な面をどうやってつないでいくかという、そこなんだと思うんです。ですからあと1年研究する機会があるし、更にはまたどんどん現場にも出て行けるでしょうから、実践と理論とをしっかりと身に付けて、ただ理論ばかりになっては困りますけれども、その辺に自信を持って、また現場に来ていただけたらと思います。

【指導・助言 : 曾田佳代子岡山市立岡山中央中学校長】

失礼します。私からは、お礼と、そしてたくさんの方が本校に来てくださって、その感想も含めてお話しさせていただきます。

1年間、前期も後期もあったのですが、授業から後期の今のインターンシップの部活動や特別支援教育まで、皆さんが入ってくださって、中学校自体も活性化したと考えております。それはやはり若い皆さんが色々なところで見てくださっているということで、本来の教員としての在り方をもう1回見直したり、「あ、こういう視点で見るとこういう考え方もできるんだな」と現職の教員が学ばせてもらったりした部分、そして我々は、体制をつくっていくマネジメントの方の視点からも随分勉強させていただきました。ありがとうございました。

部活動については、一言だけ加えさせてもらいますと、皆さんが来てくださった時期が1年間のうちの後期だったのですね。後期ということは、試合があるのが前期で、県の総体や市の総体、あるいは中国大会というのはほぼ終わっている時期です。秋季大会も10月いっぱいくらいで終わっていて、この時期はプロ野球と同じでシーズンオフのような形で、次年度に向けての力を蓄えていくところです。きっと「試合に勝とう」とか「何とかしよう」というギラギラしたものは見えにくかったのでは、という気がしております。現場ではもちろん、特にスポーツ関係は勝っていくらの部分は確かにありますから、これなくして参加することに意義があるとだけ言っている部はまずないと思います。ただそれは、例えば勝つことだけに重点を置いて、「いじめがあっても、レギュラー争いで醜い部分があっても、これで勝てたらいいんだ」という部にはどの部もしたくないし、教員側もさせたくないと考えていますので、今の時期で人間関係をつくったり、体力を蓄えたり、お互いの連携が図れたりするということが中心になっていたかと思います。ですので、できれば1年間通して見てくださればいいのではないかと思います。

そして、先程乙部先生もおっしゃっていただきましたが、中学校現場では自分の専門の部活ができることはほとんどないと考えていいと思います。野球をしていても、行ってみると野球の顧問はもういたと。その野球の顧問に代わって、新しく来た経験のある人に移るということのはなかなか難しいことです。本当にしたこともない、聞いたこともないことでも、若いという

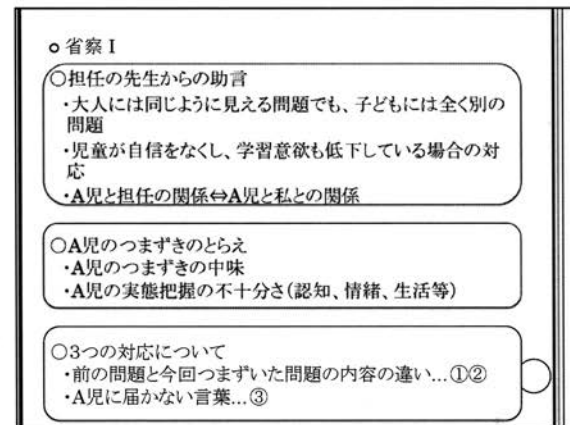
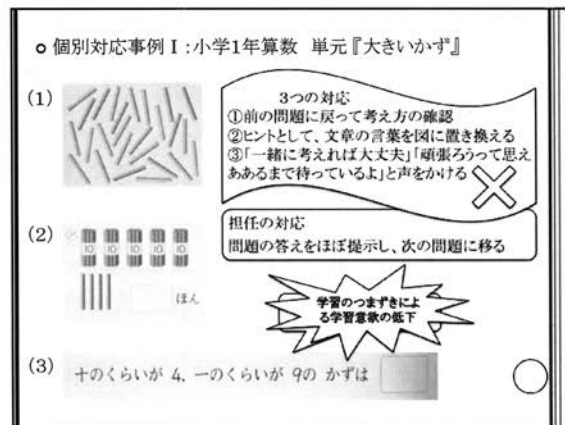
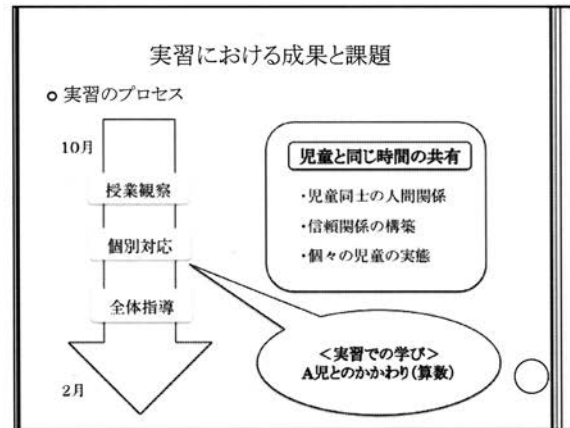
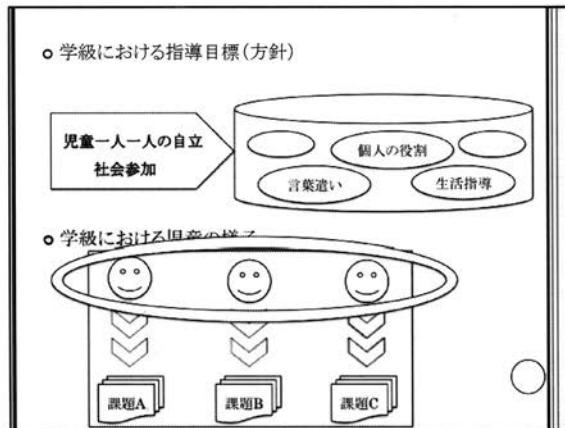
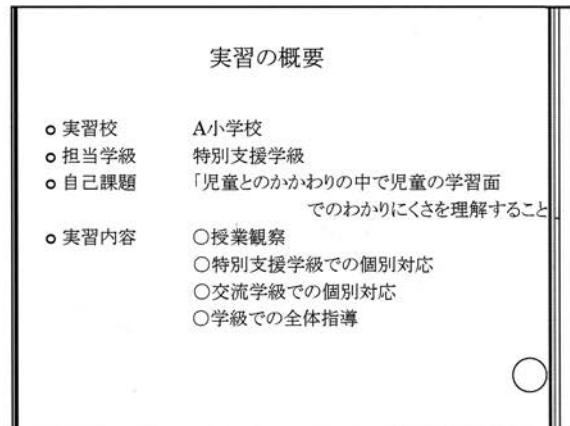
だけで「チャレンジしてごらんなさい」と言われることもあると思いますので、その辺の実態を肌で感じてくださればと思いました。

そして、特別支援教育も大変お世話になりました。一つお話ししたいと思うのは、特別支援というのは大人や教員から見たら「支援」ですが、これはきっと訳した言葉で言えば「special needs」ということで訳されていると思います。子どもにとってどんなニーズがあるのかについて、学生さん達からは「色々な掲示物で見通しを立てていくことがいいと思った」という発表があったと思いますが、今の時期でしたら、もっともっと障害の種別よっての勉強をできる時期ではないかと思います。というのは、知的障害よりは情緒の障害がある子達に対しては、色々な基礎的な知識が必要なこともたくさんあります。「今これをすると、こだわりの部分がまずこっちになるだろうな」といったことが、学問的に分かることもたくさんあると思います。そういうことを知った上で、ハード面での環境設定とか、ソフト面としてのかかわり。それとは別に支援計画的なことを毎日教員と支援員の人を立てていることもありますので、機会があったらそういう形で入ってくださればと思います。障害の種類といたながらも、生い立ちによって変わったりなど色々なことがあると思いますので、今の時間がたくさんあるうちに、そういう勉強もしながらもっとかかわっていただけたらと思います。

受け入れ先としては本当に充分なことができなくて、もっともっと皆さんとお話ができる機会があったらよかったと思っています。大学の先生方も、学校には何も言わなくてもひそかに何回も来てくださって、皆さんのことを気にしてくださっていましたので、来年以降こういう機会が与えられたら、もう少し受け入れを頑張りたいと思います。本当にありがとうございました。

2. 最終報告会（H21.3.7）での2人の報告

1) 香川真吾



○個別対応事例Ⅱ：小学1年算数 単元『大きいかず』

(1)
93-94- - -97-98- - -

(2)
25-24- - -21- - -

(3)
-50- -70-80-90- -

学習のつまずきによる学習意欲の低下

3つの対応
①前の問題を基に考え方の確認
②一桁の数に着目し、児童と数唱
③1～100まで書かれたカードの提示

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
61	62	63	64	65	66	67	68	69	70
71	72	73	74	75	76	77	78	79	80
81	82	83	84	85	86	87	88	89	90
91	92	93	94	95	96	97	98	99	100

○省察Ⅱ

○前回の対応との違い
・A児の学習意欲を下げないようにする意識
・学習意欲が低下したときにはそれを高めようとする意識

○A児が考えていること・困っていること
・A児のつまずき、学習におけるわかりにくさをより詳細にaa知ろうとする意識
・A児の困っていることの解釈・対応

○3つの対応について
・前の問題との違いへの気づき...①
・一桁の数への意識と数唱...②
・A児の認識の困難さに対する理解...③

おわりに

個々の児童には学習の得意・不得意があり、一人一人興味・関心や学び方、生活環境、経験が異なる。A児とのかかわりから、一人の児童のわかりにくさを理解することの困難さと授業の中での子どもの姿をとらえることの重要性を学んだ。

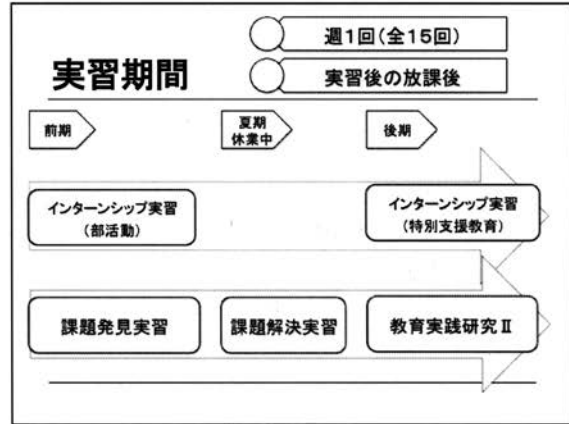
⇒ 児童の学習面での困難さをわかろうと常に意識することがとても重要である。

・教材研究や子どもの発達の理解
・授業をする時の目の前の子どもの姿をとらえること

2) 岡崎亮人

**インターンシップ実習報告
一部活動一**

**教育学研究科 教職実践専攻
22420079 岡崎 亮人**



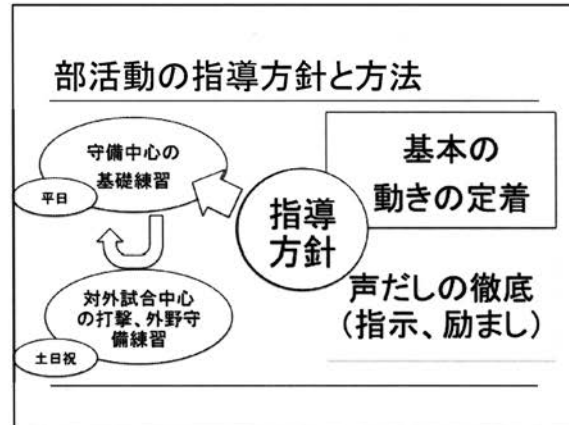
部活動の概要

岡山中央中学校 軟式野球部

部員数 1年…8人 2年…8人 3年…8人(市総体後引退)

活動状況 平日…朝夕ほぼ毎日 土日…対外試合中心

活動環境



生徒の実態(岡山市総体まで)

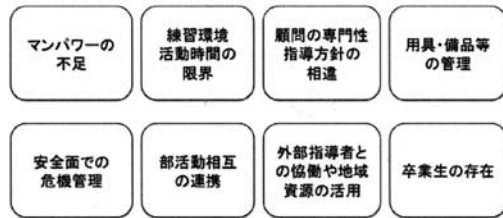
生徒の実態(市総体後の新チーム)

- 3年生引退の影響
 - 体力・技術的な不安
 - 目標の不明確さ
- 新チームの自覚
 - 学年での団結
 - 基礎練習への意欲や積極性
- 課題の顕著化
 - 技術や能力の差
 - 学年間の進捗や不満
 - 活動意欲の低下 (パターン化した活動内容等)

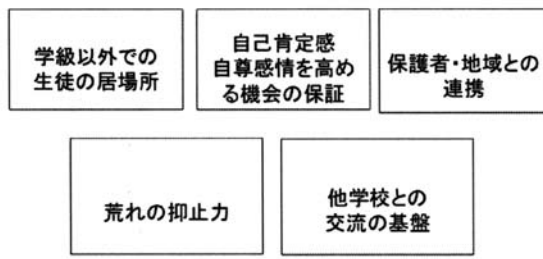
実習で学んだことや成果

- 1 公立学校が抱える課題
- 2 学校組織と部活動
- 3 長期的スパンでの生徒の変容
- 4 部活動の教育的価値
- 5 顧問教師のあり方

① 公立学校が抱える課題



② 学校組織と部活動



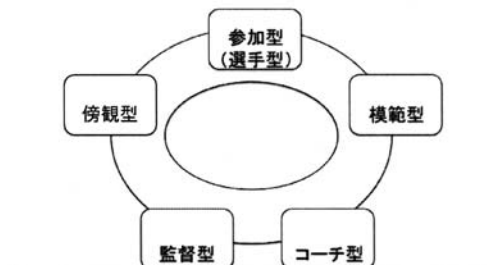
③ 長期的スパンでの生徒の変容

	大会前後 意欲の向上	新チーム の自覚	チーム課題 の顕在化	活動継続の 難しさ										
月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
行事等	入学式 仮入部	集団宿泊行事	徳島地区春季体育大会	岡山県中学校総体体育大会	岡山県総合体育大会 中国大会 全国大会	文化祭 体育大会	徳島地区新人戦	岡山県秋季体育大会	冬季休業	年始			スプリングキャンプ 卒業式	
1年	基礎準備期		基礎鍛錬期				基礎鍛錬期							
2年	専門準備期				専門鍛錬期									
3年	完成期		試合期			(引退)								

④ 部活動の教育的価値

仲間づくりを基盤とした問題解決能力の育成	学級活動への転化	活動継続力の育成
自己肯定感の向上の機会保証	ルールやマナー等の社会経験	異年齢集団での活動

⑤ 顧問教師のあり方



おわりに

- 絶対値としての子どもの経験値
 - 他実習での関わりにおける学び
- ～現場で実践したいこと～
- 1年間の指導計画の作成
 - 部活動と学級生活との連携
 - 顧問関係性の捉え直し
-

●参考

- 「生きる力」を育てる中学校運動部活動実践プログラムの開発
中川 靖彦(舞鶴市立城北中学校)
新井 肇(兵庫教育大学)
- 「部活動」の「居場所」としての重要性と課題についての考察
比山 園恵(関西学院大学大学院 院生)
- 「部活動—その現状とこれからのあり方—」
西島央編著(学事出版2006)

3. 最終報告会（H21.3.7）での事例別評価

1) 山本健五岡山市立岡山中央中学校教頭

失礼します。岡山中央中学校の教頭をやっています山本と申します。お世話になります。

先程発表をしていただきましたが、岡山中央中学校は、普通学級が10クラス、特別支援学級は視覚障害が1クラス、聴覚障害が1クラス、知的障害が3クラス、情緒障害が3クラス、合わせて18学級もある学校であります。特別支援の生徒が6分の1くらいになるのですが、全校生徒が387名で、その内の44名が特別支援の生徒になります。そういった中で、生徒の方は部活動や授業に頑張っています。

まず部活動について、先程岡崎君の方からとても丁寧に分析をしてくださった状況の中で、本校の部活動は実施されております。中学生にとっては部活動の意義がとても重要であり、今度の新しい改訂でも部活動については重視される方向になっています。そんな中で、生徒は趣味、自分の楽しみというのを見つけていくというのが大きな意義を持っているという面もあって、行っている状況だと思いますが、中には先程出てきた公立学校の課題がかなりあるように思います。本校では、土日の活動も保証するため、二人体制といったようなことをしながら部活動の運営をやっているのですが、生徒の方は大変楽しみにしながら、その部活に参加しているという状況です。インターンシップで来てくださっている学生さんが、顧問の部活への参加以上に来てくださいます。それで生徒と関わっていくというのは、生徒の活性化はもとより、職員の補充という面でも助かっている状況があります。こういった状況の中で部活動運営が行われていくことは、本当にありがたいと思っています。どこの学校も若い教員が少なくなっている現状で、若い学生さんが来て生徒と一緒にやってくれるということは、とても活性化に役立っているといった状況でございます。

それから、特別支援教育の関係についてですが、先程の発表にもありましたように、個々のつまづき等を見つけていきながら、生徒・児童の次の目指す目標、そういった辺りを丁寧にやっていくことがとても大切だということがあります。先日中学校の授業の実践発表に行かせていただく機会がありました。その学校は共同学習をやっている学校なのですが、その生徒同士の関わり、コミュニケーション、それらを高めるための授業を展開する時に、生徒同士がいかにかそれぞれの生徒の持ち味、持っている力を把握しながら関わり合いを持てるかといった授業実践の報告がありました。一つのグループが4人で、分からないことについては本人が分からないという意思表示をしたら、言われた生徒はそれについて責任を持って答える、お互いの疑問点については必ず解決するという方向で取り組んでいこうということを実践されていきました。それが2年間、3年間続く中で、それぞれの生徒がお互いの授業の展開の中で、その約束事をしっかり守りながらやっていくということで、アスペルガー症候群の生徒もその中の授業にいたわけですが、そのコミュニケーション能力がとても出しにくい、他の子に関わるのが難しい生徒がその授業の中で「この問題が分からない」というのを前の子にトントンと机を叩いて知らせるといった場面も出てきました。また、その授業、公開授業ですけれども、チャイムが鳴った途端に問題のある子どもたちは、「ああもう済んだ」と思って机に伏せて寝てしまう形だったのですが、同じアスペルガ

一の子がその子の肩をトントンと叩いて、「挨拶が済むまでは授業はまだ続いているから起きてごらん」という風なことを言ったということがあったようです。やはり授業の中で、先程操南中学校の発表にもありましたように、特別支援の視点を持ってお互いに関わらせる方法をとることが、そういった子ども達の変容に結びついていくのだなと改めて感じましたし、その学校の先生はそれを見た授業反省の中で、この研究をやった成果はここに表れたなと本当に自信を持ったという発表がございました。これからの実践、授業の在り方を探った方向としては、とてもいい発表を聞かせてもらったと思っておりますが、そういったところへつながっていければありがたいと思った次第です。

インターンシップをやっていく時に、本校はやや落ち着いた学校ということもありますので、本校だけでインターンシップをやるのではなく、せっかく他の学校を見られる機会なので、他の学校へも行けるような体制を組むのが学生にとってはとてもいい勉強になるのではと思ったりしています。そういったことを含めながら、特別支援、部活動の学生さんを本校で受けた成果として思っています。それから、本校でインターンシップを受けることが教職員の活性化にとっても役に立ちました。また、本校では外部の講師を受け入れることがあまりできていなかったのですが、教職大学院の学生さんを受け入れることを知って、入ってきてから、教職員が抵抗なく学生ボランティアを受け入れるようになったという状況があります。来年度についても同じように学生ボランティアの導入もスムーズにいくと思いますし、さらに2年目の教職大学院の学生さんが来てくれるということにとっても期待しながらやっていけると思っております。こういう機会を与えてくださって大変ありがとうございました。以上で終わらせていただきます。

2) 乙部 彦岡 岡山県教育庁指導課総括副参事

岡山県教育庁指導課の乙部と申します。よろしくお願ひいたします。私の方は県の教育委員会で現職の教職大学院生を派遣している、現場の教員を派遣している立場の総括をしているということで、今日この場に立たせていただきました。現在、10名の現職教員を派遣しております、1年間はこの教職大学院で、そして来年1年間は現場に戻ってということで、2年間の研究をしていただくということになっております。今日は来年度、次の4月から派遣をする先生方も来られているとのことで、その先生方へのメッセージも含め、少しお話ができたらと思っております。

この教職大学院の取組だけではありませんし、今年度私の個人的なテーマにもなりますが、点から線へ、線から面へということを考えてまいりました。特に大学院への派遣は、これまでも県の事業としてやっていたわけですが、どうしても個人の研究になりがちでした。その部分を学校の課題、さらにはもっと欲をいうと県全体の課題へと、この解決に発展させていきたいと思っていたところでございます。特に岡山大学の教職大学院におかれまして、新しい院生を初めて迎えられて、どのように学校の課題にしていくか、その話を5月頃に橋ヶ谷先生からお聞きしました。この視点というのは、やはり我々ももう少し強く打ち出していかなければならないと思ってきたところでございます。

その一つとして、10月に現職の先生方の中間発表があったわけですが、その前の9月から10月前半にかけて、我々の指導課の専門的な領域を携えている指導主事と本大学院在学中の先生方とで面談をさせていただきました。我々としても、県の課題、県が今進んでいこうとする方向性をお伝えする中で、先生方が研究していく方向とうまく擦り合わせができないかと思いながら面談をさせていただきました。また、2月から3月上旬にかけても、これで1年が終わり現場へ戻りますので、この1年間やってきたことがどんなことだったかということも含め、面談をさせていただきました。私のところに集約ということで情報が入ってきております。今日は先生方にも少しそのことをお伝えしたいと思っております。個々の取組はなかなか時間がありませんので省略させていただきますが、一つの評価として指導主事の方から聞いております評価は、まず意欲という点ではみなさん大変熱心であると。これは非常に高い評価を聞いております。それから内容という点では、これはそれぞれの先生方によって取り組まれている内容が違いますから一概には言えませんが、一つ申し上げるとしたら、焦点化をできるだけしてほしいという意見を、面談をした各指導主事から聞いております。扱われているテーマが非常に大きなテーマで、今日のご発表の中にも組織を動かすという大きなテーマがありました。やはりその部分は、一教員としてということになると難しいと思っております。その分、今日、現任校の校長先生方から熱いエールが送られたと思っておりますので、次年度の研究がまた楽しみなのですが、その中で、例えば一個人としてそれを点から線へ、という部分だけでもいいのだろうと思っております。その中の取組を来年度やっていただけたらと思っております。あわせて、我々も2度の面談という限られた機会でしたけれども、それらの取組がどうなったのかということについて、現職院生の10名の先生方から我々にまたお返しをいただければ、我々の次年度以降の取組として新たなものを加えていきたいと思っております。

次に、教職大学院のメリットを整理してみました。一つは現職の教員にとってみると、

比較的まとまった時間があるということが一番大きなメリットになるのではないかと。面談した先生からもそういう声をお聞きしました。それからもう一つが専門的な内容、深い内容を学べるということだと思います。そしてもう一つ、一番大きく外せないものが、やはり人材、人間関係やその他、教育力としてのヒューマンネットワークというのでしょうか、ここの部分が非常に大きいのかなと思います。今日の平松先生のご発表の中にも、他の小学校で実践をしたという事例紹介がございました。やはりそういうところのネットワークづくりというものが、今後先生方の役に立つのではないかと考えております。

あえてデメリットを言えば、やはり学校との距離なのだろうと思っています。そういう声は各指導主事との面談の中でも、いくつか聞こえてきたそうでございます。その距離をどうとって、学校の課題に寄り添っていけるかとの深慮、これが一つのポイントなのかなと思っています。ともすれば、学校現場というのは目の前の児童・生徒がすぐそばにいます。それぞれの先生方、日々努力されて、どうしても目の前の事に手一杯ということになるのではないかと。それを先生方の目を離すという役目が管理職であり、教育委員会の我々だろうと思っています。その仲間に、今年 10 名の先生方に新たに加わっていただいて、学校に戻られたら、少し先生方の目を生徒から離してちょっと視野を広げさせる、そんな役割も担っていただけらると思っています。ぜひ来年度以降、先程最初に申し上げましたが、一人の者が二人、三人と線になり、さらには地域に広がってということができればいいのではと思っています。

それから 10 名の新卒院生の方も、先日のインターンシップ実習の報告会に行かせていただきまして、また意見も少し言わせていただきました。やはりインターンシップ実習の最大のメリットは、教育実習よりもさらに長い期間、色々な角度から学校現場を見られることだと思っています。先程の岡山中央中学校の教頭先生のお話の中に、色々な種類の学校に行ける体制があればということがありましたが、これも一つだと思っています。この辺り、また来年度に向けて研究をしていただけたらと思っています。来年度から新しく我々の教員として加わっていただく先生方もいらっしゃいますし、さらにまた挑戦をして、という残りの院生の方もいらっしゃいます。ぜひ、採用試験に向けてしっかり勉強して、岡山県の教員を目指していただいて、よろしく願いできたらと思っています。

最後に、来年度、教職大学院は 2 年目になります。そして 10 名の先生方が現場に戻り、また実践研究をしていく。現場に戻っての実践研究が、その現場、周囲へどういう影響を与えていくかが最大のポイントだろうと思っています。先生方の研究の最大の成果が表れてくるかというのは、その点に関わってくるのかなと。そうすれば県全体の教育力の向上にもつながってくるとも思っています。私どもも、この後もまだ先生方への支援をさせていただきたいと思っていますので、そういう意味でのネットワークづくりをよろしく願いできればと、さらに今の 10 名の先生方と次年度入ってくる新しい 10 名の先生方へのネットワーク、この辺りもよろしく願いをいたしまして、私の指導助言という形にさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

おわりに

本取り組み「真に課題解決能力を育てるカリキュラム開発 ― 地域協働学校と教職大学院のコラボレーション ―」を終了することができました。取り組みにあたり多大な協力をいただきました岡山県教育委員会、岡山市教育委員会、各地域協働学校はじめ多くの方々にお礼申し上げます。

また、最終報告であり外部評価委員会を兼ねたシンポジウムとして開催いたしました本 GP 最終報告会には多くの参加者を得、高い評価をいただくとともに、さらなるカリキュラムの充実に向けた問題点等について指摘・指導をいただきましたことを幸いに感じております。

本取り組みは、初年度（平成 19 年度）の企画 ― 計画 ― 試行 ― 検証を経て、今年度（平成 20 年度）スタートした教職大学院（岡山大学大学院教育学研究科教職実践専攻）に導入・実施を行ったものです。この結果については、特に 2 年目である今年度の実施経過・報告にその成果をご覧いただけるのではないかと思います。

この成果報告が、少しでも各教職大学院における教員養成カリキュラムの参考になることを願っています。

それとともに、この最終報告で、本教職大学院の専門職大学院等教育推進 GP は一区切りになりますが、この GP のテーマであるカリキュラム開発は、これで終わりということではなく、これをスタートにカリキュラム改革を続けて行っていかなければならないものと思っております。今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

平成 21 年 3 月

岡山大学教職大学院 運営委員長
橋ヶ谷佳正

文部科学省 専門職大学院等教育推進プログラム

最終報告書(平成19~20年度)

真に課題解決能力を育てるカリキュラム開発 — 地域協働学校と教職大学院のコラボレーション —

〔監修〕

高橋香代 岡山大学大学院教育学研究科長

〔専門職大学院等推進プログラム・プロジェクト委員会委員〕

加賀 勝 教授 伊藤武彦 教授

小野擴男 教授 洲上克義 教授

黒崎東洋郎 教授 住野好久 教授

寺澤孝文 教授 仲矢明孝 教授

田嶋八千代 教授 橋ヶ谷佳正 教授

宮野正司 教授(特任) 中尾道子 教授(特任)

稲田佳彦 准教授 佐藤博志 准教授

山田剛史 准教授 熊谷愼之輔 准教授

高瀬 淳 准教授 渡邊淳一 准教授

山崎光洋 講師 笠原和彦 講師

北神正行 国土館大学教授(平成19年度)

近藤 勲 教職コラボレーションセンター／教授(特任)

泊 直希 教職コラボレーションセンター／事務

横山真由子 教職コラボレーションセンター／事務

藤島 宏 教職コラボレーションセンター／事務

小山朝子 教職コラボレーションセンター／事務(平成19年度)

(順不同)

〔発行〕

平成21年3月

〔編集・発行〕

専門職大学院等推進プログラム・プロジェクト委員会

〒700-8530 岡山市北区津島中3-1-1

岡山大学大学院教育学研究科

〔発行所〕

昭和印刷株式会社

〒700-0942 岡山市北区豊成3-1-27

Tel : 086-264-6110 Fax : 086-262-5096



岡山大学